

見浦牧場の空から

中国山地の雪深い山間部で黒毛和牛の一貫生産に体当たりで取り組んできた見浦牧場の元経営者とその家族が、和牛のこと、牧場のこと、農業のこと、自然とともに生きるということ、少しじっくりお話をします。

見浦 哲弥 著

目次

牛の階級制度(2002/4/11).....	5
和牛一貫経営牧場 見浦牧場について(2002/4/21)	7
おいしい牛肉 (1) (2002/4/29).....	10
見浦牧場の堆肥を使用される皆さんへ(2002/6/2)	12
おいしい牛肉 (2) (2002/7/26).....	14
背負うた子に教えられ... ..	15
和牛の道(1)(1998/9/14)	17
生と死と(2002/4/29).....	24
結婚50年目のラブレター(2001/1/29).....	27
和牛の道 (2) (1998/9/11)	31
ミツバチが教えてくれたこと(2003/4/29).....	36
育つ木(2003/4/29)	38
魚と事業(2003/4/29).....	39
商売の基本(2003/9/14)	41
我が友 船坂さん.....	43
和牛の一貫経営で思うこと ～見浦牧場の経営戦略～	46
老いるということ(2006/5/3)	51
ヒューマンリング(2005/11/15)	55
愛国心を考える(2006/4/15).....	60
パブロフの牛(2006/8/9)	62
同行崩壊す～村社会の壊滅～(2006/7/27)	64
小坂集落葬儀細則.....	68
素晴らしかった我が人生(2005/11/6)	73
混浴(2007/4/6)	75
座右の銘(2007/1/10).....	77
人生とコップ(2007/3/20)	79
サイドブレーキのない人生(2007/3/30).....	81
原爆の女の子(2005/8/5)	83
小坂昔日(2007/8/11).....	85
人生の種まき(2007/10/4)	89
立ち話(2008/2/9)	90
晴江さんと無限大(2007/10/3)	93
お寺さんは翻訳者(2008/4/6)	95
ワンチャンス、ワントライ(2008/2/8).....	97
信頼(2008/6/28)	100
文章を書く(2008/6/3)	104
祖父(2009/1/1).....	106
誰も知らない可部線ないしょ話(2009/2/23)	110
裏話 小さな農協の監事の小さい声(2009/2/23)	113
作戦戦略 院長先生のアドバイス(2009/8/13).....	116
代用教員(2008/9/2).....	119

「連載記事 中国山地」に願いをよせて (2008/4/19).....	122
時間が飛ぶように消えてゆきます(2008/5/18).....	123
岡部先生(2008/8/22).....	125
井上さん(2008/4/21).....	130
プラスマイナスゼロ(2009/6/14).....	132
増原義剛さま(2009/9/26)	134
天狗松(2009/9/29)	136
13度(2009/6/23)	138
あわてる乞食はもらいが少ない(2009/7/31)	141
ドキュメント 正義の無賃乗車(2009/7/13)	143
幻の古戦場 (2010/2/20).....	148
アルツハイマー (2009/9/26)	152
中島先生 (2010/3/31)	154
「これなーに？」～見浦牧場の教育論～ (2011/1/30)	158
こんな処で、こんな話を聞こうとは (2011/5/5)	160
ある電話 ～山村の人手不足～(2011/5/17)	165
もう終わりだけー、無駄？ (2011/5/31)	167
集落一周は 逆立ちで (2009/6/23)	168
2.26 事件と私(2011/10/1).....	171
今年の熊君 (2011/9/5).....	174
TPP について(2011/11/4).....	176
私の恩師 榎野俊文先生(2011/2/26)	178
文章を書く 2 (2011/8/28)	181
非常識 (2011/9/2)	182
敬老会(2011/9/15).....	185
ある老人の死 (2009/8/15)	187
ミミズの話 (2011/5/22)	188
金城牧場 (2012/1/20)	189
こがーなお客さんがおるんじゃけー(2012/2/3)	192
老化を自覚させられた事故(2012/3/15).....	194
雪国の教え (2012/2/10).....	196
一貫経営のこだわり (2012/3/6)	197
大規模林道、大朝一鹿野線（細身谷林道）建設中止(2012/2/29)	201
あじさいロード顛末記(2012/6/29).....	204
新同行、善戦す(2009/6/14).....	206
ラスパイレス(2012/5/21)	208
カナクソ物語(2012/5/18)	210
穩亡の大將(2012/6/12)	213
蛙の声(2012/6/6)	216
島津先生(2012/7/21).....	218
(参考)ルポ 見浦牧場.....	220
島津邦弘著「山里からの伝言」お読みになった貴方に(2012/7/6).....	223
私の勲章(2012/6/30).....	224
幸せの数(2012/3/8).....	226

農兵隊 14才で動員に(2012/7/10)	228
ウインドロー(2012/5/17)	232
素直すぎる貴方へ(2012/8/18)	237
柴栗と鉛筆(2012/9/3)	240
ドンペイと経済 (2012/9/2)	242
こんな人がいた !! (2012/9/19).....	245
選挙が変わります(2012/9/25)	246
山本夏子様(2013/3/11)	247
小板昔日 2 (2012/10/9)	249
熱中症(2013/9/2)	253
総力戦(2013/5/3)	255
ラジオ体操(2013/10/7)	257
水道物語 2 (2013/11/13)	259
達弥様(2013/9/17)	261
魚切の話(2013/10/5).....	263
牧場の大敵 ウシスイバ(2013/10/3)	265
一輪車(2014/7/4)	267
酒断(2012/3/16)	269
爺ちゃんから、大人の入り口の明弥君に(2014/5/29).....	271
再び同行崩壊す(2014/8/28).....	274
田植え歌(2014/9/17).....	275
深入山は火山(2014/10/8)	277
角と教育(2012/9/30).....	279
スーパーデキスタ(2015/7/22)	281
春、草との闘い(2015/6/30).....	282
廃屋(2015/8/8)	286
他人に返せ(2012/5/8)	288
薪用材の伐採(2015/12/30)	290
道(2014/8/9).....	292
紅葉の頃(2015/10/8).....	295
掃除刈り(2015/10/26).....	297
オガコー代記 敷き料おがくず変遷記(2013/9/10)	298
スクールバス(2016/1/10)	302
めだし帽(2016/2/17).....	304
癌(2016/2/3).....	305
マイカー(2015/8/17).....	307
山口六平太(2016/1/31)	309
愚弟賢兄(2016/1/29).....	311
私とお天気(2016/2/16)	313

牛の階級制度(2002/4/11)

牛の社会にも階級制度があるのを知っていますか？実は人間の社会より厳しい階級制度があるのです。

動物はすべて、ドミネンス・オーダーと、テリトリーの2つの性質を持っています。ドミネンス・オーダーは順位、テリトリーは縄張りのことです、そして一方が大きければ、他方が小さいと言った関係で、動物の種別によってこの表現が決まっています。例えば集団で暮らす猿は上位の猿と下位の猿の身分ははっきりしています。個々で暮らす熊は、縄張りを大切にします。普通の動物はその中間の性質を持ちます、我々人間は社会的には集団を作って順位を大切にしますが、家庭という縄張りには他人の干渉は排除します。

それで、牛はと言う事になりますと、彼らは本来集団で暮らす動物ですから、熊より猿に近いですね。縄張りには食事をしてときの餌槽の周りだけでごく狭いのですが、群れの中での順位は非常にはっきりしていて、厳しく守られます。下位の牛は上位の牛が食べ終わるまで、絶対にえさを食べさせてもらえませんし、雪深い真冬でも畜舎のなかで寝させてはもらえません。もし、そのルールを破ると手ひどい体罰を受ける羽目になります。牛の順位は、牛同士の1対1の争いで決めるのです。

自然は良くしたもので、幼い子牛は順位競争の対照にならないのです。体力のない・知識のない子牛が、体力勝負の競争には勝ち残れるわけがありません。それでは、種が減ってしまいます。そこで12カ月くらいまでの子牛は、ボスや上位の牛にはいじめられないのです。そんな現象を目の前で見ると、自然の偉大さに、ただただ頭が下がるのです。

お産などで群れをはなれて牛房に入っていた牛が、子牛を連れて群れに帰ってきたときなどに、どの順位に入れるかで争いが始まります。それが群れ全体に伝播して、ボスの交代まで広がる時があるのです。その時ばかりは私達、日頃飼育に携わっている人間の制止も耳を傾けません。勝負が付くまで争うのです。

私達はボス交代を、詳しく観察して多くの事を学びました。

まだ、群れが小さい頃、”いいあさひめ”号という小柄な牛がいました。頭がいい牛で、ボスでした。弱い牛をいじめない、人の子牛はかばう、そんな性格でした。

ある冬の寒い日に、争いが起きて、ボスの交代がおきました。見浦牧場は冬でも屋外に放牧で、子牛と力が強い牛が入れるだけの避難用の牛舎しかありません。ボスの交代があった翌日、”いいあさひめ”号は順位が3位か、4位に下がっただけで、避難舎のなかで寝てました。勿論一等地ではありませんでしたが。

その暫く後で、名前は忘れましたが、ボスになった牛がいました。大きな牛で格好も良くって、勿論力もあってボスになったのですが、彼女（繁殖牛群＝メス牛と子牛の群れなので、「彼女」です）は気が荒くて、縄張りを犯されるととことん追っかけてやっつける、子牛でも容赦はしない、そういう性格の牛でした。そんな奴でも力さえあればボスになる。そのときは、なんだかやりきれない気持ちがして、「牛はやっぱ畜生だ」と思いましたね。

ところが、それからしばらくして、やはり寒い吹雪の日に、また、ボスの交代が起きたのです。2位の牛との争いが済むと、3位の牛がかかって行きました、3位が済むと、4位の牛がと、次から次へ争いを仕掛けます、へとへとになっても新手が登場して・・・・・・
翌日、昨日まで特等席で寝ていたこの牛が、吹雪の中で震えていました。人の生き方を教えるようにね。

見浦牧場の哲学「自然は教師、動物は友、私は考え学ぶことで人間である」はこんな中から生まれたのです。

2002/4/11 見浦 哲弥

追記

「なぜ、いいあさひめ号は3位か4位ですんだのに、もう1頭の牛は最下位まで転落したか」

牛はボス争いが勃発すると、「今なら勝てそう」、「このチャンスにあがっこう」と考えて順位争いに参画します。

ボス争いのときには、上から順番にけんかをしていくわけですから、ボスだった牛は1回ごとに体力を消耗して弱っていきます。順位争いが単純な力比べだと、ボス争いで負けた牛は、一気に下に転落しそうなものですが、いいあさひめ号の場合はそうはなりませんでした。それは、なぜでしょう？

牛にもそれぞれ性格があり、何がなんでも一番になりたがる荒っぽい性格の牛もいれば、不都合がないかぎり争いをさける穏健派の牛もいます。

いいあさひめ号の場合は、4位か5位の牛が「こいつが上にいても、何の不都合もないし、このままでいいや」と順位争いを仕掛けなかったため、それ以上順位が転落しませんでした。

しかし、その後にボスになった牛の場合、それまでの所業が災いし、どの牛も、「こいつが上にいると、自分は快適に暮らせない」「以前、ひどい目に合わされたから、今が仕返しするチャンス」と考えたのでしょう。その結果、この牛は、次から次へと果てしなく順位争いをしかけられ、最下位まで転落してしまったのです。

2002/4/14 追記

和牛一貫経営牧場 見浦牧場について(2002/4/21)

本日は、遠路はるばるのご来場、ご苦労さまです。

本場は私どもが、日頃100点評価の55点牧場と申し上げていますように、まだ合格点をいただいていない未完成の牧場です。

見学のお話がありましたときは、何度もお断りしたのですが、たってのご依頼ということでお引き受けしました。したがって皆様のご参考になる点がどれほどあるかはわかりませんが、われわれを取り巻く環境も日に日に厳しくなる今日この頃、小さな事一つでも、心におとめ頂ければ幸いです。

さて、昭和40年から41年にかけて、京都大学上坂教室の上坂教授と広島県農政部の中島部長の間で、有名な和牛の一貫経営論争が行われ、本県油木種畜場で多頭化一貫経営試験が行われました。

いま振り返ってみても、その発想はすばらしく、自由化を目前とした我々に、25年も前に一つの答えを提案した広島県の技術陣に、心からの敬意を表しています。

あれから、長い年月が立ちました。いつのまにか、あのときの考えで経営を続けているのは当場だけとなりました。それが皆さんの関心を引くのでしょうか。

最近、なぜこの牧場がここまで生き残ったのか、よく考えます。

もちろん、多くの方々のご指導、ご協力、御支援を得たことは大きな要因ですが、そのほかにあげるなら、次の7点ぐらいだとおもいます。

1. 私どもは大変貧乏でして、いい牛が買えませんでしたので、やむを得ず、悪い牛に良い種雄を交配して、その子を次の基準で選抜し、また良い種雄を交配するということを激しく行いました。

- ① 連産性が高いこと
- ② 保育能力が高いこと
- ③ 管理しやすいこと
- ④ この牧場で生育がよいこと
- ⑤ 増体能力が高いこと
- ⑥ 肉質がよいこと

2. 先進地や試験場を家族で訪問して、複数の目で先進技術の修得に勤めました。そして、その技術を視点を変え、考え直して、利用できるものは積極的に取り入れました。

しかし、既存の技術にも盲点があります。たとえば、骨味のよい牛（管囲の大きなものは登録検査で減点されました。）を、との指導で、一時それを選抜の基準にしたことがありました。数年後、牛が小さくなったと指摘されました。なぜ小さくなったのか、私達は原因を懸命に追いました。そして、ようやくたどり着いた結論は、骨味のよい牛とは舍飼用の牛で、運動量の多い当場のような牧場には向かないということでした。そこで、当場では、前述のような優先順位で独自の選抜をしているのです。皆さんがごらんになると、良い牛にはみえなくても、や

つとこの場に適した牛になり始めているのです。

3. 農業には長い歴史があります。私達はとにかく、もう技術的にもすべて出来あがっていると錯覚しがちです。しかし、その農家農家はそれぞれ土地が違い、気候が違い、人間が違っているように、箇々の農業も小さくても、独自の経営、農業技術を持たないと、生き残れないのです。それを私のところでは、スキマ技術と呼んでいます。どんな立派な入れ物でも、スキマがあっては、水はたまりません。そのスキマを埋めるスキマ技術の開発こそ、私達農民の「チエ」の見せ所だと思っています。

4. 与えられた条件の中で最善を尽くす、これが私達のモットーの一つです。

古い機械は安く手に入れて修理しながら使う、これも限られた資本を有効に使う手段です。

機械の知識がないので、真似が出来ないという人もいますが、「テレビを見る暇はあっても、勉強の時間はない」では、生き残り競争に勝てないと思うのは私だけでしょうか。

5. 手順を変えたら、もっと効率良く多くの仕事ができないか、良く観察して、手を抜いても結果が変わらぬようにできないか。

たとえば、最初牧柵を作るときは全体を同じように作りました。しかし、牛は隙を見ては脱走します。でも、良く観察すると、破られるところと、破られないところは、一つの傾向を持っています。そこで、脱柵しやすいところは厳重に、牛が嫌うところは手を抜いて牧柵をつくることにしたら、所要労力は1/2になりました。このような工夫の積み上げがこの場の持ち味なのです。

6. 私達は普通の人間です。ですから、失敗は当然だと思います。しかし、一度きりの人生ですから、失敗も無駄には出来ません。なぜそうなるのか、3人それぞれの立場で議論するのです。

原因が不明で牛が事故死や病死したときは、必ず解剖してもらいます。所見が納得が行かなければ、自分たちでやることもあります。それを3人で確認するのです。失敗の中からも何かを得ようとする努力、長い時間にはそれも力になるのかもしれない。

7. 柔軟な考え方を大切にしています。家内はよく「わたしゃあ、かんがえたんじゃがのう」と言います。突拍子もない発想の様でも、それにキラメキを感じたときは、どうしたら実現できるかと3人で案を出し合うのです。3度に1度ぐらいの割合で成功しています。

最近は3人がそれぞれの立場で、いろいろな考えを話し合うことが多く、それが、この牧場のエネルギーになっています。

福山の中山畜産の社長は、榎野俊文先生門下の私の兄弟子で、大成功されたことは皆さんも良くご承知ですが、その発想の独自性はつとに尊敬している所です。しかし、その技術を学ぼうとする人は多くても、なぜそう考えるのかと、中山さんの考え方に思いを至らせる農家にお会いしたことがありません。

これからは世界が相手です。そのためには、それぞれの条件を最大に利用する独自性の強い農業を作りあげることが大切です。

二十数年前、千屋の試験場を訪問して、いろいろとご指導を受けました。その折、あの有名な「牛を囲わずに人家や畑に柵をする」千屋方式の面影を見て、その独創的な発想にその将来をみたのです。

現在は、その気になれば、さまざまな情報が容易に入手できるすばらしい時代です。しかし、どの情報を採用し、そのデータから何を読み取るか、それを考える力が非常に重要になってきました。技術も大切ですが、考え方がより大切だにご理解ください。

最近、叶芳和先生の「農業 先進国型産業論」（日本経済新聞社）を読みました。大変立派な論説で感心しました。私達の考え方に、非常に近いこの本を是非お読み頂いて、この文章の間もお読み頂くようにお願いします。

最後に見浦牧場からのメッセージです。

これまで、農民は教えられることになれて、みずから考えて行動することは忘れがちでした。

当主の義弟にドイツ系のカナダ人がいますが、彼の幾つになっても道を切り開き、前進し、歩きつづける姿は頭が下がるものが有ります。自由化とはかれらと競争することなのです。

この牧場が生き残るかどうかは、まだわかりません。しかし「進歩のない毎日は人生ではない」に言葉のように、私達はこれからも挑戦しつづけるつもりです。

当場のテーマ「自然は教師、動物は友、私達は考え学ぶことで人間である」を皆様に送ります。ご健闘をお祈り致します。

平成元年 1 1 月 1 3 日
見浦牧場 見浦哲弥・晴江・和弥

おいしい牛肉（１）(2002/4/29)

美味しい猪鍋の条件を知っていますか？

山猟師の人達は、猪が一番美味しいのは、脂の乗った秋から冬の若い個体だといいます。野山を走り回って健康に育った体に、冬を越すために脂が十分に蓄えられた時が、最高に美味しいのだというのです。

私どもは、牛肉も同じだと考えています。牛肉のうま味は細胞の中の細胞液の味です。それは適切な飼料（牛は草食動物ですから充分な牧草を含みます）と適度な運動の中から生まれます。

牛肉の値段は、見た目のよさ、つまり、サシ、霜降りと云って、脂肪がきめ細かに肉の間に多く入っているものほど、高級ということになっています。

本当に、サシが多く入っている肉ほど、おいしいのでしょうか？

もちろん脂肪は肉の食感に大きな役割を果たしています。脂肪が小さく、より多く肉の中に入る事で柔らかな食感になります。また、料理で加熱調理をするときに、肉のうまみの命である細胞液（肉汁）の流出をくい止める役割をするのです。このように、ある程度の脂肪は、加熱したときの肉のおいしさに重要な役目をしています。

しかし、肉のうまみの命である肉汁そのものおいしさは、見た目ではわからないのです。適切なえさをたべて十分運動して健康に育ったのかどうか、肉をみただけではわかりません。店頭に並んでいる肉を見てわかることは、わずかに和牛とか国産牛とかオーギービーフとか、牛の品種と産地だけです。

戦前をご存知の方は、昔の牛肉は少し固いけれど、素晴らしい味の美味しさだった事を覚えていらっしゃるでしょう。あえて偏見と独断でいうならば、戦前の牛肉は大部分は黒牛だったのです。黒牛は、今のようには肉用牛という形ではなく、役牛と言ってトラクターの代わりに田畑を耕していました。田圃や畑は深く耕すほど収穫が多くなります。ですから、仕事をする役牛は力が強い、馬力のある牛が大事にされました。それは筋肉がしっかりしている牛のことですね。発達した筋肉、濃い細胞液、すなわち濃厚な旨みの牛肉の味というパターンになったのです。ただし、何年も働いた牛の肉ですから、固くて噛みきれなくて、最後は飲み込む、そんな事を覚えています。しかし、すき焼きなどで一緒に煮込んだ豆腐や野菜などの食材に染み込んだ牛肉の味は格別でした。だからこそ、日本の代表的な料理として世界に紹介されたのです。

ところが現在は役牛は肉牛に変わり、少ない飼料でより早く大きく育てるために、最小限の牧草と穀物を主体とした配合飼料と、狭い畜舎の中で運動をさせないようにして飼うようになりました。その方が効率がいいからです。何しろ経済性、効率、合理性の世の中ですから。その結果、お肉は柔らかくなりました。食感も良くなりました。しかしあの濃すぎるほどの黒牛の味は失われて、ただの美味しい牛肉に変わってしまいました。

私ども見浦牧場は、この昔の黒牛の味を追いかけて、日本で唯一の独特の飼い方を追求しているのです。このページをお読みの皆さんに、本来の黒牛（わぎゅう）と見浦牧場の牛の話、

そして働いている人間の考え方を、聞いて頂きたい、見て頂きたいと思っているのです。

つづく

2002/4/29 見浦 哲弥

見浦牧場の堆肥を使用される皆さんへ(2002/6/2)

堆肥とは、さまざまな有機物を原料として、好氣的発酵により腐熟させ、組成的に安定したものを言います。本来は藁（わら）類、落ち葉、野草などを発酵したものを堆肥とよび、家畜糞尿を主原料としたものを厩肥（キウヒ）と呼んで区別していました。しかし、現在では、都市廃棄物、下水汚泥、食品の残りかす、林業廃棄物など、いろいろな有機物が原料として利用されており、原料の種別に関係なく、堆肥化されたものはすべて堆肥と呼んでいます。したがって、原料によってそれぞれ特徴があり、使う人がそれを良く理解して使用しなければなりません。たとえば、下水汚泥を原料としたものは、重金属を含んでいる可能性があります。食品の残りかすを原料としたものは、塩分と油分が含まれており、その含有量によっては種子の発芽に重大な影響を与えます。

家畜糞尿を使用した堆肥も、家畜の種類によって性格が大きく違います。

1.鶏糞を原料にしたもの

これにも2種類あって、使用方法が異なります。

● 生の鶏糞をそのまま火力乾燥したもの

（最近では、環境問題が盛んに議論されますので、養鶏場によっては生の鶏糞をそのまま乾燥する場合があります。）

この場合は、そのまま畑に施すと、生の鶏糞に戻ります。弊害があるので、堆肥等に混ぜて、腐らせてから畝に入れましょう。

● 発酵鶏糞

生の鶏糞を腐らせてから乾燥してあります。この肥料は、窒素、リン酸、カリなどの肥料成分が多く、有機の化成肥料と考えてください。大変、効果の高い肥料ですが、土を肥やすのではなく悪くします。おいしい野菜やお米をお望みの方は、土を肥沃にする堆肥と組み合わせ使ってください。

2.牛糞を原料にしたもの

敷き藁の種類や堆肥の作り方によって、いくつかの性格の違う堆肥になります。おがくず、かんなくずなど木質系の材料を敷料とした牛糞で作った堆肥

見浦牧場の堆肥はこれにあたります。昔の藁や刈り草が敷料の牛糞と違って、硬い繊維分が多い木材の粉が原料ですから（炭素率が高いといいます）発酵しにくい欠点があります。しかし、良く発酵したこの堆肥は、土を肥沃にする力が大変強く、他の肥料との上手な使い方を覚えると、昔ながらの甘い味の野菜やお米を作ることができます。

敷料には古紙やほとんど敷料を使用しない場合、汚れた敷料を何度も乾かして使用したもの、などいろいろあります。牛糞堆肥といっても、肥料成分の高いものは、土質改良になるほ

どの量を入れると肥料過多になるものもありますので、その肥料の作り方や組成を良く調べてから使用するようにしましょう。

3.豚糞を原料としたもの

牛糞堆肥と鶏糞堆肥の中間の性質を持っていると言われます。しかし、敷き藁を使わない、または、使っていても量が少ないので、肥料分の高い堆肥です。作物は良くできますが、土の改良には向きません。使い方はそれぞれ工夫してください。

4.その他の有機物を原料としたもの

- バーク堆肥

木の皮を原料としています。鶏糞や牛糞など家畜の排泄物を加えてはいますが、主に木の皮を粉砕、発酵したものです。主に果樹園などで使用されています。畠や田んぼには牛糞堆肥のほうがよいと思います。

- 残飯や生ごみなどを原料としたもの

この堆肥は作物の生育が悪くなることがあります。完成した堆肥に脂肪分が多いのが原因です。とくに脂肪分が1. 2%以上になると、生育の不良が確実になります。この場合、オガコやプレナーかすなどの木材の粉を加えて、何回か積み替えると、含まれている油分が分解されます

堆肥は土の中で徐々に分解して、暗褐色でコロイド状の腐植になります。腐植は肥料を土に結びつける力が大変強いので、施した肥料が流れにくくなり、作物が作りやすくなります。その上、腐植は少しずつ分解して土になり、そのとき、腐植中の微量元素が作物に吸収されてうまみを作ります。平均して一年に分解して減っていく腐植の量は10aあたり100～150kgといわれ、これは堆肥1,500kg以上からできる腐植の量に相当します。ですから土を肥やすには、それ以上の堆肥を毎年投与し続けなければなりません。

見浦牧場の堆肥は、三回以上の積み替えと、2年以上の発酵期間をとっていますので、土作りのための大量投与に十分使えます。安心してご使用ください。

ただし、窒素などの肥料分は少ないので、鶏糞や油粕や化成肥料などで、不足の成分を補ってください。

安全でおいしい野菜やお米は、健康な土から生まれます。見浦牧場の堆肥を上手に使って、健康な土で育った健康でおいしい作物を食べる贅沢を味わってください。

見浦 哲弥
(掲載：2002年6月2日)

おいしい牛肉（２）(2002/7/26)

世界中には、いろいろな種類の牛がいます。有名なアンガスやヘレホードなど、国内でも黒牛の和牛を始めとして、肥後の赤牛、山口の無角、それに乳も肉もと改良された日本ホルスタイン・・・・・・無数にあります。しかし、その中で和牛肉はトップの味を誇っているのです。

牛肉の自由化が外交の日程に登り初めた頃、和牛の種雄牛や精液の国外流出を禁止していた規制の網をくぐって、アメリカに２頭の雄牛が流れでました。続いてオーストラリアへ。牛肉の輸出を考えていた両国にとって、和牛の血統を導入することは、牛肉の味を良くするために、必要不可欠の条件だったのです。

言い替えれば、世界最高の味の牛肉は和牛だと、私どもは思っています。

でも、その最高の牛の味も、飼い方次第で色々と変わります。その話をしましょう。まず、見浦牧場の飼育方法を説明しましょう。

子牛は生まれて１０日目頃から、分娩房（産室）から抜け出して冒険旅行に出ます。見浦牧場には、分娩房が７つある牛舎と４つある牛舎と２つの分娩用の牛舎があります。そのため、常時、ほぼ同じ頃に生まれた子牛が何頭かいますから、遊び友達に不自由はしません。好奇心旺盛な子牛たちは、牛舎の周囲を探検したり、イタズラしたり、友達の子牛に遊びに行ったり、おなかが減ったとき以外は母親の所へ帰ってこない、なんて、不屈きな奴までいます。見浦牧場では大きくなると、集団で群れを作らせて飼育するので、それにあわせて小さい時から自由にさせるのです。

しかし、問題もあります。１頭でも病気になると、時間を置かないで皆同じ病気を患います。皆さんも良くご存知のように、病菌も学習します。多頭飼育になればなるほど、病菌が学習してタフになり、病気が直りにくくなるのです。ですから、一般的にはカーフハッチなどといって、親から離して、一頭ずつ別飼にするなどの方法とりますが、見浦牧場では病気に強い強健性を、血統選抜の基準の一つにすることで対応しています。また、いかに早く病気をみつけて先手をうつか、病菌が薬に対して抵抗力をつけにくくするために、いかに投薬を最小に押さえるかという点に努力しています。

ですから、子牛は小さいときから集団を組んで、元気いっぱい遊び回っています。これによって、体は健康で丈夫になり、肉のうまみの元である筋肉が十分に発達します。

「命の通っている健康な食品を消費者に届ける」、これも見浦牧場のこだわりです。でも、文章で書くと１行ですが、実際は大変です。なにしろ牛語は人間には通じません。学校や専門書をどんなによく学んでも、症状が出るまでは判らないのです。それでは解決になりません。ですから、常日頃牛とふれあい、観察し、失敗しながら積み上げて、やっと、わずかな異変も見逃さずに、適切な治療が行えるようになるのです。体で覚える、これには時間の積み上げが必要なのです。

美味しい牛肉を消費者の皆さんにお届けするためには、大変な農民の努力が費やされている事を、消費者の方にも、畜産関係者の方にも、流通業者の方にも、是非理解していただきたいと思います。

背負うた子に教えられ...

あれはもう何年昔になりますか、島根県の金城町に大きな牧場が出来ました。

私達も牧場を始めたばかりの頃で、その話を八幡の牧野組合で働いていた堀の弘和君から聞いて、勉強に通い始めました。浜田市から車で20分足らずの便利のいいところで、総面積140ヘクタール、和牛の一貫経営で目標母牛数700頭、総投資額25億円、5軒の農家の協業で、内補助金は20億円という、貧乏な私達には夢の様な壮大な牧場でした。

当時の私たちは、できるだけ家族で見学に行き、それぞれが感じた事を話し合うのが習慣のようになっていました。いつもは家内と、時には子供たちと出かけたものでした。

金城町の牧場は、小板から車で約1時間の距離、ちょっととした仕事の合間の気分転換のドライブにはもってこいです。ぼろ車でも移動するには関係なく、「勉強にこいで」の一言でよく見学に行きましたね。

その日は、小学4年だった和弥と一緒に見学に行きました。曇空で少し寒い日だったと記憶しています。

牧場とは名ばかりの見浦牧場と違って、200トンのタワーサイロが建ち並び、外国製の大型機械が勢ぞろいする金城牧場に、子供の和弥も興味津々です。

「お父ちゃん、これは何？」

「これはなー、ブロアーゆうてな、刻んだ草をあのサイロの上まで吹き上げて中へ詰め込む機械じゃね。あのサイロはな、高さが20メートルもあるんよ。見浦の機械は5メートル揚げるともう詰まって、大変なんだがの。大きい機械はすごいんよ。」

「中の草はどうして出すん？」

「一番下にの、アンローダーちゅう機械があつての、かきだすんよ。ここじゃの、その草をベルトコンベアにのせて畜舎の餌箱にの、自動的に入れて行くんよ。」

彼は黙って説明を聞いていました。そしてコンベアの先の畜舎のなかをのぞき込んでいました。やがておもむろに、こういいました。

「お父ちゃん、それなら牛の病気はどうして見つけるん？」

衝撃でした。ハンマーで横面を張り飛ばされたような一言でした。その視点で施設を見直すと、なるほど牧場全体が工場のような雰囲気です。この牧場を訪問する度に感じていた違和感はそれだったのです。命のある動物を無機物の機械と同じ感覚で扱うのは間違いではないかとの問いかけは、子供でも大人の及ばない発想を持つ、そう教えていました。見浦牧場のモットーに「動物は友」の言葉が入ったのは、この時からなのです。

牛は人間の言葉では話せません。体調の変化や、食欲の有無、飼料の不良などを、飼い主が観察して、先手をうって手当しなくては病気を防ぐ事は不可能です。金城牧場では係員が一頭一頭観察して記帳していました。それは一見合理的なやり方に見えますが、非常に手間がかか

る割に病気の発見が難しいのではないかと思います。見浦牧場では、牛群の間を歩いている内に、何となくあの牛は様子がおかしい、あの子牛は被毛に艶がない、などと群で病牛を探しています。牛は一頭ずつ見ても異常は見つけ難いものです。それより他の牛と比較して評価する方が違いが見つけやすいのです。

牛飼いで大事なことは、大規模に機械化された施設ではなく、まず牛を見る事、牛と話が出来る事、そんな基本に触れる問いかけを小学生の和弥がしたことは、本当に驚きでした。その驚きは、今でも昨日の事のように思い出せます。

たとえ家畜とはいえ、牛も一個の生命体。見浦牧場の基礎にある「畜産は命を扱う産業」という考え方が、この牧場の人間にふれあう人に、新鮮な感じを与えるのだと思います。

その彼も、30の坂を越えました。小学生だったあの日から、どのような人間になるかと、期待と不安で眺めていた私は、命の意味をいつも噛みしめている畜産家として育った彼に誇りを感じているのです。

見浦 哲弥

和牛の道(1)(1998/9/14)

昭和38年の12月に2頭の牛が入りました。これが見浦牧場の始まりでした。当時は義弟との全面協業の和興兄弟農園の時代で、和牛、水稻、椎茸の多角経営でした。と言え聞こえはいいのですが、考え方も技術も経営も幼稚そのもので、2年後に解散してしまいました。しかし、とにかく、この時見浦牧場の最初の牛が導入されたのです。

上殿(カミトノ)の武田という博労(バクロウ)から、「2頭で10万にするから」との言葉にのせられて購入した牛です。1頭は「いいあさひめ号」で小柄な島根の牛、もう1頭は「どい号」で被毛の赤い韓牛の血が入っていると思える大型の牛でした。今から考えると、両方とも随分ひどい牛でしたが、とにかく和牛でした。

収量アップへの挑戦

私が和牛生産に取り組む前は、家の田んぼを受け継いで稲作を営んでいました。しかし、この稲作が大変で、かなり小板の水準に近づいてはいたものの、深い田んぼと多い雑草、冷たい水、多発する病気などで、10アール当り200キロも取れば豊作でした。強電(電力技術)の勉強をあきらめて家の農業の立て直しを始めていた私は、猛然と稲作の勉強を始めました、朝倉書店、養賢堂などから専門書を取り寄せて読みふけりましたが、悲しいかな、小学校卒の学力では理解するのは大変な努力が必要でした。そこで、昭和28年、晴さんとの結婚を期に、あちらこちらに二人で勉強に出ることにしました。

当時、県の中央農事試験場は西条(いまの東広島)にありました。小板は交通の不便なところですから泊まりがけになります。でも、理解に苦しむときは何度も何度も出かけました。初めは若い研究員が応対してくれたのですが、そのうち、場長の石川先生が直接教えてくださるようになりました。あるとき、石川先生が「見浦君は遠いのによく勉強に来るね。近くの人中が君の10分の1も熱心さでも持ってくれば、、、」と言われたことがありました。こんなに足しげく通ってくる人はいなかったのでしょうかね。

そのうち、私達は予測収穫量に対して、必要な養分を計算して施肥する肥料設計を始めました。当時はまだ肥料の知識は一般化しておらず、まして窒素、リン酸、カリの3要素の量を計算するというようなことは、この地域の農民の常識の外だったのです。その上、試験場や普及員の指導は国の平均値に基づいており、この小板の気候、風土に適した施肥法・施肥量等とは大きな差があって、指導と結果が大きく食い違っていたのです。

そこで私は実際に試験しながら、その違いを埋めていくという方法を取りました。これは大成功で、収量が一気に増えて、それまでの1.5倍、300キロを越しました。

春先から稲がグングン伸び始めると、人が集まりました。

「こんなに出来ると、すぐ病気で枯れてしまうよ。」

当時はイモチ病が蔓延して、どの農家もその対策に手を焼いていました。しかし、私は、試験場の指導通り、適期に適量の農薬を散布して、イモチ病を防ぐことに成功し、秋には見事な稲穂がたわわに実りました。

それからは、非難の声は影を潜め、私達の稲作は注目の的になりました。肥料をやっても、水をあてても、どこからともなく人が現れて、「いくら入れたのか。」「なぜ浅水にするのか。」「どんな農薬を撒いたのか。」と、うるさいこと。返事をすると、その日の内に「見浦は何の農薬をまいたらしい。」と知れ渡ります。とにかく大変な早さでした。

その中で、2人の農民が教えてくれと、訪ねて来ました。一人はKさん、「肥料をやらないで、米を沢山とる方法を教えてほしい」といわれました。そこで、「それは飯を食わせないで、仕事をさせるのと同じやで。」と言うと、「人を馬鹿にして」と憤然として帰ってしまいました。

もう一人はJさん。当時40すぎくらいでしたか。「反別が少ないうえに（50アール位だったと思います）収量が少ないので飯米にも事欠く有様なんだ。恥を忍んでお願いするんだが、何とか教えてもらえないだろうか。」と、20半ばの青二才に頭を下げられました。私がはじめて大人として扱われた時でした。そこで、「1年間だけ、私の言う通りにして稲を作ってください。ただし、少しでも違った事をされたら責任はもちません。しかし、申し上げた通りにされて、もし1石7斗以下の収量だったら、差額は私がお米を差し上げましょう。」と約束しました。

それから半年、Jさんは、ご夫婦で懸命に稲を作られました。1～3日おきに見に行って、随分厳しいことを申し上げたのですが、それにも関わらずです。

秋になりました。Jさんの田んぼは見事に実りました。実収2石2斗。苦しい家計の中からワイシャツを1着もって御礼に來られました。高価なものではなかったけれど、それに込められた感謝の気持ちは痛いようでした。それから亡くなられるまで、「見浦は約束を守る」と信じて頂きました。

湿田を乾田に

稲は出来るようになったのですが、見浦の田んぼは湿田、床（耕土の下に作った粘土の層）の無い田んぼ、耕土が極端に深い田んぼなど、問題のある田んぼがほとんどで、耕作作業時間が他家の2倍以上かかるのが普通でした。試験場の場長先生は、「暗渠（あんきょ：地下水路）排水」が必要だと指摘されました。そこで農業土木の専門書を読んで本格的な工事をすることにしました。本格的な工事を選んだ理由は、戦時中に食料増産対策の一つとして、加計高校の生徒が勤労奉仕で施工してくれた、簡易暗渠がまったく効果がなかったという、苦い記憶があったからです。

地下水位を地下何センチにするのか、に始まって、本線はどの位置に、支線は何メートル間隔にするか、暗渠の材料は、深さはと、色々問題があり、一つ一つ解決してゆかなければなりませんでした。そしていろいろ検討した末、暗渠の材料は愛媛産の土管、深さは一番浅い所で90センチ、支線の間隔は15メートル、勾配は120分の1、としました。掘削の機械はありませんから、全部手作業になります。とても秋口や春先だけでは、作業が終わりそうにないので、施工する田んぼは稲の作付けを止め、1年中暗渠工事をしました。これがまた大変な話題を提供して、「もったいない事をする。暗渠は稲を刈取った後でするものだ。」などと非難の的でした。その批判も、翌年3石近くも収穫するという素晴らしい稲ができて一遍に無くなりました。

しかし、暗渠は問題も発生させました。それは水不足でした。小板は水源を深入山に求めている

ます。その深入山は死火山なので、ナメラと呼ぶヒビのない岩盤が浅いところに広がっています。そのせいで日照りが続くと、すぐ川の水が減って水不足が発生するのです。

父の昔話に、小板に見浦の先祖が移り住んで来たときに、7つの沼があったといっています。暗渠をして判ったのですが、確かに作土の下に厚い泥炭の層が（1～2メートル）ありました。そして何本かの川の跡 砂利の筋がありました。暗渠の結果、その泥炭の層が収縮してヒビが入り、排水がよくなりすぎました、湿田で辛うじて均衡をとっていた水利が、バランスを失ったのです。ポンプで川から揚水すると川下から苦情がでます。おまけに40～60センチもあった作土が有機物の分解が良くなったせいで、15～20センチに減って保水力が悪くなり、水不足に拍車をかけました。そこで水田を畑にする事を考え始めました。

小板では平らにできて水があるところは、どんな小さな所でも水田にしていたのです（当時の山村では米は数少ない換金作物の一つだったのです）。そのため、畑は傾斜地に追いやられます。ところが、小板は年間雨量2100ミリと言う多雨地帯です。雨による畑の表土の流出（エロージョン）が激しく、それを防ぐためにこの地方では、種蒔をしたあと、表面に「カケ」といって藁や刈草を薄くひろげるのです。カケは土が流れるのを防ぐと共に、雑草が生えるのを遅らせ、又腐ることで肥料にもなる優れた技術ですが、残念なことに草取りなどの作業がすべて手作業になって、労働生産性が極端に低いのです。

昭和20年に働いた七塚原種畜場では、西洋式の畑作業（例えば、カケをせずに草取りはホーと呼ばれる鋤（クワ）で削りとる）を学びました。同じ手作業でも数倍も能率が上がります。エロージョンのエの字も知らなかった私はいたく感心し、帰郷して早速実行してみたのです。ところが梅雨末期の豪雨、真夏の夕立、夏から秋の台風、と年中行事のように降る雨で、折角の表土がみる間に流亡してしまいました。既存の技術には問題があるものの、その中には長い年月の経験による真理も含まれていたのです。この失敗の経験から、排水さえうまく行けば、エロージョンの心配のない平らな水田を畑に転換して野菜や果物を作ったら、新しい道が開けるのかも、と思ったのです。それから何年か後に、見浦の水田は全部畑に転換されるのですが。

機械化の始まり

その頃は、ようやく戦後の混乱も落ち着き始めて、戦後、細々と続いていた農業機械、特に耕作機械にも新型が登場し始めました。湿田でも作業できる、キャタピラーのクランク型の耕作機がT家に導入されました。水冷単気筒の6馬力のエンジンを搭載して、後部の10個余りの鋤（くわ）をクランクで動かす、巨大な鉄の化物のような機械でしたが、とにかく牛で耕す事に比べると問題にならないほど高能率でした。それに農耕牛と違い、農繁期を過ぎたら餌をやる必要がありません。若い農民の羨望的でした。でも、機械としてはずいぶん未熟な代物で、故障が多い上に、単能機で耕すことしかできない、重量が大きくて移動が大変と、色々問題もありました。

そこで無理をして、畑作業にも使え、荷車を引いて運搬にも使える、万能機の耕作機（歩行トラクター）を探しました。シバウラのAT3型というのを選んで三次まで調べに行きました。販売店で紹介されてアメリカ帰りの老農夫を訪ねました。70才を越したというその人は、きれいに整備された色々の作業機とその使い方を教えてくれました。それがハンドトラクターと呼ばれる外国型の農業機械との出会いでした。耕作機を「耕す機械」として考えるのではなく、「動く原動機（パワーステーション）」として、作業機を取り付けることで初めて機械として役

割を果たす、その考え方の新鮮さは、70を超した老翁がそれを当然として受け入れている事と共に大変な驚きでした。30数万円の出費は当時の私達には大きな負担でしたが、ようやくその機械を手に入れたときは、本当に嬉しくて、それが見浦牧場の機械化の始まりでした。

空冷6馬力の石油発動機、前進3段後進1段に高低2段のサブミッション、デフの組替えで乗用・歩行の両用になる本格的な国産機でしたが、耕地整備がされていない日本では時期尚早で、生産台数も少なく、湿田に入れば沈没してしまい、デフを組替えなくてトレーラーを引かせると、前進より後進の方が速いという始末、おまけにデフの組替えは大変な作業でした。しかし、その分解や組み立てが私の機械人生の始まりだったのです。さらに、乾田と湿田との仕事の能率の違いのあまりの大きさに、私は土地改良を痛感したのです。

中島先生との運命の出会い

そうこうしているうち、義弟との共同経営の和興兄弟農園を設立、和牛、水稻、椎茸の多角経営をやろうということで、牛飼いはじめたのです。ところが、畜舎を作って牛を飼育すれば、即収益があがると考えたのだから、こんな幼稚な考えのスタートではうまく行くはずもなく、自慢じゃないけれどたちまち躓きました。

共同経営が破綻する直前に、農業改善事業の適用を受けて開拓をやらないか、との話がありました。何軒かの農家が集まって一つの農場を作って、経営規模の拡大と近代化を計るということです。分業による技術の向上、担保保証能力の増大による資本の集積、事務処理の確立、など優れた点も多く、専門家の推奨の方式でした。賛成してくれたのは、義弟のT家、義姉のK家、友達のY家、H家の5軒。ところが、すぐ問題が発生しました。構成員の奥さん連の競り合い、ジェラシー、男性は比較的实力の評価は公正だったのですが、奥さん連に巻き込まれて、家柄や小柄の居住歴の長さまでが議論の種になる始末、一番年少の私がリーダーでは収拾は不可能でした。おまけに社長の義父が財産の保全を計って、土地の名義を孫に換えてしまいました。たしか計画には同意して、100パーセント成功しろと釘をさした人なのにと、憤慨しても解決にはならず、結局わずか3ヶ月で解散となり、後始末に走り回りました。おまけに誰が原因かと追求されていわずもがなの発言をするなど、私もミスの連続で、そのケアにはその後20年も30年もかかりました。

県も町も本気でその事業を推進してくれていましたから、ただ止めますだけでは良心がとがめます。仲間の家は一軒一軒謝って精算して歩きました。「県や町はそれが仕事だから、わざわざ行く必要はない」という意見もありましたが、私は一人で謝って歩きました。

県庁に行ったときです。県農政部へ行き、課長さんにお詫びしようと意を通じますと、しばらく待てと待たされました。1時間以上経った時、農政部長室へ通されました。驚きましたね。課長さんに面会をお願いしたのに、部長さんとは。当時の部長さんは、中島建先生、広島県で最も若くて部長に就任した秀才と言われた人です。えらいことになったとビビってしまいました。「何しに來たのか」聞かれて、正直にわけを話して、「わたしの力不足でご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」とお詫びしました。すると中島先生は、「何何をしてほしいと頼みにくるのなら判るが、中止になったと謝りに來たのはお前が初めてだ」と、あきれつつ、話を聞いてくださいました。

ところが、何を思われたのか、「オイ、君、今から会議があるから、しばらく部屋の隅で待って

れ」と命じられたのです。

さて どんな会議が始まるのかと思ったら、課長さんや試験場長さんたち10人ばかりの幹部会議が始まったのです。会議の内容は農政部長さんが今度のアメリカ視察で感じたことを、如何に広島農業に反映させ、将来の競争に備えるか、との話でした。これから開発される農地は、労働生産性を上げるため、区画は大きく、形状にも配慮をしなければならないという話や、水利や農道の整備の話、水稻 牧畜 園芸、それぞれの場合の話もあった様な気がします。まだ小さな圃場、曲がくねった細い農道、雑草の繁った水漏れする水路、それが大部分の時代の話です。

一通りの議論が終わったところで、中島先生が私の方を向いて「今の話を聞いて何を感じたか意見を話すように」と言われました。ビックリ仰天とはこのことで驚きましたが、逃げる訳にも行かず、思わず日頃考えていることを話しました。

「先生方の話の中に、エロージョンのことが出ませんでした。それが気にかかります。雨量の少ない瀬戸内地方と違って、私の住む芸北地方は年間雨量2000ミリ前後。水田ならいざ知らず、畑の場合はエロージョン対策を念頭に置かないと成り立たないと思います。アメリカの穀物地帯の年間雨量は600ー800ミリと聞いています。私も畑作を自分ではじめ、2ー3年で表土を流して畑を駄目にした事があります。生意気な様ですがこの問題も大切な事だとも思います。」

その様に申し上げたと記憶しています。

一瞬室内がシーンとしました。これはいい過ぎたと反省したのですが、中島先生は何も言わずに会議を終わらせました。

それから他の方々が退席して中島先生と二人きりになった時、先生は若造の私に真剣に話されました。

「見浦君、今の畜産、特に和牛飼育は価格の乱高下に翻弄される投機になっている、私はこれを産業にしたいのだ。そうでないと和牛は生き残れない」と。

この一言が私に和牛と心中することを決意させたのです。私の人生の大きな大きなステップでした。

和牛一貫経営論争

当時、和牛の将来について、日本を二分した論争が行われていました。詳細はその1ー2年後知ったのですが、概要は次の通りでした。

その頃、日本の農村でも農作業の機械化が始まりました。戦前、岡山の興除村から始まった機械化は、大きな水冷の石油発動機を積んだロータリー耕うん機の形で始まってはいたものの、高価で重い機体がネックとなり、普及は微々たるものでした。1950年頃からアメリカから輸入され始めた小型の耕うん機（メリーテラー）が、この流れを一変させました。安価（在来機の5分の一内外）と軽量（2人で持ち上げられました）のこの機械に刺激されて、輸入・国産機が入り乱れて急速に普及して行きました。当時、広島県には役牛として13万頭の和牛がいましたが、耕運機の普及に反比例して激減して行きました。なにしろ機械はシーズンだけガソリンを食わせれば、あとは倉庫のなかで眠っていてくれます。農民がなけなしの金をつぎこんだこの機械で農繁期を済ませると、そそくさと出稼ぎに行く、色々な形はあっても小板も

例外ではありませんでした。

しかし 資源の乏しいこの日本で、折角これまで維持してきた貴重な肉資源を、このまま衰退させてはいけなと考える人が、まだ沢山いたのです。そして役牛としての需要がなくなるのなら、肉牛として改良して存続させよう、その為には一日当りの増体量を外国の肉牛の 1,1 kg（当時 和牛は 0,5・0,6）kgに近づける。30ヶ月以上もかかった出荷月齢を24ヶ月位にする。500kg半ばだった体重を600kg以上にするなど、多くの改良目標が掲げられました。論争の主題になったのは、その飼育形態だったのです。

その一つは、京都大学の上坂先生が提唱する、子牛の生産から9ー10月位まで飼育して、家畜市場で売却する繁殖農家と、その子牛を購入して肉牛として仕上げ、食肉市場で売却する肥育農家との分業という従来の飼育方式。

もうひとつは、かの広島県農政部長の中島先生が提唱する、繁殖と肥育を一つの経営でカバーする、一貫経営と呼ばれる方式です。一貫経営の最大の狙いは、家畜商による中間マージンの解消と、飼育過程の情報の還元による経営の合理化と向上でした。しかし この一貫経営方式には多くの問題がありました。まず母牛に人工授精をして、生まれた子牛を肉牛に仕上げて、代金が入ってくるまで35ヶ月以上かかります。その間1円の現金収入もないので資金繰りが難しい。飼育期間の前半と後半では、技術の考え方がまるで違う。牛のように大きな家畜はただでさえ、資本の集積が大きいのに資本の回転率が低すぎる等等・・・・

上坂先生の主張は、「日本の零細な農民にはこの方式は定着しない。農民の知恵として出来上がった分業方式のほうが適している」というものでした。「繁殖から肥育までの生育全般を管理観察しないと改良は出来ないのでは」との質問に、「家畜の改良は試験場や研究所や一部の専門家の仕事で、一般農民のあずかるところではない」、その様なことを言われていたと記憶しています。負けん気の私が益々敵愾心を燃やしたのは言うまでもありません。

多頭化一貫経営の完成をめざして

昭和40年、広島県は多頭化一貫経営試験？と称して、油木の試験場で広島県の主張を証明するためのテストを行いました。

その概要は、畑面積10ヘクタール、母牛30頭、その子牛、肥育牛、総計90頭、それを2人で管理飼育する、というもの。

母牛は年間屋外飼育、干し草は倉庫兼用の給与小屋での自由採食、サイロはトレンチサイロで、可動の給与枠での自由採食、肥育牛は簡単な雨避け牛舎、機械は18馬力の小型トラクターの一貫作業。この試験は2年間行われました。その結果、一貫経営は可能との結論が出たのですが、問題は山積していました。

今から思えば、その時この方式で一貫経営を始めた農民の中で、生き残ったのは見浦牧場だけ？なのですから、問題はあまりにも多すぎたのかもしれません。

私は、この試験の間に何度も見学や研修に参加しました、そして、その考え方の合理性に大いに賛同したのでした。しかし障壁も高くて、先達もいない、どうやって乗り越えるかは大変なことでした。

よく揃った30頭の母牛、簡単とは言え、サイロ、乾草小屋、スタンション（給餌槽）などの施設群。小型トラクターと牧草用の作業機一式（当時はまだ中古品は出回らず、輸入品が主力

でずいぶん高価でした。)

その年か、翌年かは定かではではないのですが、油木の試験場の講習会に出席した時の事です。場長先生（榎野俊文先生、後に私の人生の師の一人になられた人）に、ご挨拶のため事務室の前までゆくと、先生が研究員の皆さんに「今日の講習生の中に大物がいるから、指導は念入りに手を抜かないように」と話していました。私は、大物とはどんな人かな、是非教えを受けたいものだ、と思ったのです。講習の間も休憩の世間話の時も、注意を払いましたが、とうとう、それらしい人にはお逢いすることはできませんでした。「まさか、私が大物？そんなことあるはずが・・・・」と思いました、どうも私への接し方が違います。「なぜ、私が大物扱い？」、あれこれ考えた挙句、やっとあの中島先生と出会った会合の事に思い当たったのです。

20代の半ばに、地方政治家だったもう一人の先生、前田睦夫先生が
「社会は人で成り立っている。人の命が有限である以上、自分の考え方や見方を、次の時代に伝える為の若い人を探して、そして育てるのだ。社会と言うものはそうやって続いて行く。私もそうして育てられた。」

と、話されたのを思い出しました。

でも、まさか自分がそんな評価を受けようとは・・・・・・・・・・。

ともかく、私達夫婦は、広島方式の和牛の多頭化一貫経営の完成をめざして走り始めたのです。長い長い道のりだとは気づかずに。。。それは昭和40年の事でした。

1998年9月14日 見浦 哲弥

生と死と(2002/4/29)

あれは、亮ちゃん（息子のお嫁さん）がお嫁に来るまえの年だから、8年前になりますか、戸河内町の農業委員だった私は、委員会のあと恒例の忘年会に出席したのです。

年末で、牧場は猫の手も借りたいほどの忙しさの中ですから、心ここに有らずの心境で、乾杯が済んで座が盛り上がり始めた頃を見はからって帰宅したのです。

当時、見浦牧場には、渡辺君（次女の夫君）から貰った初代ファミリアと、律ちゃん（3女）が置いていった軽自動車のミラがあったのです。朝、家を出るときに、今日はどちらで行こうかなと迷いました。ファミリアはターボ付きでしたから、燃費がかなり悪くて、いつもだったらミラで行くのに、この日は何故かファミリアが気になって、この車にしたのです。おかげで命拾いをしたのですが。

12月21日、何日か前に降り積もった雪もほとんど消えて、新品の雪用タイヤの車は快調でした。虫木峠の登りは、先日、和弥と取り替えた部品のせいもあって、10万キロも走った車とは思えないような走りでした。峠のトンネルを過ぎると所々に雪が残ってはいたけれど、雪路を感じる事もなく家路を急ぎました。

松原の新田工業の前で、私の前を走っていた中型の乗用車が大きくスピンしました。よくみるとノーマルタイヤ、時は12月、ここから先は残雪も増えます。これは追い越した方がいいかと判断して、加速し、追い抜いて自分の車線に戻って減速した直後、事故にあったのですから、ついていませんでした。

新田工業の前と、ホテル”いこいの村ひろしま”の間に、カーブを描く大きな橋があります。8年も前は、道路脇の立木も小さくて、100メートルあまりも見通しがきいたのですよ。その橋が見えた瞬間、黒い車が視野に飛び込んで来ました。「なに？」と眼を凝らすと、橋の上で横滑りした車が、私の車線に飛び込んで圧雪状態の残雪の上を滑走してきます。驚く時間は有りませんでしたね。私も雪国で30年以上も運転しているのですから、すぐ相手の車の前輪を見ました。この車もノーマルタイヤ、おまけに車輪が横向きになってロックしています。運転手を見ると顔面が硬直してハンドルにしがみついているだけ。その時点であきらめました。「これは助からねー」

こちらの速度は50キロ位、相手の車は私より速いようでしたから、ほんの数秒しかなかったのでしょうね。衝突の瞬間は覚えがないのですよ。

どのくらい、意識がなかったのかわかりません。最初に青空が見えました。本当に青い青い空でした。ああ事故にあったんだな、俺は死んだのかな、と思ったのですが、視線を動かしたらグチャグチャになったボンネットが見えました。相手の車が大きいのかかかっています。おお、まだ生きているな、これが俺の最後か、私の人生は、こういう形で終わる事になっていたのかと、感ひとしおでした。

それから、頭がものすごい勢いで回転し始めました。まず体の情勢分析、首から下が全く感覚が有りません。手は動くかと確認すると、右手が辛うじて命令に従います。そこで、運転席の潰れ方から、下半身はどこにかちぎれているな、と判断したのです。そうすると出血でまもなく意識はなくなるな、残された時間をどう使おうかと考えましたね。

そうだ、晴さん（家内）に礼をいっていない、長い間苦楽を共にした彼女にそれだけは伝えなくては、と。

そうになると、短い時間で、動く右腕だけでどうやるか。上着の左腕を見ると腕にある鉛筆ポケットに、鉛筆が差してあります。会議にはいつも新しい作業衣を着ていく習慣を感謝しましたね。あそこなら手が届きそう。少しずつ少しずつ手を伸ばして鉛筆が取れた。芯も折れていない。つぎは書き込む紙です。手の届く範囲は限られています。幸い左の胸に広告の紙が入っていました。焦りましたね。「急げ急げ、意識がいまにもなくなるぞ、ここまで出来たのに全部無駄になってしまうぞ」と。

「晴さん、長い間有り難う」、書き終わってやっと安心しました。不思議な事に、痛みもなければ、怖くもない、まるで人事の様に考えて行動している、そんな自分が驚異でした。

でもまだ意識があります。この時間も、もったいないなと、思ったのです。そしてさっき書いた文面を見ると、いかに文字が汚い、これでは書いた本人しか読めないや、もう一度書き直そう、今度は丁寧に書いて時間が足りなくても、その時は前のやつが役にたつはず、そう考えたら焦る気持ちが落ち着いて、すこしはきれいに書けたのです。文章に書くと随分長い時間のように感じるけれど、ほんの1分か2分だった気がします。

さてそれでも意識がありました。私は子供達を育てるとき、最後の最後まで努力するようにと教えました。それを思い出したのです。駄目にしても時間のある限り全力を挙げる、それをやってみるかと考えました。まず足がついているか、下半身がどうなっているか、確認してみると・・・、右側のドアはメチャメチャですから、つかまるところもない。ところが左側のドアは傷んでいないので開くかも知れない。それには左手も使わないと。・・・懸命に左手を動かそうとすると、僅かづつ動くのです。いける、と思いました。手を伸ばしました。あと少し届きません。体を倒す事にしました。少し上半身が動きます。何とかドアの取っ手に手が届きました。死んでも離すまいと思いましたね。死にかけているのにね。まだ意識があります。レバーを押すとドアは動きます。しめた、と思いました。大きく息をして、渾身の力をだして体を引っ張りました、驚いたことに下半身がついてきます、おお、ちぎれてないやー、内出血か。

そこで、助かるかもしれないと考えた途端、死ぬことが怖くなりました。それまでは、恐怖など微塵も感じていなかったのに。・・・、退院後に読んだ医学の本に、「助からないと覚悟を決めたら、脳内にエンドルフィンと言うホルモンが大量に放出され、恐怖心を麻痺させる」と書いてありました。麻薬と同じ効果があるそうですが、まさにさもありなんという現象でした。

ドアを開け、体を車から引き出して、側溝に転落したのですが、もうその時は怖くて、怖くて、早く救急車が来ないかとそればかりでしたね。通りかかった島川君（隣家の主人）が「見浦さん、しっかりせいや。」と言ってくれたのに、家への連絡を頼むのが精一杯。生きてるうちに止血剤をうってくれ、そしたら助かると思って。・・・。

しかし、この事件は私に色々な事を教えてくれました。瀬戸内寂聴さんが、その評論の中に「生まれたときから、死が約束されている」と書いていますが、生物が生まれてから、長い長い年月の間に、私達は命の終わりに対応する方法を、学んでいるのだと思うのです。エンドル

フィンの効果は、まさにそうして身につけた対応方法のひとつなのではないでしょうか。
この様に考えたら、随分と気が楽になりました。

私も、人生が残り少なくなりました。まもなく終末ですが、要は最後まで全力で生き抜く、置かれた立場を正確に把握する、そして、あとは自然の大きな力に身をゆだねる。そうすれば、恐怖も、不安も、未練も、消え去って、平常心を持つ事ができる、こう考えたのです。大きな大きな収穫でした。

”生と死”、事故の中にも、教室がありました。

2002 年 4 月 29 日 見浦 哲弥

結婚50年目のラブレター(2001/1/29)

高校卒業後どうするか?、たいした目的意識もなく、ただ漫然と過ごしてしていた私にとって大きな問題だった。代用教員の試験でもうけてみたらと言われ、採用試験の申込用紙だけはもらって見たものの、勉強もろくにしていない私には受けてみる勇氣もなく、結局何もしないまま卒業してしまった。

卒業後は家に帰って農作業の手伝いをした。地元の小さな農協に頼まれて就職、組合長とたった2人の小さい農協だったが、今でいうセクハラに耐えきれなくなって3月で辞めてしまった。

私の生まれた集落は、広島県の北海道と言われて、冬は2メートルを超える雪に覆われてしまう、20軒ばかりの小さい集落だが、当時はそれぞれの家に後継ぎの若者がいて、青年団で結構、積極的な活動をしていた。その青年団の仲間に入れてもらった。地域の新聞の紙面作り、原紙きり、ガリ刷り、今考えると充実した面白い時期だったと思う。

昭和28年3月 青年団の仲間だった主人と結婚した。

実家と100メートルしか離れていない家だ。親戚でもある彼の家ではあったが、家の中の事は何も知らなかった。

終戦当時の混乱期は、どこの家也大なり小なり苦しかったのだと思うが、私達のところも例外ではなかった。嫁ぎ先の彼の家は、このあたりでは「分限者」と言われ、かつては田圃も小作にだしていて裕福な家の部類に入っていたようだが、農地開放で小作地はとりあげられ、唯一の収入源であった恩給は激しいインフレのおかげで、雀の涙ほどに価値が下がり、経済的には火の車であったのだ。

20才そこそこの私達に、義父は「結婚を期に独立してやってゆけ」と、田圃9反、それに雨漏りがする大きな茅葺き屋根の家を任されたのだ。

その日から、悪戦苦闘が始まった。春とともに始まる農作業、稲の植え付けの準備である。牛の手綱を取って代かきもした。大きな2反もある、爪先立ちして歩かないと股まで浸つてしまいそうな深い田圃に入って、2日も3日も田植えをした。

どんなに頑張っても、稲作りは秋にならないとお金にならない。現金収入を得るために炭焼きもした。雑木の山ではあったが、農地開放でもとりあげられずに山が残ったおかげだ。その山に炭窯を作って炭焼きをした。

昭和29年1月 長女が生まれた。寒い大雪の降った日だった。主人と弟が10キロ離れた八幡まで産婆さんと呼びに行ってくれたが、10時間以上もかかってやっと帰ってきた。産婆さんも、もうかなり年だったと思うが、本当に良く来て下さったものだ。いま思っても感謝感激である。彼の母も、私の母も、早死して居なかったのも、子育ては大変だった。風呂が離れにあったので、風呂にいれるのも一大事だった。私が子供と一緒に風呂にはいり、あがるときに大声で彼を呼ぶ。彼は大雪の中、すぐに脱げるようにと下駄をつっかけてやってくる。子供を受け取ると、子供が凍ってしまわないうちにと、必死で母屋に駆け込むのだ。あの当時は男親

が子育てを手伝うと言う時代ではなかったが、彼はお襦袢（オムツ）の取り替えなど積極的にやってくれた。

昭和29年春 ボロボロの萱屋根の家を何とかしなければと、思い切って建て替える事になった。向こう見ずな彼は、何も知らないのに山師をやって金を稼ぎ、製材も自分でして費用を節約し、12月に新しい家に何とか入れた。学校みたいな変な家だと悪口を言われたが、少なくとも雪が舞い込む事は無くなった。

そして、また春が来た。

どうすれば収入を増やす事が出来るか、切実な問題だった。彼は炭焼きで腰を痛めてしまった。炭焼きはつらいだけで高収入を得る事ができない。替わりになる物を探す事が始まった。

農事試験場など関係機関の門をたたいて助言をこうたが、標高750メートル、積雪で3ヶ月孤立する悪条件の中では、なかなか見つからなかった。

とにかく炭焼きをやめ、残った雑木を利用して椎茸栽培をすることにした。「椎茸は現金が入るまでに3年はかかる。そんな事をしなくても、木材をパルプに売ればすぐ現金になって、高く売れるのに」と言われたりもしたが、1万本まで増やした。

雑木を伐った跡には大栗を植えたりしたが、それも雪や病気でうまくゆかなかった。しかし、その時植えた栗の木が、今でも4、5本残っていて、秋になると実を付ける。薬剤散布をしないので虫喰いだらけだが、それを狙って鳥や熊がやってくる。それでも拾いに行けば、彼らの残り物でも秋を楽しむ事は出来る。

椎茸はよく生えた。日中は椎茸取り、夜は網に並べて乾燥機での乾燥作業と忙しかった。自然栽培なので、春に集中して生えてくる。やっと作業が一段落したときは他家では田植えの準備は出来上がっていた。わが家ではそれから田耕しを始める始末。田植えの適期が短い寒冷地では、両立はなかなか難しかった。

当時、牛を使って田起こしをすると、1反に2日かかった。牛を使っているだけでは能率は上げられないと、なけなしのお金をはたいてトラクターを買った。しかし 膝の上まで浸かる軟らかい田圃では、役に立たなかった。そこで考えた。湿田だから駄目なのだから、暗渠（あんきょ：地下水路）排水をしよう、と。雪に埋もれてしまう冬には出来ないで、稲作を休んで、スコップとつるはしだけで、背丈ほどの排水溝を掘って、土管を入れて、又土をもどす。気の遠くなるような仕事だった。しかし、苦勞の甲斐あって、暗渠排水をした田圃にはトラクターが入れるようになった。乾田になった田圃は、あの深かった土はどこへ行ったのかと、思うほど浅くなって作業が楽になり、能率が上がるようになった。

昭和35年に次女が、36年には長男が生まれて、育児が忙しくなった。この頃から病院でお産をするようになった。年子だったので大変だった。長女の時は乳母車を買えなかったで、木の箱の中に布団を敷き、子供をいれて田圃の畦道に連れて行って仕事をしたけれど、次女のときは乳母車を買えた。その中に2人を入れて仕事場を連れまわったものだ。

昭和38年はあの有名な、38豪雪でえらく難儀をした。4メートルの大雪に悲鳴を上げ、都

会に出て行った人たちは少なくなかった。北風が吹きすさぶ厳冬には、風が吹き寄せる吹き溜まりにすごい量の雪が積もる。私達の家は入り口だけは雪は無かったが、一步踏み出すと軒先を越す雪の壁が出来ていた。水道はまだない。どんなに冷たくても洗濯物をすすぐのは川、その川へゆけなくなり困ってしまった。そこで川へ行くためのトンネルを掘った。雪が少なくなつた今では想像もできないが。

その頃から時代が変わり始め、自家用車が持てるようになり、冬も道路の除雪がしてもらえる様になり、田舎の暮らしもそんなに不便ではなくなっていた。

椎茸の原木が不足した。手山がそんなに在るわけもなく、遠くまで買いに行くなど、もつてのほか、と椎茸に見切りをつけた。国有地に働きかけ、開拓をして牛を飼う事になって、それからが又試行錯誤の闘いが始まった。昭和38年に3女、44年に次男が生まれた。5人の子供達を育て、大学まで出すのは容易ではなかったが、奨学金に助けられて、なんとか皆育てる事ができた。学校に行きたくても貧乏であきらめ、独学で電検の2種と3種の資格を取った主人は、子供達に「学校に行きたければ一度だけチャンスあげる。家の経済状態では国公立以外は不可能だけど、君達がそれを乗り越えたら全力を挙げて手伝う」と申し渡した。ワンチャンス・ワントライ方式と名付けた壁を、子供達は皆乗り越えてそれぞれ仕事に付いている。ただ跡を継がせた次男には借りを作ってしまった。

話は前後するが、昭和38年 2頭のボロ牛を買い込んで牛飼いを始めた。冬季の交通が困難なので、交通が必要な出荷や仕入れが少なく済む、黒牛の繁殖から肥育までの一貫経営をめざしたのだ。京都大学の先生や広大の先生が出来ないと太鼓判を押したのに、である。手本がないのだから毎日毎日が戦争だった。しかし一年一年少しずつ牛を増やして40年でやっと180頭と30町の牧場を（うち10町は小作）作り上げた。40年あれば何千頭にも増やすことに成功した人もいるが、家族経営にこだわった私達にはこれが限界だった。

次男が高校の時、主人が病気になった。その頃子供はみんな都会にでていて2人だけだった。どんなに苦しくとも牛飼いは休む訳に行かず、次男に学校を休ませて手伝わせた。

主人は若い頃、「農業は嫌だから町へ出て勉強をしたい」と言ったら、義父が「お前が出たら家が潰れる」と、頼まれてしかたなく家を継いだ。それが今でも悔しくて、子供達には好きなようにさせると強がりを言っていたが、病気の時はどうしようもなくなり、次男に大学はあきらめて高校卒業後かえって手伝ってくれるように頼んだ。

次男は素直に聞き入れて、帰郷して後継者になってくれ、主人が60才の時経営を移譲した。5年後高校時代の後輩の娘さんと結婚して5年、今では経営者として2人で働いている。私達も手伝って家族4人それぞれが分担して仕事をこなしている。

気がつけば、70才、がむしゃらに働いてきたが、もう人生の終わり、長いようで、短いようで。

生き物を飼うと言う事は、一日もたりとも休みもない。酪農はヘルパー制度なるものがある由だが、肉用牛にはそんな話は聞いた事がない。泊まり掛けの旅など、夢のまた夢。しかし、それが出来なかったからといって、暗い人生だった訳でもない。なにしろ、文明なるもののおかげで、いながらにして世界のニュースを知る事のできる世の中だから、気の持ちようである。

振り返れば、色々あったが、何事も前向きに考えて突っ走る彼のおかげで、ハラハラドキドキ。
面白い人生を本当に「ありがとう。」

2001 年 1 月 29 日 見浦 晴江

和牛の道（２）(1998/9/11)

昭和３８年１２月 見浦牧場の前身、(有)和興兄弟農園に２頭の和牛(黒牛)が入りました。戸河内町上殿の武田家畜商の世話で金１０万円、何も知らない私には角があって「モー」と鳴く、まさしく牛でした。今で言う育成牛で、小柄なほうが ” いいあさひめ” 号。島根の牛で（当時は広島牛より格安だった）連産性(子牛をたくさん産む能力)が高かったが、問題の多かった牛。もう１頭は” 第２どい” 号。韓牛の様な被毛が赤い牛で体格はよかったが、大型なのに繁殖成績が悪く、たった１頭産んだ子牛も小型で被毛が赤く、すぐ肥育になってしまった牛。これが見浦牧場のスタートでした。

一貫経営論争

丁度その頃、黒牛が小型耕うん機の急速の普及で急減し、役牛から肉牛への転換が提唱され、どの様な経営方式が、また黒牛の改良が、産業として生き残るために必要かと、盛んに議論されていました。

昭和３８年から昭和４２年まで 京都大学の上坂教授と広島県農政部長の中島さんと間で、「和牛の一貫経営論争」がおきました。資本回転の遅さと、投下資本の大きさなどの問題から、「子牛生産の繁殖農家と、育成肥育の肥育農家の分業体制が基本である」とする上坂理論と、家畜商による中間マージンの解消と、飼育過程による情報の還元による経営の合理化と向上を実現するためには「繁殖と肥育を一つの経営でカバーする一貫経営を目指すべきである」とする中島部長の理論が「畜産の研究」誌上で闘わされました。これが業界では有名な、かの「一貫経営論争」なのです。

一貫経営実証試験

その中島理論を実証するため、広島県は油木種畜場で２年間の実証試験をおこないました。試験の内容は、利用する耕地は１０ヘクタール、繁殖母牛は３０頭、肥育方式は出荷月齢１９ー２０ヶ月の若令肥育方式で、子牛や育成牛を合計した総頭数９０頭、作業員２名で 技術的、労力的、経営的に成立するか否かを確認する試験でした。その２年間の試験の間に何度も油木種畜場にお伺いして勉強させて頂きました。その折りに榎野先生、佐田先生を初めとして、当時日本和牛界の一方の雄と言われた、広島県の技術陣の方々とお近ずきになりました。そして、その試験の結果は、何とか経営が成立つのではないかとの答えがでたのです。

しかし、問題もありました。種畜場のある油木町は、広島県の黒毛和牛の本場「神石牛」の中心地で、試験の母牛もいい牛が揃っていました。どうしたらそんな牛が持てるか夢のようでした。私達がそれに匹敵する牛群を育て上げるには、それから３０年の年月が必要でした。

問題はそれだけではありません。１０ヘクタールもの耕地の年間を通じた耕作、１００頭近くの牛の管理など、機械化なくては成り立ちません。油木種畜場で使われていたのは、２０ＨＰの国産のトラクターを中心として、プラオ(すき：plow)、デスクハロー（円盤碎土機：disk harrow)、ツースハロー（歯かん碎土機：tooth harrow)、モアー（刈り取り機：mower)、サイドレーキ、ヘイメイカー、トレーラー、カッター、マニアスプレッター（堆肥散布機)、等で、当時の私達にとっては夢のまた夢でした。なにしろ１０万円もだと平均以上の子牛が買えた

時代です。そのトラクターは120万円したのですよ。ヘイメイカー、スプレッダーは外国製で、為替レートが360円の時代ですから想像するのも恐かった。

一貫経営への思い

それでも挑戦してみたかった。若かったこともあったのですが、なにより、これまでの慣行経営を敢然と批判した、中島理論に夢を感じて、人生をかけてみようと思った。私も素晴らしい時間を持っていたんですね。

当時、見浦牧場の耕地面積は田畑併せて1.8ヘクタール、牧場と言うには程遠い規模でしたが懸命でした。

120㎡の角型サイロを内蔵した畜舎をS39年に建てました。その当時は畜舎を建てて牛を導入したら、即、畜産経営が成り立つと思っていたのですから、甘いと言えば「盲蛇に怖じず」の言葉そのままでした。

昔の小板では、農家には和牛は役牛として必需品でした。大畠（オオバタケ：見浦の屋号）でも常時2〜3頭の牛と2頭の馬がいました。ですから、牛の飼育は素人ではないと思い込んでいました。とんでもない！なまじそんな経験などは障害になるほど、産業としての和牛飼育は異質な世界でした。次から次と起こる問題は、いま考えると、よくぞ乗り越えてきたものだと感慨無量になります。

その当事を思い出すと、戸河内でも百百君（ドドよむ）、中前さんなど仲間が20人位いました。油木の試験場に視察にも行きましたし、山県郡の連絡会にも30人ほど集まって新しい和牛経営を築き上げるのだと、氣勢をあげたりもしました。ですから全国ではかなりの数の若者が、中島理論に傾倒して走り始めていたのです。ところが、上坂先生が指摘された通り、油木方式は資本の投下量が大きく、資本回転は農業の中でも最も遅く、利潤も小さいとくるのですから、自己資本の少ない農家にとっては、長い辛い時間との闘いなるのですが、それを何人の農家が知っていたのでしょうか。

技術的には相反するテーマを一つの経営の中に持たなければならない矛盾、すなわち、繁殖育成は動物の生理に忠実に飼育しないと成績は上がらないし、肥育部門はいかに家畜の能力をとことん利用し抜くか、この点は理論からは想像もつかない大きな壁でした。

しかも 小板は新しい理屈や方式には、強い抵抗をする山村共通の保守的な風潮が色濃く残るところで、話し合う仲間もなく、孤立して新方式の牛飼いに挑戦するのは精神的にも苦痛でした。

貴方は踏み込み式の厩（ダヤと言いました、）を覚えていますか？地面から1〜2メートルほど掘り下げて1年中敷料を足して行く方式で、農閑期の冬に腐った敷料を掘りだして田圃までソリで配る、早く言うと畜舎と堆肥舎とが合体したような物です。これが大変な代物で、牛は堆肥の上で生活している。夏はガスと下からの熱で、畜舎の中は灼熱地獄になります。いま考えるとよく牛が生きていたものだなと、感心するような環境です。おまけにそれが内ダヤといって、一つ建物のなかに人間と同居しているのだから大変です。匂いはひどいし、ハエが真っ黒になるほど食べ物にたかるし、そんな世界がつい50年ほど前は当たり前でした。そんな牛飼いかすると、中島方式の和牛飼育法は異次元世界に違いありません。挑戦する私にはこれまでの経験などないに等しかったのです。先日広島での勉強会で元畜産会の鬼塚さんが「見浦さん

は人の通った事がない道を歩いた」と話されたそうですが厳しい道でした。

一貫経営への挑戦

昭和40年、共同経営の和興農園を解散して個人経営に戻り、以後和牛経営を主力としました。2年続いた義弟との共同経営を解消したとき、これからどの様に生きるべきか大いに悩みました。交通の不便な寒冷地の小坂では、和牛の他は考えられませんでした。そこで昭和41年「見浦牧場における和牛一貫経営について」と題して 私は、考え方と試算をレポートとして書き上げました。いま読み返すと幼稚なものですが、農民が独自の立場で数字を挙げながら新しい農業を主張をしていると、評判になりました。ある県のお役人は「プロローグがあってエピローグがあって飼料生産から飼育計画表まで作られている」、と感心して頂きました。中でも牛の生産予測表は見浦独自の発想があった由で、それからは「計算尺を自由に操る農民」と紹介されるようになりました。試行錯誤はありましたが、日本の和牛界に見浦牧場があると言われる、独特のテーマ・農民哲学の出発点でした。

では、その試行錯誤の歴史を綴ってみましょう。それらの問題の解決の中から次の発想・理論が生まれてきたのですから。

和牛経営にとりくんで2年目の春、一冬の敷藁を出すのに悪戦苦闘しました。藁を切らないで長藁のままで踏ませたのですから、汚い巨大なフェルトが出来上がったと言った形です。それを、肥堀（コエホリ）と称する丈夫な三鍬（ミツグワ）で、一鍬一鍬掘り起こして、一輪車に積んで屋外に積み上げる作業を、一週間繰り返しました。4ー5頭しか居なかったはずですが、随分辛い仕事だった気がします。今から考えると、ウソと思うような話ですが40年前のことです。

餌の確保も一筋縄ではいきません。1.8ヘクタールしかない耕地で、より多くの飼料を確保するには、デントコーン（トウモロコシ）しかありませんでした。幸い暗渠（あんきょ：地下水路）排水をすませた水田が多かったので、可能な限り作付しました。よく出来ましたね。梅雨が上がり晴天が続き始めると音を立てて伸びました。背丈が3メートルにもなって、戦時中に七塚原種畜場で働いていたときと同じ様な出来ばえに大喜びでしたが、それからが大変でした。手で刈って 耕うん機で運んで、カッターで切って、サイロに吹き込む。人手から人手の作業で重量物でもあり、時間がかかる、時期がみるみる過ぎてコーンが枯れ始める、台風がきて倒れる、いやはや大変でした。

他にも問題がありました。ギシギシが増えたのです。もともとこの地帯には、スイバとウシスイバと呼ばれるギシギシがあつたのですが、本名がエゾノギシギシと呼ばれるウシスイバが、牧草の種子に混じって進入したのです。世界中で牧草地の大悪草と呼ばれるだけあって、見る間に広がりました。私達はまだこれの対応策を持っていませんでしたから、北海道から買った「ギシギシ抜き」なる鍬で一本一本抜いて歩く人海戦術で対応しました。しかし切れた根っこからも切れた根の数だけ新しく生えてくるという強烈な生命力。子供達に一本一円の懸賞を出したところ、金額的にこちらが悲鳴をあげました。夏の間林間学校にきていた女子商の農業実習でギシギシ取りをお願いしたら、種は落ちるし根は切れるし、翌年ますます増えて参りましたね。現在の方式（トウがたたないうちに根元を切って、根元に除草剤をまく）になるまでは試行錯誤と積み上げの連続でした。これなどほんの一例に過ぎません。おいおい話しますが、

新しい仕事と言うものは、口で話すような簡単なものではありませんでした。

念願のトラクター導入

昭和46年、ようやく待望のトラクターが入りました。クボタL240、24HP。隣の義弟のところでは、4年も前から18HPと38HPのトラクター2台体制でしたから貧乏な私達の悲願でした。でもその作業機が買えません。トラクターだけではタイヤの付いた発動機に過ぎません。

牧草地の開拓

45年、小坂にあった国有地110ヘクタールの開墾が始まりました。昭和27年、戦後の食料不足時代に、緊急開拓事業として小坂地区で強制買上げされた土地でしたが、くわしい調査をしたら水田としては利用出来る水不足する事が判明して、長らく利用しないで放置してあった土地です。これも話せば長い物語になるので、またの機会に譲るとして・・・広島県による開拓が始まりました。いいだしっぺの私の割当地の、上（カミ）の家の後ろの土地が最初でした。ブルトーザが何台も入ってみるみる広い畑が（外国に比べると小さなものですが）出来上がって、何から何まで新しい事ばかりでした。

種まき

初めに引き渡された畑、8ヘクタールに牧草の種を蒔きました。最初買ったブロードキャスター（粒状肥料を撒布する作業機）で知恵を絞って種をオカクズと混ぜて蒔きました。本来肥料をまく機械ですから頭を使わないとうまく撒けません。

その後は土と蒔いた種を混ぜるためにハローをかけなければなりませんが、山から木の枝を切り出して、柱に結び付けてトラクターで引っ張り回しました。それから鎮圧と言う作業をします。表面に重いローラをかけて、土を押さえて土中の水分が、毛細管現象で種子の近くに集まり易くして、発芽を促す作業ですが、専用のローラは買えない。そこでドラムカンをつないで、心棒をつけ、水をいれてローラの代わりにしました。

草刈

そんな代用品の仕事でも牧草は生えて見事な草地になりました。次は草刈です。ところが昔からの日本の鎌は牧草が苦手です。そこでオーストリア製の大鎌を買いました。大変よく切れるのですが、小柄な日本人は、体格の大きい外国の人とは体力が違います。疲れて広い面積を刈払う事などできませんでした。ところが面白いことを発見しました。それは刃物の切れ味に関しての、日本人とヨーロッパの人たちの考え方の違いです。鎌だけかも知れませんが、日本の鎌は刃先と草の滑る長さが短く、西洋の大鎌はその滑り量がとても大きいのです。従って形の違いだけでなく、材質も焼き入れの刃付けの方法も違ったのです。いつかこの話も詳しく話したいものですね。

その翌年、レシプロの小型モアー（草刈機）を買いました。七塚原の牧場で働いた20年前は馬2頭引きのレシプロモアーを見て、すごいなと感心したのですが、小型とは言えさすがは機械、能率は当時の見浦牧場の必要以上のものでした。

乾燥

しかし、草を刈ってから後はまた手作業です。手作業の道具の一つはヘイホークでした。堆肥を扱うマニアホークは子供の頃から馴染みがありましたが、草に使うヘイホークは動員で牧場で働いた時に、初めてお目にかかった代物です。早速3本買いましたね。それを使って刈り取った牧草を反転して乾かして集める。夏のお天気でも3日も4日もかかりましてね。晴天がつづけばいいのですが、小板は知る人ぞ知る多雨地帯。ほとんど乾いた干し草を、雨で濡らすそんなことが続き、泣くに泣けませんでした。

雨が来そうになると、急いで山積みにしてテントを掛けるのですが、これも大変な仕事で、現在の様に気象衛星があって正確な天気予報がでるわけではなく、ラジオの天気予報と、故老のいい伝えの雲の流れを見ながら判断して、作業をするのだから、当たるも八卦当たらぬも八卦状態でした。

あるとき夕方に急に天候が悪化しました。干し草を集めて山積みを始めたのですが、その日は量が多くて夜明け近くになりました。おまけに天候は良くなり始めて、一晩中無駄な仕事をしましたのです。へとへとになりながら、東の空が明るくなるの見た気持ちは今でも忘れません。こんな事をして本当に和牛の牧場を作ることができるのだろうか、気の強い私がそう思ったのですから、幼子を抱えた晴さんは随分心細かったでしょうね。

そこで何はなくても、草を集めて列にしたり反転したりする「ヘイレキ」という作業機を、なけなしのお金で購入しました。当時36万円、オランダ製で、2組のホイールに掛けられた、爪のついたチェーンが回転して草を集めてゆく、そんな機械でした。その説明書の中に何度も「ウインドロー」と言う単語がでてくるのです。それが気になって色々調べました。やっと「ウインドロー」が「風」と「列」の熟語と気がついたときは嬉しかった。ところが、それに大きな意味が含まれていたのです。

日本の干し草は、日光に当てて乾かすのです。ですから表側が乾いたら返して裏側を日にあてる、その作業の繰り返しでした。ところが「ウインドロー」は風で乾かすのです。草をふんわりと盛り上げて列を作る、風がその中を通して水分を取る、列が草の重みで低くなると、つくり直して又フンワリさせる。その繰り返しだったのです。それが判ると干し草作りの能率が面白いほど上がりました。

干草作りから得たもの

この出来事で、大事な事を学びました、それは一つの事柄でも、色々な見方、考え方があるということです。それからは、問題に行き当たると必ず何通りかの答えを探す習慣が付きましました。小さな事なのですが見浦牧場の生き残りには、役だっていると思っています。

1998年9月11日 見浦 哲弥

ミツバチが教えてくれたこと(2003/4/29)

去年、おがくずが積んであったトラックの荷台にニホンミツバチが巣をつくったんよ。そのままじゃあ、やれんけえゆうて、巣箱をつくって、引越しさせたんや。しばらくはせつせと蜂が出入りしよったけど、そのうち全滅してしもうた。かわいそうに全滅してしもうたのうと思うとったら、また、あたらしい蜂がきての。

情報を調べてみたら、蜜道のおいがしとるとやつぱり入りやすいんだって。ほいで、秋の寒うなってからきやがったんで、こりゃあ、その、冬が越せるか越せんか、問題じゃのうと思うて、ほいで、蜜をいっしょうけんめいやったよ。それが今は言語道断におおきゅうなつて、わんわんやりよる。それみて、頭が働いたんよ。

あー、人間と同じやな。集団、特に日本人は一人じゃなくて、何人か集まらにやできんけえの。集団があんまり小そうちゃあ、エネルギー発揮せんのか。自己増殖していかないんだ。あんまり小さくなってくと、どんどん小さくなっていく。

ほいじゃけえ、どんなにつろうても、ほんとに大事な人材は、ある程度の数、もう、利益が出んでも、赤字が出んこう、つぶれさえせん限り、かかえていかなあかんのやなど、それをトヨタのやろう、知っているな、と、わしや思うたね、それ見て。

あんまりちがわんのんよ。おんなじ蜂が、おんなじ箱ん中はいって、ほいで一生懸命次々孵るんよ。卵産んでの、新しゅうどんどん出てくる。出てくるんだが、倒れていくほうが多い。

ほいじゃけ、経営する場合、一番大切な、今、日本みたいな会社は、資本で人材が一番大事なんね。人材のスケールをある程度まで落としてしもうたら、もうだめなんやな。

もうひとつは、信弥さん（注：弟）がいいよったように、分散してしもうたら、エネルギー発揮せん、たあ、そのことなんやな。ある程度優秀な人間、一箇所に集めて、1つの集団つくるとそれが増殖し始める。

あー、蜂のやろう、こがあなことを教えてんだ、と、こないだ、わしや思うた。すげえなあ。

.....

ほんで、こないだから、蜂をじーっと、わしもあそこを通ったら見よる。ほんで、出てきたら、ぴやーっとある方向にいくんよ。

たしかに、こんなやつらは、この方向にあるよっちゅうのは、教えられるに違いない。あとは、それでも、こんなやつらは、教えられたらその方向へいって、花を探して、蜜ひろうて、戻る。

これは全部教えちゃあおらんぞと。教えよらんぞと。

それから、すりこみでもおそらくないぞと。

ちゅうのはの、この冬でも、二十何頭、三十頭ちこう、お産があつて、今朝も2つお産があつ

て、ひとは乳をつけたんだけど、見る間に学習してくんよ。どこにお乳があって、で、体をどういう風に固定をして乳を吸やぁええかっちゅうのを、はじめあたったら、すぐ学習してくんよ。

ところが、中に学習できんやろうがおるんよ。
なんぼうやっても、やっても、わしやぁこうですよ、ゆうての。

ほんだけえ、今から生き残る企業やっても何やっても、生き残るものは、人を育てるっちゅうけども、
もともと、ないものは育てられねえや。

ほんだけえ、まず、一番基本は、そがぁに飛びぬけとらんでもええけえ、いわゆる、自分で学習していく能力を持つとるやつを探して、まず集める。
ほいで、優秀な奴つけて、そいつをひとつの集団になるように育てていく。

それしかにやぁ、手がないんや。はっきりいやあの。

2003/4/29 見浦哲弥談

育つ木(2003/4/29)

そりゃあの、わしらあみたいに、自然の中で暮らしとるもんには、あったりまえなんだあや。

なしてあたりまえか、ゆうとの、まあ、むかしやあ、稲の苗をとるときに、苗をとって洗うんだがの、今、植物抜いての、こう、洗やあええんよ。根っこを。

そうすると、よう伸びるやつは、白い根がいっぱい出とる。そいで、伸びないやつは、黒っぽい、赤っぽい根があるだけで、白っぽい根がないんじゃ。そりゃなしてか、ゆうたら、養分を吸う、窒素や磷酸、カリ、それから、水分やら吸うのは、細胞膜通して吸うんだあや。古い組織や古い細胞の表面から、よう、中へいっそ吸収せんものよ。ほいじゃけえ、養分を吸うのは、常に新しゅう伸びた根しか養分が吸えんものよ。

ほいじゃけえ、よく伸びる木は、いっぱい根を、目には見えんでも、絶えず根が伸びよる。絶えず努力しよる。絶えず知識を吸収しよる。それは根が伸びとりや、ちょっと手をやれば、立派な木にもなるし、立派な仕事も出来るんよ。

ところが、なんぼう上の木が立派でも、下の根が伸びん、白い根がないようなものは、はあ、枯れるばっかりなんだけえ。

ほんだけえ、わしやあ、今のサラリーマンでも、人でも、もっと、自然を、わしらあ、自然の中で、淘汰され、進化し、こうして生き残ってきたんだけえ、自然の規制をものすご、受けとるんよ。その規制の中で、生き残るやつと、生き残らんのが分けられよるんよ。

だけえ、もっと、自然ていうものを、もっとみんなが見て、そんななかから物事を学びさえすりやあ。ぼーっとしとるやつあ、枯れるにきまつとるんだけえ、あんたあ。

そりゃあ、「わしやあ、そこそこでええよ」、ちゅうなあ、はあ、1年か2年か、木は立つとるけど、大部分が化石じえけえのお。ありやあ。中は化石なんじゃけえ。

生きとるやつはへりの形成層の下へ、わあーっと、水を吸い上げて大きゅうなりよる。そいだがまあ、養分を吸わんようなやつあ、もう、形成層がだんだんなくなって、いっぺんにはなくならんけど、すぐに枯れるなあ、はあ、決まತ್ತとるんじゃけえ。

ほんだけえ、自然の中でもっと、みんな、もっと自分を見つめてみる。どんなに理屈をゆうても、自然に逆らうことはひとつも無いんじゃもん。

ほんじゃけえ、サラリーマンだろうが、なんだろうが、組織の中で生き残ろう思うたら、その原則に従わにやあ、生き残れんものよ。

2003/4/29 見浦哲弥談

魚と事業(2003/4/29)

こないだ、郵便屋さんがきたんよ。
ほいで、ちょうど魚釣りするところを通っての。

そいから、
「魚釣れますか」
「いや、釣れんよお」

そいから、魚釣りの話になっての。
「そいで、みうらさん、魚を釣りんさるんかい？」
「わしゃあ、釣らんものよ、突くんよ。はあ、24ぐらいまでやったかの。
ほいじゃが、魚突くのものお、実際仕事をやってみりゃ、仕事にもものすごおつながとっての。」
「えっ？わしも魚を釣るんですがの。」

「わしゃあ、あんたあ、
魚が、ひらべ（注：ヤマメ）が、岩のところへぱっとはいっていくのを見つけるでしょうが。
ホコをこう、持てく。
持てくが、魚の真ん中ねろうたら、まずあたんねえ。
ぱっと突いたら、水の振動で、もう魚は知ってから、前へさあっと逃げる。
そうすると、こう、身構えといて、
どのぐらいのスピードで、前へどのぐらい出るちゅうてよんで、胴体じゃなくて、鼻先にたーんとやらにゃあ。
魚が逃げた後を突いたら、せっかく研いだホコの先はわやったれになるわ、魚は逃げてしまうわ。

そうかゆうて、前へ前へいくばかりかゆうたら、
わしゃあ、こまい（注：小さい）ときに、手長えびっていう、河口なんかにおる大きなえびを
捕りよったけども、
あいつは前へいかずに、後ろへいくんじゃ。ターンと後ろへ飛ぶんよ。
後ろのどの角度へ、どっちへ飛ぶかいうて、こうタモを持ってっというてから、前へたーんとや
ると
ぱーっと、タモへはいるんよ。

ほいで、わしゃ自分で仕事をするときに、今牛が儲かるけえ、牛をこうて儲けてやろう、とい
う考え方は捨てたんですよ。
何年か先、何十年か先をターゲットにして、そのターゲットへいくためにどうすりゃあええか、
ちゅうことを考えて歩いたんよ。

今みたいに経済変動が激しい時代にゃあ、やっぱり、胴中狙うてあたるわきやなあんじゃけえ。
みんなが胴中狙うんだったら、やっぱり、一歩先をねらうか、この、相手の魚がどっちへいく
かちゅうのを読んで走るほかにゃあ手がない。」

そしたら、いうことがええわあ、

「あれでも、わしも、魚を釣ってやりましたが、そこまで考えたことはありませんでした。魚釣って、” ああ、釣れたあ、おもしろい”、それだけだったんですが、
そういやそうですのお、やっぱり、そういうことになりますのお。」

それがタイミングじゃけえ。事業ってのはそうだけえの。
自然の中に、ものすごい教材がえっと（注：たくさん）あるのに、みんな、みな見落としとるんじゃけえ。

そいで、そのときに郵便屋さんが、
「わしゃ、魚釣ったが、まさかそがぁなことに結びつくこたあ、思うちやおりませんでした、なるほど、いわれてみりゃそうですのお。
今、よそでこれを売りよるけえちゅうて、同じものつくったんじゃ、だめなんですのお。
そりゃ売れるわけがなあですのお。
空ばっかり突きよるんだけえ、あれで儲からんのでさあや。」

2003/4/29 見浦哲弥談

商売の基本(2003/9/14)

見浦牧場と、芸北の事業団とがあれほどやってやりまくって、
とうとうこっちは残って、あっちはつやけて（注：つぶれて）しもうたけど、
あんなかに、なんでやろうねっていうのがどれほどあったかわからん。
そいだが、それは、一番基本的なことやねん。

「何を」作るんか、ということと、
「だれのために」作るんか、ということ、
それは、「何が」作るんか、ということだけえ。

ほいたら、それにおうた牛を作って、
肉屋のために作るんだったらサシをいれにやあいけんが、
そうじゃなくて、お客さんに作るんなら、
認められようが、認められまあが、
おいしい肉を作りやあええ、安全な肉を作りやあええ。
それを認められるまで、何年かしらんが、もくもくとその間、積み上げて、積み上げて、積み
上げて、積み上げて。

そいで、それを作るのは何や？
それを作るのは人間じゃのおて牛なんや。

そうすると、牛をまずつくることが始まりや。
その牛の、なんでその京都の大学の先生のいうような牛をつくらにやいけんのや、
神石の先生のいうような牛をつくらにやいけんのや、
ここにおる牛をつくりやあええんやん。

ここにおうて、格好がわるうても、ここでちゃんと子供を生んで、健康で、
人がどがあ言おうが、そがあなものは関係ないわあや。

一番なのは、お客さんが喜んでくれて、
それを作るのは誰かゆうたら作る道具をちゃんとここに合うようにしてく。
そりゃ、商売の一番基本やん。

近頃よう、何であれだけにみんな、当時の本読んだりして、
京大の学士さんがいっぱいきて、広島の方師屋さんがいっぱい来て、
なんであっちがつやけて、こっちが残ったんか。
資本も裂けるほどかけての。

そうすると、こりゃあ、金の大きさでもなしに、
人数の多さでもなしに、
一番大事なのは、何が一番ここに求められているかつちゅうことを
じーっと見抜くこと。それだけやなあ、と。

2003.9.14 見浦哲弥談

我が友 船坂さん

船坂さんは、ヘリコプターのパイロット、三段峡の入り口の落合さんの離れを借りて、別荘代わりにしていました。

その彼とはひょんなことから付き合いが始まったのです。

私が交通事故にあった話は、随筆「生と死と」に書きました。あの入院したときに始まるのです。

戸河内病院の2階の病室は4人部屋、隣のベッドに四合の松本君がいました。そこへ彼の別荘の隣人というわけで、船坂さんが見舞いにこられたのです。一言二言話をしただけの人が、退院して3-4ヶ月もしたころ、リストアしたジムニーに乗って来場、そのときは正直な話、彼のことは忘れていました。それまでは私にとってはただの通りすがりの人でした。

ところが話をしてみると、お互いに年齢、職業、生き方が違うものの、考え方や趣味などに共通点があったのです。今考えると彼は違う世界に住む私の中に、自分の影を見たのかも知れませんね。そして私は若いときに夢見た、機械や電気の世界に住む船坂さんに、興味を持ったのでした。

車のリストアの話、エンジン、塗装、機械の応急手当、などなど、話は尽きませんでした。

次にこられたときは、シトロエンのバン、これも人にもらったとかで、ようやく動くようにしたぞと、自慢をされに。

そして車内に泊まれるようにするんだと、板張りの床を作っていました。「俺なら畳を敷くがの」と申し上げると、「そうかー」とうなずいていましたっけ。

その後、何回かおいでになり、そのうちに奥様もご一緒されるようになりました。

事務所でストーブを囲みながら、皆で雑談する楽しい時間を持つ、そんなこともありました。奥さんが子育てが済んでから高校に入学したこと、それを家族で応援していると、船坂さんが楽しそうに話されて、私たちはいいご夫婦にお会いしたと喜んだものです。

ところが、もう6年前になりますか、木枯らしが吹き始めた11月、突然ご夫婦でおいでになりました。

「やあ、お久しぶり、お元気でしたか」何も知らない私は、いつもの挨拶を口にしました。

ところが「それが元気でないのよ」と、普段の彼とは違う返事が返ってきました。とっさに顔色をうかがうと、尋常でないやつれ方をしています。

「どうしたんね？」と聞くと、「実は、肺ガンでの、医者という余命がもうないんよ」さすがに驚きました。命の終わりのガン患者への対応の難しさは父をはじめ、多くの人を見てきて、それなりに理解しているつもりのは、心の動揺を顔に出してはいけなと、まず、それを考えたのです。

「開けてみたんかー？」

「開けたんよ。そして、後3ヶ月と言われたのよ。その3ヶ月がもうないんよ。」と。言葉がありませんでしたね。

そのとき、彼は私に助けを求めにきた、そう感じたのです。取るに足らない私に。それなら、

おざなりではいけない。心で話さなくてはと、そう判断したのです。

「そうか、でも私はね、生き物と裸の付き合いで生きている。だから、あなたとは違った考えをもっとるんよ。

たとえば、植物は、種を撒き、芽が出て、双葉が開き、葉が出て、茎がのび、花が咲く。やがて実がつき、そして枯れて土に帰る。私の見てきた自然には、例外はひとつもなかったんよ。

だから自然の掟には、生き物として素直に受け入れて生きることになっているのよ。そしてその折り目折り目を懸命に生きる。愚痴を言いながらでもね。特に、あなたとの出会いになった事故からは、朝目が覚めたら、今日も生きてる、儲けた、さあ、何をやろうかと、考えることにしたんよ。私はそうやって生きている。人に勧めはしないがね。」

「そうか、自然の中で生きている人間は、考えることも違うんだな。でもなー、見浦さん、夜が寝られんのよ。」と。

当たり前です。迫ってくる死のことを考えて平静でいられる人間などいるわけありません。酷いなとは思ったものの、日ごろの考えを口にしました。

「なして、無理に寝ようとするのよ。それだけ時間がもうかったと、なぜ考えんのよ。2度とない時間なら、読書をして書き物をしてやることはやまほどあるはず。神様の贈り物とかんがえられんかの？身体が必要としたら、自然が眠りに連れて行ってくれる。寝にゃいけんとかんがえるけー、寝られんのよ。」

「そうか、そう考えるのか、そう考えればよかったよのー」そういった、彼の顔が明るく輝いたと感じたのは、私の思い過ごしだったのでしょうか。

別れの挨拶が済んで、車に歩く二人が「来てよかったの、もう1度きてみたいのー」「もういっぺん来ましょうで」と話す声が聞こえました。車が見えなくなり、これが船坂さんとの今生の別れだったと思うと、胸の中にいっぺんに哀しみがこみ上げました。

それから、何日か後に、彼が死んだと風のたよりがありました。短い付き合いだったのに、悲しみの度合いは大きかった。

1年が経ちました。突然、奥さんが息子さんと訪ねてこられました。やっと心の整理がついたので報告に来ましたと。

帰られて15日後になくなられたとか、最後の3日間は呼吸困難が始まったので、入院したけれど、それまで自宅で過ごされたとか話されました。

私たちは好きあって一緒になり、助け合って人生を送ってきたのに、その最愛の人が悩み苦しみながら死を迎える、それを見なければならぬ、考えると耐え切れない恐怖でした。

ところが、小坂からかえってから、彼は人が変わって、淡々と時間を過ごしてくれました。かえって周囲の人が心根をおもって影で泣いていましたと。

息を引き取るときに、「おーい、待ってくれー」それが最後の言葉でしたと。

「おかげで彼とのいい思い出が壊れずに済みました、ありがとうございます。」と礼を言われたのです。

未熟な私の人生観で、人生最大の恐怖を乗り越えた船坂さんは、かえって私の先生かも知れません。

「見浦さん、あなたの考えは正しいよ。私が証明したよ。」と。

今、私は74、人生も終わりに近づきました。しかし、この心の平静は、彼のメッセージのおかげだと思っています。

我が友、船坂さん、あなたとの出会いも、私の大切な出会いでした。

和牛の一貫経営で思うこと ～見浦牧場の経営戦略～

最近BSEの後遺症や飼育農家の高齢化で、和牛の飼育頭数が減りました。その影響があつてか、牛価の高値どまりが続いています。そのせいで、なんぼで売れた、儲かったで、とか、どの雄牛の種を使ったら儲かるんなら、とそんな話ばかり耳にします。私が牛を始めた40年前とまったく同じです。この40年の間に日本も農村も天地がひっくり返るほど大変動があつたというのに、考え方はまったく変わっていない、悲しいことです。

私が和牛に一生を費やすきっかけとなつたのは、時の広島県の農政部長の中島建先生の「今の和牛は投機だ、これを産業にしなければ和牛は生き残れない」の言葉ですが、今も、そのまま、忠言として伝えたいと思っています。

よく、和牛だけでなく、日本の農村は崩壊した、再生しなければ、のかけ声は耳にはしますが、どう再建するのか、答えはだれも持っていない。それが現状のようです。

特に現場の農民が物事を根本から考えようとしなない、さしあたって儲かったら、若い人も農業に帰ってくれるだろう、自動車を買ってやったら家を継いでくれるだろう、そんな甘い考えの仲間たちを見るのは、心が痛むことです。

見浦牧場では、問題に行き当たったら、できるだけ根本に近い考え方を模索します。たとえば、病気で熱が出たら、熱さましを飲むのではなく、何が原因なのかと、前日までの健康状態、食事、仕事、対人 等を考えるのです。その結果、病院にいくのか、薬を飲むのか決める。でも、そんなことは誰でも実行している。ですが、その考え方を、農業を考えると、牛と付き合うときも、経営を考えると、機械を修理するときも、経済を予測するときも、応用しているのです。

もちろん、素人ですから正確に予測し、判断することは出来ません。しかし、知識が足りないときは、先進地を歩き、先輩に指導を仰ぎ、読書をし、情報を検索する、そして、現象を繰り返し繰り返し観察する。模索の中から結論を引き出すのです。

しかし、それでもうまくいかない、試行錯誤の連続、壁に突き当たっても、あきらめない。当たり前のことですが、それが見浦牧場が生き残った一因だと考えています。

昭和38年から始まった和牛経営も、児高との協業が解消して、単独経営に復帰し本格的に畜産経営を始めたころ、広島県も新しい和牛経営の構築を検討していました。昭和41年ごろのことです。

当時は和牛はあたれば儲かるが、そうでなければ儲かるのは馬喰（ばくろう）さんだけ、が実情でしたから、利益を上げるにはコストを下げるか、特別の高値を狙うかの二者択一でした。もちろん、見浦牧場はコスト低減を第一の目標としました。何しろ、山県郡の牛は、広島県の最低ランクでしたから、高値を目指すなど考えられませんでした。

そのころ、前述の中島先生をはじめとする広島県の畜産技術陣は、和牛の将来像を、多頭化と放牧技術の導入、そして、子牛生産から肥育仕上りまでをひとつの経営の中で行う一貫経営で

と提案していました。その実現化の実験として、油木の種畜場で多頭化試験が行われたのです。無畜舎、群飼育も取り入れて。これもコスト削減には重要な技術で、私は大賛成、多いに同感したのです。2年続いた試験が好成績に終了した後、この方式を県の方針として、芸北町の大規模草地開発（のちの畜産事業団）が採用したのです。

昭和41年、この地方を38（さんばち）豪雪に劣らない大寒波が襲いました。降り続く雪の中で、マイナス10度以下の日が続いたのです。そして、最低気温はマイナス24.5度の低温を記録しました。無畜舎で越冬をしていた牛群には過酷な寒さでした。

見浦牧場はかろうじて間に合った小さな畜舎に牛がもぐりこんで難をさけ、畜舎に入れない牛は建物の影で吹雪をしのぎました。でも冬が終わってやっと命をつないだときは、見る影もないやせ衰えた牛ばかりになっていました。

しかし、建物がほとんどない、芸北町の事業団の牛は悲惨だったといいます。寒さと雪との闘いで体力を失った牛たちは、雪の中に座り込んで立てなかったと。降り続く雪に埋もれて、やがて息絶えた牛は、あくる朝、吹雪のやんだ雪面に角だけが並んでいたと聞きました。

ここから、見浦牧場と事業団の対応が違ったのです。事業団の人々は、この厳しい気象条件では、冬期の無畜舎飼育は難しい、と翌年から畜舎の建設が始まりました。ところが、見浦牧場には、畜舎建設の資金がありません。どうやってこの難問をクリアするか、考えて、考えて、考え抜きました。

そのとき、冬を越して弱りきった牛の弱り方に違いがあると気づいたのです。

牛は品種によって気候に対する耐性が違うと聞いていました。チベットの牛は寒さに強く、インドの牛は暑さに強いなど、もしかしたら、同じ品種の中でも気候への耐性が違うのではないかと、それなら、選抜淘汰の繰り返しで、寒さに強い牛を作ればよいではないかと。それが門外漢（私は電気工学が専攻で、電気事業主任技術者の資格の2種と3種をもっています）の強いところで、大胆に結論を出したのです。

そのころ、見浦牧場は、子牛生産もうまく機能していませんでした。当時は、授精技術の転機でして、人工授精法が普及し始め、各集落にいた県貸付の種雄牛が廃止になり、従前の方式だと、10キロ離れた八幡まで種付けにつれていかなければならなくなりました。ところが人工授精だと、技術の未熟もあってなかなか受胎しない。これも経営の死活問題でした。そこで、これも同じ発想で対応したのです。

人間でも、子沢山の家庭もあれば、子宝に恵まれない家庭もある。そして、子供の多い家庭は代々兄弟が多い。これは遺伝の力が大きいからだろうと。それなら同じ哺乳動物の牛も同じはず。これを選抜の条件にしよう。

ある会合で和牛の飼育技術の指導がありました。席上、かくあるべき、こうすべきとの話のあとで、私は自分の牧場の条件にあった牛をつくって、対応しようとおもうと申し上げました。ところが、指導の先生は、「そのような仕事は試験場やブリーダーのような専門家の仕事で、農民が個人でやるのは不可能だ」と断言されました。

頭にきましたね。何しろ最終学歴小学校卒の劣等感の塊の私ですから、「なに？素人にはできない？バカにするな！」と憤慨しました。

田舎ではどんなに良い意見でも、高い学歴がないと「いうだけなら誰でもできる」と一言で片付けられて、相手にしてもらえません。ところが目の前に結果を突きつけると、何も言わなくても認めてくれます。二十代のはじめ、肥料計算をして稲の多収穫裁判に成功したときは、一夜にして私に対する評価が変わりました。もっとも、あいつは何を考えているのかわからない、用心しなければ、という声も大きくなりましたが。

そこで、それなら、見浦牧場の牛を作って見せてやろうじゃないか、と心に決めました。なぜ、専門家でないと牛の改良が出来ないのか、選抜淘汰で難しいのは何なのか、考えましたね。ちょうどそのころ、長男の晴弥が九州大学の農学部に在学していましたので、彼に、なぜ専門家でないと選抜淘汰ができないのか、専門書で調べて、教授に確認してくれと頼みました。

そしてその答えは、牛の選抜淘汰は非常に長い時間が必要である。そして、選抜淘汰は、途中で要素の変更をすると、目的に到達することが難しい。そういう意味合いの答えが返ってきました。つまり、最初に何十年後の目標を正確に立てることが、素人には難しいということでした。

たとえば、和牛登録教会の評価基準の中に骨味という項目がありました。枝肉重の中の骨の重量が少ないほど、肉屋さんが喜ぶ、ということで作られた項目だったのですが、放牧飼育を始めたら、この項目の評価が高い牛は皆脱落してしまいました。骨の細い牛は、放牧のような運動量の多い飼育方法には耐えられなかったのですね。それで専門家の皆さんにお会いする度に、この点を指摘して、あなたはどのように和牛を改良したいのですか、骨が細くて、舎飼しかできないモヤシ牛が目標ではないでしょうね。と申し上げていたら、いつの間にかこの項目がなくなりました。

ことほど、長期の目標を立てるのは難しい。そういうことだったのです。ところが、私たちはこれが問題になるほど困難なことだとは理解できませんでした。

私たちの供給する商品は、サラリーマンの人たちがちょっと奮発すれば買って貰える、それぐらいの価格で、最高の旨い肉を提供する、それが最終目標でしたから。

家内の晴さんいわく、「一部の金持ちに食べてもらうために、人生をかけて牛肉をつくる、そんなバカらしいことはできない。」強い支えでしたね。

目標が決まっているのですから、あとは簡単。出来るだけコストが下がるような牛を作ればいいのですから。見浦牧場の環境で、健康であること、赤ちゃんをたくさん産んでくれること、肉屋さんが喜ぶサシはほどほどでよいこと、など、選抜の指標を作ったのです。

1. 寒さに強いこと（寒さに強い牛は晩秋になると綿毛が生えてくる）
2. 放牧向きの体形であること。（骨格がしっかりしていて、ある程度足が長いこと）
3. 多産型であること（発情が発見しやすい、排卵時期が発情期間とずれない、分娩後発情再起

日数が短いこと など)

4. 哺育能力が高いこと

5. 肉牛として早熟であること

6. 肉質はA3以上であること

目標が決まれば、あとは生まれた子牛を結果で選別するだけ、雄は肥育牛として出荷して、成績がよければその母親を極力繁殖牛として長期利用する。雌の場合は、その生育状況、初産の種付け・分娩・子牛の哺育状況をその母親の成績とする。簡単なことです。

ただし、時間はかかります。雄の場合は24ヶ月から27ヶ月後、雌の場合は、最短でも26ヶ月後になります。(生まれた子牛の生育を見ますので)。ですから、あの母親は優秀とわかったときには、他の理由で淘汰されていることもあって、「しまった」ということもおきますが、長い年数を続ける間には、いつの間にか牛が変わっていくのです。

私は視点を変えさえすれば、凡人にも何十年先の目標を正確に立てることができると思います。目標が立てられれば、ただひたすらに目標に向かって歩き続けるだけ。

雪国で暮らす私たちは、新雪の中では目標を決めて歩かないと、まっすぐ歩けないことを知っています。

経営は目には見えません。それなのに、目標を持たない、金儲けだけが目標というのでは、経営が安定するのは夢物語です。

まして、農業の中でもっとも時間のかかる和牛の一貫経営で正確な目標を持たないということは、即不可能のレッテルをはることです。

私の友人で、小規模ながら一貫経営を目指した男がいました。彼いわく、「俺は六年も一生懸命牛を飼ったが、旨くいかなかった。」と。私は絶句しました。たった、6年では何も変わらない。それは、時間と資本の浪費だと。

でも彼のような農民は珍しくありません。見浦牧場に見学にくられた人の中に「もっと早よう儲かる話をしてくれー」と発言された方が何人かいました。それが農村の一面でした。

長い年月が過ぎました。そして、ここ、芸北地区の和牛農家は激減しました。でも失敗の本当の原因はなんだったのか、理解をした農民にはまだ出会っていません。

根本に帰って目標を持つ、少しづつでも独自の技術と実績を積み上げる。私はこれが和牛経営の基本だと思うのですが、依存として繁殖と肥育経営は分離されていますし、乳牛の仮腹のスマール肥育を一貫経営と称するにいたっては、和牛経営を産業にとの中島先生の夢とは、似ても似つかぬ形だと思っています。目標達成の一過程だとするのなら許されるとは思いますが、やはり、基本は忘れず追求していく、この姿勢は何よりも大切だと思うのです。私たち、見浦牧場は、これからもこの道を歩き続けます。

心あるかたがたの声援を期待しながら。

老いるということ(2006/5/3)

私は今75才、いよいよ老いの速度が速くなりました。人生誰もがたどる道、覚悟はしていたものの、現実になると厳しいものがあります。

まず、体力の衰え、いろいろな物を持ち上げるとき、今日はえらく重たいなと感じるのは手はじめて、やがて上がらなくなる、そして自分の年を実感するのです。

その体力の衰え以上に悲しいのは、頭の切れです。16才の時、奮起して独学を始めた頃は、苦しみも有ったにせよ、知識が水がしみこむように、頭に入ったものです。電検の3種、2種と続けてとれたとき、あの理解力の頭は私だったのかと、昔を偲ぶのは年寄りのサガなのでしょう。

内孫の明弥が今年3才になります。その小さい頭に水がしみ込むように、知識が吸収されて行く。その早さ、正確さ、自分の子育ての時は、生活に追われて、気付かなかった事が、目の前で繰り広げられています。孫達が限られた時間の人生を精一杯生きてくれるように願っています。でも、ひたむきに、前へ前へと生きる事の素晴らしさを、幼子が、後ろ向きになり勝ちな私に、それで良いのかと問いかけているようです。

若い日に学んだ聖書で、明日のことを思い煩うな。今日のことは、今日にて足れり。と教えられた記憶があります。あの頃、お坊さんの説教をまじめに聞かない見浦は、仏罰が当たると古老達に非難されました。あの人は、本当に人生を精一杯生きたのだろうか？。そして人生の終わりを前向きに受け止めたのだろうか？、と先だった、先輩達に聞きたいと思うのは嫌みでしょうか。「年を拾うた、年を拾うた、やれんことよ」と、悔やみ言葉だけの老人にならなかった幸福を孫に感謝しようとおもいます。

私の友人達も鬼籍に入った人が増え始めました。小学校の、松原の高等科の友も、まして先生方も、徴用で生死を共にした仲間にも、近況を聞くと寂しい思いをすることが増え始めました。人の定めとは言え、命の厳しさを、痛感している毎日、今日も生きているよろこび、精一杯生きることを知る素晴らしさ。

こんな話の流れでは、順風満帆、不幸を知らない人生のように、貴方は考えるかも知れません。現に私の周りには、「大島（注：おおばたけ。見浦の屋号）ええことよ、何もかもええ具合で」と皮肉混じりに言われる人が多くなりました。しかし、振り返れば、苦しい事、絶望した事、何度も何度も乗り越えてきました。この世の中には、いいことづくめなど、あり得るわけがありません。私も多くの問題を抱えています。が、心の持ち方が前向きだけなのです。それが、外見をよく見せているのです。

気持ちが前向きと、そうでないのとでは、困難に行き当たった時の対応にも差が出ます。それを知っていることが、幸せの原因なのです。

それでは残りをどんな生き方をするか、自分の仕事だけに追われて、the end、それで、いいのだろうか？それなら、今の能力で何が出来るのだろうか。

その一つが、同行（注：どうぎょう。地域の助け合いの組織）の再建でした。しかし、これは実際に仕事をしてみないと、完全なものには仕上がられません。そこに持ちあがってきたのが、水道組合の内容の明文化でした。何十年も問題提起をしてきたのですが、仕事が大きすぎて、誰も取りつかなかった、私が請合うとすると、それだけの時間と能力が残されているだろうかと、迷っていたことでした。

成り行きの勢いで、引き受けはしたものの、案の定、集中力が低下している現在の私には遅延として進みません。2ヶ月余りして、ようやく全体の形が浮かび始め、文章化を始めた処です。

思いは、若かりし日と同じですけど、頭と身体が付いて行かない、それが、だんだん大きくなる、そのギャップと自分の加齢の速度を理解して、効率的な人生の使い方を努力しているところです。

それにしても、物忘れは困りますね、もともと、物覚えは良くなかったのが、進出したのですから大変で、眼鏡の置忘れは序の口で、機械の修理中に部品を忘れたくらいなら、我慢も出来ますが、いま、使っていた工具まで見えないとなると、笑い事ではありません。探し物に費やす時間の増えたこと、残り時間が少ないのに、残念無念としかいえません。ちなみに、今日は水道の参考書が見えないのですよ。

私は、本を読むのが好きです、好きと言うより、生活の一部そんな感じです。ご存知の様に、読書と言う奴は、活字が目に入ると、頭の中にその場面が次々と絵になる、図表になる、図面になる、最近の漫画人種の人には理解しにくいでしょうが、自分だけの挿絵がかけるところに面白さがあるのです。幼い頃、母が教えてくれた読書の習慣が、私の一生を通じて宝となりました。

小板に転校してきた時、廊下の書棚に大阪に就職された、藤盛の六郎さんが寄贈された、本や雑誌が放り込んでありました、読む人もいないまま放置されていた書籍は宝の山でした。でも、小板小に在学の2年の間に、ほとんど無くなってしまったのです。あとでトイレットペーパーの代わりに使われたと聞いたときは、・・・・・・・・

戦争中は本を読もうにも、新刊書が手に入りません、時々少年倶楽部を買ってもらうぐらい、それも見る見るうちに薄くなりましてね。それを何度も何度も読み返して、中でも南洋一郎の冒険小説は大好きで、今でも荒筋を覚えています。

戦後はインフレで本が高く、小遣いがあれば買っていた科学朝日が、朝と夕方では値段が違って、そんな事もあったほど、ものすごいインフレでした。

世の中が安定し始めて、毎月、月刊誌、週刊誌、業務誌、単行本、専門誌、取り混ぜて10冊平均は読んだでしょうか。ある友人が「お前は生まれつき頭がいい、出きるのが当たり前」と評してくれましたが、それは間違い、年に120冊、50年では6000冊にもなりますから、なんぼ馬鹿でも少しは知識が広がります。でも読書が苦にならないと言う事は素晴らしいことでした。

私は外国に行った事はありません、国内も北は金沢、南は福岡、東は高松までの狭い国内で人生を終わろうとしています。でも外国を知らなくても、読書、新聞、テレビなど情報を集めるには苦労のない現在、案外正確に世の中を見ている、そんな自負があります。

こんな話があります。

今から10年以上前、牛肉の自由化の問題がおきました。零細な日本の肉牛生産者は、二桁も三桁も規模の違う海外の業者に太刀打ち出来るわけがないと、猛反対が起きました。規模の大小を問わず、肉牛生産にかかわっていた、農民、生産者の足並みは揃っていました。

自由化の決まる数年前、農水省の、朝日新聞本省デスクの長谷川さんが取材で訪ねてきました。この自由化に対する、現場の農民の声を本にする為に。

貴方もご存知でしょうが、日本には牛肉の品質を決めるためにサシという基準があります。背骨の尾骨の根元から、6番目と7番目の背骨の間のロース切断面の脂の入り具合と美しさがサシです。肉の切断面が霜が降った様に脂が小さく沢山入った方が高級というわけです。決して肉の味で値段が決まるのではありません。その為には、餌、飼いかた、近親交配、遺伝等々、あらゆる手段が講じられます。まさにコストダウンの逆行です。それが、当時の（今でもそうですが）流れでした。

私は、かねてから食品の基本は安全と味との主張でしたから、その話を詳しくと来場されたのでした。

そこで、かねてからの持論を申し上げたのです。サシが入る事が高級であると言うのは、消費者の意見だとは信じられない。食品は見た目も大切かもしれないが、1番大切なことは、安心と美味しい事、それに見合ったリーズナブルな値段である事と。それが、記事の中では「サシは消費者の声ではない」と表現されていました。

広島県では、毎年牛の共例会が開催されます。かねてから、このような会合に疑義をもって私は毎回欠場していました。ある年、山県地区からの出場牛がどうしても都合がつかないので、何とかしてくれと、普及所に頼まれました。もう時間がないので、見浦しか頼むところがないと。日頃お世話になっているのですから、困っていると言うのを、むげに断るわけに行かず出場したのです。

ところが、品評会というと、丸々と肥らせて、磨き上げて毛並みが光っている（整髪料をつけて磨くと言う噂もあります）、知らぬ人間が近ずいても何も反応しない人馴れした牛のオンパレード。そんな牛の中に、野生に近い放牧牛を連れて行ったのですから、その評判の悪い事。しかも、技術屋さんの指導に反して、独特の交配をした（鳥取の気高号、大柄で骨格が大きい）牛でしたから「あがあなもん、よう連れてきたの」と悪評ふんぷんでしたね。

おまけに、放牧牛と言うのは、野生に近い性質を持つようにならないと、生き残れませんから、見も知らない人間が多数集まっていれば、恐怖で身がすくんで、おびえてしまいます。逃げ出そうとするのを、角と鼻に綱をつけて無理やり引いて行くのですから、家畜の黒牛だけ見ている人からは、異常な眺めだったのでしょね。「ありゃ、なんなら」笑いがあがっても無理はありません。

でもその牛の中に、胴伸びのよさ、放牧に適した脚の太さ、肉量の多い胴の深み、等、私達、見浦牧場の提案がこめられていたのです。たった1人、県の技術員の方が、小さな声で「見浦さん、この牛は大事にしるよ」と耳打ちしてくれました。あれから30年余りの時間が経ちました。今、広島県の種牛作りの端々に、私達が追い求めた形がかすかに見え始めた感じがするのです。

年を取ると言う事は、長い時間を見たということ、人生の意味に気付くのが早かった人は、より多くのことを知っていると言う事なのです。おかげさまで、私は早めに理解する事が出来ました。多くの先生、先輩のおかげです。しかし、その事に気がついて、後輩にアドバイスが出来始めたら、もう老いが迫っていました。

最近、三段峡豆腐の岡本君が、口しげく「見浦さん長生きをして下さい」というようになりました。体調の悪化が外貌にまで出始めたのかなと、思っています。

私は、19歳の時日本脳炎に感染して、九死に一生をえました。しかし、それから、50年あまり、後遺症の頭痛との戦いでしたが、長い間、安定していた痛みに変化が生じ始めたのです。身体の疲労と頭痛が連動するようになりました。一度頭痛が始まると3ー4時間寝ないと

元に戻らないのです。今まで経験した事のない新しい症状です。そろそろ、最後の時が近づいているのかも知れません。

様々な出来事と、私が感じて、越えてきた事柄を書き残し始めたのは、少しでも、あとに続く人のお役に立てばと、思い始めているからです。

私の、死後は、お葬式も、お墓も不用だと思っています。

私の考え方、生き方を理解してくださった方々の心の中が私の住むところと、考えています。迷惑な事でしょうが、1人でも多くの心に住ませて頂きたい。これは、自然の天地の間で生きた人間の我侭なのです。

但し、家内の春さんは、猛反対です。人間最後のお葬式はその集団のルールに従う事だと譲りません。後に残された家族の事を考えろ、去り行く者の都合で、残る人間が異端視されるのは、許されないと。

でも、形骸化して、儀式としてだけに存在する、現在のお葬式にはどうしても納得ができないのです。

野村の祖父のお葬式を始めとして、多くの身内を見送ってきました。盛大な葬式、立派な葬式、トラブルを抱えた葬式、スキャンダルを隠したお葬式、・・・・・・・・・・。

生物の常として、死は当然の事です、別れの時には、何もしないで貴方の心の中の私に話しかけて欲しいと思うのは、我侭ですか？、思いあがりですか？。

取り止めのない事の羅列になりました。今日の話は、これで 終わります、少しは私の考えが伝わりましたか、また他の時に、お会いしましょう。

2006/5/3 見浦哲弥

ヒューマンリング(2005/11/15)

74歳、人間もこのくらいの年になると、自分の人生を振り返ることが多くなります。もちろん年寄りのサガで、前向きとばかりは行かず、愚痴や悔やみ事がでて、晴さん（家内）に叱られることも多くなりました。が、振り返ることのできる人生をもてたことはすばらしいと思っています。

私の父母は、当時はまだ少なかった自由主義思想の持ち主で、自分の人生は自分が責任をもって懸命に生きる、これが、ものごころがつき始めた子供のころからの教えでした。たった一度の例外を除いて。

福井の家は小さな二件長屋の貸家でした。夜になると一人、二人と父の中学校の生徒が二階に消えて遅くまで勉強していく。何も話してくれなかった父に子供だった私はその本当の意味を知ることはありませんでした。でも、何年かして十代の中ごろ、蔵の中で見つけた古い手紙がそれを教えてくれたのです。「先生にはお世話になりました」そんな意味の手紙の山でした。

昼の授業についていけない生徒の補習を自宅ですていたのです。生徒さんの顔を覚えることがありませんでしたから、いろんな人が来ていたのでしょうね。そんな話は父の口からは一言も出ませんでした。

成人してからも、思いがけない人たちから、あなたのお父さんにはお世話になって、とお礼をいわれて驚くことがありました。

昔の貧しい農村には、母乳の足りない乳飲み子に粉ミルクを買えなくて、重湯で代用し、栄養不良にする貧しい農家が多かったのです。父はそんな話を聞くと、そっとミルクを贈り続けたといいます。私は30代のころ、やむを得ず町会議員に立候補したことがあります。集落のおきてに従わなかった私は、地元で、見浦にだけは投票するなと運動がおきる騒ぎで、14票の差で見事に落選しました。

選挙が済んで町内とお礼とお詫びに歩いたとき、いたるところで、「あんたは大島（注：おおばたけ。見浦の屋号）の先生の子か」と聞かれたのです。「はい、そうです」と答えると、烈火のごとく怒られて、「なぜ、それを選挙のときに言わなかったのか。それがわかっとったら、どんな無理をしても、お前に投票したのに」と。

こんな思い出があります。小学校4年生のとき、宿題を忘れたのです。夜遅くなっても勉強せず、ぐずぐずしている私を問い詰めた母は、原因がわかると、支度をしなさいと私を連れ出しました。夜道をずいぶん歩いた覚えがあります。三国は北陸のおおきな港町、子供心にえらいことになったと思いました。ところが、とある家を「こんばんわ、夜分遅くにすみません」と訪れました。戸を開けて出てこられたのは、担任の渡辺先生（たしか渡辺だったと機を苦しめています）が「まあ、野村先生（母の旧姓）、こんな遅くに何事ですか？」と驚かれ、母が「実はこの子が宿題を忘れて、どんな宿題だったのか、伺いに来たのです」と話すと、「そんなことで、わざわざおいでになったのですか」と大変恐縮されたのです。先生は母の教え子だったのです。何度も何度も「先生には大変お世話になって」と繰り返されるのを聞いて、そんなことを一度も口にしなかった母を見直したのです。後年、欠点だらけの私が、少しは他の人たちのお役に立てれば、という気持ちをもてたのは父母のおかげだったと思っています。

私の家族の中では、人が困っていたら、自分が相手の立場だったらどうして欲しいかを考えてみようとして話し合っています。そのきっかけはこんな話からでした。

私たちの集落、戸河内町（注：現安芸太田町）小板は、広島市と益田市を結ぶ国道191号線の沿線にあります。標高が800メートル前後の多雪地帯ですから、冬季も除雪がされて自動車が通行できるようになったのは40年前、隣部落の樽床にダム（聖湖）建設が始まったときからです。未舗装の1車線ですから、雪が降ると落輪やスリップで事故続出、救援依頼がありましたね。まだJAFなどの組織がない時代のことです。

私たちは手すきの人間を動員して、道具を持って集まりました。道具といってもチェーンブロック、手回しジャッキ、スコップぐらいで、あとは人海戦術。まだ人助けに疑問を持つ人はいませんでした。

ところが、あるとき問題がおきました。助けられた運転手さんがうれしさのあまり、皆さんでお酒でも召し上がってくださいと、金一封を置いていったのです。これは金になると思った人が出ました。純朴な村人が、人の弱みに付け込む商売人になったのです。ある日、例によって動員がかかりました。

指定されたところに行くと、代表が運転手さんと交渉しています。聞くともなしに聞くと、その金額では少ない、もう少しだせ、いや、今はこれしかない、後で色をつけるから、との駆け引きでした。

人助けだと人を集めて、商売をするとは、と憤然としましたね。

当時は貧乏のどん底。広島に牛のえさをとりに行くにもスクラップ同然のトラック、財布に余分なお金を入れる余裕はありませんでした。自分があの運転手さんの立場ならどんな思いをするだろうと考えるといたたまれませんでした。

何日かして、ふと頭に浮かんだのは、それが間違いだと思うなら、加わらなければいいじゃないか。自分たちは別のやり方で人助けをすれば済む話だと気がつきました。

それからは、私のところに直接救援依頼があると、家族で手持ちの道具を動員して出かけました。

チェーンブロック、ワイヤー、トラック、トラクター、道具は少しずつ増えてゆきました。最初に下見をして、自分たちの手に負えないと判断したときは、どここの業者に依頼をとアドバイスしたりして。

そのうち「牧場の見浦に相談しろと言われて」と訪ねてくる人も出始めて。携帯電話とJAFが普及するまでは多かったですね。

ところが、救助作業が済んで帰りかけると、いくらお礼を差し上げたら、と言われる。困っている方々へのささやかな奉仕です。と申し上げても、理解されない人のほうが多かったのです。

「私たちは大変忙しい。お金で解決されるのなら、他の方を頼んで欲しかった」「それでは気がすみません。お礼を受け取って」と押し問答でした。そこで、それなら一度で結構ですから、困っている方がいたら助けてあげてください。世の中は回り灯籠、お互いに助け合えとおしえられましたからと、申し上げて納得してもらいました。

ある年、大規模林道に例によってトラックが迷い込みました。積雪は30センチ、町境から

は下り坂ですから、何とか車は進みます。ところが見浦牧場から1000メートルあたりで急に雪が深くなり60センチあまりにもなるところがしばらく続くのです。車はそこで立ち往生、引き返そうにも今度はのぼり、救援依頼がありました。

ところが4トン車に荷物を満載。見浦の機械では力が足りません。「気の毒だけど、ウチの力ではどうにもならない。こらえてや」と現場を見て断りました。家に帰って牛を飼うためにショベルに乗っても、運転手の「仕方がないですね」といった、さびしそうな顔が頭を離れません。そこで、除雪をするならどのくらいの時間がかかるか、確かめてみようと思いました。距離は約1000メートル、山国の冬、天候はいつ激変するかわかりません。出来ることなら、と思いましたね。

除雪をしてみると、雪が案外軽い。2台で掘れば間に合うかもしれない。そう考えました。しかし、雪道は南面と北面では雪質が大きく違います。賭けでした。

牛を飼い始めていた和弥（次男）を呼んで、2台でやれば何とかできるかも、牛はそれから、と相談すると、やってみるかとの答え。それから2人で除雪を始めました。わき目も振らずにね。作業を始めて1時間。半分も除雪したころ、車を締め切って、後始末をした運転手が現場から帰ってきました。「何とかかなりそうだから、機械で除雪できない車の周りはスコップで掘ってくれ」。あきらめていた彼は喜色満面で取って返しましたね。

それからさらに1時間。ようやく現場まで除雪が完了したときは、私たちもへとへとでした。大急ぎで牧場に帰って牛に餌をやらなくては、と帰り始めた私たちに、彼は飛んできて例を言いました。「どういうお礼をすればいいのでしょうか」と。

例によって、いつもの返事をした私たちに、彼は「それでは私の気がすみません」と食い下がりました。「あなたが困っているといわれたから、お手伝いした。気がすまないなら一度でいいから、困っている人を助けて、それで帳消しにしましょう。」と。せめて名前をと聞かれたのですが、それも断りました。しかし、車が無事引き返していくのを見たときはうれしかった。

それっきり、このことは忘れて話題にもなりませんでした。

ある日、宅配の車が、心当たりのない荷物を届けていきました。不審に思いながら封を切ると、お酒と野菜などと一緒に、つぎの手紙が入っていました。

（以下原文どおり）-----

見浦哲弥様

この前、雪道でトラックが動かなくなったとき、助けていただいて本当にありがとうございました。あの状況で私一人の力では脱出は到底不可能で、もうその日に帰ることなどあきらめておりましたが、大切なお仕事的时间を割いてまで、見ず知らずの私を助けていただいたことにうれしさと申し訳ない気持ちでいっぱいです。

このようなものを送ったことはお父さんの意に反することと思いますが、このままでは私の気が治まりませんので、粗末なものではございますが、どうか受け取っていただきたいと思います。

私は幼いときに両親をなくしておりますので、お父さんのいわれた”今度は困っている人がいたら助けてあげなさい”といわれた言葉が、私の父親から言われたような気がして、うれしく思っています。

困っている人がいたら、自分を犠牲にしても助けに行きます。お母さん、お兄さん、若奥さん、ありがとうございました。お父さん、これからも身体に気をつけられ、がんばってください。

本当にありがとうございました。

寺曾和正

驚きましたね。そこまで感謝されたのは初めてで、名前まで調べて送ってくる。しかも自分の住所を隠して。

そして自分の出生のことまで書いて、私の言葉を彼の父親からの伝言と聞いてくれた。これには感激しました。ひょっとしたら、私たちのしたことはとても立派なことなのかもしれない。しかし、どんなに臆目に見ても、私はそんな人間ではありません。それならこの考えの先生は誰だろうと考えても考えても思い浮かびません。心にとげのように引っかかりました。

NHKラジオの深夜番組に早朝4時から、著名人や宗教人など、各界の先達のお話があります。ある朝、聞くとともになしにラジオを聴いていると、”自分がして欲しくないことは他人にするな、自分がして欲しいと思うことを他人にしろ”との声が耳に入りました。日ごろ心がけていることで、誰が私に教えてくれたのか、気にかかっていたことです。思わず聞き入りました。

お名前は忘れましたが、有名な牧師さんで、イエスキリストが聖書ルカ伝の中で教えられていると話されたのです。疑問が解けました。私は福井に住んでいた幼いころ、教会の日曜学校に通っていました。聖書の紙芝居を見て、牧師さんの話を聞き、賛美歌を歌っていた、遠い遠い昔の教えを覚えていたのですね。

それを、助け合いが商売に変えられたのをみて思い出したのですね。それで、私はやはり凡人だったと安心したのです。

ヒューマンリングは造語です。平和運動で軍事基地を囲んで手をつなぐ、そんなときに使われる言葉です。しかし、私は人の心のつながりをあらわす意味に使いたいと思います。

先日もある人が「見浦さん、世の中は不思議なもの。人に良くすれば良いことが、悪くすれば悪いことが、必ず自分に返って来る」と話していられました。

私がまだ30代のころ、農道の改修工事の話が持ち上がりました。2キロあまりの草刈に行く山道で、途中でなくもがなの急な坂道がありました。ある山持ちの山林を避けるため、やむを得ず作った峠でした。集落の人々の難儀を（昔は田畑の肥料としての草刈が盛んでした）見かねて役場に農道の付け替えをお願いして、用地を無償提供すればということになりました。関係する山持ちは3人、何度も何度もお話をし、2人の方には承諾していただいたのですが、

1 人はだめでした。

「皆があゝの坂には泣いているのです。何とかありませんか。」と最後のお願いをしたら、次の言葉が返ってきました。「人の難儀は関係ないのよ。俺は先祖から預かった財産をびた一文も減らすわけにはいかんのよ」と。返す言葉がありませんでした。

30年たってその方が躓かれました。見る見る崩壊して10年も経たないうちに墓地まで人手に渡りました。懸命に建て直しに走り回っても、ことごとく裏目でした。私は、あの時の言葉を思い出して、背筋が凍る思いで見っていました。

ヒューマンリングは、良いほうにも悪いほうにも回ります。

そして良いほうにまわすには、他人の立場を思いやること、悪いほうにまわすには、自分のことだけを優先すること、そう考えるようになったのです。残り少なくなった私の時間、できれば最後までヒューマンリングを良いほうにまわし続けたいものだと願っています。

2005.11.15 見浦 哲弥

愛国心を考える(2006/4/15)

牛と暮らしていると、家族とは何かと考えることがあります。当たり前過ぎて見逃していることも、目のまえで繰り広げられる、牛達のドラマに付き合っていると、世間一般の常識からはなれた考え方になります。ですから、なぜ皆さんはそんな考えをするのかと、思う事が多いのです。その一つに愛国心があります。

牛はお産の前の破水のとき、床の上に流れ出た羊水をなめて飲みます。ほとんど例外はありません。そして子供が生まれると、同じ匂い、同じ味を確認して子牛をなめ始めるのです。そして舐めるにつれて猛然と愛情がわいてくる、時には飼い主にも敵意を持つ、私の子供にさわるなとね。それを見ている私達は、家族の意識、連帯感、そして異性愛とは異なる愛情、そんな感情を理解するのです。

私の牛群たちは、集団で暮らしています。群飼育と言うのですが、彼らが日常では互いに争うこともあるのに、危険が迫った時など、見事に団結する、すごいなとおもいます。

何年か前、猟犬がイノシシを追って牧場に入ったことがあります。気がつくと、牛が大騒動をしていました。すわ何事と眺めると、近所の猟師が連れた3頭の猟犬が、子牛を追いかけています。猟師の話によれば、2キロほど離れた道戦峠で猪の足跡を発見して追跡しているうちに、牧場に入ったといいます。犬達は、そこで子牛の集団を発見して、追跡の相手をかえたのです。興奮した犬達は主人の制止にも耳を貸さないで、悲鳴をあげる子牛を追いかける、それを守ろうと母親が走り回る。すると、それに気づいたリーダーが、群を集め始めたのです。子牛を中心にして、育成牛と呼ばれる若者の牛、お母さんに成り立ての若い牛、と群れ全体が輪になり始めたのです。壮年の牛は1番外側で角を外にむけて。

まるで、アフリカの草原の映画を見ているようでした。そして、ボスや幹部級の牛が、3-4頭で猟犬を追いだしたのです。大きな牛が頭を下げて突進して来る、猟犬も悲鳴を上げていましたね。弱い動物は集団を組んで、強い外敵にあたる、まるで、自然の教科書を読んでいるようでした。

それを見て私は、ああ、これが愛国心だと思いました。

私が軍国主義の戦前に、学校で教えられた愛国心は、天皇の為に、神国日本の為に、命を捧げよ、でした。何度も何度も、事があるたびに教え込まれ、反論が許されなかった。そして、何時のまにか、それが、正しいと信じる様になっていました。

昭和20年の敗戦で、それまでの価値観が全て否定されて、愛国心はタブーの言葉になりました。社会が落ち着いてくると、オリンピックなどの世界大会で、日本が優勝すると心が熱くなってくる。でも、それに愛国心の言葉は当てられません。時折、新聞や雑誌の世界に、新しい愛国心という言葉が浮かぶことがありましたが、心に響くインパクトはありませんでした。

しかし、この牛の事件で、私は愛国心の基礎は、家族愛だと思ったのです。

自分や家族が住んでいる集落、住みやすく、お互いに助け合い、守りあっている。愛する家族がこの集落のお陰で、安全に暮らす事が出来る。だから、この集落が好きなのです、愛しているのです。

その集落が、安芸太田町という行政区の中で、存在を保証されている。だから、私はこの町

を故郷として愛しているのです。

その様にして、広島県は、安芸太田町を、日本国は広島県を、それぞれ、安全と存続を保証してくれる。それで、始めて日本国を愛する愛国心が生まれ、祖国と感じる。そんな愛国心でないと、又戦前のように、国民を、私の家族を、自分たちの主張の為に死地に追いやる、悲劇の繰り返しになると思っています。

小泉首相は、バブル崩壊の後始末には必要な政治家でした。しかし、彼の国家観は間違っています。政治は国民の生命財産の安全を守る事が基本です。その次に衣、食、住の確保が仕事です。そして、そのために、社会の様々な仕組みを作り、守り、維持して行く。

靖国神社参拝で問題になった戦犯の人達の罪は、国民の生命財産を守る基本を忘れて、戦争を始めた事です。たとえ、どのような理由があったにせよ、国民を、私の家族を、死地に追いやり、国家を破滅させた罪は消えません。

私は12時間違いで、原爆に逢わずに済みました。しかし、父の後妻として、母親になるはずの人は、結婚の支度をする為に広島にゆき亡くなりました。家内の兄は、将来を嘱望された青年でしたが、陸軍に召集されて死亡しました。原爆後、可部の町に運ばれてきた沢山の被災者が「水、水」と懸命に訴えていた声は、まだ耳の底に残っています。

それは、日本国民だけではないでしょう。戦争に巻き込まれて命を失い財産を無くした外国の人々、その人たちの恨みは、どのような理由があるにせよ、その戦争を始めた人々の罪を許す事はないはずです。

愛国心という言葉が歩き始めました。「にせものの愛国心」と「本物の愛国心」を区別したい、区別して欲しいと、私は思っています。

2006.4.15 見浦哲弥

パブロフの牛(2006/8/9)

貴方は“パブロフの条件反射”という事をご存知でしょう。1936年 ロシアの生物学者パブロフ教授が発見した、動物の条件反射のことです。小学校3年のとき叔母が買ってくれた科学の本に紹介されていた記事で、なぜか記憶に深く残ったのです。後年、和牛の一貫経営にのめりこんだ時、大きく役立った理論でした。今日はその話を書きたいと思うのです。

昭和43年、小坂の開拓が始まる時、開拓の希望者は、それぞれ、事業計画書を町の担当者に提出したのです。

何日かして、友人のF君が話に来ました。

「おい、見浦やー、Nがのー、お前が牛を165頭も飼う言ゆた、ゆうて笑いよったで。牧場へ1—2頭連れて行くのも、一仕事なのに160頭とは、馬鹿も休み休み言え、たわけた奴よのーと。それんだがのー、俺もどうやるんか聞きたいよ。ほんまに、どうやるんなら？」と。

そこで条件反射を思い出したのです。犬で出来るのなら、牛で出来ないはずはない。N君は小坂の中の私の反対派の大將でしたから、売り言葉に買い言葉で、思わず私はズバツと言いきったのです。

「これから見浦の牛はのー、訓練してのー、わしが“整列”ゆうて号令をかけると、一列に並んでの、右向けー右、前に進めと言うとの、並んでついて来るようにするけー、問題はないんよの。」

それを聞いたF君が馬鹿にされたと思ったのか、いやもう怒った怒った。

「なんぼ、大島（見浦の屋号）でも、そがあな事が出来るわけがありゃあせん。人を馬鹿にするのも、ほどほどにせー」

「そんなら出来たらどがあすりゃー」「おー、そんなときや、小坂中を逆立ちをして歩いてやらー」と、喧嘩別れになりました。

パブロフの犬を使った実験では、餌を与える時に必ずある音を聞かせたといひます。私達もそうですが、食事の時は自然と口の中に唾が湧いてきます。動物も同じで餌を前にすると唾が湧く。それを確認する実験でした。パブロフ教授の予想どおり、ある期間繰り返すと、音を聞くだけで、唾が湧いてきたというのです。

そこで、見浦牧場でも餌をやる時は音で合図することにしましたが、その音が問題でした。ベルにするか、ホイッスルにするかと、音源を色々検討したのですが、物忘れの名人が揃っている見浦牧場で、牛を呼ぶときに特定の器具を必ず持つて行く事は不可能との結論で、自前ののだ、すなわち、「モーン」と私が声を上げる事で決着したのです。但し、この方法は人が変わると声質が変わるので牛が理解してくれないという欠点がありましたかね。

さて、広言の手前、「あれは口からでまかせ、できなんだーや」、ではすまされません。毎日牛に餌をやる時は、独特の鳴き声で牛を呼ぶのですが、すぐ憶えて行動してくれる、そんな虫のいい話はありませんでした。

頼りはあの理学書にあった「繰り返す事で生物が反応する」という文章だけ。3ヶ月繰り返しても牛が応えてくれないときは、さすがに駄目かと諦めかけましたね。ただし、そこでへた

ばらないのが、たった一つの私の取り柄、泣きべそをかきながらも続けましたね。

三月が過ぎてしばらく経ったある日、1頭の牛が私の声で頭を上げました。そして私の鳴き声を確認めたのです。何度目かの鳴き声に牛舎のほうに歩き始めた時は嬉しかった、本当に嬉しかったですね。牛舎に帰った牛は、そこに餌がある事を確認すると、翌日も私の鳴き声を聞いて来てくれました。

一つの山を越すと次が心配でした。一頭訓練するだけで3ヶ月、他の牛も訓練するとなると、また同じ苦勞をしなければならない。この方式は再検討かと心配したのです。ところが、ボスの行動を見て真似をする牛が出始め、1ヵ月もしないうちに、群れ全体が同じ行動を取るようになったのです。教科書の何処にも記述されていない、牛の群飼育方式の発見でした。

しかし、1度でも人間が違う行動を取ると彼らは混乱します。それを見て、人間も同じなのかと気付きました。約束したら必ず守る、それが信用なのだと。1度ぐらい大丈夫などと考えると、牛でも混乱する。まして人間はと。牛は真理を教えてくれる友達、彼らからも生き物のルールを学ぶべきだと。

見浦牧場の信条「自然は教師、動物は友、私は学ぶ事で人間である」の「動物は友」の言葉が生まれた瞬間でした。

2006.8.9 見浦哲弥

同行崩壊す～村社会の壊滅～(2006/7/27)

平成 16 年の春、小板の部落総会で一つの議案が可決されました。

それは、何百年も続いてきた村社会への弔鐘でした。しかし、賛成した村人は、そのことがやがて恐ろしい結果をもたらすことを、まだ誰も知りません。世の中の流れと単純に受け入れて、仕方がないと、なかばあきらめていました。が、私と私の家族は微力を承知でこの流れに逆らう事にしました。集落の将来と、子孫の為に。

私が大畠（オオバタケ）の家を代表して、集落の組織「小板部落会」に出席を始めたのは、確か 19 歳のときからです。ですから、この部落の歴史を自分の目で確かめ始めてから 55 年、父が集落内の事をよく話してくれていましたから、（小学校を卒業した頃からのことは、私なりの解釈ではありますが。）それを含めると 60 年以上、随分長い小板の時間を見つめていたことになります。

考えてみると、同年輩の仲間や後輩が部落会に入れて貰えるのは、40 歳前後から、たまたま、代表者の戸主が早死にしたときに 30 代で入会する。それも意見でも言おうものなら、「文句を言うのは、まだ早い」と叱られる始末でしたから、ほかの人達の集落に関する知識が、私よりはるかに少ないのも無理はありません。

見浦家の先祖は、関が原の合戦で、西軍に属していたと聞きます。落武者狩に追われて中国山地を徘徊し、匹見（島根県）の芋原（山の向こう）に落ち着いたのだと。そこから分かれて小板にきたのは 350 年程前。その時すでに、4 軒の先住者がいたといえますから、かれこれ 400 年以上もこの集落が存在してきたのだと思うのです。山間の交通の不便な豪雪地帯、何かにつけて助け合わなくては生きて行けない処です。

私が集落に参加した時は、数多くの申し合わせ（不合理と思われる事も沢山ありました）が不文律としてありました。その一つが同行（ドウギョウ）だったのです。

私も最初は同行の意義は分かりませんでした。ただ、お葬式の時は、両隣の人が願人（ガンニン）として現れる。そしてお葬式の総てを取りしきる。田舎の葬式は、こうして行なわれるものと思っていました。

祖父や母の葬儀のときは子供でしたから何も判りませんでした。父の時は大畠の当主でしたから、同行の意味は身に染んで、その重要性を理解しました。

身近な肉親が亡くなって、混乱している精神状態で野辺送りをする。実際には中々出来る事ではありません。そんな時「父が死んで」と、一声お隣に声をかけると途端に組織が動き始める。何もしなくても、お寺の手配から家の周りの掃除まで。気がつくと「終わっただけ一、挨拶をしてくれーや」と、同行全員が食事をしている所に「ありがとうございました」と、お酒を注いで歩いて終わり、本当に有難いと思いましたね。

その同行がなくなる、しかも部落の総会で多数決で決まったとは、驚きました。口伝だった同行の規約を、明文化し統一したのは私でしたから、ショックは大きかった。

総会から帰った息子に問いただすと、部落の財産管理の組織、小板振興会の財政が破綻状態で、お葬式に今までのような援助が出来なくなった。過疎と高齢化で人員の確保が出来ない（各

戸1人ずつ出る取決めでした)。基本が崩れたのだから、同行そのものを廃止して自治会長が葬儀社を斡旋する、そんな形にすれば、集落に負担がかからなくて済む、そんな提案だった聞きました。「人数もないし、金もないのなら、同行はあっても、なくても同じよー」との声で、反対者もなく多数決で決まったと。彼も対案を持たない以上賛成票をいれる他はなかったと、答えたのです。

そこで、彼に"同行は助け合いの原点、皆がその本質を誤って解釈し、手間返しの集まりと理解しているけれど、本当は助けを求められたら、出来る人は許す限り力になってあげる、そんな助け合いの組織なんだよ。それを改善でなく全廃して、これからこの集落が続くと思うのか"と意見をしました。

昭和17年の年末、父が先峠（サキダオ：国道191号線深入峠）で炭を焼いていた、鍛冶口と言う人を配給品の事で訪ねた時、（当時は焼子と言って、親方の山に炭小屋と居小屋を作って住み込み、歩合で生活する人が居ました）奥さんが出てきて、主人が2日ほど前に死んだ、相談する所もないので、米びつに押し込んであります、天候が良くなり次第外へ出して焼くつもりですと。仰天した父は部落に帰って、同行を集めて鍛冶口の葬式をしてやろうと提案したのです。ところが「ありゃー小板の同行じゃないけー、やるこたあーいらんよー」の声が上がったといひます。烈火の如く怒った父の「他人の不幸を思いやる事が出来ない奴の手伝いはいらん。わし一人でも葬式をしてやる」の言葉に、同行が動いて、全員で葬式を出してあげたと聞いていました。仲間も「そんな事があったの、そうそう鍛冶口さんだったのー」と。その話しをしたのです。

和弥（息子）は、それから3日ほど考え抜いて"親父さん、同行を再建して欲しい。考えて見たが同行は助け合いの基本だった。基本が間違っっては集落は生き残れない。総会で賛成して、それをひっくり返す行動に出れば、信頼を失い、批判される事は重々承知だが、非難は全部私が負うから、是非動いて欲しい"と。

間違いと気付いたら行動する、マイナスの結果が予測できるのに踏み込んで行く彼に、さすが我が子と誇りを感じたのです。

さて、最初口伝だった同行を文章化した話は、今は故人の小笠原福美さんから始まりました。口伝の規約は人によって幾通りも解釈ができます。葬儀が始まっているのに、喧々囂々意見がまとまらないことが、数多くありました。願人が違ふとやり方も違ふ。そこで、小笠原君が「見浦君に、同行の規約を文書にまとめてもらおうや」と総会に提案したのです。面倒な仕事は若い奴に押し付けるに限ると、意見は一致しましたね。私が30を越したばかりのことです。それが最初の「小板部落葬儀施行細則」です。何もないところから始めるのですから、単語一つでも苦労しましたが、知らないと言う強みもあって、当家とか、野武士とか、強引に解釈して文章を作りました。昭和51年5月の事です。

でも、文章にしてみると、不具合の所や、見落してきた所など、矛盾点などが見えてきました。そこで、叱られたらその時よと、当時としたら思いきった考えで書くことにしました。

まず、同行の人達は労力奉仕なのです。お金持ちと、生活が一杯の人と、お金のあななしで、葬儀に違いのある事は間違いだと思いました。それなら、葬儀の内容に天井を設けてやれと。そこで、お寺さんは3人まで、花輪は禁止、生花は一對まで、お棺は箱棺で、上に金欄（金欄は集落で購入して使用する）をかけるだけ、等々。皆が、それが、何を意味するのか判らない

内に賛成を貰いました。

後年、小板では葬式の競争がないので住みやすいと、評価されたともありますし、また、この取り決めを無視して花輪を並べられ、皆で決めた葬儀細則を無視するのなら、同行全員を引き上げると交渉して止めさせたり、色々とありましたが、簡素ながら心のこもったお葬式の形は定着したのです。

簡素ながらという言葉の裏に私のささやかな願いが込められています。都会でもそうですが農村は周囲を意識しすぎます。「隣がああだったから、うちはあれにゃあ負けられん。」そんな見栄の張り合いが強いのです。私が集落に入ってまもなく、ある事件が起きました。

小板では、毎年12月に持ちまわりの報恩講が開かれていました。ところが、あるお家で引き出物として参加者にアルマイトの汁杓子が出ました。今の100円ショップで見ると安物でしたが、みるみるエスカレートして大きなお鍋になるのに時間はかかりませんでした。住民に大きな負担になったのは言うまでもありません。それを防ぐ意味での簡素な葬儀は大切なことなのです。残った家族の経済的負担を最小にする。新同行には、そんな思いもあるのです。

さて、時代の流れで人口が減り始めました、特に38豪雪とよばれる4メートルに及ぶ大雪はその勢いに弾みをつけました。時は高度成長とよばれる日本繁栄の時期、その気になれば都会に仕事はいくらでもありました。

目先の効く人は、値上がりを始めた郊外の土地に投資をして大儲けをするなど、投資の対象にも事欠きませんでした。

若い青年たちが都会に去り、乏しい資本も山村から流出して行きました。

そして、小板も中国山地の過疎地に仲間入りしたのです、吉崎、新宅、小松屋、エトセトラ・・・。

同行の中に大工さんがいなくなりました。お棺が作れなくなりました。そこで、素人でも作れる厚いコンパネと呼ばれるベニヤ板で作ることにしました。ところが、不幸があってから、板を買いにゆくのでは、半日以上無駄になります。それで、振興会が買い置きする事になりました。

その内、長い間、集落の中で助け合った仲間ではないか、棺材料くらい只にしると、言うことになりました。次は写真のないのは寂しいね、遺影の写真ぐらい買ってあげろになり、ほかの集落ではもっと大きな写真だったと、歯止めがきかなくなりました。

特に苦言の私が引退して、若い和弥になり、ブレーキがかからなくなって、ばらまきは派手になるばかり。バブルは終わって振興会の収入も心細くなる一方なのに、スキー場だ。レジャーだ、観光だと夢を追い続けました。その度に会の財布が軽くなったことは言うまでもありません。

引き締めができない最大の理由は、引き締めをどこの葬式から始めるかでした。「わしの家の時から、きつーするゆうんは、なんぞ恨みでもあるんか」と言われた時に、真正面から説明して納得させる勇気を誰も持ち合わせていなかった。そう結論するのは酷かもしれませんが、誰もやりませんでしたね。バラ撒きの時の大声の人たちは特にそうでした。

そう言えば、最初の同行改革のときも、節目になったお家の親類から「ここから葬式に制限するのはどうゆうことなら？てめえの家の葬式を派手にしたらただではおかんぞ」と脅されました。父の葬儀は細則にしたがって簡素な葬式だったので、いっぺんに定着して異論がでなくなったのですが。

さて、小板では葬式が4－5年有りませんでしたから、その内機会があったら取り上げて、集落の人達に考え直してもらおうと思っていました。

ところが、お元気だったHさんのおばあさんが、心臓麻痺で倒れたのです。

何回かの役員会で、同行廃止は問題を含むと、発言はしてきたものの、決まったことだから、との返事を繰り返す幹部に、半ば匙を投げていた和弥も、これには驚いて、振興会長に”疑問が問いかけている同行廃止なのだから、集落全員に意志の確認が済むまでは、今までどうりにやってほしい。今回だけは強行は止めて欲しい”と、電話で頼んでいました。しかし答えは”多数決で決定したことは変えられない”でした。

多数決とはいえ、老齢化の進んだ小板では、出席者はいつも5－6人、長い間、小板という集落の中で暮らしてきた、全員の意見を代表しているとは思えません。

そこで、私も会長に、”それなら緊急に全員の意思確認をしろ。それをしないで葬儀をすれば、取り返しがつかなくなる”と、電話したのです。ところが、会長は”Hさんも了解済みなので、何の問題もありません。総会で決まったことだから、このままやります”と答えてきました。

やんぬるかな、もはや人を傷つけずに収拾する事は出来ないと、天を仰ぎましたね。

和弥は、”俺は悪者になってもいいから、小板の住民の立場になって収拾してくれ”と、重ねて頼みます。彼に、この様に本気で頼まれたのは初めてでしたね。

大島（見浦の屋号）は私の代になってから、悪役が続きました。開拓、水道、道路と数えればきりがありません。また貧乏くじかよと、さすがに暗然としましたね。

葬儀が済みました。案の定、不満が続出しました。当事者のHさんは、”小板ではこの方式で葬儀をすると説得された。最近住民になったばかりなので、詳細は知らず従うしかなかった。葬式が済んでから、いろいろ納得がいかない点が多かった。”そう話してくれました。大切なお母さんの葬儀が問題を含む形で強行された。当事者ではない私も”小板の住民として申し訳ない”と、頭を下げるだけでした。

さて、どう収拾するかを考えました。まず、財団法人小板振興会からの補助は考えられなくなりました。次に過疎と老齢化で労力不足も現実です。これでは従前の方式での同行は全く不可能です。では、同行が始まった原点に思考を戻してみよう、そう考えたのです。

辺鄙で小さな集落で生きてゆくためには、自然発生する助け合いの精神を、集落の住人が再認識する事が必要でした。

しかし、役場まで20キロの山道、冬は3ヶ月の雪の下、働き場もない、そんな厳しい環境では、助け合いと言っても最低限の事しかできない。その中で作り上げたのが、この「新小板部落葬儀細則」です。

添付しますので本文とあわせてお読み頂き、私共の真意を汲みとっていただきたい。そして御意見をお聞かせ下されば幸いです。

この新同行になって4人の方を見送りました。特に今回は30代の青年が「見浦さん、この方式でいける」と言ってくれました。嬉しい嬉しい一言でした。

小板新同行は試行錯誤をしながら、これからも存続の為に努力して行きます。
どうか暖かく見守ってやってください。

2006.7.27 見浦哲弥

小坂集落葬儀細則

私共の小坂部落では、集落内で死亡された方を、同行(ドウギョウ)として、助け合いの葬儀を行ってきました。

しかし、過疎現象が進み、高齢化が進行するに及んで、今までの申し合わせも、手直し、変更、廃止？のやむなきに至りました。

そこで、今回から、葬儀施行細則を改正し、同行を任意の集りで、その趣旨に賛同し、思いやりと、助け合いの精神をお持ちの方々を会員として、運営して参ります。

小坂に定住の皆さんの、一人でも多くの参加と協力をお願いします。

目的

小坂部落の一員として生活され、小坂の人として生涯を終えられた方を、同じ仲間として小坂の土に返すため、簡素ながら、心のこもった野辺送りをすることを目的とします。

葬儀の基本

1. 葬儀は同行全員で行います。(お元気で、お手すきのご家庭は何人でも、また、短い時間でもご協力ください。)
2. 葬儀は故人宅《以下当家といひます》、または小坂会館とします。この手配は願人がします。
3. 火葬場は町営の火葬場(土居にあります)とし、火葬場の準備、使用後の清掃等は同行が手配するものとします。願人は役場に問い合わせて使用の許可と注意点を確認して下さい。
4. 葬儀は、それぞれの宗旨、ご都合により、ご希望がお有りと思います。浄土宗以外の各宗派、またお付き合いの葬儀社との立場も全て認め、ご当家がご希望の不足部分を同行が補います。ただし、その場合は、この葬儀細則の精神に基づいて、簡素で心のこもった葬儀と言う事になります。以下は、浄土宗の場合を書き記しますが、他宗の場合はこれに準拠します。
5. 生花は三対、果物かごは一对までとします。花輪はご遠慮願ひます。
6. お棺は、箱棺とし、金襴をかけます。《金襴は振興会にあります》

葬儀の施行

1. 死者が出たときは、当家は、速やかに世話人《不在の時は相談役》に通知してください。通知を受けた世話人は、当家と相談の上、願人1名を指名します。(原則としてお隣とします)
2. 願人は、当家と相談して葬儀の日時を決めて下さい。親戚、知人への通知は、当家にされるものとします。

以下、葬儀は願人が指揮して行いますが、病気その他で、その任に耐えないときは、世話人に申し出て下さい。世話人は相談役と協議の上、適任者を指名します、指名された時は、特別の理由の無い限りお引き受け頂きます。

● 願人 (ガンニン) 1人

1. 願人は、当家から依頼を受けた時から、骨上げまでの葬儀、又は葬儀の不足分一切のお世話をします。

2. 願人は葬儀を開始する旨、世話人に報告して下さい。世話人は補佐役として願人の仕事を手伝います。
3. 願人は別表の出役表に基づいて、同行会員に役割をし、速やかに通知して下さい。通知を受けた会員は、事情の許すかぎり協力してください。但し格段の理由のある場合はこの限りではありません。（出役表は新しい同業では、まだ出来ていません。実際の葬儀の中で適正な表を作り上げて行くつもりですので、しばらくお待ち下さい。）
4. 葬儀の式次第など、当家と話し合って決めてください。
 - A. お寺さんを決めて依頼する《3人まで》
 - B. 役場に届を出す《健康保険証、死亡診断書2通、年金手帳、判…》。
 - C. 当家より葬儀費用五万円を預かってください、もし当家にその手持ちが無い場合自治会長に相談して下さい。葬儀中の出費は一切願人が取り仕切して下さい。不足の時は、帳場より仮領収書と引き換えに、一定金額を受け取りこれに当てます。
 - D. 葬儀に必要な資材を調達してください。
 1. 葬儀用の貼り紙
 2. 会葬のお礼品
 3. 葬儀の領収書
 4. 飾り紙花
 5. おとき場用の食材
 6. その他以上を、当家の手持ちを確かめて、不足分を調達して下さい。
5. 書類、購入品のメモ、依頼先《弁当、バスなど》名簿等を飛脚に渡して、部 落外の用事を依頼します。
6. お寺さんの休憩所、帳場の場所を決めて、それぞれのお家に承諾をとります。お寺さんの接待は、世話人又は相談役があたります。
願人は常に所在を明らかにしてください。願人は主に当家に、世話人は帳場か、おとき場に詰めるようにお願いします。
7. お総佛さんの手配をしてください。
8. お布施は、当家から依頼があった時のみ、帳場から仮領収書と引き換えに指示された金額を受け取り、お寺さんに差し上げてください。
9. 当家と話し合って、当主挨拶は誰か決めもらつて下さい。ご親族のご焼香の順序も同様とします。
10. 葬儀の進行係りは願人とし、葬儀委員長として最後の挨拶も願人とします。
(但し、願人の依頼で世話人又は相談役が代行する事もあります。)

11. 願人は、お斉の亭主役を勤めて下さい。
12. 願人は葬儀終了後、後始末を確認して、帳場と共に当家に行き、報告と金銭書類の引渡しをしてください。

● 帳場 （チョウバ）

1. 帳場は役割の通知を受けたら、速やかに当家に忌中の張り紙を出して下さい。
（張り紙は、見浦和弥に依頼すれば、パソコンで印刷してもらえます）
2. 帳場は、願人に指示された場所、日時に帳場を開設する準備をして下さい。
3. 帳場は、入金のみ扱います。願人から葬儀費用の請求のあつた時は、仮領収書と引き換えに、必要な金額を渡すことができます。
4. 香料、香典、見舞い、等、科目に応じて、金品を受け取り、領収書を発行し 会葬お礼品を手渡します。
5. 帳場が立てこんで、規定の人員で処理できないときは、願人に申し出て応援 を頼んで下さい。
6. 複数の帳場人が金銭を受け取る時は、それぞれ領収書と金箱を持ち、各々の入金のみに領収書を発行し、責任の所在を明らかにして下さい。
帳場終了後も、帳場人ごとに集計し、領収書控えと照合確認した後でないと、集めてはなりません。
7. 香典帖の記入作成は、コンピューターの表で代行することができます。
（現時点では、帳場の集計が済み次第、伝票（帳場の領収書）を見浦和弥、又は見浦亮子に渡し て香典帖の作成を依頼してください。）
8. 帳場締め切り後、速やかに願人と費用の精算をして下さい。
9. 帳場は、記帳、精算が終わり次第、願人立会いの上、その書類、香典帖、領収書、金銭を当家に引き渡して下さい。

● 板場 （イタバ）

お斉の賄いをする役を言います。

1. 責任者を決めて願人に報告して下さい。
2. 当家の手持ち材料、お斉の人数を願人に問い合わせて、不足分を書き出して購入を依頼して下さい。
3. 献立は
平 5品 若しくは 7品
つぼ 1品
汁 1品 味噌汁
汁のふた 1品
とします。
容器は人員の節約のため、パックを使用します。みそ汁、お茶は別に器が準備されていますので、それを使用して下さい。

4. 故人の身内の方の昼食が必要な場合があります。確かめておむすびを作つて ください。なお同行会員のための、おむすびも必要です。
5. 野武士に持たせる野団子、9個が必要です。忘れないで下さい。
6. お斉がすんで、板場の後始末が完了したら、責任者は、借り入れ品、残り物の送付、備品の収納など、結果を確認の上、願人にその旨報告下さい。

● 野武士 (ノブシ)

式場の設定、駐車場の準備・案内、火葬場へ伴走してお世話するなど、葬儀の裏方をさせていただきます。火葬場は町営の火葬場を使用します。

1. 互選して責任者を決めて、願人に報告して下さい。
2. 火葬場の管理人に連絡して、その指示に従って準備をして下さい。
3. 霊柩車より前走して、火葬場に行き、雑用を受け持って下さい。火葬場を退場するときは、清掃して、管理人の確認を貰って下さい。
4. 管理人への寸志は誰が持参するかを願人に確認して下さい、もし依頼されたら確実に手渡して下さい。
5. 火葬場には、生花、ろうそく、線香、抹香(焼香用)、野団子、お酒(1升)、骨壺、骨箸(若干本数)、その他を忘れずに搬送して下さい。
6. 火葬場の業務が終了したときは、必ず願人に報告して下さい。以後、願人の指示にしたがって葬儀の後始末をください。
7. 以上は原則です、その時の状況に従って、願人に相談の上、適宜対応して下さい。

● 飛脚 (ヒキヤク)

部落外へ連絡、届け、買い物、等の用事を担当します。

1. 部落外の葬儀の用事をさせていただきます。役割の通知を受けた時は、直ちにその指示に従って下さい。
2. 役場への届けや、買い物など、願人からの指示は必ずメモを貰って下さい。
3. 出先から帰宅する前に、願人に電話して新たな用事の発生の有無を聞いて下さい。
4. 指示された用事が済み次第、速やかに帰宅、願人に報告して次の指示を受けて下さい。
5. 飛脚の仕事が完了した後は、他の雑用をお願いすることになりますので、ご協力ください。

● 小走り (コバシリ)

1. 葬儀の様々な雑用をお願いしますので、常に願人と連絡を絶やさないように、お願いします。

葬儀終了

葬儀が終わったら、会員全員で食品残品の当家への移送、什器、器材の手入れ、格納、返品、会館の清掃などを、願人の指示と確認のもとで行い、願人の終了の挨拶の後、解散するものとします。

但し、事情の有る方は、この限りではありません。願人の許可をもらって帰宅してください。

補則

1. 本細則に記載の無い事柄については、願人の指示に従ってください。
2. 葬儀式次第については、お寺さん、宗旨によって微妙な違いがあります。接待係の世話人又は相談役は、その点をよく確かめて下さい。
3. 葬儀の用事で自家用車で集落外に出られた方に、ガソリン代の一部(2000 円)が支給されます。願人に申し出て下さい。
4. この細則は、会員の同意の上で変更されるものとします。

2004.12.16

平成18年8月15日現在は 世話人は見浦哲弥、相談役は島川重行です。

素晴らしかった我が人生(2005/11/6)

私の文章を読んで関心を持ってくれた後輩君、私の人生は素晴らしい人生だったんだよ。振り返ると様々な事があった。苦しい事も、悲しい事も、楽しかった事も、反省すべき事も。でも平凡を自認して生きた私には、分に過ぎた素晴らしい人生だった。

その人生の基礎は、父と母から受けた。

お前は普通の人間だと、例を挙げて論してくれた父、あれが私の根本だった。そこから努力の積み上げが始まった。私が普通の人間なら、他人に負けないためには、努力しかないそう思い込んだから。

母には、人の善意に素直であれと、死の床から諭された。そのおかげで冷血な合理主義者にはならなかった。

あれは、母が末期癌で広島で病床に臥しているときだった。私は、熱心な浄土真宗の信者だった小板の祖父が、母に木彫りの観音様を持って行けというのを断った。「母はキリスト教徒だから仏さんはいらん」と。それを人づてに聞いた母は、苦しい息の下で氣力を振り絞って私を叱った。「人の真心には、宗教も、人種も、貧富も、何の違いはないのよ。何故そんな事がわからないのか。」と。ともすれば、独善的になる私が、辛うじて自分を見失わないですんだ、大切な教えだった。

人生は出会いだと喝破する人がいる。私はそれが運だと思っている。

私の生き方を変えた人の一人は、流川教会の杉下牧師である。

昭和22年の厳寒のさなか、まだ荒れはてていた広島の夜学で、英語の教師としての彼に出会った。

私が彼に感化を受けたのは、彼の小さな教会のミサのスピーチ。

「体の栄養失調は何時か回復するけれど、心の栄養失調は二度となおる事はない。だからこそ、心豊かに暮らさなくては・・・。」と。それは、一生の心の物差し。そして、彼は私の人生の師の一人になった。

私が16歳、先生は30代、可愛い女の子と奥様との3人家族、ミサといっても家族と身内同様の人達の小さな集まり、そこへ友達と2人で参加させて頂いた。お祈りの後の短いお説教の一言が、まだ子供だった私の心に滲み込んだのだ。何度かあった人生の曲がり角で、ふと心をよぎる黒い影を吹き払ってくれた一言。まさに人生は出会い、人生は学舎。

私の政治の師は、前田睦夫先生。小さな選挙違反でお世話になった。

彼は加計町の3名家の一つ、前田家の跡取り。若いころから社会主義運動に参加し戦時中は投獄もされた、反戦運動家。私のどこが気に入ったのか分からないが可愛がって頂いた。先生は50台後半に交通事故で亡くなられた。

その3回忌が加計町の旧前田家であった、その折のことである。

当時、先生のご家族は息子さんの勤務地、東京に転居されていたが、奥様が帰郷されて開いた、ごく近親者の集まり。会の半ばで、故人の思い出を一言ずつ話す事になって、何を話そうかと迷ったのだ。月並みの先生の賛辞なら簡単だが、先生と私の関係を表現するには物足りない。そこで、エピソードを話すことにした。それは次のような内容だったと記憶している。

「あれは、社会党の集会の後、先生の広島のお宅に泊めて頂いたときの事でした。一夜明けて、『おい見浦君、朝飯を喰って帰れや、家内が留守じゃけ一の、何にもないがの、冷や飯ぐらいあるじゃろうけ一』。先生が並べてくれた朝飯は本当に有り合わせ、冷や飯と漬物、それを何のてらいもなく、楽しそうに一緒に食事をしてくださった。それは、暖かく楽しいものだった。その時思ったのです。”一番大切なのは心ではないか、見栄も体裁も関係ない、こんな生き方があるではないかと”。」

集まりが終わり、三々五々解散する人の中で、加計の大ボスの佐々木寿人さんが、私を待ち受けていた。

「おい見浦君、わしゃ睦雄の幼友達じゃが、今日の話の中で、お前が一番、睦雄を知っとった。一度、わしの家に遊びにこい」と、山長者の寿人さんに招待を受けたのです。驚きましたね。でも住む世界が違いすぎる。とうとう、訪問はしなかった。その息子さんが今は加計の町長。勇気を出して行くべきだったのか、ちょっぴり後悔をしている。でも、それからは一層、わが道に行くが強くなりましたね。

ここ見浦牧場は中国山脈の背骨、芸北地区にある。スキー場のメッカでもあるが、この地区で牧場を経営する事は、人には理解の外の事柄が多い。

冬、避難舎が一棟しかない放牧牛群をはじめ、肥育牛群、分娩牛群等等、牛は吹雪の中で寒さと雪に耐える。雪国に人生の大半を過ごした私も、いつまで続くかと途方にくれるほど吹雪が続くこともしばしばである。だから子供の頃は、お正月から2月の初めまでの間にする事は、子供は学校へゆくのと、家の中で炬燵のお守をするだけ、大人は炉端で藁細工、縄を織い、草履を作るだけ、暗い暗い長い冬だった。

その中で、冬も放牧で牛を飼う、世紀の大冒険でしたね。

牛は、充分飼料を与えさえすれば、寒さの中でも3ー4日は何とか生き延びてくれる。でも餌が途絶えれば生命の危機が迫まる。1ー2頭ならいざ知らず、200頭近くの牛群に飼料を給与する。1日に2度の除雪をしても20ー30センチも路上に積雪がある。何処まで続くかと暗然としますね。

しかし、何日かすると必ず日差しが戻ってくる。それを希望として頑張る。そこで見浦牧場の標語が生まれた。

”逆境は続くことはなく、好運もまた続かない”と。

春が来る。辛い苦しい冬の後だから、素晴らしい素晴らしい春なのです。人生も同じ。だから、それを理解して生きている人は素晴らしいのです。

74年生きました。辛いとき、悲しい事を、何度も何度も乗り越えて、私の人生観が正しかったと自信を持っています。

私の後輩の貴方は、まだ長い時間をお持ちです。前向きに生きて下さい。楽しい事と共に、辛いことや悲しいことも起きるでしょう。でも負けないで乗り越えて下さい。私の文章に興味を持たれた貴方なら、その困難に負けない力をお持ちのはずです。

たった一度の人生です。悔いのない素晴らしい生き方をして下さい。遠くから、そっと見ていますから。

2005.11.6 見浦哲弥

混浴(2007/4/6)

この言葉から想像する場面はたいそう色っぽい。しかし私の混浴の相手は子牛、おまけに糞まみれとくると、大変な勇気が必要なのです。

18年の暮れ、そのアクシデントが起きました。

本来、牛は生まれた時はびしょぬれです。母親が必死に舐めて被毛の粘液を除き、体温が一時的に上昇して被毛を乾かす。被毛が乾くと毛が空気を含んで断熱層を作り、体温を維持するシステムが動き始める。造化の神様はすごい事をします。

春から秋まで気温の高いときは保温の心配はしないですみます。自然の繁殖はこれに合わせて時期があるのです。

ところが、経済の中で利益を上げる経営をするとなると話が違ってくる。とくに和牛は子牛が生まれないと収益はありません。乳牛はミルクと言うもう一つの収益があるのですがね。だから一年一産が目標になる。必然的に気温の低い時にもお産がある。その対策が重要な技術となるのです。生まれたら出来るだけ短時間に被毛が乾く手段をつくす。その為に母親が舐めない時は、洗いざらしの手ぬぐいを何枚も使って拭く。強力なヘヤードライヤーで乾かす（昔は4-5百ワットの器具しか手に入らなくて苦労しました）。500ワットの投光器を並べて温度の高いエリアを作る。などなどです。

見浦牧場は屋外の群飼育、お産が近づくと群れから離して産室の牛舎に収容しなくてはなりません。ところが残念な事に私達は人間、完璧を目指してもミスが起きます。記録誤りや思い間違い、原因は様々ですが、結果は笑い話ですまなくなります。

今回の騒動は乳房の腫れ、陰部の腫脹、腹部の大きさから、空胎と思い込んだところから始まりました。それも複数人の眼で確認してそう判断したから問題です。

日が暮れて夜の餌やりに繁殖牛舎に上がった私達は、運動場の雪の中に生まれたばかりの子牛を発見したのです。既に体温が下がって微かに悲鳴を上げるだけ、しまったと思っても手遅れ、すぐ住居に担ぎ込んで「風呂を沸かせー!」。昔の五右衛門風呂と違って、安物とはいえボイラーですから、数分でお湯が貯まり始めます。湯温はショックを少なくするため38度、首を支えるため人間と一緒に入って抱えて身体を支えてやるのです。

嫁の亮ちゃんが聴診器で心音を確認しながら、途切れそうになると顔をひっぱたいてショックを与える。まるで戦争でも起きたようなさわざです。体温が上がるにつれ微かな心音が強くなる、温度を調節する係りの和弥（経営主）も必死。家族総動員でした。

風呂で耐える事1時間。ようやく心音も正確になり筋肉に力が入り始めた頃には、私の体力も限界に達していました。しかし子牛の体温はまだ35度。通常生まれた直後の体温は39度前後、まだ不十分でしたがこれ以上続けると今度は人間の事故が起きる。入浴を中止してミルクを飲ませてみる事に決めたのです。

最初に飲ませるのは乳牛の初乳。子牛は胎盤を通して各種の抗体を受け取る事が出来ません。抗体は初乳で受け取る。しかも腸壁の組織が生まれて数時間で密になるため、単体がかなりの大きさの抗体は、腸壁の組織が密になるまでに飲ませないと吸収されないのです。まさに時間との争いでした。

しかし、生命力の強さは、時には人間の常識外の仕事をします。一口、自力で飲み落としたのです。

「飲んだ!」見守っていた全員に、希望の緊張が走ったのです。子牛が一瞬休んで、ゴクゴクと続けて飲んだ時は、「やったー!」と歓声が上がりました。

生き物を飼う、生命の強さを実感する、この喜びがあるからやめられない。

一口ごとに身体に力が入り、1リットルあまり飲んでくれた頃は体温も上がり始めていました。「助かったのー」「よかったのー」全員が思いを一つにした瞬間でした。

あれから110日あまり、毎日4リットルのミルクを飲んだ子牛は、あのドラマは片鱗も想像できない元気一杯の子牛に成長しました、まもなくミルク給食が終わります。

あと2年の付き合いが終わる頃にはどんな牛になっているやら、私に見守る時間があるのやら、と、色々な思いを持ちながら毎日牛と暮らしています。

2007/4/6 見浦哲弥

座右の銘(2007/1/10)

見浦牧場の事務所を覗いてください。
乱雑に取り乱した室内の壁に色あせた標語が貼ってあるのが見えるでしょう？ この標語が私達の生き方、この牧場の考え方の基本なのです。今日はその話をしましょう。

その中で1番大切にしているのは“自然は教師、動物は友、私は考え学ぶことで人間である”です。

もう随分昔になりますが、可部の中学校の先生が立ち寄られました。壁のこの言葉を見て共感する所があったのか、誰の言葉かと尋ねられました。私が考えた座右の銘ですとお答えしたら、たいへん感心されました。

しかし、この言葉はいまから40年余り前、この牧場をはじめた頃、何も知らない私が思い悩んで思考錯誤し、様々な人達の意見を聞いて、色んな本を読んで、ようやく辿り着いて出来あがったものなのです。

この世の中では、一つの事柄でも立場が変わると正反対の答えがでる、そんな事が多くあります。これでは新しい農業の道を探すのには役に立たない、とくに市場経済と呼ばれる競争社会の中で生き残る事は不可能だと思ったのです。没落した見浦家では資本の大きさと競争に打ち勝つ、という方法は取れませんでした。

残された道は人の1歩先を歩く、それしかなかったのです。そのためには多種多様な意見や情報を取捨選択しなければならない。その基準になる物差しがあれば、私のような人間でも正確な判断が下せるのではないかと。

その物差しは何にするべきか、悩みに悩みぬきました。わたしの経済の指針、マルクス、ケインズの天才をしても完璧な理論にはなり得なかった。人間は神ではないと歴史が証明しています。私のような無学な者でも理解が出来て、絶対に間違いのない基準、それは何か、何ヵ月も考えましたね。

そしてある時、ふと思ったのです。私達は自然の中で生きている。自然を否定しては存在しない。ならば自然の法則が絶対の基準ではないのかと。

たとえば、草花は、種をまき、芽が出て、双葉が開き、根を張り、茎が伸び、葉が茂り、花が咲く。そして実がつき、種を落として、枯れて土に帰る。その過程のなかでの開花なのです。ところが花屋の店先では何時でも美しく花盛り、お金を払えばどんな花でも手に入る。スーパーに行けば、お米も野菜も果物も様々な商品が何の前置きもなくすぐ買える。こんな便利な社会に住んでいると物事の本質が見えなくなる。仕事も生き方もね。

私が牧場を始めて数年後、一人の青年が訪ねてきました。米作りは限界がある、だから畜産をやりたいと。畜産は何を考えているのかと聞くと豚を考えていると。

当時、戸河内では3軒の農家が養豚で安定した経営をしていました。そこでまず手作りで小さな豚舎を作り、2-3頭からはじめろとアドバイスをしたのです。

ところがそんな事では何時になっても豚で飯は食えない。今は資本主義の時代、金がないのなら借金をしても大きくやるべきだと、無責任な発言をする親類がいて、おまけに餌さえ売れ

ればの餌屋が種豚も技術も提供すると申し出たから大変、立派な豚舎が建ち、種豚が30頭入るのに時間がかかりませんでしたね。

ところが、相手の生き物。1頭1頭が扱いが違う。病気にもなる、怪我もする。回りがああだ、こうだと言っても経験のない者には対応できるわけがありません。思惑どうりに行かなくても、銀行も飼料屋も取り立てには容赦ありません。こんな筈ではなかったと気付いた時は、もう蟻地獄、長年続いた旧家も破産する道しかありませんでした。

10年余り経って彼が来ました。「見浦さん、わしが間違っていた。貴方が正しかった。」そう言った寂しそうな姿にかけける言葉はありませんでした。長い反省の末だとは思いますが、失った人生は2度と帰ってこない。2ヶ月後病で死んだ彼は、まだ40代の初めでした。

自然の中で生まれ、田舎で育った彼が、その自然から何も学んでいなかった。花屋の店先で咲き競っている花々には生きて行く為の根がない、華やかだけど短い命の仇花だと言う事が理解できなかったのです。

自分で豚舎を建て、2-3頭から飼いはじめる。そして失敗や体験の中から学んで行く。それは、植物が根を張り、茎を伸ばして、葉を茂らせてからでないと花をつけないのと同じだよと教えたのに、彼にはその意味が理解できなかった。残念でなりません。

自然の真理は身近にありすぎて、見落としている人が多いと思います。私がそんな基本から話しを始めるようになったのは、この小さな集落の中で、いくつか同様なことが起きてからなのです。

でも「そんな事は誰でも知っている。馬鹿にするな」何度も叱られましたね。同じ話に真剣に耳を傾けてくれる様になったのは、私が老境に足を踏み入れてから。世の中はままならぬものです。

今日は見浦牧場の基本の話をしました。この続きはまた次の機会に。

最後にもう一度。「自然は教師、動物は友、私は考え学ぶことで人間である」

2007/1/10 見浦哲弥

人生とコップ(2007/3/20)

あれは牛を飼い始めて 10 年余りも経った頃でしたか、見浦牧場最大の危機が訪れました。

その年は、世界的に大豆もコーンも不作で、飼料原料が高騰して、一袋（20 キロ）650 円前後の配合飼料が 2 倍近くになったのかな。おまけに、飼料の高値に嫌気した飼育農家が、仕上げ前の牛をいっせいになげ売りのものだから、牛価は半値、この業界は大変な騒ぎになりました。試行錯誤中の私達も、まともに荒波を受けましてね。どう切り抜けようかと必死でした。

そこへ退官されてヤンマーの嘱託になっておられた中島先生が「おい、見浦君どうしているか。」と訪ねてこられました。「先生、大変です。とても切り抜けられそうもありません。」と申し上げたのです。そして見浦牧場の現状を報告したのです。半分あきらめかけていた私の話を黙って聞いておられた先生は、「見浦君、経営というものはコップのようなものなんだ。」と話し始められました。

「そのコップに資本を入れ、労力をいれ、知恵をいれて、一杯になって始めて利益が湧き始めるんだよ。たとえ九分九厘溜まっても、一杯にならなくては利益は生まれてこないんだ。大きいコップは大きい利益があるかもしれないが、小さなコップも大きなコップも、一杯にならないと利益が湧いて来ないのは同じ。そのコップの大きさを決めたのは、君自身ではないのか？自分で決めた事に何故悲鳴を上げるのか？持てる資本を全部投入し、力の限り働き、能力以上に知恵を注ぎ込む、それは当然の事ではないのか？弱音をはく前にする事は一杯あるはず。」と。

ショックでしたね。ぶん殴られた気がしましたね。そんな当たり前の事に気付かずに後ろ向きになっていた私に、猛然と腹が立ちました。悔しくて悔しくて、2・3日は夜も寝られなかった。そうだ、自分が決めた事だ。最後の最後まで全力投球をしよう。自分の持てる力を全て投入してみよう。本当に全力投入したのか？余分な事をしてはいないか？そして結論がでました。まだ心の中に見栄と体裁を持っていました。特に兄弟に対して。そうだ、ありのままの自分で生きよう。辛いときは辛いと言い、助けが欲しいときは助けてと、素直になろう。

12月の28日、農協の組合長が電話をしてきました。「見浦君、緊急融資をする事が決まった。至急保証人を二人頼んでくれ。保証人の所得証明書も必要だ」と。

以前の私なら二の足を踏んだのですが、素直に兄弟に頼めました。「ああ、いいよ。書類を送れ。」この瞬間、新しい私が生まれたのです。

年末、辛うじて間に合った融資。見浦牧場が生き残った喜びもさる事ながら、目の前に広がった人間の生き方。目から鱗が落ちるとはこの事でした。

あれから30年あまり、新しい人生を生きてきました。問題は山積しているものの、経営は黒字が続いています。世代交代もなんとか出来そうで、若い連中の生き様が本物になったようです。

振り返って周囲を見ると、今の私が当然と思っている事を知らないで模索している人が余にも多い。若い当主和弥がこういいます。「大切なのは人生で迷った時、本当のアドバイスをくれる人を持つこと、それが1番大切だ。しかし、そんな人はあまりにも少ない。」と。

私には、師となるような資格はありません。しかし、自分が体験し、実践してきた事は話せます。

危機を乗り越えることができ、再び先生にお会いした時、「あの話はこたえました。何日も夜も寝られませんでした。」と申し上げましたら、先生は「あのとえは色々な所に使えるんだ」とおっしゃいました。例えば、幸せな家庭を望んだら、誠実と信頼と愛情を家庭というコップに一杯になるまで注ぎ込まなければ幸せはやって来ない、と言うように。

人生は面白いものです。しかし、人間ですから物事が見えなくなる事もあります。その時に本当の事を教えてくれる人を持つ、それが大切な事だと思うのです。その為には、日頃から誠実に生きる。それを続ける姿を見て人生の師が登場する、これが私達の社会の基本だと思うのです。

2007.3.20 見浦哲弥

サイドブレーキのない人生(2007/3/30)

私が小板に帰った当時、戸数は27戸でした。それから65年の年月が過ぎて行きました。振り返ると長い長い時間、様々な変化がありましたが、夜逃げ、倒産、自殺と言う悲しい事件が8件もありました。それぞれ理由や原因は異なりますが、27戸の小さな集落にしては異常な数として私の記憶の中に残っています。

76年になる人生で、この小さな集落の中で見た悲劇、その中から教訓を読み取るためにはこの年月が必要でした。折角得る事の出来た真理、墓の下に持って行くのは惜しい、そんな気持ちでこの文章を書いています。

8件の中で縊死（注：いし＝首吊り自殺）は3件、その気持ちは私なりに理解はできます。実は私も何度か自殺を考えたことがあるからです。

その一つはニクソンショックの時、ニクソンが大統領の時にアメリカで大豆の大凶作が起きました。アメリカの国内での供給不足で価格が暴騰、アメリカの世論は自国の食料の危機に何故輸出が行われているのかと沸騰しました。業者は長期契約に基づいて輸出をしているだけなのですが、アメリカ国民は納得しない。ついに時の大統領ニクソンは大豆の禁輸を決めたのです。その決定で不安にかられたほかの穀物も暴騰し、日本では一袋（20キロ）670円前後だった飼料が、1400円余りに高騰しました。驚いた日本の農民は家畜の頭数を減らして対応しようとする。市場に牛があふれましてね、売れないのです。拌みこんで買ってもらった値段は1/3。年末の支払が大変になって。

政府も緊急融資の制度を作ってくれたのですが、殺到する申し込みに駆け出しの新米牧場は枠の外でした。それまでにも何度か危機に遭遇したことがありましたが、この時ばかりはもはやこれまでとあきらめかけたのです。

当時、出荷の世話をしてくれていた広島経済連の中野君という青年が見浦牧場の担当でした。日頃私の考えに共感してくれていた彼は、自分の事のように奔走してくれました。そして、あと3頭、年内に出荷すれば融資が受けられるというところまで漕ぎ着けてくれたのです。

そして12月の末、出荷する牛がいないので、まだ肥育中の牛を広島の屠場に連れて行きました。こんな若い牛は屠畜出来ない、と言う係員を拌み倒して処理して員数あわせをもらったのです。勿論価格は前述のとおり大赤字でしたが、辛うじて年末を越す事が出来たのです。

自殺を覚悟したのはこの時でした。支払が間に合わなかったら倒産、私を支援してくれた多くの善意の人に迷惑がかかります。時計よ止まれ、そんな気持ちでした。

市場経済の中では危険は隣り合わせ。だから計画をして市場調査をして万全を計るのですが、それでも危機が訪れるのです。まして予測不能の事柄が起きると、当然の様に危機が発生する。それを乗り越えるには、日頃の生き方と運と気力が必要になるのです。

ですから、ただ儲かるから、人が上手くやったからなどと、安易に考えて事業をはじめて追いこまれて行く。8件の中の半数以上はそれでした。

ここ小板では、いや農村では、人の失敗を話題にする事は人の道に外れた事だとの考えがあります。同情はしても教訓にするのは不謹慎だと。しかし、それでは「前車の轍は踏むな」の教えを守る事は不可能です。

私が初めて自治会の役員になった20代の前半、会長だったTさんは集落の資産家の一人でした。彼が小豆の先物取引をしていたのです。当時は雑穀の輸入は許可制で、国内産でほとん

どを賄っていたのです。しかも、生産の大部分は北海道、天候次第で豊作凶作を繰り返していました。そして暴騰暴落、当たれば大もうけ、外れれば倒産、その危険な取引にのめり込んでいたのです。

これを商品取引と言うのですが、なかでも1割の証拠金で大きな取引のできる、先物信用取引は博打そのものです。失敗した彼は私を子供と思って愚痴を並べられました。1年も経たないうちに死亡され、家は倒産、集落の人たちは養子の息子の放蕩が原因と見当違いの結論を下したのですが、その本当の原因を知っていた私は納得出来ませんでした。

何年かしてTさんが話題になりました。実はこうだったと話すと、友人のHが血相変えて食って掛かりました。見浦は人の悪口をいう、根性が曲がった奴だと。

30年あまりして、義弟のT家が倒産しました。これも商品取引の失敗が引き金でした。小豆が大豆が変わったのが、たった一つの違いでした。

私は自分を含めて、良い事も悪い事も、世の中に起こる事は教訓として吸収しようと努力してきました。牛達は仲間が失敗すると同じ事は2度と繰り返えさない、その事実を教えて。

なぜ人間はそれが出来ないのか不思議でなりません。8軒の崩壊した方々の原因を見ると何軒かは防ぐ事が出来たのではないか、同じ事の繰り返しは悲劇の中からでも学ぶと言う事を怠ったからではないのか、私はそう感じるのです。これも長い時間を見つめないで理解が出来ない事柄の一つかも知れません。

子供の頃、私の叔母が結婚詐欺にあいました。失意のあまり病に倒れて死亡したのです。後始末に東奔西走した父が本当の内輪話をしてくれたのは数年後、私がようやく青年期に入り始めたときでした。「詐欺というものは嘘を本物と思わせて成立する。だから本物以上に本物らしく見えるものだ。用心しなければいけない」と。

そこで父に聞いたのです。「本物より本物らしく見えるものをどうして見分けるのか」と。

父曰く、「お前が普通の人間なら、努力もしないのに美味しい話などあるわけがない。これは美味すぎると思ったらまず疑え。そして一つ一つ疑問点を洗い出して行け。ウソが基本の詐欺は、どんなに巧妙に組み立てても、どこかに必ず不自然な所がある。それを見つけたらその話は詐欺。近づくな」と。

世間知らずの若者だった私には有りがたい教えでした。

私はたとえ自分や家族に不利な事柄でも、実際に起きた事柄は結果まで正確に認識すべきだと思っていますし、それを教訓として生きてきました。それが人生のブレーキだと信じています。

身近で起きる事柄は伝聞よりはるかに正確です。本当の貴重な教訓なのです。

この集落では臭いものには蓋で、見ざる、聞かざる、言わざる、が美德とされていました。誰がどこから始めた教えかは知りませんが、変化の激しくなった世の中をブレーキのない車で高速道路を走るようなものだと感じるのは私の思い過ごしなのでしょうか。

最後に貴方にお聞きします。

貴方の人生の車にはブレーキが付いていますか？

1度、サイドブレーキを引いて試してみませんか？

そして振返って見ませんか？

原爆の女の子(2005/8/5)

今年も8月6日がやってきました。

あの前日の夜、県庁の建物疎開で働いていた広島市から、庄原にあった農兵隊の本部へ帰隊して、間一髪で難を逃れた私に、この日が来る度に思い出す女の子がいます。

昭和20年7月の終わりに、10日間の予定で、仲間4人と県庁の建物疎開の手伝いを命じられました。予定日数分の米と味噌を持たされ、引率の幹部に連れられて、県庁の講堂へ。ここだけが、まだ壊されていなくて、案内の県の職員が、山積みされた宿直の布団を指差して、好きなものを持って行って好きなところで寝ろと。本部からきた幹部曰く、倒された建物の整理をして釘を抜けと。目的は古釘、錆びとらん奴を一本でも沢山持って帰れ。新しい釘は手に入りませんでしたからね。幹部は「手を抜かずには本気で働け。遊んだりすりゃあ、ただじゃあ済まんぞ。集めた古釘の量でわかるけえの」。言うだけ言うと、さっさと庄原へ帰って行きました。

何しろ七月の終わりの広島は暑いものって、庄原の七塚原は別世界でしたからね。

宿舎の講堂の周りは瓦礫の山、米軍の猛爆撃で日本の都市が片っ端から灰になって行く最中でしたから、少しでも焼失の面積を減らそうと、防火線と称して建物を帯状に破壊して行く。それを建物疎開と言いましてね。まだ建てられて間もない家も防火線上にあったら最後、壊されてします。余談になりますが、母方の叔父に医者が出て、粒粒辛苦やと建てた病院を残して軍医として召集され、敗戦で帰郷してみたら建物疎開で病院は破壊されていて、もう少し敗戦が早かったらと、落胆のあまり自殺した、そんな悲劇もありました。庶民にとって、戦争は絶対するものでなく、巻き込まれるものでもありませんね。

さて、あの年は暑かった。10日の間に1日だけ雨でした。夕立が一度ありましたか、今思い出ただけで汗が出る、そんな暑さでした。夜は蚊が多くて山積みされた蚊帳を吊って潜り込んで寝たのですが、まともに張れなくて苦労しましたね。

朝10時ごろまでは何とかしのげるのですが、それからは、汗との闘い。あの幹部の脅しが恐ろしくて、錆びていない古釘を探して、瓦礫の山に登ったり降りたり、サボることなど考えませんでしたね。

11時半になると、当番が飯盒炊飯、薪だけは山ほどありますから苦労はありませんでした。おかずの味噌をなめての食事、大豆や芋が大半の本部の隊の食事より、混ぜもののない麦飯はご馳走でした。

何日かして、通りかかった女の子が、声をかけてきました。「あんたら一、味噌しかなあんなか。」少し年上の16、7の女の子でした。「これしか食べるもんがなあけえ、しかたがないんだよ。」「ふーん」その女の子はしばらく考えて、「あんたら一、一寸おいで」という講堂の陰にあった、社員食堂の裏に連れて行きました。そして4人の飯盒の蓋にジャガイモの煮付けを入れてくれたのです。思いもかけぬ親切でした。煮付けも美味しかったが、それより好意が嬉しかった。60年も昔の事なのに、今でもその暖かさを心に感じます。

翌日、あの女の子はいないかな、と食堂の周りをうろついていたら、50くらいの男の人に、「食券を持たないもんが来る所ではない」と、犬ころのように追い払われました。

以来、8月6日のときには、あの女の子の冥福を祈って黙祷しています。

同時に、私達を怒鳴りつけた男の人が、あの女の子の身代わりになってくれればなあ、と、、、
食い物の恨みは恐ろしい・・・・・・ですね？。

8月5日の夜行で庄原の駐屯地に帰って、辛うじて一命を拾った私に、あの優しさは心に染み入る教えでした。彼女との出会いも、大切な大切な出会いでした。

どんな時でも、他人の思いに心を走らせる事は、人としての優しさを持ちつづけるために大切な事なのだと。

つらい戦争の中にも、人生の教室がありました。

2005.8.5 見浦哲弥

小板昔日(2007/8/11)

私が小板に帰ったのは、昭和16年4月、60年余りも昔になりました。

広島左官町にあった、三段峡バスの始点から半日がかりの小板は、山奥のそのまた奥の秘境でした。今は廃校になった小学校と、氏神の河内神社にしか、昔のよすがを偲ぶしかありません。天井と車体の後ろに荷物かごをつけたフォードの小さいバス、土ぼこりを舞い上げて、飯室の峠を超え、太田川のほとりを延々と走って、虫木のつづら道を這い上がり、松原の集落で息をつく。まもなく深入山の山道を登りつめ、広島県の国道最高点890メートルの水越の峠(タオ)を過ぎて、山間に忘れられた十数件の人家、それが小板でした。

当時、小板は26軒、上(かみ)から、上田屋、藤盛、田屋、住福、宮田屋、大前、富士野、大畠(これが見浦)、藤田屋、藤政、松広、田尻、田島屋、仁井屋、原、世賀井田、新宅、田川、小松屋、城根、出本、和泉屋、大下、堀田、中屋、今田屋。この中には、若い人は知らない家もあるでしょうね。

明治の終わりごろに作られたという、広島から益田に続く一車線の国道を、小さなバスやトラックが、もうもうと土ぼこりを上げて走る。雨でも降ったら大変で、穴ぼこだらけの砂利道を車が悲鳴を上げて峠をのぼる。今考えると別の世界ですね。

この地帯はたたら製鉄で有名な中国山地の真ん中で、集落を流れる小板川には、砂利の中に黒くて重くて小さな穴が開いた小石がたくさんあって、小板にきたときは随分不思議に思ったものです。

それが小板にあったたたら製鉄の鉱滓で、藤盛の上のたたら場から川に流れ出たものだったのです。カナクソといいましたね。

これには後日談があるのですが、自伝2にかきましたからそちらを読んでください。

小板川といえば、当時は川にも魚をはじめ、いろんな生き物がいっぱいいましたね。

一番多かったのはドロバエ(アブラハヤ)、馬鹿な魚でね。縫い糸にミミズを結んだだけで釣れました。20センチもある大きなやつがね。ところが友達は何も食べない。同じ川にいる、ヒラベ(ヤマメ)やゴギ(イワナ)には目の色を変えるのに、ドロバエはゴミ扱いでした。

好奇心満々の私は、さればとて、鍋いっぱい釣りに上げたドロバエを醤油で煮付けたのです。白身でおいしそうに出来上がったのですが、泥臭くて食えたものではありませんでした。ヒラベやゴギは本当においしいのに、天と地の違いがありました。

もっとも、古くいわく、”ドロバエも春先はおいしいが一”

小さなゴリがいましたね。腹の吸盤で川底の意思に吸い付いて、ぴょん、ぴょんと水の中を移動する。三国の竹田川にもいましたが、もっと大きかった。

テンギリというやつもありましたね。なまずのミニチュアみたいな魚で、少し赤みを帯びていたかな。

そして泥鰌(ドジョウ)が川の中にも田んぼにも用水路にもたくさんいました。

それが、いまは、数が激減するか、いなくなりましたね。

除草剤や農薬のせいだと思うのですが、農業が楽になると反比例して自然がこわれていった、そんな気がしています。

小板川は三段峡の合流点に大きな滝があって、魚切になっているので、鮎も鰻も登ることが

できません。ただ、泥亀は応戦原の堰では時折見ることがあって、捕まえたときは大喜びでした。

そんな小板の川の変化は50何年前、PCPという除草剤が使われたことから始まったと思っています。

小板に最初に入った除草剤は24Dというやつで、有名なベトナム戦争の枯葉剤作戦で使われた代物でしたが、この薬では田んぼの生き物が目の前で死んだ覚えはないのですが、その次に入ってきたPCPは、撒いたとたんに、おたまじゃくしやみみず、ゲンゴロウなどの生き物が地表に這い出て死んだのです。田んぼの表面が真っ白になったときは恐ろしかったですね。

確か1年か2年でこの除草剤は手に入らなくなりましたが、時代が変わるときはとんでもない商品が出るものです。もっとも使うほうも無知でしたが。小板川の変化はこのとき始まった、そんな思いがしています。

私の家、大畠の前に深入山がそびえています。深入山の本峯は少し低い前深入山の影ですが、見慣れているので、こちらのほうが形良く見えます。この山が死火山だと知ったのは、随分後のことです。

このことを知ったとき、そういえば頂上に薄くはがれる変な石がたくさんあったなと思い当たったものです。

母岩の褶曲でできた山ではありませんから、雨水が地中にしみこまない。だから日照りが続くと湧き水がすぐ止まるのです。

田屋のかみの川床に、地元の人がナメラと呼ぶ、ひびのない岩盤が見られます。

小板が水で苦勞をしたのは、これが原因でした。

日照りになろうものなら、飲み水のあるのは3軒だけといわれていましたから。

大畠はその幸運な3軒のうちの1件で、水のない不自由を理解していませんでしたね。

もっとも、チョロチョロと背戸の横穴から流れ出る水は、飲み水が精一杯でしたが。

昭和45年に小板地区の農業構造改善事業が始まりました。60ヘクタールの農地を新設して、6戸の牧場と6戸の黒牛の兼業飼育農家を作ろうという計画でした。

その牧場や飼育農家のために、専用の水道を敷設する、その話しが地域に説明されたとき、吉政頼人君が、リーダーだった私のところに抗議してきました。

「小板の皆は水に不自由しとるんど、なんで皆のところにも水がいくように考えられんのか。」

言われて初めて考えの足らないことを思い知りました。役場に駆け込んで、補償工事がないと、地域の賛成が得られないと交渉しました。やっさもっさの結果、全戸に配管し、1個の水栓を町と県の補助でつける、その代わり、この事業に反対はしない。それで部落の了解をとる、ということになりました。

しかし、その会合が大騒ぎとなりました。

何人かの人「てめーがこんな事業を考えるから水道をつけることになる。昔は川の水を飲んでいたので、いらんことをするな」と大変な騒ぎ。日ごろから出すぎと私に反感を持っていた、保守派というか守旧派の連中の総攻撃でした。覚悟はしていたものの、誰一人私を支持する発言がないのには参りましたね。

ところが会合が終わって散会し、家々の明かりが消えた深夜、我が家の玄関の戸をたたく人がいます。

まだ眠りについていなかった私たちが何事かと戸を開けると、向かいのMのお爺さんが立っていました。

「まだ電気がついていたんで、起きておりんさんとおもうて来た」と。そして、玄関に入るなり、両手をついて頭を下げられました。「見浦さん、今晚は申し訳なかった。」

驚きましたね。いや、驚いたなんてもんじゃない。驚愕でした。相手は私の上級生の父親、親子ほどの年の違い、その人が手をついて謝られる、何事が起きたかとおもいました。

「何があったのかはしりませんが、手を上げてください。よかったら、話を聞かせてください」と。

お爺さんの話は、私の知らなかった水に不自由している人々の実態でした。

小板は深入山という死火山のふもとにあります。褶曲でできた山々は岩盤のひび割れの中に大量の雨水をためることができるのに、粘質の溶岩でできた深入山は日照りが半月も続くと飲み水に事欠くようになります。その話しは既にも書きました。

小板で、真夏の日照りで水切れを起こさない水源は3箇所、幸い見浦家の水源はその一つで、その点は幸せでしたが、その他の家では、飲み水はもらい水だったのです。

ですから、風呂水などは川から汲まなければなりません。Mさん曰く、「夏の日切れには、風呂の水を変えることができないのよ。仕事に行けなかつて飯がくえんけーの。川へ水汲みにいくことができないのよ。じゃけー、10日も同じ風呂にはいつての。泥水に入るようなもんで。」

初めて知った悲惨な実態でした。真夏の労働で汗だらけの体を癒す最低限の楽しみも、この有様だったのです。そういえば、他の人たちも水が枯れかかった小川で水浴をしていましたっけ。

「そんな中で、無料で水道がつく、こんなうれしい話はなかった。それなのに、見浦さんの提案だと、攻撃される、牧場を始めるから水道の話になった、昔は川の水を飲んでいたんだ。馬車や牛車が通っていたころは、雨が降ると川に道路の水が流れ込んで、牛糞や馬糞が水船にういていた、小板の水の不自由には皆泣いていたんだ。それなのにあんたのことを応援するものが誰もおらんのだ。」

わしも何度も本当のことを言おうと思ったんだが、口から出たら村八分になる。それで恐ろしゅうてなにも言えなんだ。申し訳なかった。」と再び頭を下げられたのです。

そして、「あんたは間違っではおらん。わしと同じ考えの人間は他にも何人もおるんじゃ。どうか最後までがんばって、皆のために水道をつけてほしい」と。

そして「夜中にすまなんだの」と帰られたのです。

表面から見えなかった小板の裏側が見えた瞬間でした。

翌日、集落の人たちが連れ立って、皆の意見だから、代表を辞任するようにと、来場しました。

小板のためにならない、が理由でした。そこで、多数意見なら辞任するけれども、どこが悪かったのか教えてほしい、と聞いたのです。ところがためにならないの繰り返しです。

「私も人間だから間違いもあったかもしれない。将来のため、悪かったところは直したいと思うから、是非教えてほしい」と詰め寄ったのです。

視線を合わせないようにと下を見ている人が何人もいました。Mさんの話のとおりでした。

「〇〇さんが、お前はためにならない、とゆうとるんだから間違いがない。」最後の答えがそれでした。

「わかったよ。多数決なら仕方がない。やめるよ。それだが、後始末をする時間は呉れろ」と

要求すると、「止めるんならそれでええけー」と満足してかえっていきました。

それからは役場との交渉は腰が入りました。反対派がおとなしくしている間に、水道敷設が後戻りをしないように工作しておこうと思ったのです。

県の補助金もきまり、工事業者も決まって、もう大丈夫と確信してから、代表者を辞任しました。でも、後段がありまして、工事が始まると見浦のところは水道工事の図面がありません、と工事人が問い合わせてきました。私に対する村八分の始まりでした。

M爺さんのおかげで本当のことが見えていた私は折れませんでした。幸い飲み水には不自由していません。畜舎用の水は小板川の伏流水に井戸をほって、ポンプアップをして間に合いました。

しかし、水道が完成して「毎晩新しい水の風呂にはいれて、極楽で一。見浦さん、本当に世話になったの一」とM爺さんに礼を言われたときはうれしかった。

この話には、後日談があるのですが、その話はまたの機会にして、今日はこれまでにしておきます。

世の中には見えないところに本当の姿がある。そのことを教えられた貴重な体験でした。

社会の上層の人々の、見えない人たちへの気配りができない、悲しい現実をみるにつけ、底辺に住んだ自分ながら、ささやかな幸せを感じています。

2007/8/11 見浦 哲弥

人生の種まき(2007/10/4)

先日三段峡豆腐の岡本さんとの世間話がはずみで宗教談義になり、良きにつけ、悪しにつけ、結果には必ず原因があるという話になりました。聖書の中にも、良き種を撒かば良き麦を刈るべし、悪しき種を撒かば悪しき麦を刈るべし、(60年も前の記憶ですので、文言は定かではありませんが)とあります。本当のことなんですと結論して別れました。

それから何日かして、今田三人(いまだみつと)君のことを思い出しました。彼は4歳上、3年ばかりの付き合いでしたが、まさに人生の種まきでした。今日はその話を聞いてください。

もう15年あまりになりますか、開拓地の一部が競売になりました。地方事務所の某課長さんから、是非買い入れるようにと要請が来ました。貧乏のどん底で牧場経営に追われている私たちにはそんな余裕はありません。そのことを申し上げてお断りすると、隣の餅ノ木部落に使っていないお前の土地があるではないか、買い手を見つけてやるからその金で購入しろと勧めてくださいました。それが別荘を作られた桐子さんと、退職後ペンを建てる予定の坂本さんでした。

坂本さんの土地は道路に面していましたが、桐子さんの土地は狭い小道はあるものの、道路との間には今田さんの土地があり、ある意味の袋地になっていました。その解決が買っていた条件になったのです。

今田さんは、38豪雪のあと、餅ノ木集落に見切りをつけて離農され、広島の団地に住居を購入して生活されていました。田舎の人は愚直といわれるほど勤勉で正直ものです。離農した何人かの私の友人も、それぞれに住居を購入して都会に根を下ろした人が多かったのです。その数年前に既に人生を終えていた今田さんもその一人だったのです。

20数年も無音だった今田さんを、お願い事で訪ねるのは心が重かったのですが、手配をしてくださった人の好意に応えるためにも、足を運ばなくては、と思ったのです。電話連絡をし、仕事を終えて帰宅された息子さんを訪問して、ことの次第を説明してお願いしたのです。

話を聞き終わった彼は言下に「分かりました。見浦さんの言われるようにしましょう」

そして言葉を続けて、「亡くなった父が、小坂で信頼できるのは見浦だけ、が口癖でした。その人のお頼みですから。」と。

忘れていた、青年時代の出来事を思い出しました。

昔の小坂は青年団活動が盛んでした。集落の事業に協力する、郡の体育祭に出場する、追宴会と称して田舎芝居をする等々でした。動員から帰った翌年、青年団に入団した私は最年少者としてしごかれることになりました。

その年の末、恒例の追宴会(赤穂義士討ち入りの12月14日に開演する村芝居のことをそう呼んでいました)の準備に駆り出されました。今の草野先生の家の下がわにあった会館(小坂小学校、2代目の校舎を転用していました。)日頃物置と化して荒れ果てている内外を整理して舞台を作る。その作業の最中のことでした。

その日は各自、鋸(ノコ)や鉋(ナタ)、鎌(カマ)を持参するようにとの通達でした。私の父は学校の先生、刃物などの研ぎ方は知りません。教えてくれる人のない我流で研いだ私の刃物が切れるはずがありません。悪戦苦闘する姿を見た仲間が私の道具を見て「物は切れないが息は切れるで」と声を合わせて笑う始末、悔しかったですね。

それを黙ってんでいた今田君が私をそっと物陰に呼びました。「俺の道具を使え」その一言はうれしかった。そして信頼に値する人を見つけたと思ったのです。

翌年、年長者が結婚などで退団して、彼が小板青年団の団長に就任しました。彼の優れた人間性に心服していた私は、団員として裏表なく協力しました。当たり前のことです。

やがて、彼は、自分で判断のつきかねる事柄は、「おい、見浦、このことをどう考えるか」と真っ先に相談してくれるようになりました。私もその信頼に応えるために一生懸命努力した記憶があります。

たったそれだけの、彼が団長だった2年足らずの短い時間のことを、彼は生涯覚えていて、息子さんに話していたのです。

何十年も昔の、それも彼の優しさに応えた、小さな誠心誠意が大きく花開いて帰ってきた。私の人生の大切な曲がり角で、生きることの不思議さを実感した瞬間でした。

そうして袋地の道路の問題は無事解決して、売りに出た開拓地は見浦牧場の一部になりました。

私の住んでいる自然は、種をまかなければ何も生えてきません。雑草でも、風や鳥や動物が種を運んできてはじめて生えるのです。芽が出て葉が茂って初めて花が咲く、当たり前のことですが、人生も同じでした。

そこでお聞きします。

貴方は人生の種まきをしていますか？

いい種を撒きましたか？

種まきをしないで大きな花が咲くことを望んではいませんか？

2007.10.4 見浦 哲弥

立ち話(2008/2/9)

昔といっても、50年ほど前の話ですが、よく立ち話がありましたね。あぜ道で気のあった友人と会うと、そこでも、あそこでも、と始まっていましたね。あぜ道に腰を下ろして、煙管を取り出したら最後、「もう昼だけえ、またにしようや」になるまでに半日はかかる。のんびりとした時代でした。

高度経済成長が始まった、池田総理の時代から、そんな田園風景が消え始めました。生活を支えるために他業種に働きに出る兼業農家が増え始め、時間を惜しんで働く、働き蜂の日本人が増えました。特に農村は、です。

時代は変わって、小板にも別荘が建ち始め、都会の人たちの姿が多くなりました。長い会社勤めから開放されたリタイヤの人たちは、自分たちと違った世界の田舎の人たちとの世間話も、田舎暮らしの一面として期待したのですが、なかなかどうして、通り一遍の付き合いはあっても、深くのめりこむような付き合いは程遠い、が現状、そんな感じです。

それにつけて、何年か前、取材に訪れたアメリカ人が、話題が彼の琴線に触れたとたん、糸

が切れたように話し始めた、あの場面をよく思い出すのです。たかが立ち話でも、興が乗って話し込むには、共通の話題という接点がなくては始まりません。集落の住人は、天候の話、隣人の噂、作物の出来等々、接点はいくらでもあります。都会の人と集落の人との間には、何を話題にすればよいか迷っている、だから挨拶だけで終わりにする、そんな関係のようです。

しかし、考えてみればもったいない話で、違うエリアで暮らした隣人は、大変な情報の持ち主で、その点が理解できると、立ち話が学習の場が変わって、貴重な知識獲得の教室になってしまうのですが。

先日、道端で草刈をしていました。このあたりではめずらしい50馬力のトラクターを使って。普通は日本製で20馬力前後の新型なのに、当場の機械は30年、40年前の外国製、しかも作業機も外国製、操縦者は70をはるかに過ぎた老人となれば、興味を持つのが当然かもしれませんね。でも立ち止まるだけの人が大部分で、話しかけてくる人はさすがに少ない。時代のせいですか。

ふと気がつくと、圃場の縁に人が立っていて話しかけてきました。
「面白そうですね」と
「興味がおありですか？」
「いや、このあたりでは見かけない機械ですから」
「そりゃあ、もう40年以上も前のイギリス製ですからね。」と話が弾み始めました。
「私の牧場は貧乏ですから、新品の機械は買えなくて、人がスクラップに出す程度の機械を安く手に入れて、使っています。」
「でも、修理がいるでしょう？」
「業者に依頼すると修理費が高くて、新品のほうがよくなります。ですから勉強して自分で修理するのです。」

話は次々と進んで、30分ばかり続きました。
相手の人にすれば、日ごろ手に入れることの出来ない情報の山だったでしょうね。
でも、私にしてみれば、都会の人が何に興味を持つのか、その一端を知っただけでも貴重でした。おまけに、見浦牧場の和牛のことも、少しばかり付け加えましたから、いつの日か役立つかもしれません。

たち話、ただの時間つぶしにするのも、勉強の場にするのも当人しだい。限られた時間なら有効に使ってほしいなと思っています。

2008・2・9 見浦 哲弥

川村秀三郎様(2007/2/11)

突然手紙を差し上げる失礼をお許してください。

私は2007. 1. 29発行の日経ビジネスの「保守分裂でそのまんま独走」の記事を拝見した一読者です。

拝読してあなたのご意見に間違った点は見出せんでしたが、何かが不足なのです。心に訴えてこないのです。そこで何が不足なのか、私なりに考えてみました。そして得た結論は「隠し味がない」ということでした。

貴方様は57歳、これからの方です。もしかしたら、底辺で生きた76歳の私の体験がお役に立つことがあるかも知れない。そう考えてペンを取りました。もしこの文がお目に留まることがあれば、最後までお読みいただければ幸いです。

私は中国山地の山間で和牛の一環経営を40年余り続けてきました。日本広しといえども同じ考えの農民とは出会ったことがありませんので、独特の方式なのでしょう。それは和牛を周年放牧という形で飼育してきたからです。そして、自然の中で世代交代をして適応してきた牛たちに、人間が見落とし、忘れてきた様々な事柄を教えられました。

先日、先生と同年輩の当地方中堅の人工授精師さんにお会いしました。年賀の挨拶のあとで、「見浦さん、皆さんはどうですか？」と尋ねられました。

私の牧場は目下世代交代中で、嫁が資格を持った授精師、(彼女は免許を取ったときの仲間ではもっとも優秀といわれましたし、実地も熱心で経験も10年余りになる)それが一昨年あたりから成績が下がり始めて昨年は分娩予定日がきても赤ちゃんがいない、空胎が目立ち始めたのです。ついに例年なら五十数頭生まれる子牛が44頭。

その話をして、「私も覚えがあるが、指先に神経を集中して微妙な感覚を読み取らないと結果が悪くなる。そのことは体験しないとどうしても自分のものにならない。彼女はそれを体験中。」それを聞いた彼、「そうなんだ、私も何度も失敗して初めて身につきました。」

「貴方は中堅、若い人にはその話をしてあげてください。」とお願いしたのです。

牛の人工授精の教科書にも、講習会の指導にも、指先の感覚が最後の決め手とは教えていないが、本当の技術は失敗と経験の積み重ねの中でしか育たないものです。

たくさんの子牛を育てていると、彼らが人間と付き合うにも、相手によって差があることに気づきます。私はそれが人の持つ隠し味のせいだと思っています。

組織の中に居られた貴方は、選挙民という多種多様の人たちが理解できる隠し味を持つ。それが出来ていなかった。そこが敗因で、決して分裂選挙が決定的な要因だとは思えないのです。

私が30後半の昔、本省から、山本、川村両課長さんが来場され、意見を聞かれたことがあります。特に川村さんの時は、大勢での来場をお断りしたら、秘書官と運転手の3人でおいでになりました。

そして作り始めた牧場の丘で、これからの農業について、私の考えを聞いてくださいました。

私は、そのときの経験から、高級官僚の人たちは、優秀な人間の集まりであると思っているのです。が、何かが物足りない、それが人間としての隠し味だと気づくまで、40年近くかかってしまいました。

貴方はこれから政治家の道を歩まれるのだらうと思いますが、底辺の庶民は動物と同じように、この人は仲間なのか、敵なのかを本能的に知ろうとします。この能力を侮ってはなりません。そこに訴えるのが人間の隠し味だと思います。政治家や有力者だけでなく、袴を脱いで多くの人に触れ合ってください。その中に貴方の人生の出会いを増やす人がいるはずです。

長官、先生と呼ばれる方に失礼なことばかり書き記しました。老人の戯言とお忘れください。そして、これからも、日本のためにご尽力ください。

2007. 2. 11 見浦 哲弥

晴江さんと無限大(2007/10/3)

” ∞ ” このマークを知っていますか？数学で泣かされた「無限大」の記号です。無限大にどんな数を加えても、引いても無限大。無限大にどんな数をかけても無限大。どんな数も無限大で割るとかぎりなくゼロに近くなる。

どうでもいいようなこの公式が出てきたときは、数学とはなんとバカな事を本気で教えると思いましたがね。それが牧場作りの最中に登場しようとは、そしてそれが農業のもっとも大切な真理だったとはね。今日はその話をします。最後まで読んでください。

昭和45年、見浦牧場の開墾が始まりました。ブルドーザーが木の根を掘り、土を起こして平らにしていく。戦後の緊急開墾がクワとカマで大地に挑んだ姿を知っているものとしては隔世の感がありました。

しかし、貧乏な私たちには、その開墾の方法に表土扱い工法ではなく、地成工法を選ぶしかありませんでした。

表土扱い工法とは、最初に表面の黒土を剥いで別の所に積み、その下の芯土や岩盤を削って平らにして、表土を戻す方法です。植物が生育していた肥えた土が表面になるので、理想の形の工法ですが、重量物の土を大量に動かすので大変高価につく。(田圃の耕地整理で採用されていますが、10アール当たり100万円を越すといわれています。)

地成工法とは、文字通り、高いところを低いところに埋めていく。結果、表土は埋められ、芯土が表面に出ます。植物にはうれしくない状況を作るのですが、何しろ工費が安い。しかし、牧草がよく伸びるところと生育不良のところができる。確か、付帯工事(取り付け道路や排水路など)を含めて、10アール当たり14万円あまりだったと記憶しています。ですから、表面には石ころがゴロゴロ、浮陸直し(でこぼこな押し)が大きかったところは特にひどかったですね。

見浦牧場のメインの畑は10ヘクタール弱あります。その畑も石ころだらけでした。拾っても拾っても石ころがでてくる。その当時はモアー(草刈機)はレジプロ(バリカン式)で小石が当たって刃が傷むと草刈中止。短い夏の草刈シーズンの貴重な時間が飛ぶように消えていく。でも石拾いは第一の優先事項でした。

しかし、外国に比べれば小さい区画の10ヘクタールも夫婦二人での石拾いともなると広大です。しかも完全な手作業。毎日毎日、朝から晩までの石拾いは遅々として進みません。ついに私が音を上げました。

「石は無限にある。無限からいくら引いても残りは無限、こんなきりのない作業はもうやめた」と。

それを聞いた妻の晴さんが怒りました。烈火のごとくです。

「なんぼ残りが無限でも、拾っただけ石が減ったと考えられんのか。数学では正しくても、その公式は農業で正しいとは限らない」と。

まさに、愚公のことわざの世界を突きつけられた、そんな衝撃でした。

私は少年期を都会で中産階級の生活の中でした。私の中では意識するしないにかかわらず、都会人の合理主義が考え方の基礎になっていたのです。農業ではそれは成り立たない、彼女の言葉はその点を痛烈にっていました。

中国には”愚公山を移す”という古い諺があります。愚公という農民が田畑に陰をする邪魔な山を移したという話です。途方もないことと笑う世間をよそに、黙々と工事を始めたという話です。はじめは何の変化もないように見えた山が、子供、孫、曾孫と耐えることもなく続けられて、やがて山が平らになって立派な農地が出来上がったという話です。

小さな人間の努力も積み重ねると、不可能と思えることも可能になる。まさに晴さんはその点を指摘したのです。理詰めで物事を考えるあんたには、無数にある石ころは無限かもしれないが、私には有限と見えると、農民の血が彼女に言わせたのです。このときから彼女はパートナーではなくて身近な教師になりました。

農業には農民の考え方が必要なのです。もちろん産業構造の中の一員としての現在の農業には近代的な都市感覚も必要であることは言うまでもありません。しかし、それだけでは農業を支えきれない。農民が持ち続けた理念を忘れては日本農業は生き残れない、そう考えるようになりました。

あれから長い年月が過ぎました。石ころだらけだった牧場もずいぶんきれいになりました。もちろん石ころが皆無になったわけではありませんが、無限だと考えたことは笑い話になりました。

私も老人になりました。そして長い時間の人生の過ごし方に、ささやかですが、確信を持つようになりました。

様々な職業には、それぞれ取り組むための信念と生き方があるのだと思っています。それが長い長い人生を支えていくのだと。

2007. 10. 3 見浦哲弥

お寺さんは翻訳者(2008/4/6)

先日、S 豆腐の O さんが、久しぶりにお寺に説教を聴きにいったと、こぼしていました。何でも、集落の物故者の法要とかで、久しぶりでしたね。と。ところが、お坊さんの説教のまずさに、時間が過ぎず、大変でした。なにせ何を伝えようとしているか、全く判らないのだから、あれなら見浦さんの文章を読んだほうが、まだましですと。

自分の拙い文章が優れていると思いがってはいいませんが、お寺さんの説教のまずさには、閉口している私ですから、大いに同感しました。

しかし、そんな話を聞くと、もう 20 年になりますか、事故で死んだ S 寺の若い跡取りのお坊さんを思い出します。

彼が父親の住職の名代として報恩講に来てくれたのは、もう何年前になりますか。彼の姉が長女の戸河内中学校の同級生ですと申し上げたら、私との年齢関係がお分かりいただけるでしょう。

龍谷大学を卒業して宗教家としてホヤホヤの彼に、先代の住職との触れ合いからの話をしたのです。

先代住職は彼の大叔父、当時の私は二十歳を越したばかりの血気盛んな若造。父が、これからはこの子が大島を引き継いでゆきます、よろしく。と紹介しました。

そのとき私は申し上げたのです。

私の代になりましても、家としてはこれまでどおり檀家としてお付き合いさせていただきます。しかし、私が浄土真宗の信者になるかならないかは別です、と。

16 歳のとき出会った流川協会の竹下牧師さんの、「体の栄養失調は治るけれども、心の栄養失調は治らない」の説教が心に染み入っているの、それを越す説得力がないと他の教義は受け入れることがないでしょう、と。

その話から、若い彼は、本気になって私を論破しようと、議論を仕掛けてきました。しかし、彼の論議は頭の中で組み立てた論法、仏陀が自然の真理で辿り着いた仏法の真髄で説得しない限り、自然の中で暮らしている私には勝てません。でも次の年の報恩講にも、僕はこう考えたが、と真剣でした。

何度かそんなことを繰り返すうち、私は彼は本当の宗教家になれる、信者が求めている心の叫びに応えることのできる、浄土真宗の通訳者になれると本気で考えるようになりました。

それから毎年、彼が報恩講の導師として来場するたびに、お互いの考え方をぶつけ合って議論しました。もちろん、彼と私が親子ほどの年齢差があることなど、意識はしなくなりました。彼の心の人間に対しての暖かさが本物と判るにつけ、彼に対する期待が大きくなりました。彼も、私の自然の子としての生き方が判るにつけ、僧侶としての立場を離れて、それを理解しようとするようになりました。

「見浦さん、貴方の考えを突き詰めていけば、自分の墓は要らないと考えているのでは？」

彼が私の人生観の中に立ち入った瞬間でした。この時、本物の宗教家が誕生したと思ったのです。この近辺では出会うことがなかった、宗教家としての僧侶に出会ったのです。

うれしかったな！！

あれは何年でしたか、大きな台風が来ました。中心がこの地帯を通り過ぎ、風の通り道は風神の道路とばかりに大木がなぎ倒されました。風がこれほどの力を持っていたとは。

小坂も何本かの風神の道ができました。家の後ろの松の大木が倒れたのはこのときでした。もし、これが家の方に倒れていたら、私たちの家族は全滅、そんな恐ろしい台風の夜でした。

夜が明けて被害が明らかになるにつれ、様々な情報が入ってきました。その中に悲しい知らせがあったのです。

彼が老人夫婦の非難を手伝いにいって、洪水の川に転落、老人夫婦ごと流されて死亡したとの知らせでした。大災害時の行動としては軽率との非難もありましたが、それも若さゆえ、彼の人間としての優しさゆえでした。

将来、この地区の精神的柱になったであろう彼の死は、ここ、太田川地区の浄土真宗団に大きな打撃を与えたと思っています。あれから彼に匹敵する人間性を持った仏教家にはまだお会いできません。

神様も仏様も時々大きな悪戯をなさる。私の残った時間の中で、彼のような宗教家にもう一度お会いできればと、かすかな期待をしています。

宗教家は教義の翻訳者、でも、ベースに人間としての優しさが必要なのですよ。

2008. 4. 6 見浦 哲弥

ワンチャンス、ワントライ(2008/2/8)

私は、3人の女の子と2人の男の子の子宝に恵まれました。その子供たちは、広大の理学部、同総合科学部、九大農学部、愛媛大学教育学部、井口高校（この子は私が過労で体調を崩して、進学をあきらめてもらいました。担任の教師に、なぜ大学に生かせないのかとずいぶん説得されました。国立一期校の現役合格の可能性を持つ子の将来をつぶすのか、とね）を卒業しました。

私の家庭は他の文章で何度か紹介したように、見浦家（戸河内町では小板の大畠は旧家の端くれでした）のどん底からスタートしたのです。そんな私と自分の意思で人生を共にする道を選んだ、家内の晴さんは、ずいぶん物好きだったと今でも思っています。

当時は、小板も若い人が多くて（長女は22歳のときの子供）よく集まって議論しました。敗戦でそれまでの軍国主義が一変して民主主義に、長老支配が多数決政治に変わったのですから、事ある毎に議論が紛糾しましてね。子供の家庭教育もそのひとつでした。

私が小板に帰ったときは、小学校は餅ノ木の生徒を含めて27人、樽床ダムの工事が始まってからは工事関係者の子弟も通ってきて70人を超していました。もっとも新制中学校が併設されていましたが。

小板集落の生徒が半分以上でしたから、各家庭は子供5人6人の子沢山でしたね。ですから子供の事は共通の話題で、よく議論の種になったものです。

曰く、「子供は親の都合で生まれてきたのだから、借金しても悲しい思いをさせてはいけない」「高校ぐらいは卒業させなくては世間体が悪い」等等、戦前の地主制度に苦しみぬいた農民が、農地解放と高米価と好調な林産物の売れ行きに、子供たちには自分たちの辛い思いはさせないと、考え出した理屈のひとつでした。でも、その論理は、自分たちの都合で作上げた、身勝手な考えでした。

私は、たとえ家庭という舟が泥舟であっても、乗り合わせた以上、沈まないためには貧乏に耐え、苦労を分かち合って目的地に着く努力を全員でする、それが当然のことではないか、と主張したのですが、見浦は子供のことを考えていない、かわいいと思わないのかと笑われました。

私は、それならわが道をいくと、長女の祐子に申し渡したのです。

「今、見浦はこういう仕事をして、年収がこれぐらい、支出がこれぐらいで食べていくのが精一杯。だから他の家庭のように、進学は当たり前、ということはできんのよ。」と数字を挙げて説明したのです。

彼女が小学校2年か3年生のときです。子供ではなく、大人に話すように。理解はできなかったでしょうが、私の真剣さはわかってくれたのでしょうね。最後は彼女も懸命に聞いてくれたことを覚えています。

「でも、おとうちゃんは家にお金がなくて進学できなくて、悔しくて悔しくて独学をして資格を取ったけれど、勉強がしたくても進学できない悔しさは今でも心に刻み込まれているんだ。だから、上の学校に行きたかったら、1回だけチャンスをあげる。国公立の高校、大学に1回で合格したら、どんな苦労をしてでも行かせてあげる。これはおとうちゃんの約束。」 懸命に

聞いていましたね。昨日の事のように顔に浮かびます。

それからの彼女は勉強の態度が違ってきました。他の子供たちと微妙に差が出始めた気がしました。私の子供ですから、特別の頭を持っているわけではありませんが、自分のために勉強している、そんな感じでした。

中学は戸河内中学でした。進学するとき、こんなことを話した記憶があります。

「分からない事があったら何んでも聞きなさい。知らないこと、分からないことは恥ではない。聞かないこと、理解しないことが恥なの。担任の先生で分からなかったら、他の先生に教えてもらいなさい。事務室には先生がたくさんいるはず。それでしかられたら、父ちゃんが謝りにいってあげる。」と。

ところが、そんな彼女が半年もしないうちに、勉強ができる、頭がいいと注目されるようになりました。先生方だけでなく、PTAのお母さんの中から、小板の山奥でも勉強ができる子がいるんだと、失礼な発言が飛び出す始末。でも本当のことを知っている人はいなかった。彼女が小さいときから自分のために勉強をしていたということ。

勉強というものは、どんな目的で、誰のために努力するのが理解できると、いろいろな事柄が知識として頭に入り始める。これは結構面白いものです。まして、周囲の同輩たちが認め始めるとやりがいまで生じてきます。

彼女は学区外の市内公立をめざしました。戸河内中学の秀才さんに混じって、3人の合格者の1人として舟入高校に入学したのです。

高校でも失敗を繰り返しながら認められ始めました。市内の生徒さんにしてみれば、山県の奥から来た山猿に見えていたのですが、やがて本領を発揮、国立一期校受験の1人に選ばれました。そして広大理学部数学科に現役合格をしたのです。

彼女が広大進学後、初めての帰宅で「父ちゃん、数学は考え方の学問だった」と報告してくれたとき、この子にはもう親としてのアドバイスは必要ではないと安心したものです。

下の弟妹たちにも、祐子と同じようにその年齢になると同じ文句で申し渡したのです。

「見浦は貧乏だけど、一度だけチャンスをあげる。上の学校に行きたかったら、自分のために勉強しなさい。」姉の成長を見ていた弟妹は、ねえちゃんには負けたくない、とがんばり始めました。

これが見浦のワンチャンス、ワントライ教育法の起源でした。

でも、子供たちが進学を目指して本気で勉強を始めると、約束の手前、私たちも懸命に働いて学資を捻出しなければなりませんでした。

時は見浦牧場にとって開設初期の正念場、子供たちへの月末の仕送りは私たち夫婦にとって大問題、時間よ止まれと何度思ったことか。

子供たちも奨学金の支給を受けるために、懸命の努力で成績を上げなくてはなりませんでした。

祐子が50歳代になり、あの困難の時代も遠い思い出になりました。

そして人生そのものがワンチャンス、ワントライなのだと、理解できるようになりました。

今でも「見浦の子は頭がよくて、勉強ができて」と、子供たちの同級生の親御さんに話しかけられて驚くことがあります。実はこうこうなので、内輪話をしたくなります。しかし、若いお父さん、お母さんには必要な話でも、同年輩では茶飲み話の話題には重すぎます。もはや

私の時代は過ぎたのです。

今日は、見浦のワンチャンス、ワントライ教育法の話でした。
では、また。

2008.02.08 見浦 哲弥

信頼(2008/6/28)

Jさんという大工さんがいました。昔かたぎで腕のいい大工さんでした。私より20歳ばかり年長の先輩。今日はその人との話です。

20歳前半、稲作りに成功しました。当時、小板の最高反収は1.7石(250キロ位)、見浦家は1.2石(180キロ位)もう少し少なかったかな。それが2年余りの稲作りで2.5石(350キロ)を超す多収穫に成功しました。この話は、そのときから始まったのです。

新しい稲作りに挑戦した私たちに、集落の人たちは悪口雑言でした。小板で一番稲作りがへたくそが多収穫を目指して新しい挑戦を始めたのですから当然でした。

当時は何から何まで伝統やしきたりが大事。代掻きひとつでも昔からの方式があって、最初は右回りに輪を描いて回り、次に縦に並べて右回り左回り、最後が再び右回りを繰り返しながら、最初の地点に戻る。順序が厳然と決まっていたね。代掻きは田圃の土をドロドロにして植えやすくするのが目的のはずなのに、古老から教えられたことを正確にやる、それが米作り。私はそれを、違うんじゃないか、要は目指すべきは多収穫で方式はどうでもいいというのですから大変。田圃の回りにはいつも人がいましてね。へたくそがやせ牛で仕事をしている、と笑っていたのです。が、新しいことをはじめるととたんに人が増えましてね。特に田植え杵のときはひどかった。

田植えのときは田植え杵という道具を使うのです。田圃に筋をつけて苗を植える目印にする六角杵Tいうのがありまして、3センチぐらいの杉の角材を組み合わせで六角の円筒を作り、田圃に転がして目印をつけていく。ぬらしたり乾かしなどの連続ですから、良質の材料でいい大工さんが時間をかけないと出来ない。皆さん、それはそれは大事にしていました。

ところが見浦家には一世代前の田植え杵、3本の細い角材を組み合わせた平面杵で植えるところにはしるしが付いていて、印のところに苗を植えたら向こう側を持って手前に返す。その連続で田植えをする方式でした。この杵は材料はそこそこで、大工さんも普通の大工さんで作れる、ただし能率はかなり悪かったですね。

当時の私たちには、新しく六角杵を作るお金も才覚もありませんでした。悔しくてね。本を読み漁りました。ある本の挿絵にT字型の杵の横棒に苗を植える目印の木片を打ちつけ、縦棒を引っ張って田圃にしるしをつける道具が載っているのを見つけました。これなら私にも作れるさ。早速自作して、改良して何とか使えるようにしたときにはうれしかった。何しろ参考になるのは小さな挿絵だけでしたから。

この杵の欠点は、人間が引っ張って歩くのですから、上筋が右に左に曲がるのです。六角杵は上手に転がすと見事な直線になるのですが、私が作った杵、”ばば”(後に馬場と呼びました)は、その欠点がありました。で、この方式で田植えを始めると、大勢の人が集まりましてね。

隣の婆様などは田圃のふちで「こがーなことで、米ができやー百姓はいらんよー」と、大声の悪口でした。野次馬が皆うなづいていましたっけ。

ところが、私が父から独立して、小板で最低の米作りからの脱却を目指して猛勉強していたことは、皆さんはご存知ない。朝倉書店、養賢堂などの専門書を買って読みふけりました。

入門書なら何とか理解できたものの、専門書は小学校の知識ではさっぱり分からない。分からないで済ませられる性格なら苦労はないのですが、夜が眠れない。

考えた末、農業試験場に勉強に行くことにしました。ところが近くには稲の試験場がない。仕方がないので西条の農業試験場に一晚泊で通ったのだから、若かったのですね。

もちろん、豊かではない財布ですから、一度により多くの事柄を学ばなければなりません。理解できない点を列挙して教えを請いましてね。帰宅して稲や田圃を調べ、もう一度本を読み直す。その繰り返しでした。

何回目かの訪問で、いつもは研究員の方が相手をしてくださるのに、その日は場長先生が出てこられました。「今日から私が見浦君の相手をするから」と、いまから考えると先生は私の熱心を高く買ってくださったのです。勉強がはかどったのは言うまでもありません。

そんなこととは知らない集落の人たちは、見浦の若造が生意気に、新しい稲作りを始めたげな、年寄りに教えてくださいと頭を下げないで、うまいこといくわけがない。やりそこなったらわろうてやろうで、と。前年までが悲惨な稲作りでしたから無理はありませんが、そんなこんなで、大勢の野次馬が集まったのです。

さて、そんな皆さんの期待に反して、その年の稲作りは大成功でした。先生に教えられたことと、私が気づいた寒冷地の稲作りの盲点対策が成果をもたらしました。

翌春、二人の方が訪ねてこられました。いずれも40過ぎの働き盛り、飯米百姓と呼ばれた0.5-0.6ヘクタールの小農の人でした。

そのうちの一人が

「見浦さん、稲作りをおしえてくれーや」

「どが一な稲作りが知りたいんよ」

「肥料が少なくて米が仰山とれる米作りよ」

「おじさん、それは飯を食わせないで仕事をしろというのと同じやで」

それを聞いておこったのなんの、考えてみたら、その子供たちは青白い顔でやせていましたっけ。

もう一人が前述のJさんでした。

「見浦さん、恥をさらすようだけど、米作りが下手で飯米がたらんのよ。なんとかもう少し仰山取れるように教えてもらえんかの」

20歳も年少の私に頭を下げられたのです。食べ盛りの男の子が二人、それが昔の見浦くらいの米作りでしたから、苦しさはよく分かるのですが、それよりもJさんの真剣さに心を打たれました。

「わかりました。私の稲作りを教えましょう。ただし、条件があります。この一年は私が申し上げたとおりの稲作りをしてもらいます。ひとつでも間違ったら、結果の責任は負いません。しかし、私の言葉どおりに作られたら、1石7斗（225キロ）を保障しましょう。もし、出来なかったら差額は私が米を差し上げます。」

そして稲作りが始まりました。2-3日おきにJさん宅を訪ねて稲の育成状況を見ました。入り口に黒板を備えてもらい、不在のときは要点を記して、すぐに対策をしてもらいました。施肥、防除、水の管理、エトセトラ・・・・・・。

Jさんも奥さんも懸命に、青二才の私の言葉に従ってくれました。

秋がきました。丹精した稲は彼の田圃では見たことのない見事な実りでした。

自分の仕事が忙しい私は、結果が見えてきた時点で「もう大丈夫ですね」と申し上げて、訪問は中止しました。

稲刈りが済み、脱穀が終わった12月。

Jさんが大きな紙包みをもって訪ねてきました。

「見浦さん、お世話になりました。」と。

「1石7斗より多かったですか？」の問いかけに、

「だいぶ多かった」と答えられました。

正直なところ、少なかったら補償の約束は、まだ経済的に弱い私には大きな負担でした。

お礼にといただいた紙箱にはワイシャツが1枚、安物でしたが、Jさんの精一杯の感謝がこめられていました。

でも、この話はこれだけでは終わらなかったのです。

あれは何年でしたか、国道191号線の付け替え工事が始まったときです。新道がJさんの家の近くを通ることになりました。

かねがね、自分で建てた家で生涯を送ると決めていた彼は、道路が所有地を通過することを頑として承知しませんでした。情勢次第で路線が変更されて立ち退きを迫られては、と思い込んでのです。

建設事務所が来ました。役場が来ました。自治会長も行きました。立ち退きはない。道路は30メートル以上離すと約束しても、「あんたらでは信頼できない、見浦を呼んでくれ。彼が間違いないと保証したら同意するが、それ以外では話にならない。」と。

困り果てて役場が私の元にやってきました。「なんとかしてもらえないか」

集落の道路委員だったとはいえ、地権者の意向を役場に伝えて調整するまでが仕事、決定を保証するなど、権限もないことを頼まれたのは初めて。役場の再三の懇願に、とうとう、「約束する。もし変更するよなことが起きたら、自分のこととして戦う」

「見浦さん、本当じゃのー」

「本当じゃ」

それを聞いて彼は役場の人に

「見浦さんが約束してくれたけえ、判をつくけえ」

Jさんは分家さん、おとなしい人で、集会でも意見を言うことはなかった、物言わぬ私の指示者でした。他にも何人かいた同様の人たちが、集落での私の力だったのです。

何年かしてJさんが亡くなりました。息子さんと同居していた奥さんが認知症にかかりました。病状は進行して、徘徊が起きるようになりました。そして、ご主人と二人で建て、ともに働いた田圃の周りをうろつくようになりました。昔の住居は跡形もなくなっているのに。

息子さんの顔を見て、「貴方はどなたかいのー」と見分けが付かなくなりました。それなのに、たまにであって「おばさん、わしが分る？」と聞くと、じっと目をすえて「わかるよ、哲弥さんじゃー」と答えてくれました。

息子さんの記憶は消えても、私の記憶は残っていた。あの稲作りの一年がお二人に与えたインパクトの大きさを教えられて、人生において誠実に相手の立場を考えて生きることの正しさ

が証明されたと思っているのです。

人の心に住む、それは私の生き方。それがたまたま実現した J さんの物語。貴方はどう感じましたか？

2008.6.28 見浦 哲弥

文章を書く(2008/6/3)

私が文章を書き始めたのは、カナダに住む一番下の妹（サチ子）に母のことを書いてくれと頼まれたのが始まりです。

私が小学校6年生のとき、5人の幼い子供たちを残して、ガンに倒れた母の記憶が、当時2歳だった妹には全くない、それで兄貴がボケないうちにと依頼されたのでした。

はじめは思い浮かぶままに文字の羅列に過ぎなかった文章も、少しは進歩したのか、自分で読み返しても面白く、あんなことも、そんなこともあったと、人生を振り返るよすがになりました。

ところが一方老化も進行し、あの事も書いておきたいと思っても、いざパソコンに向かうと頭から消えていることが多く、そこで、思いついたら即、題名と書き出しだけをメモることにしたのですが、今度は未完成の文章が山積みするようになりました。

気分が向いたらコンピュータに話しかける、それも2－3行ずつ。この方式では完成までにとんでもない時間がかかるのですが、積み重ねるということは恐ろしいもので、半年から1年後には仕上がっていく、まとまりを欠く恐れは多分にあるのですが、目下はこの方式で書いています。

しかし、人間というのは勝手なもので、いざ、記憶を文章に変えようとする、成功したときや、自分が正しかったときが前面に出てしまいます。世の中そんなにうまい話ばかりではなくて、私もお他聞に漏れず、失敗も間違いも結構ありました。

それがなかなか出てこない。今となっては失敗も文章の彩りになるのにと、残念です。

最近は見浦牧場のホームページの読者が増えてきたようです。面白いといってくださいる方も多くなりました。

無学の私の文章にも興味を持ってくださるのは、見浦牧場の考え方の基本が皆さんと少し違っているせいでしょうね。

それは何か、見浦牧場の判断の基準は「自然」なのです。自然の現象を観察して、自分たちの考えて照らし合わせてみる、自然が生き方のものさしになっている。そのことだと思います。

見浦牧場は中国山地の真ん中にあります。厳しい気象、自然環境、そして経済条件。その中で懸命に生きてきた家族の体験や歴史は外部の人には面白いレポートと読まれるのでしょう。

でも、見知らぬ人から読んでますよ、と声をかけられ、一部でも私たちの生き方に賛意を示してもらったときは、書いてよかったなと思うのですよ。

今日、隣部落の高信さんが訪ねてきました。彼は私たちの又従兄弟、もう80歳をはるかに過ぎたのに、もうろくの兆しはなく、昔話に華が咲きました。彼もマイコンで記録をとっているとか、もともと頭のよい人でしたが、まだ衰えていない。

お互いにこの年までボケずに生きてこられて、数多くの経験とそれなりの知識を持っているのに、次の世代に伝わっていない。記憶が失われる前に文章にして記録しておこう、と意見が一致しました。

1時間あまりの話の中で、彼も私も知らなかったことを数多く知りました。残った時間はわ

ずかです。急いで記録してゆきます。

残念なことは、もう少し文章がうまいと、皆さんにより多く読んでもらえるのですが、そこは我慢して読んでください。

では、これからも、思いついたまま、駄文を書き続けますので、どうかよろしく。

2008年6月3日 見浦 哲弥

祖父(2009/1/1)

祖父、父の父、自分の血の4分の1が同じ人、とはいっても、私の孫にとっては、はるかかなたの先祖になりますね。ですから、私の孫は、その人がどんな人で、どんな生き方をしたのか、どんなエピソードの持ち主だったか、知ることはできない。もし、知ることが出来たら、彼らの生き方の参考になるかもしれない、そう考えたのですよ。

そのためには、まず、私の知っている祖父像を書き残さなければ何も始まらない。それがこの文章のプロローグなんですよ。

見浦家の私の父は弥七、祖父は弥三郎、曾祖父は亀吉、それから先は名前は知らない。

亀吉の先代、つまり私の曾曾祖父は一家言があったようで、意志の弱かった長男を家からだして、家督を次男の亀吉に継がせた。長子相続制が確立していた時代にですよ。

その追い出された長男の跡継ぎが住福で、見浦家の血筋は絶えて養子の子供が現在の継爾くん、彼のお爺さんの謙一さんにこの話を聞かされた。謙一さんは、祖父の弥三郎とは仲がよかったようで、今の家と田畑は、弥三郎に勧められて買ったのです。それまでは藤や谷のあばらやが住まいだったというから、当時としては思い切った能力主義だったのですね。

亀吉は大変な切れ者で、当時建設中だった国道広島益田線の小板通過には、県庁の役人と大論争を繰り広げたとか。その結果、国道は集落を縦断する形で建設された。それが旧国道191号線です。彼の論拠は、主要道路が集落を通らないのでは集落の発展はない、たとえ多少の寄り道になるとしても集落の中を通すべきだと。当時はまだ、交通の重要性が理解されていなかった時代にです。

それにつけても思うのは、毛利氏の本拠地だった吉田町のこと。鉄道の芸備線は町の中心をはるかに離れて通っているのです。初めて芸備線で三次まで言ったとき、吉田駅がないのを不思議に思いました。国鉄のバスには吉田駅があったのにね。きけば、鉄道が町の中心を通ることには最後まで反対の勢力があったとかで、そのおかげで吉田町は田舎町から発展することはありませんでした。

そんな時代に交通の重要性を理解していた亀吉は、強引に小板の集落を縦断する形に国道を通したのですから、先見の明があったのだと思うのです。

道は集落や田畑のほとりに曲がりくねって付いているもの、そう理解している住民は、田圃の真ん中を直線で道路を通した彼を殺してやると騒いだと聞いています。

しかし、そんな彼にも弱点がありました。理屈では県の役人には負けなかったが、文字が読めなかった。文盲だったのです。ですから、県から文書が来ると息子の弥三郎に読んでもらった。

ところが弥三郎は文章の要点だけ「なにになにだ」と省略する。亀吉じいさんはそれに腹が立ってもどうすることもできない。悔しくて悔しくて、それなら、と孫の弥七に勉強させたのです。弥三郎がだめなら弥七がいると。ですから、弥七が勉強している時は、どんなに多忙な時期でも特別あつかいだったと。

弥七のことは改めて記すことにして、亀吉がずば抜けた人材だったことは、伝聞でも明らか

ですが、それに比べて弥三郎は目立たぬ人だったといえます。私の知る弥三郎は、私たち悪童孫集団のイタズラを目を細めて「ほうほう」と笑いながら見ていた優しい優しい爺様でした。

昭和16年に帰郷して2年弱たった昭和18年の冬、81で亡くなったのです。私は、父母の死に水をとることは出来なかったのですが、彼の最後には立ち会うことが出来ました。

真っ白な見事なあごひげの小柄な爺様、今でも、その穏やかな顔が臉に浮かびます。そして、町内のいたるところで聞かされた逸話から、彼の人柄がほうふつと浮かび上がるのです。

その中の1つが次の話です。

ある年、広島のある旅館で弥三郎爺様が1夜の宿を求めたといえます。コート代わりに使い古した赤い毛布(赤ゲットといいましたね)をかぶって、「一晩泊めてもらえんかのー」と。

宿の女中さんはみすばらしい姿の爺様に「今夜は満室で部屋はないよ」と断りました。「あがいんこう、どが一な部屋でもええけー、なんとかしてつかーさいや(注：そんなことを言わないで、どんな部屋でもいいから、なんとかしてください)」と爺様。

そこで顔をよく見ると、悪い人間ではなさそう。「階段下の布団部屋でよかったら」と女中さん。

「えー、えー、それでえーけー。飯はあるかいのー(注：いい、いい、それでいいから。飯はありますか)」

「火を落としたけー、飯はないで(注：火を落としたから、飯はないよ)」

「そんなら風呂は御願ひできるかいのー(注：それなら風呂は御願ひできますか)」

「今人がはいっとるけー、空いたらゆうてあげるけー(注：今人が入っているので、空いたら言っておあげるから)」

さて、真夜中近く「おじーさん、風呂が空いたけー」と女中さんが呼びに来た。そして「風呂に入ったら、掃除をしてお湯を抜いておいて」と風呂場に案内してくれた。

あくる朝、「昨日は遅かったんで宿帳がまだだったんで書いてほしい。それから宿賃はいくらいくら」と女中さんがきたとか。爺様おもむろに胴巻きを引き出して、札束から1枚ぬいて「これで勘定してくれんさい。それからもう一晩厄介になられんかのー」といったよし。

赤ゲットの爺様が思いもかけず金持ちだったことに驚いた女中さん、帳場に飛んでいって番頭さんに「かくかくしかじか」。

番頭さん、「どこへ泊めたんなら?」「布団部屋」「すぐに部屋を変えてもらえ」とかなんとか。

前夜とは打って変わった扱いにムカッときた爺様。「お爺さん、お風呂に入ってください」と一番風呂を案内してきた女中さんの言葉に何食わぬ顔で「ハイハイ、今日は風呂が早いのですのー」と風呂にいったよし。

「女中さん、良い風呂でした」と声をかけられた女中さん、次のお客さんに「風呂が空きました、どうぞ」と声をかけたとか。

ところが、裸になって風呂場に入ったお客さんが驚いた。湯船にお湯が一滴もない。かんかん怒って帳場に怒鳴り込むお客さん、「この宿はお客に風邪を引かすのか!」と。

番頭さんにしかられた女中さん「お爺さん、なんちゅう悪さをしんさるんなら(注：なんという悪いことをなさるのですか)」と爺様に文句をいうと、爺様はすっとぼけた顔で「あんたー、夕べ、風呂が済んだら掃除をして、お湯を抜いておけといいんさったで、掃除もしときました、どこが間違いでしたかの?」と。

この話がこの地方で有名なのは、田舎者とバカにされていた人がずいぶん多かったせいなのでしょうね。

私が小坂に帰った年、昭和16年、大畠には林蔵さんとミカヨさんという2人の住み込みの

使用人がいました。

林蔵さんは40過ぎ位の少しばかり知能の遅れた、顔のケロイドがあって一見恐ろしそうに見えたのですが、気のやさしい親切な男、ただし仕事の前はきれなかった。(仕事のできないことを表現します) 何しろ牛が怖い、牛を扱う田仕事は又一さんとよぶ通いの男衆と、小学5年の私が動員されて田圃に入らせられる。仕事はできないが表裏のない本当にいい人だったな。私を呼ぶのに、「坊ちゃん」とは絶対に呼ばないで「哲弥さん、哲弥さん」と名前で呼んでくれた。乏しい知識を懸命に伝えようと努力してくれた。

ミカヨさんというのは、30後半の聾啞者、正規の教育を受けていないので、手話ではできないが、林蔵さんに輪をかけた正直もの。かわいがってもらったな、水屋(台所)と畑の世話、ただし、料理は下手だったな、春はゼンマイとワラビなどの山菜とり、空きは柴栗拾いやナバ(きのこ)採り、そんな山国のことを教えてもらった。手真似と声の調子、態度で意志が通じて、身障者と思ったことは一度もなかった。

小板に帰る前に住んでいた、三国の家の川向うに教育を受けた聾啞の青年がいて、時々彼が普通の大人のひとたちと手話で熱心に話しているのを見かけました。周りの人たちも変わりのない付き合いをしていた、そんな光景を見、母からはそれは当然のこととして教えられていたから、ミカヨさんにも差別感はありませんでした。何しろ私の知らないことを山ほど知っている、大先輩でしたから。

ある時、集落のおばあさんが話してくれた。大畠に世話になった人は多いんよ、と。食べるのに困ったら大畠にいく、子だくさんで大畠から学校(小学校だけど)にいった子供は、あそこと、あそこと、大人の人も少し問題があって働き口のない人も、給料は安いけれど食べさせてもらえると。

そんな爺様でしたから、孫には優しくかった。ずいぶん悪戯をしたのに、母方の祖父には叱られた記憶ばかりなのに、見浦の爺様には一度も叱られたことがなかった。今でも眼を細めて笑っていた顔が頭に浮かびます。でも、目先は見える人だったようで、見浦の爺さんに一泡吹かせてやろうと画策する人も多くて、どんな旨い話をしてもかからなかったとか。かえって裏をかかれて悔しがったとか、そんな話を何度も聞きました。

そのうちの一つ、隣部落の知恵者が集まって、見浦の爺に一泡吹かせてやろうと、相談をしたといいます。

何の話で引っかけるか。「あの爺様は頭が回るのは嘘はだめ。しかし、人間だけ一、眼のたわんことはあるで、そんなら、あの奥にある山と、この部落の見浦の田んぼと交換ちゅう話はどうかいの」

「そりゃーええで、山奥じゃけー誰も行って見たものはおらんし、境も丘から丘へ、っちゅうばかりで誰も知らんのだけー、かかるかもしれん。持っとるだけで一文にもならん山と、5反(50アール)の田んぼの交換はおもしろいで。」

その話を持ち込まれた爺様は「あの田んぼは小板から4キロもあるんで、作るのが大儀になっとったあんたらが、ええのなら換えてもええで」と承諾したとか。

知恵者共は、見浦の爺様も人間じゃー、このたびは見えなんだの一、と大喜びだったとか。ところが、爺様、役場を訪ね、登記所を訪ね、隣接地の地主に境界を教えてもらって、息子の弥七にコンパスと平板と三脚をそろえさせて、人の背丈より高い熊笹を踏み分けて測量に入ったとか。

測量して驚いた。その山から流れ出る小川が小板の小川より大きい。出てきた測量の結果は2

60ヘクタール。見浦の爺様も驚いたが、隣部落の知恵者が驚いた。引っかけたと思ったのが逆で、前代未聞のあほな取引。あんなに広いと思わなかったので、この話は白紙に、といったと言わなかったとか。悪意で始まったこの取引、爺様は一步もひかなかった。爾来、このあたりでは見浦の爺様には手を出すな、が教訓として定着したと聞きました。

後年、神楽団で世襲制度に反対してストライキを、部落の役員会でのタダ酒の禁止を、など、若いくせに一言多い私に対して、「早いうちに芽を摘んでおかなくては」と長老会議が開かれ、年功序列に従わないからと村八分になったのは、前段に祖父の事件があったからでしょう。何しろ見浦は一代おきに同じような人間が現れるという、風説が定着していましたから。

しかし、先祖の話は見ようによっては面白い。そして参考になるものです。あなたも先祖の話を探る旅に出ませんか？そして子供や孫に話してみませんか？

2009.1.1 見浦哲弥

誰も知らない可部線ないしょ話(2009/2/23)

この話は可部線建設が加計駅で止まって延線工事が5年も6年も中断した時の話です。覚えている人は、ああそんなこともあったね、とおっしゃるはずですが、それが後年可部線が廃線になる大きな原因になろうとは、当時は誰も思いもしませんでした。当事者は口を閉ざし、数少ない真実を知る人はこの世を去りました。でもエゴは身を滅ぼすという見本のような事実を今日は話してみましようか。

戸河内の町長選挙で6票差で当落が分かれたことがあったのです。当選したのは革新派とみられた丸山鶴逸さん、私より20歳の先輩。彼の初めての町議選の時、小板の若者たちの集まりに、当時問題になっていた横郷林道建設不正の話をしてもらいに来ていただいたときからですから、長いおつきあいでした。そんな関係で、及ばずながら、その町長選挙の応援に参加したのです。

当落が判明した翌日は大変な騒ぎで、誰もが俺の一票が当選を決めたと自慢する、前代未聞の選挙でした。6票差ですから、3人が投票を変えていたら結果は逆になります。そんな僅差の勝利でした。

ところが選挙後1週間もしないうちに、鶴逸さんから会いたいと連絡がありました。当選後のあいさつ回りで忙しいはずの彼が黒子の私に用事とは何かと思いましたが、役場の近くにあった”けやき”という小さな喫茶軽食のお店が指定の場所でした。あとから来られた丸山さんは、角のボックス席を指定して、周りを確認して話はじめられました。その内容は1町民の私には衝撃的な町議会の話でした。

「見浦くんや、わしゃ可部線を戸河内まで開通させるのが公約じゃけえ、選挙の後、すぐ岡山の国鉄の管理局へいったんよ。そこで早期着工を陳情したら、局長さんが”来んさるところが違がやーせんかの”と笑うんよ。わしゃー、何をいわれとるんかわからんでの、何度もきいたらの、」と話始められたのです。

実は国鉄は可部線の延長は規定の事実として実施しようとしたのです。ところが敷設の路線で苦情が出て中止になっていると、そしてその苦情はお宅の議会からですよと、しかも議長さんはじめ議員さんの連名で、われわれの要求が通らなければ鉄道は敷設させないと、陳情されているのです。と

驚いた丸山さんが詳しく訊ねると、加計から殿賀を通過して上殿、戸河内への路線と、上殿から少し曲がって筒賀の中心を通過して戸河内への路線と2案があったのだといいます。山間の小さな村落でも鉄道が通れば通勤通学の便利が良くなる、おまけに土曜日、日曜日の観光にも力になる、そんな思いで筒賀村が鉄道誘致をと願ったのは当然過ぎるほど当然の話です。筒賀を通過しても時間的にも2〜3分多くかかるだけ、それで村の中心に駅舎ができる、しかも上殿にも駅は作るという計画ですから、ぜひそうしてあげてと協力するのが隣村としての友情だろうと思うのですが、実際は筒賀に線路が回るのなら建設は反対、と戸河内議会が決議したというのですから、非常識この上ありません。

ようやく事情を理解した丸山町長は、平身低頭議会の理不尽をわびて、その足で筒賀村役場に出向いたとか。

当時筒賀村は吉原村長、後年、安佐農協の監事として同席する機会に恵まれて、その折の話を聞かせていただきましたが、汗顔とはまさにこのことでして、恥ずかしくて。

私も戸河内町民の一人として申し訳ないと頭を下げるだけでした。

吉原先生曰く、丸山さんは筒賀村の役場に來られて、手をついて謝られた。それで水に流したのよと。

そして、「筒賀村にも駅を作るよう、全力を挙げるので、可部線延長に協力してもらえないか」と丸山町長に頼まれたと、筒賀村にも駅舎ができとなれば、村民も鉄道の恩恵にあずかることができる。過去は水に流して、鉄道の早期着工に協力して努力しようと、約束したんだと話されたのです。

しかし、丸山町長の話はこの後がありまして、路線が確定して筒賀村経由が決まった時、「議長がのー”戸河内のメンツがつぶれた”と町長室にきて男泣きをしたのよ、見浦君はどう思う？」とあきれ顔で話された。あまりの非常識と、このような人物に集落のボスというだけで地方政治を任せる、選挙民への憤りを私にぶつけられた、そんな思いで聞いたものです。

国鉄は政治線と呼ばれる鉄道の新設と、国労・勤労などとよばれた労働組合の経済原則を無視した権利の主張、待遇の改善で、民鉄と呼ばれた私鉄グループが黒字経営なのに、最大規模の国鉄は赤字続き、税金の垂れ流しという批判が起き始めていました。

政治家も官僚もどうにかしないと、国鉄は破滅、ひいては国家財産の破たんにつながりかねないと、その対策に奔走していました。その最初が国鉄の分割民営化でした。その次に来たものが採算の取れない政治線建設の中止でした。

そして三段峡駅から板が谷の真下まで掘り進められていたトンネルも、松原から150m掘られた斜坑も建設中止で無駄になりました。

ここに糞詰まり線と酷評される経済価値の低い鉄道が完成したのです。

さらに進められたのが、採算の取れない赤字路線の廃止、特に将来性のない盲腸線と呼ばれる路線は真っ先に対象となりました。

さらに沿線住民の減少と経済優先の社会は、可部線廃止を時間の問題にしまいました。

建設から約30年、廃止が具体的になり、赤字縮小のため利用者の増大が存続の条件になりました。それから泥縄の存続運動、鉄道の必要を説く声は大きくても、反省の声は聞こえませんでした。あの時の議員さんで生き残っていた人は何人も居たのに。

鉄道問題と同時に町村合併の問題が起きました。

可部線建設の裏事情に通じていた野上さんが町長選に立候補しました。相手候補は鉄道の筒賀村の通過に反対した議員。もちろん、野上さんを支持しました。

立候補で挨拶に來られた彼に、「この票は4票だけど、全部あなたに入れるけえ、周りの町村と仲良くして」というと、「仲良くすりゃ、ええんじやの」と裏の裏まで知り抜いている彼らしい返事でした。

当選した野上さんが指揮する合併前提の町運営は、見ていて胸が痛くなるような他町村に対する気遣いでした。彼の努力で戸河内町民は農協合併の時のような、蚊帳の外に出されて、どこ

かに入れてくれとお願いしなければならないという悲しい思いはしなくて済みました。
町長在任中、最愛の奥様を亡くした彼は、町村合併が成立して間もなく、精根尽きはてたように亡くなりました。
現在は旧戸河内役場が新安芸太田町の役場、合併前に危惧した問題はどこにも見えません。老体にむちうって全力投球された野上さんは戸河内町の数少ないすぐれた人材でした。

さて、存続運動に夢中の地元民に国鉄が出した条件は、赤字額の削減でした。そのために要求されたのは最低乗車人員の確保でした。沿線の地元民は設定された利用客の増大に懸命になりましたが、沿線住民の減少と、自家用車の普及という現実には逆らうべくもなく、目標に届かずに廃止が決定しました。
最後の年、廃線を惜しむ名残客で三段峡への観光客は膨れ上がり、ホテル、旅館、土産物屋、etcは大いににぎわいました。ローソクの最後の火が燃え上がるように。
満席だったお別れ列車が走った翌日、三段峡線はひっそりと死んでいきました。

鉄道の路線も駅舎もそれぞれの自治体に贈与されて処理を待っていました。ところが目先だけの町会議員が数人、復活を叫んで運動を始めました。経済的な問題で廃止されたのに、その解決策なしに署名運動で圧力をかけて復活しようと、駄々っ子の悪あがきのような運動を始めたのです。おまけに不成功の時には返金すると約束して募金まで集め始めたのです。

町会の選挙の折、立候補の知人が訪ねてきました。鉄道問題を取り上げるなら、建設の時からいきさつを調べないといけないよ。表面だけの現象で判断すると大きな間違いをするよ。その気持ちがあれば、私の知っていることは話してあげる、とアドバイスをしたのですが、又の機会に聞くよ、と上っ面の運動に関与して暴走、先輩として残念の一字でした。

現在は鉄路は撤去され、駅舎は改築されてバスの停留所、役場の前の路線は大きな駐車場として利用されています。しかし、延々と続く路盤と橋梁は、ありし日の可部線を思い起こさせます。はからずも立ち会うことになった鉄道建設の裏話、思い返す度に悲痛な面持ちで語った丸山鶴逸さんの温顔を思い浮かべるのです。

今日は、あなたの知らない過去からの報告を聞いていただきました。

2009年2月23日 見浦 哲弥

裏話 小さな農協の監事の小さい声(2009/2/23)

ひよんなきっかけから農協の役員に選ばれて、かれこれ15年近く農協の経営に参画しました。内部にはいって業務が理解できるにつれ、矛盾や改良すべき点が目につくようになりました。理事時代、組合長をリコールして交代させたこともあります。今日はその話ではなく、1期務めた監事の時の裏話を聞いてください。

農協の役員は勘弁してくださいと辞任した私に、今度は監事をやれ、と依頼がきました。もうやらないと言ったのに、どういふことや、と聞くと、役員選考委員会で決まったんや、是非とも引き受けろと。

農協の役員は3年ごとに総代会の選挙で組合員の中から選ぶ建前になっているのですが、実際には旧農協（戸河内農協も戸河内、松原、上殿、寺領、二郷の合併農協）の地区から役員選考委員が選出されて、この地区からは誰と誰を出したいと推薦する。その結果を地区に持ち帰って承諾を得て総会にかけろ。総会では選考委員会の提出した名簿を承認する、という手順になっていました。

ちなみに松原地区は理事2名、監事1名。

私は4期理事を務めましたから12年務めたことになります。他の方の半ば名誉職？と違って、牧場の仕事で目が回る忙しさ、その中で月一の役員会は苦痛でした。

中島先生の言葉に人生をかけて生きてきた私は、在任中に「次期組合長は君だから身边をきれいに」と忠告され、そんな話が事実になったら一大事と理事を辞任し、農協の出資金の名義も息子に書き換えて安心していた矢先だったから驚いた。

「名義も息子にして農協から手を引いた、と何度も貴方に話したのに」と怒っても「蛙に小便」で「今から選考委員が集まって代人を決める時間がない」と取り合ってくれない。田舎では役員という名誉職、それが嫌だという奴の気がしれないと。

泣く子と地頭には勝てないと、新しく出資をして監事に就任、後に責任問題に連座させられて賠償までさせられたのですから、まさに踏んだり蹴ったり、でもその話は又の機会にして、今日はどこでもあった地元農協の見えない裏話です。

さて、監査に就任しました。ところが理事仕事は12年も務めれば経験で大概の業務が理解できますが、監事は素人、勉強もしましたし、経験者のお宅を訪問して話を聞きました。

ところが現実にはどこから手をつければよいか、誰も的確な指示はしてくれない。最年長の元郵便局長氏は算盤を出して伝票の再計算に血道をあげる始末、そんなことは違うのではと思ったのだが、相手が先輩では。

ならば私の道を行くかと、監査会担当の議長に貸付金の帳簿を見たいと要求すると、別室でと案内された部屋の机の上に帳簿が山積みされていました。しまった、これを全部調べるのかと後悔しましたがあとには引けない。関係書類も見たいので、というと、部外秘ですので、と念を押されて借用書までならべられた時には、監査役の権限の大きさと責任の重さに心臓が締め付けられる思いでした。

もちろん、私も農協から融資を受けていましたから、自分の書類もその中に含まれていました。

帳簿の項目ごとに関係書類を照合していくと、借用書の自署捺印の欄の署名の筆跡が同じものが何通もありました。窓口の職員が代書したのでしょうか。これは違法です。

利子の支払がなされていないのが何通か。これはどんな理由で遅れたのか、督促の現状はと課長の説明を要求。目下厳しく支払を請求中で、最後は裁判まで考えている、疑問の項目には当然の処置をとっていると説明を受けるなど、監査の業務にも少しは慣れてこの方式で受け持ちの仕事をこなそうと決めた矢先、とんでもない不正処理の項目が目にとまったのです。

それは、貸付原簿のある項目でした。通常、貸付金は毎年一定の金額で減少していく。これが原則です。元金の返済があるためです。ところがこの項目の貸付金は減少どころか、毎年増えている。しかも小さな金額ではない。この項目の借用書を探し出して確認すると、私の友人、町の有力者で、農協の中でもかつては有力な役員だった。

しかも私の考え方に理解を示して協力してくれた友人。

何度も何度も確認をして事実を理解したときは、頭の中が真っ白になりましたね。農協でも資金関係の情報は関係者以外に漏れてはならないとの鉄則があります。めったなことは口に出せない、そこで担当している金融の課長を呼んで、この貸付の詳細な情報を要求したのです。

やってきた課長が言いづらそうに話した全容は次の通りでした。

数年前から元金の返済が止まったこと、その後利息の支払いもなくなったこと、相手が農協でも有力な役員だったこともあり、対応に苦慮して監査時に監事にも相談したこと、しかし明確な指示がなく、やむをえずこのような違法な帳簿処理で粉飾したこと、等等を報告してくれたのです。

そういえば、組合長と専務が「誰さんはしわい（注：苦しい）で」と話をしているのを聞いたことがありました。この件は根が深く誰もが避けていた案件だったのです。

勘ぐれば、こじれてしまったこの件を解決するには、正論ばかり主張する見浦を使おうと考えていた人がいたかも。

その時には気がつかなかったのですが、以後の経過はそう教えていました。

難問を先送りした前任の監事には腹が立ちましたが、現監事の中では私がずば抜けて長い役員経験者、これは一人で担ぐしかないなと結論を出しました。そこで文章にして同僚の承認を得て理事会の結論にする方法を取ることにしました。

こう書くと、迷いもなく正しい決断をして実行する正義漢見浦と思われるかも知れませんが、とんでもない。

私も農協を通じて国から牧場建設の資金の貸付を受けていましたし、運転資金として、餌代、子牛の貸付など、直接、間接に農協からの借入金がかなりの額になっていました。

私は見浦家の没落を体験して、借金が嫌いでした。ところが自己資金の都合がつく範囲で小さく小さくまとまろうとする考えに、農協の専務さんが「今の時代に事業をしようとする他人の資本も考えないと成り立たない」と意見をされたことがあるのです。ところが資本論をはじめとして経済の知識を少しはかじっていた私は、その対極にある恐ろしさも知っていました。友人の話は即、明日の私かもしれない。その恐怖心と責任感との間を何度往復したことか。あなたは笑うかも知れませんが、小心者にはつらい辛い決断だったのです。

監事に就任したら最初の集まりで監事のボス筆頭監事を互選します。幸い F さんというベテラ

ンの先輩がいたので、全員一致で彼を選んだのですが就任間もなく病を得て亡くなられ、後任はということになりました。前歴からういうと、見浦さん、あなたが筆頭幹事という意見を押さえて、年長のＳさんにボスをお願いしました。その関係でＳさんは私の意見を尊重してくださいました。悪いけれどこれを利用させてもらおう、そう思ったのです。

そこで、理事会に出す監査報告書は各自が分担した分野を書く、そして総評を筆頭幹事が書くようにと提案して了承してもらったのです。私の報告がうやむやになることを防ぐためには報告書がそのまま理事会に届くことが必要でした。

大口の不正処理の貸付金があること、その貸付金は償還が止まっていて利息の支払いもここ数年なされていないこと、その借受人が当農協の役員であった町の有力者であること。数字と実名を記載した報告書を書いたのです。

しかし、私も農協から融資を受けている身、経済活動の世界では明日は何が起きても不思議はない、努力をしても彼に起きたことは私にも起きる、わが手でわが首に縄をかけ、絞首台に登るのと同じことではないか。それは恐怖心との戦いでした。

かろうじて自分を失わずに書いた報告書はそのまま理事会に届きました。はじめは黙々と読んでいた理事さん達は、やがて憤然として声をあげました。「組合長、これは事実なのか」、「事実です。」と答えた組合長に安堵の色が見えたように感じたのは、私の思い過ごしだったのでしょうか。前任の監事だった理事さんが口をつぐむなかで、早急に厳正な処理をと理事会の結論が出るのに時間はかかりませんでした。

その後の役員会で、この問題の処理が済んだとだけ報告がありました。聞こえてきた噂は、彼の会社が倒産したこと、彼が病を得て亡くなられたことでした。

私には人の上に立つとか、判断を下す立場などの役割は重すぎて引き受けたくありません。でも人間には逃げられない時もある。この出来事は、そんな辛い重い決断の出来事でした。

後に安佐農協との合併が成立して、新農協の滝中組合長が旧戸河内農協の役員との懇談会にやってきました。その席上「実は私は6農協（安佐、戸河内、筒賀、加計、芸北、豊平）の中で戸河内農協の経理が一番悪いと予測していたのです。ところが合併して内容を精査して驚きました。一番きれいだったのです。」と話されたのです。末席で聞いていた私は、そのときはじめてあの決断は正しかったのだと思ったのです。

今日は私の人生の中で忘れられない出来事の話、危うく逃げ出すところだった怖い怖い思い出を聞いてもらいました。見浦さんも人の子と軽蔑しましたか？でもこんな辛い決断は二度とは起きてほしくありませんね。

2009/2/23 見浦 哲弥

作戦戦略 院長先生のアドバイス(2009/8/13)

和牛の飼育をした人なら誰でも、ご存じの病気があります。子牛の白痢症、生後10日から30日ぐらいに発症する下痢で、特徴は便が真っ白になる、軟便から、水様便になり、最後は血便になって死亡する。

一農家で飼養する牛が1-2頭で、年間子牛が1頭か2頭しか生まれない規模のときはほとんど発病しない、あまり気にならない病気だったのですが、多頭化するにつれて多発するようになり、見浦牧場のように年間50頭以上も生まれると全頭発症する重要な病気になったのです。

もう30年あまり前になりますか、西日本の和牛農家の皆さんが、近くにある「いこいの村広島」というホテルで京大の宮崎先生を招いて研修会を開いたことがあります。その折、「見浦さんの牧場では、子牛の白痢病はどのくらいの割合で発症しますか？」と質問されました。「100パーセント」とお答えしたら、どっと笑われました。

まだその時代には、放牧の形式で子牛の多頭生産をしている農家はなかったのです。

しかし、1戸あたりの牛の飼養数が増えるにつれ、発症も増えて問題になりました。ですが、当時は適切な治療法は確立していなかったのです。

しかし、第二次世界大戦でチャーチル首相の命を救った抗生物質は畜産の世界でも威力を発揮していました。

白痢症も最初は獣医さんが処方してくれたオーレオマイシンオブレットの錠剤1/2を飲ませるだけで快復。抗生物質の威力に白痢症恐れるに足らずとおもったのですが、それからが大変でした。

何頭かの治療をするうち、薬の効き目が落ち始めたのです。1/2錠が1錠になり、3日も連続投与しなければおさまらない。そのうちに他の薬剤と併用しなければならなくなりました。

獣医さんがテラマイシンを使ってみますかと提案。治るものなら何でもテラマイシンの筋肉注射に切り替えたのです。効果抜群、たちまち白い下痢便が健康便に変化し、いい抗生物質にあたったと喜んだのですが、これも前回と同じように効果が落ち始めたのです。

それでも4年ぐらいは効果があつたのですが、ついには他の抗生剤に替えなくてはならなくなりました。これがこ私たちが「耐性菌の発生」と呼ばれる抗生物質の問題に出会った最初でした。

さて、それからは次々と効果のある抗生剤を探し回りました。ところが最初は効果があってもすぐ効かなくなる。しかも1-2年ぐらいでね。

もちろん問題点が見えたのですから、猛勉強を始めました。ところが抗生物質の耐性菌問題は人間の病気でも解決されていない大問題、答えなどあるわけがありません。

そのうちに、使える抗生物質（もちろん畜産用ですが）あらかた使ってしまって、獣医さんに「見浦さん、こんなことをしていたら使う薬はなくなるよ」と忠告される始末。

もっとも勉強で少しは知識を得ていましたから、効かなくなったテラマイシンの使用だけは厳禁していました。

テラマイシンの使用を厳禁していた理由は、細菌は最初は薬剤に耐性を持っていないはず、連

用するから耐性を持つ、抗生物質が微量しか存在しない自然界では耐性を持つ細菌より耐性のない本来の細菌のほうが生存競争で勝つはず、それならば本来の細菌が生存競争で勝ち残るのに十分な期間を置けば、細菌の耐性はなくなるに違いない、こう思ったのです。それを効果の無くなったテラマイシンで確認しようと思ったのです。

10年が過ぎました。手に入る抗生物質もなくなりました。再びテラマイシンに帰るしか方法がなくなりました。

でも、ただ再使用するのでは能がない、何かプラスになる考えはないか、切れの悪い頭で懸命に考えました。ちょうどそのころ、傷の手当てで戸河内病院に出かけることがあったのです。

外科は院長の繁本先生、手当てを受けながら考えていたことが口に出ました。

「先生は治療をされるとき、細菌をどう思って対応されているのですか？」と聞いたのです。先生の答えは私の想像の他でした。

「細菌とは知恵比べなんだ。どうやって相手の裏をかいてやっつけるか。細菌もこちらの手の内を読んで抵抗してくるからな。薬の種類、投薬の量、回数、併用する薬、等々、人間と細菌の戦争なんだよ。」、場数を踏んでこられた先生らしい意見でした。

でも、この話は私の懸案に光をさしてくれました。白痢症の治療も細菌との戦争なんだ。それなら奴さんが混乱するようなことを考えればよいのではないか。

テラマイシンは細菌の分裂を防ぐ抗生物質、それにもう一つの抗菌剤を加えれば、大腸菌くん、少しは混乱するのではないか。とはいえ、こちらの腹を見透かされて両方の薬に耐性を持たれてはやぶへび、細菌への効き方が異質の抗菌剤なら、大腸菌くんも悲鳴をあげるのではないか、おまけに乳酸菌のように、大腸菌の繁殖を邪魔する生菌（生きた菌、腸内で繁殖して大腸菌が増える邪魔をする）を加えたら、と作戦計画が浮かんできたのです。

今、思い返しても、頭がさえていましたね。

いろいろ考えた結果、殺菌剤には化学殺菌剤のサルファジメトキシシンを選びました。生菌剤は乳酸菌製剤。この3種を配合して白痢症の子牛に投与しました。ところが効果がいまいち。

でも、諦めませんでした。知恵比べなんだとの院長先生の言葉を思い返して、生菌剤を替えることにしたのです。ちょうど薬屋さんから、子牛の下痢用に開発したからとテスト薬がおいてあった。それが枯草菌の製剤でした。乳酸菌の代わりにその枯草菌の製剤を入れた3種混合の薬を投与したのです。子牛の症状が劇的に快方に向かった時はうれしかったですね。

家内の春さんが、「まぐれよー」と酷評しましたが、以来20年余、この方式で治療が成功してきました。ただし、ウイルス風邪の併症のときは、肺炎を発症することが多くて、別途に肺炎治療が必要ですが、これで見浦牧場では白痢症の対策が確立したのです。

確認のため、獣医さんの意見を聞いて回りました。ところがたとえ効き目があるにしても、投薬方法が間違いという意見が多かった。なにしろ生きた菌の生菌剤と、菌を殺す殺菌剤とを一緒に水に溶かして投与するというのですから非常識です。殺菌剤と生菌剤は時間をおいて別々に投与すべきという意見が大勢でした。常識的に考えればその通り、さらばと実験をしました。各々の薬量、投薬方法、ありがたいことに実験動物には不自由しません。試される牛は大変だったと思います。

その結果が、子牛の体重25－30kgに対し、

- ・テラマイシン注射薬 5 cc
- ・ジメトキシシン 1-1.5 g
- ・ミノトール（枯草菌製剤） 20g

を 150-200cc の水に溶いて飲ませるのが最良という答えが出たのです。

発症の初期なら 3 日、泥状便以降なら 4 日投与するという処方では白痢症の治療が 20 数年続いているのです。

もっとも、サルファ剤にも耐性が出ますので、ダイメトンなど、形の違う製剤に代えて使うなど努力はしていますが、この長い時間効果が持続していることは、見浦牧場の大きな財産になりました。

現在は世の中が進歩していて、それぞれの専門家が高い技術を誇っています。私たちのような素人が立ち入られる分野ではない、餅は餅屋にまかせろ、は現代の常識ですが、案外な見落としと隙間はあるのです。地道な観察と発想は、このような思いもかけない新技術を発見することもあるのです。

われわれの世界はまぐれあたりで成功するような安易な世界ではありませんが、今日の報告のような出来事は案外多いのでは？

この文章を読まれた貴方、一度自分の周りや考え方をじっくり見なおしてみませんか？大切なことや素晴らしい現象を見逃しているかもしれませんよ。

「ありゃー、まぐれじゃー」と否定する前に。

2009/8/13 見浦 哲弥

PS

この処方が白痢症に対して長期間にわたって効果を持続している理由については、いまだにはっきりしておりません。もし心当たりがある方がおられましたら、仮説でも結構ですので、是非情報をお寄せください。

代用教員(2008/9/2)

長い人生の出来事で忘れていたことが多々あります。今日はその中の1つの話を聞いてください。

先日、内孫二人を病院に連れていくことになりました。息子は仕事で手が離せず、応援として嫁のお供で私は孫の監視役。

病院は20キロ離れた雄鹿原病院。この地方では60キロ以内の小児科は雄鹿原病院の吉見先生のみ。子供が激減したのですから当然です。

先生は私より10歳ぐらい先輩だったと記憶しているのですが、まだお元気で、見浦家はことあるごとに雄鹿原病院。私も子供も孫も3代にわたってお世話になった、ホームドクターのような関係の先生です。

気さくな先生で、人間性が素晴らしい。身障者の女性を愛されて、大病院院長の父君の反対を押し切って結婚、地方の病院で障害患者のためにつくされた、聞こえてくるのは暖かい話だけ、その先生との会話からの報告です。

「先生、お元気でなによりです。」ここしばらくご無沙汰でしたから、お歳の割にお元気な先生に、お世辞抜きのごあいさつを申し上げると、「2年前に退職したのが、医師不足でまた働いています」と言われました。

先生はしばらく仕事をされた後、思い出したように「見浦さん、確か、代用教員をされた見浦さんですね」と聞かれたのです。

私は小学校しか出ていません。もちろん教員資格はありません。学校で働いたこともありません。先生は誰かと間違えられたのだとそう思ったのです。

が、思い出したのです。あの話だなと。

あれは、小坂に松原小学校小坂分校があったころ、ダム工事関係のお子さんはもういませんでしたから、昭和35年か6年か。そんな頃だと記憶しているのですが、当時小坂分校の藤戸先生から依頼があったのです。

先生は文科系で、理科工作は全くの苦手、冬の間だけその授業を受け持ってもらえないか、子供たちの貴重な時間を浪費するのはみていられないからと。

春から秋まで道路が通行可能な時は、本校から専門の教師が通ってきて授業をしていました。ところが交通が途絶する冬の間は先生が小坂通勤するのは不可能に近い。もちろん、全く除雪がされなかった時代とは違って、何度かは交通可能になるのですが、吹雪が始まると1週間も2週間も除雪ができなくて交通途絶。藤戸先生夫妻は教員住宅に居住されていて、女子の家庭科は家内が受け持つので何とかかなりそうだが、男子の理科工作、これだけはどうにもならない。見浦さんは電気の資格をお持ちとか、その知識を子供たちに伝えてもらうわけにはいかないか？

私の持っている資格は、電気事業主任技術者の3種と2種、ちなみに3種は工業高校電気通信科卒業の資格、2種は高等工業電気科卒業の資格です。

もともと、数学が好きだった私が、小坂脱出のため、6年かけて独学して、ようやく手にした

免状でしたが、家を守れとの父の命令で忘れようと努力していた学問。それを役立ててほしいと依頼があったのです。

藤戸先生の熱心な頼みもさることながら、子供たちの時間が無駄になる、という言葉は説得力がありました。自分の独学を振り返ると時間を惜しんで勉強した若かりし日のこと、少年の頭脳にとって、その時間がどんなに貴重であるかを知っている私は、拒絶する勇気がありませんでした。

さて、私のようなものでよければ、と承知して、条件を出しました。理科工作の範囲であれば、教科書にない問題を教えてもよろしいかと。先生曰く、時間が無駄になるのが怖くての考えだから、貴方の考えで授業をして子供のためになると思う方法で授業してください。ならば、と考えましたね。子供たちが興味をもって、しかも将来に少しは役立つ教材はないかと。しかも教科書から離れてもよいとお墨付きをもらったのだから、これを100パーセント利用しない手はないと。

当時の小坂は農業機械が普及し始めた初期、モミすりや脱穀（稲扱ぎ）が機械化され、子供たちの身近に農業機械を見る機会が多くなっていたものの、大人たちが大切に、難しそうに取り扱う、子供たちが悪戯でもしようものなら大目玉、子供の好奇心が入り込めない聖域でした。どんな風になっていて、どうやったら回るのか、興味津津の世界でした。10年ほど前の私もそんな事が知りたかったな、そう考えたのです。

ちょうど、三菱の空冷の農業エンジンの手持ちがありました。戸河内にあった吉尾農機店から買った、2.5馬力の小型エンジンが。中古の機械でしたので、何度も分解して構造は知りぬいている。これを教材にしようと思ったのです。

根雪が降って、授業が始まりました。教卓の上に乗せたエンジンを前にして、子供たちに「冬の間、藤戸先生から理科の時間を受け持っていてほしいと頼まれました。私は専門が電気工学ですが、子供のころエンジンが回るのが面白くて大変興味を持ちました。そこで、この時間を使って、みなさんにエンジンを教えたいと思います。エンジンが回る仕組みはもちろん、中がどうなっているのか、どんな部品がどんな役割をしているのか、一緒に勉強していきたいと思います。」と。

教材にしたエンジンは、4サイクルの単気筒の空冷。種類や仕組みを黒板で説明する間は、まあ授業だから聞くかという態度だった生徒も、授業が進んで、分解が始まり、部品を前にして仕組みと役割の説明がはじまるとだんだん本気になりました。複雑な機械も分解した部品を1つ1つ手にとって説明を受ければ、誰もがそれなりに理解できる部品でした。しかし、スパナとドライバーで次々と今まで見えなかった機械の心臓部が出てくる。火花を飛ばすプラグもよく見るとその構造がそれぞれ意味を持っている。その電気を起こす仕組みは、磁石と細い銅線を巻いたコイル。それで電気が起きる。次々と登場する新知識。子供たちの大部分は本気になりましたね。

1月と2月と冬じゅうかかった授業も、分解と説明が済んで、テーブルの上に部品が並べられました。今度はその組み立て。子供たちの目は「ほんまに、しゃーないんかのー（大丈夫なのか）」そう言っていました。実は私も組み立ててうまく回らなかったらどうしよう、内心はどき

どきものでしたね。

授業の目的が修理を教えるのではなくて、関心を持ってもらうことでしたから、組み立ては確か2時限か3時限で完了したと記憶しています。そして、いよいよ試運転。”子供たちが注目している。なんとかうまく回って”と心の中では祈っていました。

ところが当人が緊張しているものだから、エンジンも不調。最初はプルプルでおしまい。代用教員の先生が教壇で震えてりゃ世話がない。神様仏様と願った2回目にエンジンに命が蘇ってブーンと回り始めた時は、私のほうが感激しちゃって生徒の顔を見るのを忘れたのですよ。でも授業が終了してお別れのあいさつをしたとき、彼らの態度は違っていた。そんな感触でしたね。

卒業式の日、畑で仕事をしていたら、学生服姿の上級生4人と出会いました。「卒業おめでとう」という私に「ありがとうございました」と答える彼らの態度が先生に対するそれでした。そう思ったのは、私のうぬぼれでしたか。

それから何年かして、餅ノ木部落の生徒のお父さんに会いました。開口一番、「おい、見浦君。うちの子に何を教えたのかい。君が教えた生徒が4人も自動車の整備工になったぞ」と笑いながら話して行きました。嬉しそうにね。

50年あまりの歳月の末、思いもかけず、吉見先生の口からでたこの話は、どうして先生に伝わったのかしばらく悩みました。一般に学校の先生とお医者さんがこんなことを話し合う機会が多いとはおもえませんが、藤戸先生が退職されてから伝わったのなら理解ができます。藤戸先生は雄鹿原のお寺の出身、リタイアされてから住職になりました。土地のお寺さんとお医者さん、これなら接触する機会が多くて、こんな昔話が伝わっても不思議はない。こう結論を出したのです。

遠い遠い若かりし日の出来事、その一つがこんな形で蘇りました。まるで昨日の出来事のように。「人の心に住む」というささやかな私の願いが、こんな形で実現していたのかもしれないね。

2008/9/2 見浦 哲弥

「連載記事 中国山地」に願いをよせて (2008/4/19)

先日は私の文章に関心をお寄せいただき、有難うございました。読書家の先生が一時間もお読みいただいたとは驚きました。関心をお持ちいただいたことは光栄です。

私と先生との接点は、昭和39年11月か12月か、年の瀬が迫っていたと記憶しています。あれからほぼ20年ごとの「中国山地」の記事、私たちも興味を持って読ませていただきました。

先生も御承知のように、この地帯の激変ぶりは、ここに生活の基盤を置いて人生を賭けてきた私たちも驚嘆するほどの変わり方でした。しかし、その感じ方は外部からの見方とは大きな違いがあったはずです。それを両面から描いていただきましたかった。これがほぼ20年ごとに企画された3回の連載に対する私たちの不満でした。

第一回の取材には困難な時代の中でも明日に夢を持つ農民が描かれていました。もっとも大多数の農民は大変だ大変だと将来を模索していましたが、希望は感じられたのです。

しかし、二回目の「中国山地」では夢破れた農民や、無住になった集落の話が目につきました。その中で、私たちを取り上げていただいた記事には、身びいきながら明日へ懸命に生きる農民もいると紹介してありました。それはどん底を這いまわっていた私たちにとって、暖かい応援歌でした。でも全体として一回目に比べて後ろ向きで弔歌が聞こえてくるような、中国山地の没落が表現されていました。

そして三回目の連載は、途中で読む意欲を失ったのです。

マスコミの役割は、現実を正確に報道する、それが使命であり、存在理由であることはよく存じていますが、この複雑で込み入って、理解が難しくなった経済システムの中で、暗中模索、右往左往している農民に、これはこういうことなんだ、生産者の立場だけでなく、消費者のニーズにこたえてゆく、新しい時代が始まっているんだ。どこそこの農民はこんな理解をしている、このような対応で時代に挑戦している、等々、明日につながる報道、記事の作り方はできなかったのかと思うのです。

ただ、眼前に起きている現象をそのまま伝えるのなら、人間はいらない、コンピュータで十分。それはチャップリンのモダンタイムスの世界、すでに何十年も昔に指摘されていることです。現在のマスコミに期待するのは現実だけでなく、明日への希望とその考え方、それを少数ながら明日に歩き続けている人達がいる、中国山地の住民を通じて人間の夢を語ってほしかったのです。

生産者としての農民も消費者としての都会人も、大きくマスコミの影響力を受けている。私は、中国山地の人たちが新しい時代に歩き出す、応援歌を書いていただきましたかったのです。

難しいことだとは思いますが、50年に近い時間の中で3回も継続的に取材され連載された先見性をお持ちの中国新聞、最初の取材のときに20年ごとに繰り返したいとおっしゃっていた記者さんの約束が3回も果たされた勇気に、もうひとつ先見性という勇気を添えていただきたい、私はそう願っているのです。

時代は大きく変化して、外国からの資源の入手が困難になり始めました。

中国山地に放棄されているさまざまな資源も見直しが必要となるのも時間の問題になりました。外国とちがって不利な条件の中での再開発は人的資源の充実が前提条件です。若者の育成、これは大会社の問題ではなく、われわれの身近な問題なのだと理解しています。そのためには、地域に理解が深い中国新聞の人的、物的、知的財産は、必要不可欠の資源だと理解しています。

地方紙の雄として自他ともに認められている中国新聞、これから始まる困難な時代にその力を発揮されることを、心から願っているのです。

2008/4/19 見浦 哲弥

時間が飛ぶように消えてゆきます(2008/5/18)

父が人生を終えた年齢、79歳にあと2年になりました。健康に恵まれて忙しい毎日を過ごしてはいますが、時間の消えることの早さ、若い日々の頃には想像もしなかった時の流れです。私の家族は今の農村では珍しくなった3世代同居の大家族なのですが、その世代、世代で時間の流れが違っている、まさに異次元空間を共有しているかのような不思議な感覚です。

これが人生の長い時間の末に見ることができる不思議な世界なのだ、と思っています。この時間のあり方を、ほんのわずかでも若い日に予測し、理解できていたら、一度きりの人生の時間をもう少し効率的に使ったと思うのですが、これは老人の戯言です。

しかし、毎日トラクターや重機に乗車して作業しながら、友人たちが早くから仕事の第一線から離脱し、人生から立ち去ったことを思うと、私はずいぶんと幸運な星の元で生きたのかな、と考えることにしています。

20代の前半に三次で70歳を超したおじいさんに農業機械の指導を受けた時、その年で矍鑠（カクシャク）としている、とんでもない化け物だと思ったものです。今の私はその化け物に近付き始めているのかも知れません。

でも読書の量が減ったのは痛いですね。たとえば、かつては文芸春秋を3日で広告まで読み切ることができたのに、今は1カ月も2カ月もかかる。文字を追い、頭に絵を描く、それが2-3ページしか続かない。残念ですが、それが現状です。

読書だけではありません。若いころは機械の中身がどうなっているか、疑問を感じたら分解して確かめなくては落ち着かなくて、分解し、組み立て、青写真を見て、説明書を読んで、それでもわからないと専門書を探しに行く。もっとも私のことですから専門書といっても初歩の初歩でしたが。

それが、これほど疑問を持っても、ま、明日にしよう、ということになってしまいました。明日が少なくなったというのにね。

ですから、作業場には明日分解して修理して再生するはずの機械や部品が山積みになってしまいました。2007年12月、スクラップ屋さんに処分してもらいましたが、その一つ一つの疑問や思いつきを解決しないで処分する、一つの終わりを感じたものです。

私の時間が止まらないで終わりに突き進んでいく、人生は厳しいですね。二度とない人生が終わりに近づいてゆく、人はこんな時どう対応するのでしょうか。

宗教に救いを求める、趣味を追い求める、旅行をしてまだ見ぬ世界を見聞する、選択は個人の自由ですが、その数は無限にあるように思えます。でも、その一部でも満足するだけ追うのには時間が足りません。最後にはあれもこれもとに残した事柄の多くに悔いが残る、私はそんな気がするのです。

思いあがりかも知れませんが、それよりも一人でも多くの出会いを探す、心に暖かい思い出を残すほうが豊かに人生を終えることができると思っていますのです。

昨夜（2008年1月28日）一人の男性が訪ねてきました。家の前を走る大規模林道で雪の中で立ち往生したので助けてほしいと。今年は珍しく救援依頼がなくて安心していたのですが、深夜の作業が済んで寝ついたすぐのことで、さすがの私も参りました。

年の頃、60前後か、今から益田へ海釣りに行こうとして近道をして通行止めの表示を見逃したとか、話を聞いてみると、場所は刈尾山の吹きだまりの地点、「スコップを貸してくれ、自分で掘り出すから」というその人を雪道の怖さを知らない都会人と投げ出すには良心が許ませんでした。

身支度をして救援に行くことにしました。時刻は午前4時、場所は前述の熊の出没する地点、今年は前年がどんぐりの豊作だったので冬眠しているとは思うものの油断はできません。

本人はそんなに大げさにしなくてもと、不満げでしたね。

出かける前に、「初めに確認しておくけれども、約束してほしいことがある」というと、彼「金なら出すけえ、心配せんでくれ」と。

「金はいらん。わしゃ一、人に助けられたことがあるんよ。じゃけえ、困つとると助けを求められたらできれば助けることにしとる。もし、あんたがそんな時に出会ったら、一度でええけえ、助けてあげて。これが条件。」

「変なことをいいんさるの一。わかったけえ」「車が上がったとき、お礼じゃ一、金じゃ一いいんさんなよ。」

1キロほどの除雪されていない雪道を走って現地に到着してみると、案の定、吹きだまりのい雪の中にスタックして亀（車輪の下が雪が空転でなくなって車体の底が雪につかえて浮いている状態）になっている。

車の横を除雪してみると車輪の下は60センチもの雪、大仕事になりました。

60過ぎの運転手君は、さすがに事が片手間仕事ではないと真剣になりました。

ところが素人ではなすすべがありません。ただ眺めるだけ。車の向きを変えるにも道路上の雪は完全に除去しなくてはなりません。向きを変えて下りの今来たわだちに乗るためにも、助走の距離が必要です。笑いごとではありませんでしたね。

雪の夜中、一時間余りの悪戦苦闘の末、路面を掘りだしました。その狭い区間で滑りながら方向転換をしました。ところが来た道のわだちに乗るためには、さらに助走のための除雪が必要でした。

ようやく動けそうになったとき、彼は挨拶に来ました。「わだちに乗ったらとまらんけ一、お礼いっておきます。どうも有難う。」彼の態度が「金はあるけ一」と行った時とは変わっていました。

人生の垢が洗い流されて、本当の人間が見えてきた、そんな素直な態度でした。

へ一、人間ここまで変わることができるのか、と今度は私が感心したのです。

車が雪道にうまく乗り走り始めて、挨拶のクラクションを鳴らして暗闇に消えて行った時、疲労を忘れて充実感すら覚えたのです。

今年も大規模林道に小さなドラマがありました。

2008. 5. 18 見浦 哲弥

岡部先生(2008/8/22)

あれは見浦牧場と義弟の田尻の牧場に、それぞれが和牛を10頭余り飼っていた頃ですから昭和45年前後だと思います。

50歳くらいの紳士が訪ねてこられました。「牛が放してあるのを見たので、どんな考えで飼っているのか話を聞かせてほしい」と。

てっきり新聞社の記者さんだと思い込んだ私は、「取材はお断りしています。」と申し上げたのです。

実は新聞の取材では苦い思い出があったのです。

この地方は中国新聞のエリアで、数年前、中国山地という連載記事がありました。

どういう経緯で取材にこられたのか定かではありませんが、当時義弟の弘康夫婦と共同経営していた和興兄弟農園を取材され、記事になりました。

農業部門をすべて統合して月給制、原則時間から時間の労働、4人の協議による経営方針の決定など、文字だけ並べれば理想の経営ですが、現実はそんなに甘くはなく、厳しい毎日だったのです。

それがちょっとした心の食い違いから崩壊するのは一瞬でした。なにしろ14歳のときから働きづめの私と、農業高校で習った教科書の農業を信じ切っていた義弟では初めから無理な協業でした。

問題を抱えながらの和興農園の記事は好意的な記事となって新聞に掲載されました。しかし、1年もたたないうちに崩壊したのですから、私にとっては苦い教訓となったのです。

ですから、紳士が「どうして取材を断るのですか？」の問いに、「農業は1年や2年で答えがでる、そんな考えでは何もできないのです。絵に描いた絵空事は農業ではないと思うのです。20年か30年して、実績をお見せしながら、こうこうです、とお答えをするのが農業だと信じているのです。」と。

翌年、再び息子さんと来場されました。長野の岡部です、と名乗って。

なぜこんな山奥に再度おいでになったのですか、とお聞きすると、実は前年、お宅とお隣とを息子と2人で訪ねたのです。お隣では、農業はすべて農政の責任、農政はかくあるべきと、当時農村にまん延していた農民評論家の考えをきかされました。

ところがお宅では、農業は結果がすべて。実績を見せられないのに、夢を本物らしく話すのは戯言、本当の農民ではない、そう返事をされた。あちらこちらと日本の農村を歩いたが、そんな対応の農民は珍しかったので、詳しく聞いてみたいと再訪することにした」と。

そういえば、私の政治の師、前田睦男先生も同じことを言われたことがありました。「見浦は変わってるけーの」。

どうも私は変人のようですね。自分では普通の常識人だと信じているのですが。

閑話休題、先生は長野の人。若いときから農民教育に携わって、日本の農業普及員の制度を作ることに関係したこと、農林省の外郭団体に籍を置いて、農業の現場の調査報告をしていることを話されたのです。

しかし、ご自身のことは詳しく聞かせてはもらえませんでした。ですから40年あまりのお付き合いの中でも、先生は正体不明、が私の実感なのです。

ですが、変人見浦の話はよく聞いてくださいました。そして問題だと思われた点について、ご自身の見聞の中からその答えになる、さまざまな現場の話をしてくださいました。それが私という小さな世界の住人が井の中の蛙にならずにすんだ大きな力になったのです。

それからは、西日本を調査旅行される時は必ず立ち寄られました。愛用のぼろぼろのブルーバードに乗って。

あるとき、私が日本の農民は勤勉だから、と申し上げたら、次においでの際はたくさんの写真を持ってこられました。そしてその中の1枚を示して、「これをどう思いますか」と聞かれました。

その写真には牧草地や畑が延々とほらかな山並みまで続く石の牧柵(?)で囲まれている風景でした。

「これは、畑にあった石ころを拾って積み上げてできた石垣なのです。これを作ったのはイングランドの農民。農民はどの国でも勤勉が当たり前。勤勉だけでは競争にならないのでは。」耕して天にいたる、これ精なるや、これ貧なるや”、中国清朝海軍の提督が遠洋航海で瀬戸内海の島々を見ての感想の言葉だと聞きました。

世界に冠たる日本農民の勤勉と思い込んでいた私には衝撃でした。農民は何処でも勤勉は当たり前、それなら外国の農民にまさるためには何があるか、学習と新しい発想しかない、そう確信したのです。

もともと考えることが好きな私が情報集めに懸命になりました。読書は当然ですが、それぞれの専門家には年齢の上下は関係なく教えを請いました。そしてその情報を分析して組み立てなおして、家族の意見を聞きました。子供でも真理を突くこともありましてね。それがこの牧場で話しこむと面白い、考え方の切り口が違う、の原因なのですよ。

あるときはスイスの山岳酪農の写真を見せていただきました。私は、その1枚にくぎ付けになりました。出来上がった干し草を巨大な風呂敷に包んで、急斜面を車のある道路まで引き下ろしている写真でした。

少年時代、向深入と呼ばれた草刈り山から、干草を背負子(オイコと呼んでいました。)で背中に負って運びおろすつらい作業は、何か変わる方法はないかと思案したものです。上り下りの回数を少なくしようとたくさん背負うと膝がガクガクしましてね。却って疲労が大きくなる。ほどほどに背負うと、何回目かの急斜面の登りはものすごく疲れる。ずいぶん考えましたね。ふと気がついたのは冬に引くそり、あれが使えないか、さっそくテストしました。しかし雪がないので草山でそりをひく、急斜面でも無理がありました。それなら上の梶棒だけなら、とこれはうまくいきました。背中に負う何倍も積んで、二人で(一人は転覆防止のため側面に)斜面を駆け下る、ガクガクする膝に力を入れながら背負っており苦しさに比べると天国でした。ところが再び梶棒を担ぎあげるときは、背負子の何倍もの重量を持ち上げなくてはなりません。苦しかったですね。なんとか方法はないかと考えましたが、それ以上の知恵は出ませんでした。

ところがその写真では、大きな風呂敷に干し草を包んで引き下ろしている。これなら背負子の何倍も運べて担ぎあげるエネルギーも最小、まさに参ったの心境でした。以来、外国とか、異業種とか関係なく、役立ちそうな技術や方法は積極的に取り入れましたね。自分たちのエリア外の話でもしらないことは熱心に聞きました。本気で聞くと、相手の人も真剣になって、時には秘中の秘を話してくれる、そんなときは貧乏も忘れました。

ときたま機械の修理を依頼、そんなとき、サービスマンの人が、見浦さんに修理にいくと、仕事を休んで懸命に観察する、疑問をぶつける。教えないわけにはいかないし、教えれば次回は自分で挑戦する、「苦手じゃー」といいながら教えてくれました。日本という国は本当にいい国でした。

貴方はまだ覚えていますか、よど号ハイジャック事件を。赤軍派と呼ばれる過激派の連中が日航機を乗っ取って北朝鮮に逃げた話しです。

その時人質の乗客の身代わりになった政府高官が山村政務次官、その彼が農林大臣に就任したのです。

そして、「私は今の日本の農村の実態を知らない、誰か詳しく話せる人を探せ」と官僚に命じられた。そして岡部先生に白羽の矢が立てられた。

「農林省にきて大臣に農村の現場の実情をレクチャーしてくれるように」と指定の時間に大臣室に出頭すると「今日は岡部先生に勉強させていただくので一切の来客をお断りするように」と秘書官に命じられて、その日は一日中日本農業の現況と問題点についての話で費やされたと。

それから私の身边にも異変が起き始めました。

最初は農林省（今の農水省）課長さんが牧場を見たいと連絡がありました。牧場づくりでいろいろお世話になっているのですから断るわけにもいかずお受けしました。

おいでになったのは、山本さんという課長さん、驚いたのはお供の多さ、肝をつぶしました。岡山の農政局、県庁の畜産課、地方事務所、普及所、役場などなど10台余りの公用車がついてきました。

あきれるや腹が立つやら、国道にずらりと並んだシーンはまだ目に浮かびます。

何を話したかはもう定かではありませんが、和牛の放牧一環経営の思いを述べていた記憶があります。ところが、最後に「見浦くん、金城牧場を知っているか」と聞かれました。”背負うた子に教えられ”に登場する、島根県金城町の大牧場です。5軒の農家の共同経営で自己資本5億円、国や県の補助金が20億円、総工費25億円、牧場面積百何十町歩という大牧場、何回も何回も見学に行った牧場です。

「よく知っています。最初から何回も見学に行かせてもらいましたから。」と申し上げたのです。ところが山本さん、しばらく考えてきかれました。「実は、その金城牧場がおかしくなって、再建を考えているんだ。君ならこんなときどう考えるか聞かせてほしい。」と言われたのです。

どんな人にも物おじしないのが私の身上、そこで持論を申し上げました。

日本列島は北から南まで3000キロ、沿岸から小坂のような山地まで1000メートル余りの高低差、地勢学上、牧場ごとに千差万別の条件の違い、だから再建するのなら、一番地域を知りぬいている現場の人間が中心になって再建計画と立てないと不可能だと思いますと。

しばらく目をして考えていらっしやいました。やがて「計画の数字がきれいすぎたな一。あれは、お百姓さんではない、県のお役人がつくったな一。」と。

落ち目になった金城牧場の見学には、それきり行けなくなりました。倒産の危機は見浦牧場も例外ではありませんでしたから、落ち目の時に見学に来られるなど、小心の私たちには思っただけでつらい、私たちが嫌なものは他人も同じだと思ったのです。

それから何年かして、もう安定した頃と訪問しました。共同の農家の人は牧場経営から手を引いて一角で養豚に転進していました。豚は和牛より資金回転が速い、資本力の小さい農家には、和牛の多頭経営はもっとも難しい農業部門だったのです。

そして、牧場は島根県の畜産事業団の直轄になっていました。広島県の芸北大規模草地開発の牧場と同じように。

山本さんがお帰りになったあと、今度は広島県から依頼がありました。農林省の課長さんがもう1人話を聞きに行きたいというが、引き受けてくれるか？

前回の大名行列で懲りた私は、丁重にお断りしました。ところがなんとか引き受けてほしいと強引です。上級官庁からの依頼では無理ありません。再三の依頼に私も本音がでました。前回はお供が大勢いらっしゃいました。お話は課長さんの他、おひとり二人なのに、10何台かの車は税金の無駄遣い、この牧場の生き方に合いませんと。

ところが折り返し返事がきました。その条件をのめば引き受けてくれるかと。そこまできると、もう断る理由がなくなりました。旬日を経て東京から来場された方々を見て驚いた、課長さんと秘書官と運転手の3人だけ、その時点で私も前向きになりました。

それから半日、一番大きい草地を見下ろす丘に腰掛けて話しこみました。秘書官、運転手さんまで加えて。

見浦牧場のこと、和牛の一貫経営を始めたこと、これからの日本農業のこと、この地帯の農民気質のこと……、話は尽きませんでした。

彼の名は川村さん、私より少し年長の40代から、ものすごく頭の切れる人で、自分の知らないことはとことん問い詰めてくる、変な農民の話は面白かったのかもしれない。

夕方肌寒くなり始めて、また会いたいと言って帰って行かれました。日本の高級官僚には素晴らしい人がいる、目が覚める思いをしたものです。

それから間もなく県庁から再び依頼がありました。旅費は一切持つから、東京に行ってほしい。

そして本省で課長連中の会議でこの間の話を繰り返してほしいと。

時は建設当初の見浦牧場、猫の手も借りたいほどの忙しさ、でも日本の農業の中枢の頭脳はどんな人たちか、お会いしたら勉強になるだろうなと強く思いましたね。

ところがそれを聞いた家内の春さんは怒りました。勉強は教えられるほうが足を運ぶもの、教えにこいとは本末転倒ではないか、学歴や肩書にひれ伏してきた農民では考えない発想でした。

そして偉くなるつもりなら離婚してほしいと脅されました。

何度思い返しても、家内は女に生まれたのは間違い、男だったら田尻は崩壊ではなく発展中であつたろうと思います。天の神様は大変な偏屈者ですね。

次の会においでになった岡部先生に川村さんのことをお聞きしたのです。それによると川村さんは大蔵省のエリート、時は田中角栄氏が自民党の幹事長のとき発表した日本列島改造論が世の中の話題をさらっている時、これを読んだ川村さんがこんな政策をとったらバブルが発生すると反対の論文を発表したのです。後年予告どおりにバブルが発生しました。東京の地価の総

額でアメリカ全土が買えるなどと、バブルの幻想に国民が浮かれて経済が崩壊寸前までいきました。その後始末に膨大な税金と空白の10年という時間を浪費したのですが、それは20年あまり後の話。

その田中さんが大蔵大臣になり大蔵省に乗り込んでくる、貴方もお聞きになったことがあると思いますが、彼は敵味方を峻別することでも有名。反対の論文を発表した職員を許すわけがない。心配した時の高木大蔵事務次官は彼を田中さんの目の届かないところに隠すために農林省に送り込んだ、将来日本を背負う人材をみすみすつぶすわけにはいかないと。ちなみに高木さんは何年かあと、国鉄総裁になって中曽根さんと国鉄民営化に豪腕を振るった人物。

そんな理由で図らずも農業にかかわった川村さんがデスクワークで満足するわけではなく、見浦牧場においてになり、変人見浦の話に共感された。そんな裏話をお聞きしたのです。そんなこんなで川村さんとの縁は切れました。しかし、彼ほどの頭脳、どこかで噂話ぐらいは聞けるかと思ったのに、3年たっても4年たっても音信はありませんでした。その後、岡部先生が来場された時、川村さんのその後をお聞きしたのです。沈痛な表情で「彼はガンで死んだ」と言われたときは、大切な人ほど早死にすると世の中の無情を恨んだものです。

先生もご高齢になり、従前のように日本中を歩き回れる事が少なくなりました。ときどき届く年賀状でお元気を確かめながら、私の牧場経営に大きな影響を下された先生のことは、家族全員忘れることはありませんでした。4年前、先生から若者3人を連れて見学にいくと知らせがありました。嬉しかったですね。見浦牧場の最初からご存じの先生が現在をどうぞご覧になるかと。

帯広の若者3人を連れておいでになった先生は、昔とほとんど変わりはありませんでした。思わず、「先生、おいくつになられました？」とお聞きしたら「90何歳」と答えられました。そうして牧場を歩いて、地勢が変わったことを指摘されました。道路工事の残土を無償で受け入れて改良しましたとお答えすると、公共事業と農業を結びつけたか、公共投資と農業投資の連携は社会資本の効率投資の手段だったな、と感心していただきました。

日本の、広島県の片田舎で偶然の出会いから、40年あまりもご指導いただいた、こんな素晴らしい出会いもあるのです。先生が次の時代の農業人を育てようとして目をかけてくださった、ご恩返しは何もできませんでしたが、そのお気持ちは継いでいこうと思っています。そして伝えてゆこうと努力しています。私の文章をお読みになっている人の中に、明日の日本の農業にいくばくかの関心を抱いていただくなり、先生のお気持ちの一半でも受け止めていただきたいと思います。

今日は、岡部先生と見浦牧場のかかわりを報告しました。

2008. 8. 22 見浦哲弥

井上さん(2008/4/21)

昨日、井上さんという人が訪ねてきました。

以前、会社の仕事で小坂の別荘作りに来られたとか、私の記憶には残ってはいませんでした、お話を聞きするうちに田舎の人たちの心が荒廃したのは、小坂だけではなかったのかと、さびしくなりました。

井上さんはリタイヤ後、旧八幡村に移住したのだそうです。住居の周りの空き地で野菜や花を作ろうとした、ところが埋め立てられた空き地で、どうしてもうまくいかない、そこで見浦牧場を訪ねられた。

お話を聞きながら思ったのです。昔なら周りからサイチンヤキ（世話焼き）が登場して、ああでもないこうでもない世話をやいた。そのうちにサイチンヤキが複数になって、当人そっちのけで論争が始まる、記憶にあるそんな風景はまだ新鮮なのに、現実には遠い遠い昔になってしまった。

私たちが余った堆肥の無料提供を始めたのは、もう10年あまりも前になりますか。無料というのが、みなさんには大変違和感があったらしく、無理にお金を置くと争いになったこともあり、それならと品物を持ってこられるやら、大変でした。そのうち、家で見浦の堆肥でできたと、大根の一本もお持ちいただければそれが私たちには最大にうれしいと申し上げて理解をしていただきましたが。

実はこんな考えを持つようになったのには、それなりに悲しい経験があるのです。私たちが貧乏のどん底を歩いているとき、一円のお金も節約しなければならない、そんなとき人が不用品として放置してある品物でも、分けてくださいといえ、いくらくらと要求される。それもかなりの高額な値段で。道端の崩れた石も値段をつけられる。人の足元を見て、と悲しい思いを何度もしたのです。でもそれでわかったことは、もし立場が逆になったら、相手も悲しい思いをするのだろうと。本業の商売に関係がない限り、必要でないものは差し上げては、と。

堆肥はまさにそれでした。どんなに努力しても撒ききれなくて余る堆肥は私にとっては無価値、自家用にお使いになるのなら無償提供をしようと。

ところが今や善意も金銭で評価する時代、拝金主義が横行する田舎では真意が理解してもらえなくて、逆に金を払うから積み込みをしろと強要する人まで現れて。見浦牧場は特別、が定着するまで時間がかかりました。ようやく「おい、見浦さん、また頼む」と勝手に積み込んで帰られる人が大方になりました。

まして都会の人が移住されてきたら、自然に回りがあつまってサイチンを焼く、そんな昔の風景を復活しようとしている、私たちは現代のドンキホーテ。でもそんな暖かい田舎を作りたいなと夢んでいます。

多忙で目が回る忙しさですが、近日中に訪問してお役にたてることはないか、見に行こうと思っています。

今日は井上さんの話でした。

2008.4.21 見浦 哲弥

プラスマイナスゼロ(2009/6/14)

見浦牧場に配合飼料（トウモロコシやマイロ、ぬか、油粕、等々を子牛用、成牛用、肥育用に配合を変えて調整してある飼料）を運んでくるバルク車（ばら積みのトラック）の運転手さんの愚痴を聞くことになりました。

彼はこの定年間近、この道一筋に社会の底辺を支えたまじめな人間、娘1人の3人家族を懸命に支えてきた、そして60歳を過ぎて晩年、ふと周りを見渡すと恵まれた環境の同年代が目について、”なんでわしばっかり厳しい人生を送らにゃーいけんのんかいの”と気持ちが暗くなると、話されたのです。

彼が見浦牧場に飼料の配送に来始めてもうかなりの年数がたちました。これまでそんな内面的な話しをされたことはなかったのに、ふと私に愚痴を漏らされた。これも出会いのひとつかと思って真正面から対応することにしたのです。

最近読んだ天文学の本に、宇宙は真空の中から生まれたというのがあります。

何もない真空という空間も、ある衝撃が加わるとプラスの粒子とマイナスの粒子が現れる、たまたま近くにブラックホールがあって、マイナスの粒子が吸い込まれると、プラスの粒子だけが残る、物質が誕生する、我々の宇宙はビッグバンでこのようにして誕生したと。

人間の人生も同じではないかと思っているのです。幸せなことも、運のいいことも、不幸や、辛苦の積み重ねも、加え合わせると、プラス、マイナス、ゼロになるのではないかと。

私が暮らした小さな小坂もそんな見方で振り返ると、まさにそのような解釈ができる事例が山積みです。

お金持ちでわがままで自分中心であのくそたれと憤慨されたあの人も、結果は大変不幸だった。

クラスメイトで優等生で弱い同級生をいじめる奴がいました、その彼は30半ばで傷心自殺。

いじめられてもいじめられても笑顔を絶やさなかったM君は貧しいながら心豊かな老後を送っている。

友人に「お金がない、貧乏だ、不幸だ」が口癖の友人がいました。

私が「食べるだけお金があって、なんとか生活していければ、それだけでも幸せなのでは」というと烈火のごとく怒りました。「お金があれば何でもできる、なんでも買えるんだ」と。その彼も年には勝てず、痴呆になって人生を終えました。その晩年はお金では買えなかった。彼は私の言葉を思い出してくれていたのでしょうか？

人生にはお金の価値だけでは計れない、心の幸せがあります。物質的な面と精神的な豊かさを合わせて考えると、プラスマイナスゼロの方程式が成り立つと考えているのです。

そして、それがビッグバンという宇宙の大原則にも一致すると思うのです。

もしかして貴方は幸せは物質的な面だけと考えているのでは？それでは前述の友人と同じではありませんか。「なして、わしゃ、ええことがないんかいの」と悔みながら人生を終えることになる。

私の人生はもう限りなく終わりに近い。思いもかけず与えられた長い時間で、周りを振り返るとこの方程式が浮かび上がってきたのです。それがプラスマイナスゼロの法則だったのです。

うまい話しのなかった私も、考えてみれば何度も死線を越えました。そう考えれば幸運のほうが多かった恵まれた人生だったのかも。喧嘩をしながらですが暖かい家庭も持てましたし。

運転手さんに申し上げました。「奥さんに不満があるのかな」「家内に不満なんかはないよ。料理のうまい人での。」「娘さんはどうですか」「孫が可愛うての。」

「それなら少々収入が少ないのは仕方がないですね、私の理屈からいうとプラスマイナスプラスで幸せなのでは」と申し上げたのです。

彼曰く、「そう考えたことはなかったの、私は幸せなのかもしれませんの」、と。

今日は、見浦風の屁理屈、人生はプラスマイナスゼロの話を聞いていただきました。

2009.6.14 見浦哲弥

増原義剛さま(2009/9/26)

平成21年8月31日の総選挙が済みました。広島3区から選出されていた貴方が落選され、選挙前からの下馬評通り、民主党の橋本さんが当選されました。時の流れとはいえ長年貴方に投票してきた1選挙民としては寂しい心境です。直接お話しする機会はありませんでしたが、農協や森林組合の会合で貴方の話を聞く機会は何度もあって、問題点の解析と対応の話はさすが高級官僚出身の方と感心していたのですが、残念ながら気持ち伝わってこない。能力の高い人なのに残念だなと思っていたのです。

同業の河合克行さんも積極的に会合に出席されて、何度もお話を聞きました。比較するのではありませんが、一選挙民として先入観なしの感じからいえば、人間としての暖かさは彼のほうが勝っているのかなと感じたものです。

実は私は50年近く和牛の牧場を営んでいます。山奥の不便なところですが、幸い後継ぎの息子の所に市内から動物好きの娘さんが嫁に来てくれて、孫3人を含めて7人家族として暮らしています。仕事に熱心な彼女が懸命に牛の世話をしますが、牛たちが心を開かない、一方牛の群れの中で育った息子の指示には100パーセント従うのです。決してやさしくはないのに。

毎日の生活で違いを見せつけられて焦る彼女に私は話したのです。「牛は高等動物、相手が信頼できるかできないか、その判断ができるまで観察している。あせってはだめ、根気よく付き合いなさい。」

あれから10年あまり、牛群の中で牛をおいまわしている彼女は、さすが牧場の女主人と感心しています。それでも牛の中で育った息子には及ばない。信頼というものは長い時間が必要なのです。

ところが何頭かが信頼すると、残りの牛も安心して見習う。これが集団で暮らす動物の習性です。人間もまた同じ。

ですから政治の世界では、地域のボスの信頼を得ることが選挙に強いといわれるゆえんですが、ところが地域のボスは必ずしも集団の信頼を得ているとは限らない、有力者の奥様が地域のご婦人方の信任を得ていないかもしれない。かえって思いもかけない人が大きな影響力をもっている。そんな世界を見浦牧場の牛たちは見せているのです。

貴方は、もう次の選挙のための活動を始められていると思います。これまでの運動のルールに沿った努力も大切だとおもいますが、新しい路線の開拓がより必要だと思うのです。

田中角栄さんのどぶ板選挙ではありませんが、一日に一度立ち話をしてみませんか。5分でもいい、お天気の話でもいい、聡明な貴方なら、5分の会話で明日に続く人なのか、その場限りの人なのかは判別がつくはずです。明日へと続くと感じたら、さらに5分話しを続ける、運が良ければその人や周りの人の問題点を知ることができるかもしれません。

毎日1人のノルマも4年間続ければ1500人と話すことができる。その積み上げの中で貴方の考える伝える新しい雰囲気が出てくれば、1500人は何倍かになるのです。

今日も息子の嫁さんが牛の世話をしている。100頭余りの群れにはいっていく。仲間が来たというように何の動揺もない牛たちの態度。ここまで来るために、彼女は10年あまりの時間

をかけたのです。

「あせっては駄目、信頼をえるには変わらぬ態度で付き合う以外は方法がない。」私の言葉を信じて積み重ねた結果なのです。

これからの選挙も有力者や各種の団体、組織の支持は当選の大きな要素であることは変わらないとおもいます。ですが、それだけで選挙ができた時代は去りました。選挙民と政治家の間を結ぶ新しいラインの開発者が生き残る、そんな気がするのです。その1つの提案が1日1回の立ち話なのです。ただし、同じ人だけとの立ち話では輪が広がることはありませんが。

昨日、隣村での世話話で「民主党が勝ちましたね。自民党は駄目ですか」と聞くと「民主党が良くて投票したのではないのよ。自民党が墮落したけえ、やいとう（お灸）をすえたのよ」との返事が返ってきました。酔っぱらって記者会見に挑んだ大臣を首にできない政党では選挙民が憤慨するのも無理はありません。

負けるべくして負けた今回の選挙、でも見捨てたわけではない、ここが大切なところです。懸命に毎日の生活を営んでいる選挙民の気持ちを理解するために、どうしたら生の彼らの気持ちをくみ上げられるか、是非考えていただきたいのです。

見浦牧場の和牛は高等動物です。彼らは考える力を持っています。経済動物ですから暖かい気持ちを持って接しないと成績が上がりません。まして選挙民は人間、政策も行動も暖かさと思いやりを感じさせるものでなくてはなりません。理論や政策が正しくても、それだけでは選挙民の心をつかむことはできません。まして利益誘導だけでは信頼を回復することはないのです。

敗戦で混乱していた昭和20年の冬、助けていただいたお爺さんに教えられました。雪国で生きていくためには相手を思いやることが大切なよ。それが自分が生き残る手段になると。経済発展はしたが、金、金、金、の殺伐した世相になりました。私どもの集落で起きたお葬式の同行事件を書いた”同行崩壊す”を同封します。お暇なときにお読みいただいて、ささやかですが助け合いの精神で再建した小さな集落の心を理解してください。

道端に貴方の顔写真のビラが並んでいます。昔なら名前を売り込むのに最良の手段だったかもしれませんが、時代が変わりました。

「今日増原さんに会って話をしたんよ。気さくな人だったよ」の一言が何倍かの票になって返ってくる、それを忘れてはいけません。

失礼を顧みず、いろいろを申し上げました。老人の躁言とお許しください。今回の敗戦を明日への跳躍台とされることをこころから願っています。

2009. 9. 26 見浦哲弥

天狗松(2009/9/29)

母屋の後ろの斜面に生えていた老松が枯れました。私たち3兄弟が子供の時にほとんどてっぺんまで登って遊んでいた松、小学生の私たちが2人がかりでないと手が届きませんでしたから、当時でもかなりの年数だったと思うのです。それから70年近くたちました。あまりにも巨大になっていて、除去するにはどうすればよいかと心配をする始末。大きな枝は川のほうに2本も3本も伸び出て、近くから見るとアンバランスの極限、枝の下は車庫、倒れたら即交通手段を失います。「やれんことよの」とため息の連続でした。

ところが平成20年の暮れごろから枯葉が目立ち始めました。今年（平成21年）の6月ごろには青葉が全く見えなくなって完全に枯死。家内の春さんは、早く専門家に依頼して処理しろとせっつくのですが、農山村は過疎と老齢で専門の職人がいなくて、心当たりの人が思い浮かびません。高所作業が専門のきこりさんは友人を含めて何人もいたのに、老齢化で現役ははるか遠くになり、にけり、の人ばかり。やむを得ず私が挑戦することにしたのですが、何しろ高い。あの上に上がると考えただけでも心臓をつかまれるように恐ろしい。が、後始末はどうしても必要。冬になり、積雪で倒れるまでにはもう時間がない。追い込まれて退化した頭が考えた。老松はもう死んでいるのだから痛くはない。足場の横木を直接幹に打ち付けても痛みはないはず、それなら登れるかも、と実行することにしたのです。

老松といえば私が小板に帰郷した時に、見浦の墓所の後ろに2本の老松がありました。住み込みの林蔵爺さんが「ありゃー天狗松ですけーの、切ったらたたきがあるますけーの」と御宣託、ところがまだ50代だって親父ドン「迷信じゃー」とぶち切ったから大変、翌年の春から母はガンでたおられる、冬は祖父が老衰で死亡（82歳でした）2頭いた白毛と赤毛の馬と牛が次々と病死、その挙句に親父様、水車の修理中におっこちてけが、往診してもらった戸河内の丸山医師曰く「肺から空気が漏れる音がする、手の打ちようがない。安静に」とのご託宣、意気消沈した親父ドン、子供たちを枕元に読んで顔を見回しながら、「哲弥、お前は長男、後をよろしく頼む。」私は中学の1年生でしたよ。親父ドンは運よく何日かして怪我が快方に向かって全快、笑い話になりましたが、天狗松といえば思い出します。

今度の松も私にとっては天狗松、枯れ始めてから私の失火、春さんの交通事故、肥育牛の頓死、そういえば焼けた牛舎だけ火災保険が掛けてなかった等等、並べれば結構あります。縁起担ぎだったら「たたきじゃー。」というところかもしれません。

ところが見浦の家族は能天気、人生は浮き沈み、ええ時もあれば悪いときもある、孫を含めて家族全員なんとか元気、プラスマイナスゼロじゃー。おかげで失敗続きの私も頑張っていられます。

今から60年前、日本は無謀な戦争を始めて見事に敗戦、明治の御維新以来、営々と蓄積した資本も資源もことごとく使い果たしました。わずかに残った国内資源の山林も、消失した都市の住宅再建に燃料にと乱伐につぐ乱伐で丸裸になったのです。日本の経済が再建されて都会がみるみる変貌を始めた頃は、小板の山林には100年以上の大木がある山は5本の指で数えられました。

ですから一般に30センチもあれば大木のうち、木材の値段も高騰しましてね。こりゃー山林はもうかる、都会へ出て就職して退職金や年金をもらうよりは造林をして売れる気を育てるほうが正解と山仕事に精を出す友人がいますね。ところが日本の経済が大発展、世界第二の経済大国とやらになって、国の銀行にはドルがじゃらじゃら、山から木を切り出して製材して使うより、お店で買ったほうが安い、いい品物がそろると、国民の目が輸入品に向いて、国内材の安値が続きましたね、退職金代わりに杉の木を育てた友人はぼやくことぼやくこと。

2009年8月19日 最後の足場3本を打ちつけました。前日から明日は懸案の老松の伐採処理をするのでと、息子の和弥に協力を頼んでワイヤーの取り付け作業。てっぺんに上がるのは私ですが、下で工具やワイヤー、ロープを供給するのは彼、私の希望するものを瞬時に判断して細引きに結び付けてくれる、余人には代えられない相棒なのです。以心伝心でないとも15メートル以上もある高所では、バランスをとっているのが精いっぱい。もっとも安全ベルトで体の保定はしているのですが、恐怖心は青年時に比べると何倍も大きいのですから。頂点から3メートルばかりしたの幹にワイヤーを結びつけて本日の作業は終了。明日は高所でのチェーンソーの使用、思うだけで身がすくみました。

2009年8月20日 朝、今日は枯れ松を始末しようぜー、と息子に声をかけました。本当は恐ろしくて逃げ出したい自分に声をかけたのですが。

4-5日前から10トンのパワーショベルを背後の高台に据えて準備はできていました。そのショベルと枯れ枝をワイヤーで結び、上部から切り落としていくのが作業の段取りです。

一度に根切りをして引き倒すには巨大すぎて機械の力が足りません。ですから上から枝、幹、と四段階に分けて切り落とすことにしたのです。問題は樹上で切断の作業をすること。足場が不安定ですからこれが一番危険。もちろん安全ベルトは装着して命綱は確保してあるのですが、手鋸でも怖いのにチェーンソーの操作とは、恐怖恐怖、また恐怖でしたね。

最初、大きな枝2本は手鋸で2/3ほど切り、後は息子が機械で引き落とす。そのたびに木の上から下りたり登ったり、不安定な足場を頼りに、意地と息子を頼りにうまく真下の車庫に損傷を与えずに作業が済んだときには、ほっとしました。懸案の難事業が事故もなく終了した。夕方には二人ともへとへとでした。

伐採をした老松の年輪を数えた亮ちゃんの報告では130年プラス10年ぐらいとのこと。私の子供の頃にはすでに70歳の大木だった、長い長い付き合いの松の木でした。

この松の木は3代にわたる見浦家の盛衰を見て何を感じたのでしょうか。その年輪を見つめていた和弥は約100年以前に年輪の間隔が非常に密な時期があったのを発見。天候が不良だったかもしれないと話しました。

何時か老松を代弁して物語を書いてみましょうか。

あと半年で79歳、今日は恐怖と戦って枯れ松を処理した報告でした。

2009. 9. 29 見浦哲弥

13度(2009/6/23)

”13度”、これは、この世の中には、まだまだ見落とされている技術の隙間があって、努力すれば私のような無学な人間でも見つけることができる、それが経営に結びついて利益を生み出してくれる。その体験談です。

60年前、敗戦の混乱の中から立ち上がり始めた日本の農村に農業普及員がやってきました。食糧不足で農産物がひっぱりだこ、わが世の春がやってきたと沸き立っている農民に最新の農業技術を教えるために。

役場に駐在した技術員さんは、各集落を回って指導して歩きましたね。ある時は公民館で講義を、ある時はあぜ道で実地指導をと、当時の農村は今では想像もつかないほど活気がありました。

その中に稲作の合理的な施肥の指導があったのです。何しろ肥料は山草の堆肥と役牛の糞尿、ダル肥と呼ばれた人糞尿、ときたま配給があって硫安と呼ばれた硫酸アンモニア、カリンサンという過燐酸石灰、硫加なる硫酸カリが配給されるのですが、なにしろ使い方を知らない。現在の化成肥料は作物ごとに3要素が配合されていて、しかもとける早さまで調整してある。何々の肥料と称するものを施しさえすれば、そこそこに生育して収量があがる、当時はそんな便利で進歩した時代ではありませんでした。

ですから、農民自身が地域の気候に合わせて、品種を勘案して、前述の単肥を配合して施さなければいけない。しかも田畑の土質によってその割合も微妙に変化させなければならない。

硫安をまいたらカラが青黒くなつての、ようできたんだが、イモチで全滅じゃった、なんてのたまう農民を教育しようと行政機関も普及員さんもシャカリキになった。そのてんやわんやぶりを想像してください。

ところが問題が起きた。普及員さんの指導で作った稲が出来が悪い。ひどいのは全滅。よくても半作以下、藁はギョウサン（注：たくさん）できたが、シイラ（注：米麦の結実しない物）が多くての、青玉や白米がおゆうて（注：多くて）の、原因はイモチ病。

農民の信頼はガタ落ち、それでも翌年は来年こそはうまいことやるで、と挑戦した連中がいた。少数でしたがね。

この現象には地域差がありましてね。暖かい地方、板谷以南では指導が効果をあげている、松原でも小板のような被害はでなかった。

その原因はこうです。まず指導の概略から説明しますか。

肥料は作土（稲の根が張って肥料を吸収する、一般には黒土と呼ばれる耕作されている土のこと）全体に肥料を混ぜなさい。全層施肥というのですが、こうすると肥料が流れにくい、従前はシロカキの時に肥料を撒いていたので、表面2〜3センチのところに肥料が集中し、空気中に水に溶かされて流亡する割合が高い、特に窒素は空気中に蒸発してしまう、だから少ない肥料を効率的に使用するために全層施肥をなさい、こういう指導でした。

ところが、この方法で稲を作ると、まず、稲がなかなか伸びてくれない。肥料不足のような症状をしめすのです。ところが7月に入って気温が上昇するととたんに青黒く見えるほど肥料が

効いて急成長を始める、本当は7月の中頃からは葉の色が引いて、茎の中に稲穂を作るために体が引き締まる大切な時期なのに、どんどん徒長する。そんな稲ですからイモチ病の得意先で発病、全滅するというパターンでしたね。

なぜ小板だけがこんなことになるのか、考えて考え抜いてもわかりません。ところがある日、田んぼにはいつて冷たいな、と思ったのです。5月だというのに田んぼの深いところは氷のように冷たい。実は没落した見浦家では田仕事にはく田靴という長いゴム靴は買えませんでしたから素足でした。これが幸いした。

もしかして土の中も13度の原則が支配しているのでは、とひらめいた。

稲の生育温度は13度以上と、専門書に書いてあったのを思い出したのです。そしてこれが原因ではないかと。

植物の根は新根と呼ばれる白い新しい根が肥料や微量元素を吸収するのです。根が伸びなければ稲は肥料を吸収することができない、肥料不足を起こす。

そして小板は豪雪地帯、根雪が遅くまで消えない。小学校の入学式に本校の松原に行くと桜が咲いているのに、小板に帰ると山影にまだ残雪が残る。

土は比較的比重が大きい物質、地表から伝わる熱で作土の深いところが13度以上になって、指導どおりの効果を上げるのは時間がかかるのでは？

答えがでました。

肥料の全層施肥は取りやめて、シロカキ（注：代掻き。水田に水を引き入れ、土を砕き、ならして田植えの準備をすること。）の時にまく表層施肥に蒸発が多いとの指摘に対してどのくらい増量すればよいか、10パーセント、20パーセントと、それぞれ試験区を設けて確認をしました。

その結果、確か15パーセントぐらいが見浦家の田んぼの適量だったと記憶していますが。

稲はできました。悪口雑言の村人の期待を裏切って最高の稲が。

イモチ病で枯れるぞとの予測も、普及員さんの指導の適期の予防で防ぐことができて。

大人連中の大反感を買いましたから、私の鼻が高くなって、見たか、の態度だったのでしょうね。

しかし、この出来事で大きな人生の教訓を得たのです。

・世の中には99パーセント正しくても、1パーセントの見落としでゼロになることがあるということ。

・よそで正しくても条件が違えば、取るに足らないと思える見落としも、結果はゼロであること。

・大学や試験場でも普及員さんでも見落としはあるということ。

・見落としは、なぜ、なぜの繰り返しと注意力で私にでもみつけられたということ。

あきらめないことが条件ですが、これが、私の人生の大きな教訓になったのです。

この出来事が文章”信頼”のJさん物語や、新鋭普及員Kさんとの”技術員の農民への理論の押しつけはいけない、技術と情報の提供者であるべき”との論争に発展するのです。

遠い遠い若かりし20代、そしてその後の私の人生を決めた小さな出来事、それは今でも新鮮な教訓かもしれませんね。

今日は懸案の”13度”を書いてみました。

2009/6/23 見浦 哲弥

あわてる乞食はもらいが少ない(2009/7/31)

この言葉は私が最も憤慨した罵声である。

もう過去の話しになった米の生産調整、貴方はまだ覚えておいでだろうか、敗戦後の日本が直面した問題に深刻な食糧不足があった。しかし政府の手厚い保護と技術の進歩で米作りは進歩し、日本の農村では最も安定した有利な作物になった。

ところが、食生活の変化でコメの消費が減少、余剰が生じ、その米を農業倉庫に保管して需要の増加を待ったのだが、余剰米は増加するばかり、農業倉庫（主に農協の所有）の保管量も増加、古古米（保管の年数がたつごとに食味が減退する、まずくなる）は食糧不適で飼料用として安く売り払うなど、食管会計（独立の食糧管理会計）の赤字は危機的に増大、たまりかねた政府はコメの生産調整に乗り出した。すなわち、コメを作らないと補助金をもらえる。その上政府の指定する作物を作ると補助金の上乗せもある。まじめに考えると随分農民を馬鹿にした政策なのですが、背に腹は代えられない。

その政策は昭和41年から始まったのです。基準は昭和40年にお米を作った田んぼが対象になる。ところが見浦はその40年に転作をして飼料用トウモロコシを作ったのです。一輪車しか行けない6アールほどの田んぼを除いて全面的に転作、したがって転作料と呼ばれた補助金の対象にはならなかった。

それを伝え聞いた反見浦派の人たちが集まって曰く「理屈ばかりこねやがって、補助金がいっそも貰えんげな、あーゆうんを、あわてる乞食はもらいが少ない、ゆうんよ」と。さすがに笑い過ぎすには重すぎましたね。

働かないとお金がもらえる、そのほうがよほど乞食に近い、てめーたちのほうが本当の乞食なんだと喉まで出かけたが多勢に無勢、ぐっとこらえましたが悔しかったな。

でもそれからの長い年月が経って振り返ると、あの笑った人たちのほとんどは厳しい市場競争の中で脱落していきました。

最も、投資と称して値上がり前の近郊の土地を購入、高く売って大金をつかんだ人がこの集落からも出ましたから、真面目にコツコツと働いて積み上げるのは時代遅れと思い込んだのは無理はありません。

しかしその人も子供さんがお金儲けは真面目に働くことではなく、うまく立ち回ることだと思い込んだからたまりません。親類も巻き込んですべての財産を失う羽目に追い込まれたのだから、あの時の高笑いは何だったのでしょうかね。

そうはいっても、真面目にコツコツ積み上げるのには勇気が要ります。特に若いころは周囲の運のいいやつばかりが目について、自分が情けなくなりました。

人生は努力の集積だと説かれても、格好のいい奴がちやほやされるのをみると、なんでもっと好男子に産んでくれなんだかと親を恨みましたし、体育の時間に要領が悪く仲間にあだを言われて自信を失って人をうらやむ、子供の頃は特にそうでしたね。

まして努力をしないで親の財産のおかげでうのうと暮らす、うらやましいよりは反感を持ちました。この世の中は不公平ばかりとね。

集落の集会で金持ち談義が始まりました。裕福な2-3の人と取り巻き連中が能天気な話を延々と続けます。

聞いている人たちの中には生活の厳しい現実を抱えている人もいる。たまりかねて大きな声がでました。「世の中には生活の厳しい人もいるんだぞ、少しは考えて話せ。人の気持ちにはなれんのかい。」痛い指摘にお金持ちが激昂しました。「何か言えば銭がない銭がない口癖だがな。金がなけにゃ借りて使え、つまらんやつじゃあ」話しの方が水を打ったように静かになりました。後年、この人が破たんして無一文になったとき、誰も親身になってくれないと嘆いているのを聞いたことがあります、自分がその種をまいたことは忘れてしまったのでしょうか。

ニクソンショックで飼料の高騰、牛価の暴落で資金ショートに追い込まれたことがありました。ちょうどそのころ友人が思いもかけず高値で売れた山林代、700万円をどう使おうかと悩んでいると相談を受けた時は、さすがに世の中の不平等を恨みました。でもあきらめたりうらやんだりしないでど努力しました。その結果が今日だと思っています。浮き沈みは人生のならい、それを一つ一つ乗り越えてはじめて幸せや成功があると理解するまでには長い時間がかかりました。

汗を流さないで手に入る運は幸運ではなくて不運なのかもしれない、そんな話をしてくれる先輩が周囲にはいませんでした。そこに今の社会のひずみがあるのかも知れません。ですからあえて声を大ににして伝えたいのです。この社会は努力せず、汗を流さないで手に入れたものは影絵でしかないのですよ、と。最も一日や一年や努力しても評価はされません。友人のように6年も努力したと訴えても誰も認めてはくれません。昔から10年ひと昔といわれてきました。最低が10年はかかる、今にはじまったことではないのです。幸いなことに人間は、力のない子供と老人の間の時間を除いても、4－50年の長い時間を与えられています。どんな環境の人もチャンスは与えられているのです。そのことに気づくのと気付かないのが人生の大きな違いになって表れるのです。

最後にこの文章に目を留められた貴方、悔しい思いをしたときに思い出してください。悔し涙はマイナスではない、貴方の心次第で大きな力になることを、そうやって人生を歩いた人間が数多くいることを。たった一度の人生です。くじけながら、泣きながら、それでも歩いている人がいることを思い、負けないでください。そしてその人たちは普通に平凡な人なんだということを。汗しないで手に入れるものは本物ではない、それだけを知っている人たちだということを。

2009.7.31 見浦哲弥

ドキュメント 正義の無賃乗車(2009/7/13)

思い返すと、当時は些細なことで忘れてしまっていたことも、本当は重大な意味があったことがあります。

昭和20年8月5日、私たちは広島県庁の建物疎開の作業から、本部の庄原の七塚牧場へ呼び戻されました。

おかげでかろうじて生き延びてこんな文章を書くことができ、人間の運の不思議を痛感しているのですが。

派遣されていた仲間は私を入れて5人、建物疎開とは名目で本部の建物修理用の釘の採取が目的でした。

当時は民間には新しい釘の入手など全く不可能でしたから、知恵者の幹部の発案で派遣されたのです。10日ばかりの作業が済んで1日早い引き上げ命令で、広島駅から芸備線に乗車することになったのです。

当時は旅行も大変な制限がありまして、公式の旅行証明書がないと切符は手に入らない、わずかに発売されている自由切符は長蛇の列、それでも入手の可能性は限りなくゼロに近い、敗戦前夜の混乱の世界でした。

私たちは建物疎開に派遣され、本部に連絡のための旅行と書かれた証明書を持っていましたから、行列を横目に簡単に切符を手に入れたのですが安心したのが悪かった。

広島駅に着いたのは5時ごろだったと思います。切符を手に入れなくては安心できないと、長い行列をしり目に公用の窓口で簡単に切符を買って、さて乗車までは時間がある、駅の周りでも見てみるかと歩き始めてすぐ、仲間の一人が切符がないと騒ぎ始めました。しまい忘れかと服から荷物まで徹底的に調べても出てこない、本人は泣き出すし、皆も青くなりましてね。証明書は切符と引き換えですからもう一度買うことはできません。いまさら行列に並んでも買える目途は立ちません。落としたのかと歩いた道を何度も回りました。当時の切符は貴重品ですから、拾われたら最後出てくる気遣いはありません。

乗車の時間は刻々と迫ります。仲間が「もうどうにもならんで、本部に帰ったら幹部に迎えにきてもらうけえ、お前はここへ残れ一や」と言い出しました。えらいことになったと泣きべそだった彼が遂に大声で泣き出しました。「おいてかんでくれー」。

その時、ふと思ったのです。キセルはできないかと。小板に帰郷する小学5年生まで毎年夏休みには家族全員で福井から広島までの汽車旅行が恒例でした。

駅で切符を買い、改札を通る仕組みは仲間の中では私が一番よく知っている。

当時の混乱の中でも、見送り人用の入場券は誰でも自由に買うことができました。ですから私が考えたように入場切符を使って列車に乗り込むキセルという不正乗車をする人は少なくはなかったのです。

対策として車内の検札は厳しかった。ただ、ぎゅうぎゅう詰めの満員だと車掌さんが仲を歩いて検札に歩くことができない。それを期待したのです。

もうひとつ、降車駅で改札を通るときの問題があるのですが、父が改札を通るとき、家族全員

の切符を扇形に持って駅員さんに渡していたのを覚えていたのです。怪しいと不審をもたれなければ、1枚1枚調べはしない。枚数と人数を確認するだけ、それならうまくいくかも知れない。

「一人置いていかないでくれ」と号泣する向井君（彼の名前を思い出すのに20年あまりかかりました）を見て、こりゃ置いては帰れん、大バクチになるが仕方がないかと考えました。

そこで皆に相談した。実は1つだけ方法があると思うけど、ばれたらただでは済まない。警察が憲兵隊かとにかくトンデモナイ目にあうことになる、それを承知ならと相談すると、号泣している向井君を見捨てて帰るなどと無情なことを言う仲間はいませんでした。置いていかれるのは自分だったかもしれないと思うと、人ごとではありませんでしたからね。

「一緒に帰れる方法があるのなら、それをやろうや。」そこで入場券で乗車して改札口を出るときにごまかす方法を話したのです。

原爆前夜の広島駅は招集された予備校の兵隊さんや見送りの華族、買いだして田舎にいったオバサンたち、私たちのような動員された学生など、さまざまな人でごった返していました。今でも目を閉じると広島駅の大ドームの下の人いさを思い出します。

さて、衆論は一致しました。入場券も買いました。予定の列車にもぐりこみました。客車は満杯で立錫の余地もない、これは幸いと思いましたが用心したほうがいいとトイレの前で頑張ることにしました。検札があったら向井君をトイレにに入れて他の連中は陽動作戦をするのが打ち合わせでした。

幸いにもあまりの満席で車掌が通路を通れない、恐れた検札はかなったのですが、三次に近づくにつれ、車内が空いてくる、恐ろしくてね。

三次と甲立の真ん中ぐらいでそれまで離れていた芸備線と国道54号線が並走するところがあるのです。三次に肥育牛を出荷するときにそこまで来て線路を見ると、あの時は恐ろしかったなど、恐怖がよみがえってきましてね、何十年も消えませんでしたから、よほどのことだったのですよ。

三次を過ぎるともうすぐ、当時は”山之内東”（現在は七塚）が降車駅、30分もかかりません。

5人で何度も何度も打ち合わせを繰り返しました。

私が先頭で切符を5枚見えるようにして改札係に渡すこと、全員は大声で挨拶をして改札口を通ること、駅の明りが見えなくなるまでゆっくり歩いて絶対に走らないこと、ばれたら警察か憲兵隊かただではすまないことをよくよく考えて申し合わせには従うこと。

駅で降車した人は私たちの他は4-5人だったと思います。真っ暗でしたから8時過ぎごろだったでしょうか「ただいま帰りました」大声で挨拶をして打ち合わせどおり、私が先頭で改札口を通りました。駅の照明がやけに明るく感じて、いつ「オイ君たち」と声がかかるかと、戦々恐々としながら、でもゆっくり歩きました。

駅を出ると20メートルばかりで曲がり角、戦時で街灯は点灯していませんから、そこからは真っ暗、がそれまでが長かった。

全員が陰に入ったとたん、誰が言ったか「走れ！」釘が入った重いリュックサックを背負って全速力で走りました。山道に入って何処でも隠れられるところまできてよ、誰言うともなく「助かった」と、へたばりこんだのを覚えています。

この話は誰にもしないと約束して本部に帰りました。「御苦労だった」といわれても、いつばれるかと心配でした。

しかし、翌日は原爆が落ち、10日もしないうちに敗戦と大事件が続いてこんな小さい事件は忘れられてしまいました。

しかし、この事件は敗戦で社会も見浦家も混乱に次ぐ混乱、生きてゆくことに精力を使い果たした私は思い出すこともありませんでした。ふと広島から帰ったのは何日だったかなと気になったのは20年も過ぎていたと思います。そして当事者の向井君を思い出したのです。それが8月5日だときづいた時、あのキセルをしなかったら彼を殺していたと。

長い人生には様々なことが起きます。気がつかないうちに少しは善行をしていたのかな？

向井君、幸せに生きているのかな、もう人生を終えたのかな、私も終盤になった今日この頃、遠い昔話を思い返しています。

2009/7/13 見浦哲弥

92歳まで生きる(2009/9/21)

沢山の雑文を書いてきました、そして思いつくまま題名をつけてきました。

ところが、あまりにも多すぎて題名から何を書いたのか、文の内容を察する事が困難になり始めました。多分に老化のせいとは思ふものの、不便なので題名は即内容を想像できるものにすることにしました。そして、この文がその最初です。

息子の和弥は38歳、本来なら今が人生の最良の体調を謳歌している年齢ですが、残念ながら持病がある。小さいときから激しいアレルギーに悩まされた彼は、喘息に苦しんでいます。大気汚染の激しい都会と異なって、空気の綺麗な小坂は彼には最良の環境の筈なのですが、山村の生活は激しい肉体労働を要求します。季節の変わり目に苦しむ彼を見ると、私はもう少し長生きをしなくてはならないかと思うようになりました。

和弥は随筆”背負うた子に教えられ”に書いた様に、最近の若者には珍しく、自然を見つめる心の目を持っています。自然を肯定するだけでなく、それを人間の社会に置き換えて考える思考も、私の生き方をもっとも良く知っている人間の一人です。しかし、前に述べたように体が弱い。もっとも、私も体が弱くて父に何度も見放された様に、若いときは決して頑健と言えませんでした。ですから、その内神風が吹いて健康を取り戻すのでは、それが私の願いです。

ところで彼の子供は男の子ばかり3人もいる。この子達に私の生き方を伝えたい、勿論、息子や嫁さんを通して、そして運が良ければ私の口からも直接に体験を話してやりたい、それは高望みだとお笑いでしょうが、これも願いです。その為には最小限あと15年は生きなければなりません。夢のまた夢、でも楽しい夢でもあります。もしその夢がかなった時は、何から話してやりましょうか？。

でも、それは私のささやかな希望に過ぎません。この年齢になると何時人生の終わりを宣告されても文句は言えません。それで思いつくままに、記憶を文章に変えているのです。そして、孫達だけでなく、そとの若い人達にも読んで貰えるのではないかな、そんな不埒な考え

もあるのです。

2008.9.6 目下、老いが絶え間なく進行中です。昨日は前日草刈りをした住福草地でトラクターで集草しロールにしました。夕立が来そうなこともあって、1時から夕方6時まで休憩なしでトラクターに乗って作業をしたら、こたえましてね。夜中の2時まで動けませんでした。おかげで受け持ちの牛達30頭あまり、その他に子牛が10頭程いますから40頭ですか、食事がもらえませんでした。作業に行こうと思っても体が動かない、こんな時に老化の進行を痛感する、勿論、思考の方も停止、ひたすら眠って回復を願うだけ。ただ有り難いことに病気ではないので、時間が経つと気力と体力が沸いてくる。

私には5人の子供がいます。家内の春さんに言わせると、悪いところは全部私の影響とか。でも私にも言わせると頑固なまでに生き方にこだわる、いい点も伝わっているのにと、心の中で自慢しているのです。

そして末っ子の和弥夫婦が牧場を継いで生活を共にしているのですが、彼は物の見方、他人に対する思いやり、等々今の社会が若者ののに期待する考え方のほぼすべてを自分の物としています。

本人が気がつかなくても社会が彼を求めている、適切な判断、正確な見通し、集会に行くと何時か周りに人が集まる、自分は勉強するために集会に出席してるのにと、ぼやきます。が、体力のなさが大きな欠点、その原因を与えたのは、彼をこの世に送り出した私達夫婦に責任があります。ですから残りの人生は彼のサポートで使い切ることにしたのです。孫達が彼の戦力として役立つまで。

明弥が二十歳になるまで生きるとすると、私は93才、家内は92才、日本の平均寿命が78才ですからかなり遠大な計画で、同級生の大部分が幽冥境を異にしていますから、欲が深いと笑うのも無理はありません。

2009.2.26 八幡の堀の姉が訊ねてきました、私は留守だったのですが、春さんの話では甥坊の弘和が膀胱ガンで全摘とか、60前後の筈ですから笑い事ではありません。最近では身近な人間がガンで倒れることが多い。何しろ死亡原因のトップを争っている厄介な病気ですから、私の様に78才でまだ元気で働けるのは、よほどの幸運かも知れません。

2009.9.1 農兵隊（戦時中動員されて働いた組織）の友人 柏原明四君が亡くなりました。動員先で病気になり一週間、同じ病室で枕を並べた仲、彼の親類が此の集落にあり、時々顔を合わせた。その彼の訃報は私の残り時間は後幾ばくもない事を、思い起こさせました。”人間は生まれたときに死が約束された”は瀬戸内さんお説教ですが、考えてみれば一生と言う時間は随分短いものですね。このことを20歳、30歳頃に理解していれば、もっと違った生き方があったでしょうね。

2009.9.22 毎日機械に乗って作業をしています。まだ複雑な操作も何とかこなしていますから、もう少しは大丈夫かも知れません。目標は92歳、でもただ生きて居るだけの目標でなく、それなりの作業をこなす牧場の一員として役だつ事が願いですから、呆けては目的を果たしたことになります。

くたびれた頭脳を励ましながらか読書を続けています。目下、オープンオフィスのマニュアルを読み始めました。

最近は体の衰えで夕方の6時頃からは休む様にしていますが、気力だけは前向き、母屋に枝を伸ばしていた老松が枯れたのも処理出来たではないか、機械で引き倒すために、地上20メートル近い幹の上部にワイヤーを取り付ける作業も、考えに考えて成功しました。年を取ったから駄目なのではなく、体力の衰えは長年の経験と知識で補う、そんな前向きな気持ちでいます。

成せばなる、成さねばならぬ何事も、ならぬは人の成さぬなりけり。
これが、現在の私自身を励ましている言葉です、弱気になって尻込みがしたくなると”なせばなる” とつぶやく事になっています。

2009.9.21 見浦哲弥

幻の古戦場（2010/2/20）

ここ小板は、広島、島根の県境に近い中国山地の分水嶺近くに有ります。
冷涼な気候と清冽な空気、恵まれた自然を慕って訪れる人も増え、別荘も建ちはじめました。
しかし、ここが無名の古戦場であったことを知る人もなく、また古文書が残されている話も聞いた事はありません。
ただ、地名が余りにも生々しく古戦場を連想させてしまうのです。

私がこの地に帰郷した昭和16年、新しい友人達の言葉の中の地名に違和感を感じました。それがこの話しの始まりです。「オーイ、てっちゃんやー、オオセンバラに水浴びに行こーや。」夏の暑い日差しの日、悪童連が誘いに来る、オオセンバラなる処はどんなところや、と思いましたがね。
集落の平場を流れた小板川が幅40メートル長さ200メートルの狭い山間を流れ下るところがあります。それを抜けるとまた平場、その川幅の狭まった所の堰が水浴場。深さが1メートル 長さが30メートルくらい、これが学校公認の山の子のプール、水浴びの間の甲羅干し、体を温めて又泳ぐ。楽しい遊び場でしたが、なんでここがオオセンバラかいのー、と思いましたね。

何時の頃か父にその事を聞きました。確か父だったと思いますが、彼曰く「あれは応戦原と書く」と答えてくれました。
驚きましたね。応戦原、敵を迎え戦う事ではありませんか。しかも応戦原の傍らの家の屋号は城根、城根の家を建てるために斜面を整地して屋敷を造ったときに土の中から、錆びた槍や刀が続々と現れたとか、城根屋敷の上側の斜面に残っていた石塚の周りでは折れた刀や槍の穂先が、子供の時にはまだあったと古老の話、まさに本物の古戦場。
応戦原から300メートルほど下流に深入山からの支流、出ガ谷（イデガタニ）との合流点があります。それを500メートルほど遡ると小さな原っぱがあるのです、そこがチニワ、「ワラビを取りに行こうやー」とよく行きました。ではそこは、と聞くと血庭と答えが返ってきました。
好奇心は最高になりました。それからは小板の地名に関する事は根掘り葉掘り聞き集めましたね。
いや、あるわあるわ、次々と古戦場まがいの地名が現れてきましてね。

前述の城根はすでにも書きました。シロネと書いてジョウネ。城の根っこなら、上にお城があるはずと思ったら80メートルほどの峯がタカノス、鷹の巣と書きます。
登ったことの有る友達は石垣があったといいます。後年境界を決めるために歩いた時は藪が生い茂って確認は出来ませんでしたが、小さな物見の砦があって鷹巣城。

その峯の後ろがカクレザト、隠れ里と書きます。平場から見ると両側の稜線が同じように見えて、その間に平地があるとは思えない。小さな谷川があって小板川の本流と合流する所は狭い谷で、その奥に集落ができて人が住める場所があるなどは、猟師や木こりならいざしらず、一般人には想像もできない、そんなところもあるのです。

応戦原から500メートルほどさかのぼると、国道191号線に突き当たります。その道が益

田方面に旧芸北町八幡に越す小さな峠、それがドウセンダオ（道戦峠と書きます）道路地図帳にもちゃんと記載してありますから、私の話は全部が想像の産物ではないと理解して頂けるのでは。

その先の集落がコウツナギ（甲繫と書きます）、昔は5軒ばかりの集落があってその中の1軒が鍛冶屋さん。そしてその中を流れる小川はタチアライカワ（太刀洗川）こうなるともう物語の一つや二つ伝わっていても不思議ではないのですが、残念ながら古老から何も聞いていない、古文書がないと言うのは萱葺き屋根の住宅で火災が多かったと言う事で理解が出来ますが、昔話が一つもないと言うのは・・・・・・・・。

小板は4つの集落と隣接しているのですが、その一つ大規模林道の北側の集落はソラジョウ（空城と書きます）ですが砦が有ったとは聞いていない、でも話しの要素は揃いました。そこで独断と偏見で作上げた私の昔話はこうです。

・・・・・・・・

関ヶ原の天下分け目の合戦より100年ほど前、山陰の雄、尼子氏と、安芸にその人有りと記された吉川氏の勢力争いが、ここでも起きました。

山陰から山陽側に越すためには幾つかのルートがありますが、主要な道はそれぞれ守りが固められて攻めにくい、しかもこの芸北地区は山陰側からは山が険しい。国道186線や191線を走ると山肌を急に下って行きます。改良された現在がそれですから、谷底を這い登った古道で大軍を移動するのはすこぶる困難な仕事なのです。しかし、一カ所だけ山陰側には隠されたルートがあった。

浜田側から波佐川を遡って、金城町波佐から現在の県道115号線に分かれると、源流に向かって一車線の狭い道が山あいには隠れているのです。谷川に沿って緩やかな道を登り切り源流に近い地点で左側のなだらかな林の中を500メートルも歩くと（現在は一車線の砂利道があります）そこは、もう八幡高原本塚原（キツカバラ）。地元の人しか知らない山道ですが、もし私が尼子の部将ならこれを利用しない手はない、そんな考えを起こさせるルートなのです。

さて、八幡から広島に進出するためには、三つのルートあります。

その一つ、八幡から雄鹿原へ越すルートは可成り急な峠を越さなければなりません。しかも雄鹿原側は急坂なのです。

その二つ、八幡から流れ出る太田川の支流柴木川は、急峻な三段峠を下ります。

となると3番目の殆ど高低差がなくて広島に向う現在の国道ルート191に沿ってと、考えるのが無理がありません。

その途中が小板、その境の小さな峠が道戦峠、そこから私の夢物語が始まるのです。

時は中世（時間設定はご自由に）山陰にその人ありと知られた尼子氏と広島吉田（現在の高田市）の吉川氏は、ここ芸北でも激しい勢力争いをしていました。

知勇で知られた尼子の部将（貴方が名前を考えてください）は、地元の獵師から耳寄りな話を聞きました。それが前節で述べた山道だったのです。

かねてから、山陽側に進出が願の尼子も急峻な中国山脈を越えて大軍を移動する事が困難な

事は知っていました。まして要所要所を吉川軍が守りを固めているとあっては。そこにこの話です。彼は部下の軍勢を引き連れ、くだんの獵師に案内させて、この道をたどったのです。

首尾よく木塚峠から八幡高原に進出した尼子軍は現在の国道191号線沿いに広島を目指しました。

鷹巣砦の知らせで橋山集落から吉川勢の守備隊が急遽駆けつけました。先遣隊が空城川を遡り山道を登って小板に、本隊は松原を経て深入山の麓を通り小板に。

何故、橋山集落に吉川の守備隊が駐屯していたと思うのかと言うと、ここには坂根屋敷という土堀を巡らせた、この地域には珍しい古屋敷があったのですよ。私が20代の頃はまだ現存していて、そこで忍者映画の撮影があったりして。

道路から見上げる坂根屋敷は農家の風情ではありませんでしたね。

私はここが守備隊長屋敷で、その下に続くなだらかな棚田に守備隊の兵舎があった、そう考えたのです。

道戦峠での小競り合いの末、本隊同士が衝突したのが応戦原、ここからが地名の登場で貴方の空想力をお借りしなければなりません。

尼子の進入を許してはならじの吉川の防戦は激闘また激闘、死屍累々となっても勝敗はつかない。両軍は一時的に引いて休戦、吉川方がたむろしたのが、やや下流の血庭、血の庭と表現されたのですから、負傷者の山、さぞ悲惨な光景だったのでしょうか。

尼子軍が引いたのは道戦峠を越して2キロほどの甲繫（コウツナギ）、その小川が太刀洗川、刃こぼれがした刀を小川で洗って血糊を落とす、合戦でいたんだ鎧を繕う人もいる、そんな場面が浮かんでくるのです。

中国山地の小板という、小さな集落の地名から500年前の同じ空間に描かれたかも知れない出来事、それを空想できるのは私達地元の人間の特権なのですよ？。

長い歴史のある日本、目を閉じると、貴方がお住まいの地域でも、思いもがけない光景が浮かんで来るのでは。

私は山国の雨の日に、窓の外の鎮守の森の小道を三々五々退いて行く落ち武者達の姿を臉の裏に見ているのです。

2009.5.5 見浦哲弥

追記

私達の時空は幾重にも重なり合っていると思っています。

貴方のお父さん、お母さん、お爺さんとお婆さん、その又先祖の人達、それぞれが生きた歴史が現在に続いている、それを多く知ることは、限られた私達の時間を有効に使う方法だ思うのです。その為にはより早い時期に興味を持たなければ、話してくれる先人達がいなくなって

しまいます。

今、お読みになった出来事も、小坂で生まれて育った人で興味を示した人は殆どいません。まして子供の頃に聞き歩いたなど、変人以外に考えられないと。
ですから10歳過ぎで移住してきた私の話を「見浦は昔の事をよう知っているのー」と感心する始末、学校で学ぶ歴史の他にも大切な歴史があると思うのですが。

2010.2.20 見浦哲弥

アルツハイマー（2009/9/26）

最近、遠い身内にアルツハイマーかと思われる症状を発見しました。

貴方も良くご存知のとおり、脳細胞が集団で壊死することで発生する病気です。日本人の老人の四分の一が発症するといわれ、発症後十年前後が余命といわれる厄介な病気です。

考えてみると、私の人生の中でかかわったアルツハイマーの人は4人、それぞれかかわった時期は違うものの、いずれも中期以降で治療の出来ない状況でした。（早期なら病気の進行を止めることが出来る）。でも、早期の発見は同居の家族でなくては不可能といわれるくらい、初期は常人と変わらないといえますから。

私は77才、脳細胞の壊死と思われる物忘れが目下進行中ですから、アルツハイマーへの関心も一入、若い人とは受け取りかたが違います。

人間の体は細胞から出来ているのは、誰もが知っています。血液、筋肉、骨格にいたるまで、そして絶えず再生、壊死を繰り返して、機能を維持し生命を支えている。お風呂に入って体を洗うと出てくる垢は皮膚の死骸ですね。しかし、その下には新しい皮膚が再生している。一見同じようでも僅かずつ変化し老化して行って、死に続いている。自分の手もよく見ると、いつの間にか老人班と呼ばれるシミが現れています。

ただ、その再生の速度は部位によって違いがあります。

専門家ではありませんが、牛たちと生活して、病気や治療などにも付き合っていると、一般人よりは病理や治療の知識が深くなります。

そして、より深い観察が早期発見に繋がる、経営の上で最も大切なことなのです。牛は痴呆やアルツハイマーになるほど高齢になるまでは生かしてもらえませんが、だだ BSE と呼ばれる伝染性の脳症がありますが、これは人間にも感染することが判明、徹底的に対策が取られて先行的に排除されていますので、牛を見て学ぶことは出来ません。ですから、身近に起こった事例を見て、自身の変化に注意する他は発見の方法はないのです。

2009.8.11 眼鏡を2つ新調しました。壊れるのもありますが、行方不明になる、思いもかけないところで発見する、すべて置き忘れ。亡くなった友人の一人が「眼鏡がみえんようになっての一」と愚痴っていましたが、最後は奥さんの命令でヒモで首からぶら下げていましたっけ。

屋外作業の多い農家では邪魔になって、そんなことは出来ません。そこで安い眼鏡を数多く持つことで対応しているのですが、出てくる時には同じような代物が 6個も7個も並ぶのです。ところが行方不明が続くと1個の眼鏡さえ見当たらない。老化とはとんだところにも被害を及ぼしています。眼鏡なしでは読書も機械の修理もコンピューターの操作もままならぬのに。

若かりし時には、年長者の物忘れが不思議でした。牛を飼い始めて必要に迫られて勉強し、少しは知識が増えて、頭では物忘れの現象を理解しても、自分にどのような形で現れるかは想像も出来ませんでした。

しかし、定年と呼ばれる年齢に近づき始めると、遠慮なく現れ始めたのです。忘れると言うことが何の抵抗もなく発現する。それが当たり前のように。怖いですね。

置き忘れをしても中年までは歩いた跡をたどれば、少しずつ思い出す、最後はそうだったと目的物を探し出せたのですが、だんだん歩いた跡も定かでなくなる、こうなると自分のやっっていることが不安で自信が持てなくなり、その不安を打ち消すために、自分の考えに固執する、全

体を見て判断する能力が衰えていると言うのに。

最初に、人の名前が出なくなる。そこは老化の入り口、その後ろに深刻な症状が控えているのです。弱って行く脳細胞を絶えず刺激して、活力を維持する努力が必要だとの説明は身にしみて痛感しています。

その対策として実行しているのは読書と文章書き、視力の低下で老眼鏡との二人三脚ですが、お陰で皆さんからは、「まだ確かなのー」とお世辞を言われて喜んでいます。

ところが先日、忙しくて3ヶ月ほどご無沙汰だった本屋を覗いてみる気になりました、中国山地の頂上の小板から70キロで益田市、ここに行きつけの古本屋さんと新刊書のお店があります。もちろんメインは古本屋さん、財布の軽い私には新刊書は1-2冊しか買えません。有り難いことに古本屋さんではその10倍も買える、勿論探している本が手に入ることは稀ですが、買い物袋一杯の本の中には、当たりで読みこむ本が何冊かあります。そこで新刊書の本屋さんへ移動、本探しをして1-2冊購入するのが何時ものパターンなのです。それと月一回の巡回図書館の本を1-2冊、これが現在の読書量、そうそう他にも若い連中が読んでいる月刊誌にも目を通してはいますが、徐々にその量が減っています。たった一つの脳細胞壊滅の抵抗手段と努力しているのですがね。

その折、購入した本の中に”明日の記憶”萩原浩著という小説がありました。映画化されたようですが気がつきませんでした。読みはじめて驚いた、まさに私が経験し始めたことではあるまいか、ただ主人公は50歳、若年性アルツハイマーという設定、私は70歳の後半で違いはあるものの、記憶力の低下を小説とは言え、文章で眼前に突きつけられると心中穏やかではありません。

思い出せば同じ病で倒れた友人のO君が、トラクターで田圃に出るまでは良かったが耕すレバーがどうしてもわからない、機械が故障したと隣家に相談に行った話を思い出しました。

ある日突然記憶の一部が消える、小説の一部にオーバーラップして「なしてかいのー、なしてかいのー」とつぶやいていた彼の顔が浮かんできました。

日に日に進行してゆく病状に唯流されるだけだった友人の病状は老いることの難しさを教えていました。

振り返れば、私も何度か死線を越えていきました。そしてたどり着いた老年、どういう結果で終わるのかは不明ですが、最後まで前向きに全力で生きてゆくつもりではいます。

2009.9.26 見浦哲弥

中島先生（2010/3/31）

中島先生は当時広島県の農政部長、広島県庁の歴史の中で最年少で部長になられた秀才、その人との出会いが、私の50年の和牛との付き合いの始まりとなろうとはね。人生は不思議なものだなと痛感しています。

その小さな出会いが日本畜産の一部門、和牛界に一石を投ずるかも知れないと来れば……。私は皆さんに、一喜一憂をしないで、懸命に生きていけば、平凡な人間でも充実した一生になることを知って欲しいと思ってこの文章を書いています。

あれは昭和40年のことです。私は何戸かの農家で農業会社を作ったのです。参加してくれた農家は5軒でした。

時間から時間の労働、労働成果に基づく月給制、当時はそんな考えの若者が全国に多くて数多くの組織が出来ました。この周辺で生き残っているのは、広島では有名なナシの幸水園、山口の船方総合農場等々、もっとも我が農園は3ヶ月で破綻しましたが。

私の農業会社、和興兄弟農園が崩壊した経緯は又別の機会に報告しますが、今日はその後始末の中でおきた出来事の話です。

当時、国もそれまでの零細な農家では世界の中での競争には生き残れないと、再編して経済的に足腰の強い農家に育てる事業に力を入れていました。その一つが農業構造改善事業だったのです、勿論我が農園もその対象で行政機関が動き始めました。私達の計画で何を指導すべきか、どうすれば補助金や融資の対象になり得るのか、もう多くの機関が走り始めていました。

それが、スタート直後に崩壊したのですから、取り組んで頂いた方々には大変なご迷惑をかけたのです。私はお詫びに行くのは当然の義務だと思ったのです。

メンバーに相談したのですが、事業は中止したのだから、もう世話になることもない、だから謝罪に行く必要はない、が答えでした。

でも私は納得できなかった。善意の人に迷惑を掛けたのなら謝罪するのは当然、それが父母の教えでした。

そこで暇を見つけて頭を下げて歩きました。役場、農協、地方事務所、農業普及所、そして最後に県庁を訪れたのです。こう文章に書いてしまえば簡単ですが、失敗を謝って歩くのは辛い仕事です。「すみませんでした」だけでは済みません。必ず理由を聞かれる。他人に責任を負わせるのは簡単なことですが、考えれば私の未熟が総ての原因、そんなことは出来ません。針の筵に座るとはこの事でしたね。

おまけに仲間達からは冷たい視線、その最中でしたから、よけい辛かった。

でも、ここで逃げてはと自分を励まして後一つの県庁を訪れたのです。受付で「畜産課長さんにお会いしたい」と申し込んだときは、これで終わりと腹が座りました。ところが受付嬢が電話を掛けて私に指定した場所は、3階の農政部長室。変だとは思ったのですが課長さんが部長室に出かけているのだなと、自分なりに解釈して部長室の秘書官受付に出向いたのです。「戸河内の見浦ですが、受付でここに来るように指示されました。畜産課長さんにお会いしたい」と。

「見浦さんか、このイスで待つように」と言われて、秘書官室の隅のイスに座って待つこと2時間、長かったですね。しかし、非は私にあります。これで最後なのだからと自分に言い聞かせて、ひたすら待ちました。やがて部長室の扉が開いて、秘書官が「中島部長です。こちらが

戸河内の見浦君」と紹介されたときは驚いて、課長さんにお会いしたいとお願いしたのに部長さんとは、と舞い上がってしまいました。

何しろ、県知事、副知事の次が部長、広島県でもっとも若くて部長に就任された秀才と後で聞かされた、その人に鋭い目で見つめられて「今日はどういう用事で来たのか」と聞かれて、しどろもどろになりながら、途中で投げ出した理由を説明して「申し訳ありませんでした」と頭を下げるのが精いっぱいでした。

黙って聞いていた先生は「謝ることだけで来たのか」と一言、「ご迷惑をおかけしたのでお詫びするのが当然ですから」と、申し上げると「この次は、うまくやるので宜しくと、頼みに来る人間は多いのに、すみませんでしたと謝るために来たのは、お前が初めてだ」あきれていました。が、ちょっと考えられてから「今から会議がある、部屋の隅で話を聞くように」と私に命じられたのです。何しろこちらはお詫びに来た弱みがあります。遅くなるので帰ります、とは言えませんでしたね。

会議室の隅にあるイスに座って待つことしばし、集まったメンバーを見て驚いた。畜産課長を始め、各種畜場、試験場の場長、畜産関係の科長さん達、広島県畜産の指導者の蒼々たるメンバーばかり、10人ばかり出席されていたのかな、私は小さくなっていましたね。

議題はアメリカの畜産を視察して帰られた部長さんの報告とこれからの広島県の畜産、特に役牛から肉牛に変換を始めた和牛の振興が主題だったと記憶しています。その為に県内に散在する牧場適地をいかに開発するかに議論が集中したのです。しかしスタートでつまづいて夢やぶれた私には遠い話でした。

1時間か2時間か、定かではありませんが退庁時間が迫って会議がお開きになりました。やれやれこれでお詫び行脚も終わりだと、ホッとして見上げた窓外の夕焼けが、やけに印象に残っています。

ところが、その時、中島先生が私に声を掛けました「見浦君、今の会議で気がついた点を話してみたまえ」、晴天の霹靂とは正にこの事でした。真面目に聞くのだったと反省しても後の祭り、泥縄で思い返しても人に話すような論点はありません。ぼんやりしていたのですから。

でも一つだけ気に掛かることがあったと思い出したのです。それは会議中に原野や山林を開墾したら土が流れるだろうと思った事です。

実は小板は年間雨量2100ミリと言う多雨地帯、畑作には特別な耕作方法があったのです。種を蒔くと必ず表面に薄く藁か刈り草を広げる。確かに土は流れにくいし、雑草の生えるのを遅らせる、おまけに少しは肥料になる、優れた方法なのですが、気温が上がって雑草の勢いが強くなると除草は手作業しかない。大きな畑になるとやっと終わったと振り返ると又草が伸びて元の黙阿弥なんて笑い話で、炎天下の草取りは辛い作業でした。

14歳の時の動員で七塚原の牧場で働いて、アメリカ式の畑作を見ました。それは雑草が生えたら、カルチベーターやホー（草を削る鋏）で草を削る、又伸びてきたら削ればいい、その内に作物が生長して地表を覆うから、雑草は伸びなくなる。

作業効率は桁違いに高いのですから体にも楽、合理的だなと感心したのです。

ところが、ここ小板は数少ない換金作物の稲作の為に平地や緩やかな斜面はことごとく水田、こんな中国山地の畑は水利が悪くて稲が作れないか、傾斜が厳しくて田圃にならないか、そん

な条件のところだけが畑、梅雨や真夏の夕立の時は、このアメリカ式の畑作では大切な表土が泥水になって流れ下りましてね。

父親から借りて耕作した20アールの畑の3年後は斜面の上側は表土がなくなって芯土が出ていました。これがエロージョンと呼ばれる土壌流亡の現象でした。

悔しかったですね。負けず嫌いの私ですから、農業誌や文献を読みあさりました。図書館は遠いし、インターネットはない時代、得られた情報はわずかでしたが、等高線作付けとか、牧草を带状に栽培する方法とか、世界の各地でも工夫がされていると知ったのです。そして非効率な小坂の畑作も、長い年月で考えられた土壌流亡防止の優れた方法だったと理解したのです。

そのことを思い出しながら「先生方の話の中で気に掛かることが一つありました。新たに牧場を開くと言うことですが、これから開発するところは雨量の少ない瀬戸内海沿岸地帯でなく雨量の多い中国山地が多いと思うのです。だとすると土壌流亡をどうして防ぐか、その対策のお話が全くなかった」と、前述の体験と私の思いを話したのです。

ふと気がつく会議室がシーンとしていました。全員の視線が私に集中していました。「しまった、言い過ぎた」と、冷や汗が出ましたね。何とか話し終えたときは逃げ帰ることだけを考えていましたね。

会議は終了しました。全員が退席したのに、先生は部長室に行って座るように命じられました。机を間にして着席された先生は、ご自分の和牛に対する思いを話し始められました。

「和牛は日本の宝、だがこのままでは生き残ることはできない。いかにして、安くて、安全で、美味しい牛肉を供給するかが大切なのに、現実の農民は本質を離れて高値狙いばかりを追っている。現在の和牛経営は投機なのだ。これを経済合理性に基づいた産業にしなければいけないのだ」と。

50年近くも昔のこと、詳細は忘却の彼方ですが、話の趣旨はこの様なものだったと記憶しています。

しかし、感激しました。農業教育もまともに受けていない一青年に、自分の思いを情熱込めて語る、しかも広島県農業政策のトップが一回りも二回りも年下の私に。先生の情熱に飲み込まれた私は、夕闇が迫っていることも気にならなくなっていました。

これが私が和牛経営に生涯を掛けることになったきっかけなのです。

当時、広島県は和牛の放牧一貫経営の試験をしていました。母牛30頭で子牛を生産し肥育牛として市場に売却する方式です。しかし一般には子牛生産と肥育牛生産は分離して経営するのが主体でした。(和牛界では子牛を生産する繁殖経営と、その子牛を購入して肉牛に仕上げて市場に出荷する肥育経営とに分離しています。現在でも殆どがこの方式です)

繁殖経営は零細な農家が多く、肥育経営は何千頭の巨大経営を初めとして大型が多い、それなりの問題を抱えている仕組みなのです。

しかし、私達が基本とした油木種畜場の多頭化放牧一貫経営試験も数多くの問題を含んでいました。そして、この方式に挑戦した公営民営の大牧場も、民間の中小牧場も殆どが敗退して行きました。乗り越えなければいけない問題があまりにも多く存在したのです。

見浦牧場は、まだ試行錯誤中の牧場ですが、多くの方々の善意に支えられ、家族が力を合わせる事で、辛うじてここまでたどり着きました。そして思うのです。
中島先生の ” 和牛経営は投機ではいけない ” の言葉をかみしめながら、これからも、この道を歩き続けて行こうと。

” 人生意気に感ず ” 人間にとって出会いがどんなに大切か、今日はその話を聞いていただきました。

2010.3.31 見浦哲弥

「これなーに？」～見浦牧場の教育論～（2011/1/30）

内孫の淳弥が盛んに「これなーに？」を連発しています。彼は見浦牧場の現経営者見浦和弥の次男坊、その姿を見ていると、40年も前に亡くなった父の教えを思い出すのです。

あれは、私の最初の子供、祐子が生まれた時、父が改まって話してくれたのです。

・・・

人は自分の子供は誰も可愛い、そして特別だと思うものだ。その挙句に頭もいいはずだから勉強もできるはずと無理強いをはじめる。世の中にはそんなに天才も秀才もないのに。

私は30年あまり中学校（旧制）の数学教師をした。広島第一中学校（現国泰寺高校）、熊本第一中学校、福井第一中学校と、各県トップの中学校でだ。第一中学校はその県の優秀な生徒が集まってくる。その中で理数科を選ぶ連中は頭が切れるやつ、そんな連中を3000人教えたんだ。その中で天才秀才と認めたのはたった3人しかいなかった。そんな連中を実際に教えた俺が自分の子供を冷静に見るとみな平凡、一人も天才秀才はいなかった。だから努力の積み上げ以外、自分を高める方法はないんだ。

だが、勉強好きの子供はできる。それは好奇心の強い子供に育てることなんだ。それには最初が肝心なんだ。

子供は2歳から3歳の頃に「おかーさん、これなーに？」を聞く時がある。このときの対応が大切なんだ。聞かれたら本気で答えてやること。「あんたにはまだ無理、大きくなったら教えてあげる」が最も拙劣な対応だと。

子供は意味がわからなくても、大人が本気で答えてくれると、次も安心して聞いてくる。そして新しいものに興味を示し、疑問を持つこと、答えを探すことに抵抗がなくなる。これが成長するにつれて、彼の性質になって、視野が広がっていく。それが学校での学習にも威力を発揮し始める。もっとも、学科の好き嫌いが大きくなる傾向があるが。

・・・

と教えられたのです。

私の子供は長女の祐子をはじめとして、女3人男2人の5人、いずれも就学時には平均以下だったのが、3年生4年生になるに従って学友を追い抜いていく、そして本校の戸河内中学校に入るところにはクラスのトップを争うようになる。父兄のみなさんが「見浦の子は頭がいい」と評価するのですが、本当のところは誰も知らないのです。「おかーさん、これなーに？」から始まっていることを。

父の教えの通り、「これなーに？」から育てられた好奇心は、人生を自分の力で歩いていくための能力の一つとなって子供たちを支えてくれているようです。

この記事を目にすることで、一人でも多くの親御さんが、お子さんの「これなーに？」を大事にしてあげてくれることを願っています。

2011.1.30 見浦 哲弥

こんな処で、こんな話を聞こうとは（2011/5/5）

あれは、牛肉の輸入自由化が国際問題になったころですから、もう何年前になりますか。中国新聞社会部の友人から電話がありました。「おい、見浦君、取材をうけてくれんか」、中国新聞の連載記事”中国山地”に登場してからは何人かの記者さんと知り合いになりました。その一人からの依頼でした。何事ですかと聞くと、「アメリカの特派員から依頼されて」とのこと。即座に断りました。「恥をかかせなさんな、わしが英語が出来ないことはよくご存知のはず、真っ平ご免で」

当時は日本の肉牛農家に大問題が持ち上がっていたのです。それは牛肉輸入の自由化。

日本の自動車をはじめとする工業製品が、安くて高品質とアメリカ市場で競争力を発揮、危機感を抱いたアメリカ政府は見返りとして圧倒的競争力を持つ農産物の輸入増大を日本に迫ってきたのです。その一つが牛肉輸入の自由化、広大な農地と一農場が何万頭という規模、それに対する日本は零細な農場で10頭余りも飼えば大きな農家といわれる畜産業、結果は最初から決まっていると、死活をかけた反対運動が全国の肉牛農家に起きたのです。

S 記者は言葉を続けます。

「あがー（そう）いいなさんな。向こうの依頼は面白い農家を紹介してくれとゆうんじゃがの、優秀な農家はぎょうさん（沢山）知っとるんじゃがの、面白い農家はあんただけなんよ」

「甥坊にハーフのカナダ人がいての、わしが英語ができんでえらい苦労したけーの、真っ平御免なんよ」

「そこは心配いらんよ、優秀な通訳を連れていくけえ、助ける思うて受けてくれや」

「そこまで言うんなら今回だけで」

当日現れたのは記者さんと背の高い外人さんの2人、約束が違うと思ったら、外人さんは流ちょうな日本語を話す。聞けば東大の新聞学科に留学中とか、サイドビジネスで特派員をやっている。

彼の名前や会社名は聞いたと思うのですが、その後の議論のショックで定かな記憶がない。確かなんとかジョージだった気がするのですがね。

彼は開口一番「牛肉の自由化はどう思いますか」と聞いてきた。

私が答えたのは「賛成ではないが、反対はしない」でした。

それを聞いて彼曰く、「この話で牧場関係者に意見を聞いて歩きましたよ。でも全員が絶対反対と答えました。貴方のような意見の人は一人もいませんでした。その理由を聞かせてください。」と食い下がってきたのです。

「お答えしてもよろしいのですが、それには私の歴史観から説明しなくてはなりません。長くなりますが、よろしいですか。」

「結構です。聞かせてください。」

秋の小春日和の午後でした。庭石に腰掛けて、話し始めたのです。

「初めにお断りしておきますが、私は初等教育しか受けていません。申し上げることが我田引

水で正しい歴史観から外れているかも知れません。あくまで山奥の農夫の戯言と聞き流してください」と前置きして。

・・・

私の先祖は関ヶ原の戦いで西軍に属し、負け戦の落ち武者狩りに追われて中国山地に逃げ込んだと聞いています。各種の文献によれば、当時の日本の人口はおおよそ2700万人、それから徳川幕府が270年続いて完全な鎖国政策を敷きました。300年後の明治初期の人口は約3000万人といわれています。内戦も外国との戦いもなかった幕府の政権の下で人口がほとんど増えなかった。もちろん新しい水田の開発や長崎の出島を通じた多少の技術流入があったにせよ、この間に3000万人にしか増えなかった人口、これが日本という島国が養うことができる人口の限界を示していると思うのです。

ところが、明治維新から日本の人口は急激に増加しました。敗戦時の1億人（植民地の人口を含みます。）この間たったの85年、それから60年あまりで1億3000万人、この急激な人口増加の原因は日本の経済発展によることは誰もが知っています。

しかし、この発展は外国から資源を輸入して、加工して輸出する加工貿易であることは当然のことですが、それが成り立った条件を深く考える人が少ない。自分たちの生存につながる話なのに。

明治維新のときに、フランスは徳川幕府を、イギリスは薩長連合を支持してインドで成功した用に日本の植民地化を期待したとの評論があります。しかし、隣国中国で起きたアヘン戦争の結果を熟知していた日本人は、西郷さん、勝さんの話し合いでの江戸城明け渡しにも見られるように、泥沼の内戦には踏み込まず、先進国に付け入るすきを見せなかった。

それをみたイギリスは、日本を友邦国として育て、東洋の植民地経営に利用しようと方向転換をしたのです。そして結ばれたのが日英同盟。

イギリスと同盟を結ぶということは、その貿易圏を利用できる。すなわち、当時世界最大だったポンド貿易圏が利用できるということだったのです。勿論、幾ばくかの制限はあったにしろ、原料の輸入、製品の販売に大きな便宜を得て、勤勉な日本人の国民性と相まって順調な経済発展をし、当時の世界五大強国の末席にまで駆け上がったのです。

その日英同盟の最大の恩恵は、明治37、8年の日露戦争でした。北の強大国、帝政ロシアは東洋での植民地拡大を狙ってシベリヤから南下をはじめました。極東での不凍港を求めて。そして、日清戦争で日本に敗れて混乱する中国から、シベリヤから東シナ海の大連に至る鉄道の敷設権をえて、鉄道の建設が始まったのです。わずか10年前の戦争で国力を使い果たしていた日本が恐怖したのは言うまでもありません。

僅かな日本の権益も侵害されて、日本自体の植民地化の危険さえ感じたのかもしれない。そして開戦やむなしの結論が出ました。

しかし戦うためには膨大な資金が要ります。工業が発達初期の日本では新型の兵器は外国から輸入しなければなりません。大砲も弾薬も一部しか自給できません。兵器の輸入のための資金は国債を発行して資金の豊かな外国に購入してもらおうとしました。

しかし東洋の小さな島国、当時 GNP がロシアの 1/6 で有色人種で新興国の国債は信用があり

ませんでした。負ければただの紙切れになる日本の国債の購入は、万に一つの大ばくちですからね。

当時の蔵相高橋是清の奔走があったとはいえ、その国債を売りさばいてくれたのはロンドンの金融街シティー、おかげでなんとか戦費を調達できた。

貴方は日本海海戦で東郷元帥率いる日本海軍がロシアのバルチック艦隊を全滅した大勝利の話は知っているでしょう？昔の教科書では東郷元帥の名指揮と日本海軍の猛特訓の成果だと教えられました。アドミラル東郷の名は世界に轟いたと。何も知らない子供は精神力がロシアの大艦隊をせん滅したと信じ込んだのだから恐ろしい。この思い込みがアメリカとの戦争に竹槍で戦うことにつながり、本気で竹槍訓練をしましたから、歴史の改竄ぐらい悪質な罪はないと思うのです。

私は読書が好きですから日本海海戦の大勝利に日英同盟の恩恵をまともに享受した日本、それを日本側に都合のいいように捻じ曲げた義務教育の歴史の教科書にたどり着いたのです。

イギリスは当時世界最高と称されたアームストロング砲を日本に軍艦に搭載してくれました。しかも最新の戦術を開発した海軍大佐を日本に派遣、その理論を詳細に提供してくれたのです。次にバルチック艦隊がヨーロッパから極東に航海する経過を世界に散在していた植民地から日本に通報していたのです。

初戦に日本がかろうじてロシアに勝利して旧満州国で追撃し、奉天で軍隊の再編成のために整然とシベリヤに撤退していくロシア軍を、弾薬の不足からただ傍観するしかなかった日本軍。それを見たイギリスはアメリカと計って戦争終結の圧力をロシアにかけてくれたのです。これが日本の窮状を救った。持久戦になり長引けば国力が尽きていた日本はひとたまりもなかったでしょう。

もちろん、権謀術数の国際政治の世界、善意だけで物事は成立しない。かの国の利益につながる思惑があったことは否定しませんが、少なくともイギリスは日英同盟にしたがって行動してくれた。その結果、日本はロシアの植民地にされることはなかったのです。

しかし私が教えられた日露戦争の歴史はこの点に全く触れていない。日本人が勇敢で国民が総力を挙げて戦って得た勝利だと、情報の少なかった当時の日本人は政府の見解をうのみにするしか方法がなかった。

日露戦争後10年ほどして第一次世界大戦がおきました。

ドイツ、オーストリア連合と、イギリス、フランス、アメリカなどの諸国が世界を二分して戦った戦争です。日本も日英同盟にしたがって参戦したのです。

戦争は長期戦になりました。ドイツとフランス国境付近に気付かれた塹壕で持久戦が始まりました。映画「西部戦線異状なし」で日本人にもよく知られています。

戦車が登場し、毒ガスが使われ、次々と投入される新兵器、人的物的資源の果てしない消耗戦は本国が小さく人口が少ないイギリスには大きな負担でした。

そこでイギリスは友好国に協力を要請したのです。

お金持ちのユダヤ人には戦争終了後ユダヤの国を作るという約束で戦費の拠出を、植民地インドには戦後の独立と引き換えに義勇軍の派遣を、日本には日英同盟にしたがって陸軍一個師団のヨーロッパ戦線投入を要請したのです。

大戦の終了後、約束の履行を迫ったユダヤの建国は先住民のアラブの激しい抵抗を引き起こし、現在のイスラエルとパレスチナの紛争となり流血が続いています。一方独立を期待して義勇軍を送ったインドへの約束不履行はガンジーの独立運動につながりました。これらのイギリスの不誠実な日本は歴史教科書の中で協調されました。

が日本はどうしたのか、「外国の戦争に日本人の血は流せない」と、東洋にあったドイツの植民地を占領することでお茶を濁したのです。ユダヤやインドと違って、日本は日露戦争で借りがあるのにも関わらず、前述の政策で逃げたのです。相手のイギリスの立場から考えると日本の態度は不誠実、かつ信頼できない相手になったと認識されても仕方がない行為でした。

日英同盟は一年の予告期間を守られれば、一方的に廃棄出来る条項がありました。これに基づいてこの同盟は英国側から破棄されたのです。

日本は明治政府以来の政策で重工業の導入、加工貿易の拡大で国力の増大を計ってきました。加工貿易は原料の輸入と製品の販売があって初めて成立します。ポンドの貿易圏の利用が難しくなった日本は世界の中で様々な妨害に直面しました。

そこで為政者は考えた。それなら独自の経済圏を作ればいい。そうして当時軍閥が割拠し、国として混乱の極みだった中国への侵略がはじまったのです。それが日本の歴史上はじめての敗戦になった日米戦争につながるのです。

明治維新後に国民が営々として築き上げてきた資産も領土も失って膨大な死傷者を出し、周辺の国々に多大な被害をもたらした無謀な戦争は、自分の利害だけを考えて友邦国の信頼を裏切った日英同盟の破棄から始まっていると思うのです。

牛肉の自由化の問題は日米の国際問題、輸入超過で貿易赤字のアメリカが収支のバランスを目指して得意の農産物の輸出拡大を計る、当然のことです。それを自国の都合だけで一方的に拒否するのは信義に悖（もと）る行いだと思うのです。交渉して譲るべきところは譲り、妥協点を探す、それを最初から全面拒否することは間違いです。まして、軍事を含めあらゆる点で緊密な関係にあるアメリカで牛肉で敵対するのは決して国益にならない。ましてアメリカ、イギリスの政治の中心民族であるアングロサクソンを敵に回すなど、日英同盟破棄の愚を繰り返すようなもの、たかが牛肉で同じ間違いを犯してはならない。私はそう思っています。

．．．．

そう申し上げたのです。

ところがこれを聞いた特派員氏の反応がすごくてこちらが驚いてしまいました。彼曰く、「こんな話を日本で聞こうとは思わなかった。それも東京ではなく広島で、広島市ではなく山県の戸河内（現在の安芸太田町）で、それも町なかではなく町境の山のなかで、しかもお百姓さんから。」

そして、今度は自分の話を聞いてくれと話はじめたのです。

彼はアイルランド移民の2世で、母国がイギリスの植民地で200年も苦しんだことを子供の時から繰り返し聞かされた。その植民地政策が過酷そのものだったと。しかし移住先のアメリカで苦学してハーバード大学に入り、アングロサクソンの友人が数多く出来た。彼らと付き合っただけで感じたことは、この民族の政治感覚が素晴らしいということだった。イギリス(政治の中心はアングロサクソンが握っている)の植民地政策には批判はあるものの、それらの政治能力の高さは認めざるを得ない、そう思っていた。それと同じ意見を日本の、こんな山奥で農民の貴方から聞こうとは。。。と。

それからいろんなことを話した気がします。気がつくやうに夕方、肌寒くなっていました。S記者がアイルランドが植民地だったとは知らなかったとつぶやいたのを、特派員君が猛然と勉強不足だと抗議したのを覚えているくらいで、後は何を話したか記憶にありません。私の歴史解釈が外国人に認められたショックで、他のことは記憶が出来なかった。

帰り際に「忘れるところでした。今日の目的は牛肉自由化でした。反対しないと言うなら、どうやって競争するのですか、聞かせてください。」と。そこで「消費者の声をより多く反映することが競争力になると思っています。お国の方は太平洋の彼方から日本の消費者を見る、私は2時間の距離で100万人の消費者と接触できる。これを武器にしようと思っています」と答えたのです。

しばらく考えていた彼は、「今日は勉強になりました。お礼にアメリカ農商務省が抱えている問題を1つだけお教えします。対応する時間はまだあります。頑張ってください。」

5-6年前、退職したS記者が訪ねてきました。昔話の終わりに「外人を連れてきたことがあるけど覚えているかい」と聞きました。「覚えているよ」と答えたものの、あの出来事が私の人生の勲章だったことは胸にしまっておきました。

「こんな処で、こんな話を聞こうとは」は、わたしへの最大の褒め言葉だったのです。

2011.5.5 見浦 哲弥

ある電話 ～山村の人手不足～(2011/5/17)

2010.7.20 お嫁さんの亮子君がある電話で悪戦苦闘をしていました。息子の和弥は代わろうと
しませんし、受け答えの論旨が支離滅裂になり始める、見かねて電話を代わって驚いた、中国
新聞の女性記者さんの取材電話だったのです。

時はテレビの放送がアナログからデジタルに変換される期日まで後一年と迫って、政府もマス
コミも懸命に報道合戦を繰り返している最中。

ところが我が見浦家では、先日小板地区で決定した共同デジタル組合に参加しないことに決定
したのです。

理由は一つ、10年先の小板では、維持管理していく青壮年（男女を合わせて）2－3人しか
想定できないからです。それも不慮の出来事は全くないとの前提です。

それなら地域のニュースは入らなくても個々で対応できる衛星放送の電波を利用してこの問題
をクリアしよう、それが私たちの答えなのです。

この結論を導き出した理由が外部の人には理解ができない。国も県も町も財政が逼迫している
というのに、膨大な補助金を出して個人の負担は35000円で抑えるというのに、まだ不足
があるのですかと。もともとアナログの時代から小板は難視聴地帯、正規に受信料を払って
いるのは見浦家だけ？そんなところに都会並みの映像が見られるのは棚ボタではないのか？

それで本当の理由はなんですか？それが取材の目的でした。

記者さんは30代、お若い彼女にはこの中国山地で起きている深刻な過疎、いや過疎を通り越
して消滅の危機にある現状は理解できない。最も地元の人たちも理解したくない、認めたくな
い。

そんな小さな集落でも存続している間は、色々な公的が義務があるのです。それを列記しまし
ょう。

1. 行政との連絡・対応の自治会長
2. たとえ小さいとは言え集落の財政を支える共有財産の管理、財団法人小板振興会の役員
3. 小板は一部の家庭を除いて生活用水が不足していました。その対策として40年前に建設
した小板簡易水道組合の管理運営業務
4. 少ないとはいえ子供たちがいる。しかも20キロのバス通学。学校対策にPTAの役員も必
要。
5. お葬式の手伝いなどをする、小板同行（どうぎょう）の運営
6. 氏神さんである、河内神社の管理責任の総代さん
等等、、

もちろん、人手不足が深刻な現在、男性だけが担う必要はありません。男女同権の現在、女性
に期待するところ大ですが、田舎は古いところ、駆け引きや人を動かす所はまだ男性が必要な
のです。

今度の共同視聴組合も4、5年は順調に動くと思いますが、10年もすれば様々な問題が発生
するでしょう。これまで問題が発生するたびに貧乏くじを引かされてきた見浦家としては、今

回は遠慮させていただく、これがこの問題に対する姿勢なのです。

いま、日本中で発生している、過疎、高齢化、その最先端の集落の消滅。それにささやかな警鐘を鳴らしていると思っていますが、間に合うように人の心に届くことができるのか、せめて大海の一石になればと思っているのです。

2011.5.17 見浦哲弥

もう終わりだけー、無駄？（2011/5/31）

身の回りに老人が増えました。当人の私も目下81歳をめざしてまっしぐら、増えたと感じるのは当然です。

ところがもう何をしても時間がない、役にはたたないと、勉強も努力もしない人が多い。死後の後生安楽を願って信心三昧、昔は多かったですね。でも社会が進歩して情報が充満し、知識吸収の機会は山積みしているのに、遊びに、旅行に、信心に、と後ろ向きに走るだけなのは間違っていると思うのです。

先日、牧柵の修理のため、冬の間に切り倒して小切ってあった（必要な長さにきること）栗の木を取りに行きました。土の上に転がしてあった木を持ち上げると、裏側に数本の枝が伸びていました。そして新芽が出て葉が開き始めていました。

いままではごく当たり前と思っていた現象でしたが、その時は違っていた。これは自然からのメッセージかもしれないと思ったのです。

世間一般では、定年がきてリタイヤすると余生を楽しむとて後ろ向きになる人が多いなかで、私の男の同級生でただ一人生き残っている的場くんも、そして私も、まだ現役で仕事をしている。貧乏といえはそれまでですが、旅行だ、レジャーだと残りの人生を楽しむだけに使っている人が先立って行く。

70年あまりもつきあった的場くんの顔を見るたびに、自然の教えはそうではない、最後まで全力を尽くしなさい、それが無駄であってもと、訴えているようです。

根のない丸太の生き残る可能性はゼロに近い、たとえゼロでも前向きの努力をしなさい、仕事も勉強も許す限りの全力を尽くしなさい、これが自然の生き方なのだと。

私の人生の指針は自然、見浦牧場のモットーは

” 自然は教師、動物は友、私は考え学ぶことで人間である ”

人称して見浦教。

長い人生で起きた様々な出来事の中で、私は自然の理を参考に生きてきました。でも終わりの生き方は目下勉強中。その中で気付いたこの現象は、大きな自然の教えなのかも知れません。最後まで人間らしく生きる、そのためには無駄と思えることもけっして無駄ではないと。

一本の丸太が教えてくれたこと、私の頭は、大切なことなんだ、徒労ではないんだと、繰り返し訴えています。

長い人生の迷い道で何度も正道を教えてくれた自然、間違っているはずはない。これからも迷いながら残りの人生を歩いてみようと思っています。

2011.5.31 見浦 哲弥

集落一周は 逆立ちで (2009/6/23)

昭和44年に見浦牧場は国の構造改善事業に参加しました。小板地区にある呼気誘致に60ヘクタールの牧草地を作り6戸の畜産農家と6戸の兼業農家を作る計画でした。

その事業に各農家がそれぞれ計画を立てて申請したのです。

大多数の人が2-3頭から10頭の規模なのに、私は一貫経営、子牛から肥育までの165頭飼育と計画書を出したのですよ。

それを聞いたH君、我こそは昔から牛を飼っている牛飼いぞ、こんな戯言は聞いたことがないとみなの前で笑ってみせた。「見浦はトオスケ(阿呆)を言う、そんなことができるわけがな一がな」と言ったと、友人のO君が注進してきたのです。

そして、彼曰く「それんだがの一、俺もわからんのよ、一人で165頭もどうやって飼うか、教えてくれーや。」

無理ありません。乳牛では多頭飼育は実現していました。

20頭-40頭ぐらいを大きな牛舎で飼う、若者の夢でした。隣の雄鹿原地区では乳牛飼育をはじめ農家が増え、小さなマンサード屋根(腰折れ屋根)の牛舎がこれ見よがしに建ち始めました。私の頭にある七塚腹種畜場の牧場とはかなりの差はありましたがね。

そこへ聞いたこともない和牛の放牧飼育をやる。しかも165頭で。Hボスが見浦が気が狂ったと笑ったのは無理ありません。

昔は、小板にも30頭ばかりの和牛がいました。もちろん役牛として農耕や運搬が仕事でした。トモダヤと称する棟続きの畜舎や、ウチダヤという母屋の人間が住む部屋と隣り合わせの畜舎で飼っていました。

見浦家はウチダヤでした。6月の終わりになるとハエが大発生。ダヤと境の壁穴から人間の住居に殺到。食事時など、ご飯の上が真っ黒になる。いま思い出しても食欲がなくなります。

4月になると、役牛の活躍の場、冬じゅう暗いダヤ(駄屋:牛舎のこと)で過ごした牛は田起こしに、代掻きにと春の風物詩の一翼を担うのです。

エサも、屑米や麦、ぬか、ふすま、等が加わって上質になりましてね。牛もええもんを食わにゃ一力がでんで一、と。

ところが、春になってからでは間に合わない。早すぎでは太りすぎて力がでない。この辺りの按配が素人の見浦家ではわからない。冬飼いの悪かった見浦の牛が力尽きて田んぼの中で倒れて大騒ぎ、痩せてはいても重量はありましたから、泥田の中から担ぎ出すのは大変でした。ですから、見浦が牛のことでオオモノ(大言壮語のこと)を言う、と皆が笑ったのは当然でしたね。

さて、そこで、私の悪い癖がでました。

「訓練するんよ。見浦の牛はの、”集まれ”と号令すると一列に並んで、”右向け右、前に進め”というとなついてくる、だから心配はいらんのよ。」馬鹿にされたと思ったO君、怒ったのなんの。「そーが一なことは聞いたことがない、それができたら小板を逆立ちで回ってやらー。」

子供のころから動物好きだった私は、小学校4年の時に会った、パブロフの反射条件の理論に心酔していました。サーカスの動物芸も、叔母の家の飼い犬が私によく馴れるのも、条件反射の応用、牛でも訓練すれば人間の命令に従う、と信じていました。

現に田んぼで牛を動かすのは、手綱と号令(止まれはバツ、前進はシーチョッ、チョッチョッ)で動くではないか。

さて、売り言葉に飼い言葉、牛を訓練しなければなりません。すでに数十頭いた牛群をどこから訓練をはじめるか、試行錯誤が始まりました。

最初にエサやりの合図を覚えさせなければと思いました。その合図は人間の声にするか、笛にするかを決めなくてはなりません。今日は笛を忘れたから人間の声にする、では牛が覚えるわけがないと思いました。そこで物忘れ名人の私はいつでも持ち歩いている自分の声を使うことにしました。

しかも牛にもわかる特徴ある声、連載記事”中国山地”でも話題になった、唸り声にも似た腹の底から出す「もーん」という声を使うことにしました。

訓練をはじめました。夕方の餌やりの時、必ず合図の「もーん」を使って呼びかけるのです。餌場でね。それから牛を追い集める。

最初は牛は見向きもしてくれません。1カ月たち、2カ月たっても、牛群に変化はありませんでした。さすがに3カ月になるとこれは駄目かと疑心暗鬼になりました。パブロフの理論は牛には通用しないのか、と。

O君の、やっぱりできなかったかとの高笑いを思うと気が重かったですね。

ところが3カ月目の終わりに呼び声に応じて頭を上げた牛がいたのです。

翌日は頭を上げただけでなく、周りを見まわした。これはいけるかも、と思いましたね。

3日目には、頭をあげ、周りを見渡し、そしてゆっくり帰り始めたのです。

「やったー」飛び上がって喜びたい、そんな気分でした。

帰ってみれば餌がある、翌日からは呼ぶとまっすぐ帰ってくるようになりました。それにつれて他の牛も動くようになり、全群がコントロールできるようになるのに、時間はかかりませんでした。

リーダか上位の牛を教育しさえすれば、他の牛はそれを見習う、そして全群をコントロールできる。しかしリーダが交代したら又初めから訓練か、と思うと憂鬱でしたが、群れの中に知識が保有されていました。

世代交代でリーダが交代しても、群れの中の知識がコントロールを受け継いでいく、素晴らしい発見でした。朝牧柵の扉をあけると牛舎から親牛も子牛もわれ先に草地に走りこむ。夕方大声で呼ぶと、一列になって草地から帰ってくる。「牛は学習する」と胸を張りたい気持ちでした。

O君の家からは、夕方一列になって丘を越えて帰ってくる牛の列は見えるはずなのに、逆立ちをして集落を回るという約束には一言も触れませんでした。どういいわけをするのかと意地の悪い期待をしていたのにね。

しかし、この出来事で牛は高等動物だと実感したのです。

家畜というのは、動物を人間が生きるために利用させてもらう、乳牛はミルクを肉牛は牛肉を作る能力を利用するのだと。しかし私は牛たちは高等動物、高い知能を持っている。その知能も能力、利用しない手はない。これが、見浦牧場の考え方なのです。

産肉能力（肉を作る力）だけでなく、習性や記憶力や思考力なども利用させてもらう、それで労力が節約できれば、コストダウンの大きな力になると考えているのです。

その出発点のコントロールに成功したのです。でも O 君の「なんぼ見浦でも、そんなバカなこと」の発言には少々頭に来ていたので、約束だから小板中を逆立ちで回れと言ってやりたかった。

でも 40 年あまりたったある日、彼がひとりごとのように「あればっかりは出来るとは思わなかった」といったのを聞いて溜飲を下げたのです。

あれから長い年月が経ちました。O 君も幽明界を異にしました（ゆうめいさかいをことにする：あの世とこの世とに別れる。死別する）。今では意地悪をしなくてよかったと思っています。

2009.6.23 見浦哲弥

2.26 事件と私(2011/10/1)

2.26 事件は昭和11年に起きた、日本陸軍の過激派が起こした政界要人暗殺のテロでした。昭和天皇の考えを押しつぶして、大陸侵略に日本を引きずり込んだ、平和日本を語るときには忘れてはいけない、忌まわしい、そして貴重な教訓でした。それが、中国山地にすむ一農民の私の傍らをとおりすぎていった、今日はその話を文章にしましょう。

昭和11年2月21日、東京で陸軍によるクーデターがおきました。当時困難を極める国際状況の中、平和的な解決を模索するが言おうと、東北地帯の打ち続く凶作で貧困のきわみに追い込まれた農村の救済のため、軍部の予算要求に大鉈を振るった財政、それに反感を持った一部将軍と過激な青年将校が起こした、政府転覆のテロでした。この事件で、拡大一方の軍備予算に大鉈を振るった高橋是清大蔵大臣、昭和天皇の平和的外交を支えていた木戸内務大臣、軍部の過激派を抑えた首相の海軍大将岡田啓介ほかの政府要人が暗殺されました。

事件後、陸軍の意見を代弁したとて、反乱軍を鎮圧しない軍の優柔不断ぶりに怒り心頭に発した昭和天皇が、「朕の大事な重臣を暗殺した反乱軍を誰も鎮圧しないならば、朕が近衛師団を指揮して征伐する」と発言されて、あわてた陸軍が急遽鎮圧し、首謀者を即決裁判で銃殺、加わった兵隊はその後の危険な戦線に繰返し送り込んで戦死させてもみ消し、歴史からの抹殺を図ったのです。

巷で噂された本当の首謀者、某陸軍大将は軍の司法官が懸命に立証しようと努力したにもかかわらず、影の圧力で罪を問うことができませんでした。

日本は、これを境に破滅の戦争にのめりこみ、何百万人の国民と二千万人といわれる外国人の命を犠牲にしたのです。

なぜ私がこの事件に大きな関心を持ったか、それは頭から離れない強烈な場面の記憶があるからです。

それは真っ黒な広いお庭に煌々と燃える篝火（かがりび）、喪服を着た大勢の人、黒い着物の母が狂ったように泣いていました。

近親者が集まった松尾大佐のお葬式だと知ったのは、何年か後、5歳の子供が鮮明に覚えているのですからよほどの衝撃だったのですね。

小学2年のとき、通っていた旭小学校の校庭に大きな胸像が建てられました。陸軍大佐松尾大蔵の銅像です。そのころから父や母から2.26と呼ばれた日本陸軍による反乱とそのテロで時の政府の要人が数多く暗殺されたことを少しずつ教えられ、長じるにつれて関連の本を読み、その概要を自分のものにしました。

今日では、多くの人がそれぞれの立場でこの事件を論じています。素人でしかない私が論評を加えることはやめますが、青年のころ、父の従兄弟のYさんにこの事件で何があったのかと聞かれたことがありました。当時福井の見浦家に下宿して女学校に通学していた彼女には何も知らされなかったか、事件の巻き添えにすることをお恐れた父母が何も話さなかったのでしょうか。そこで、私が知る限りのことを話したら、「哲っちゃん、あんたよく知ってるね」と感心されたのは事件後50年もたってから。

そこで偏見かもしれませんが、私が知る限りのことを書いておくことにしたのです。

当時の首相は福井県出身の海軍大将岡田啓介、元来海軍は幹部養成の仕上げに必ず遠洋航海で世界の各地を訪問する仕組みがありました。

それで装備を維持し、世界の体制に遅れをとらないための研究は陸軍より現実的でした。したがって日本の国力から他国とはことを構えないことを是とする穏健派の指導者が多かったのです。まして、日中戦争解決の目鼻がつかない現実の中ではアメリカやイギリスを刺激しない外交を国是としていました。ところが陸軍は中国の指導者だった蒋介石將軍を支援する米英に一泡ふかすべきの強硬論者が多かったといえます。

その黒幕の総帥が真崎甚三郎対象、彼にそそのかされた青年将校が政府に反対して、穏健政策を堅持する要人の暗殺を目的としたクーデターを起こした、それが2. 26事件なのです。

事件当日、義弟の岡田啓介首相の官邸を訪れていた松尾大佐は、玄関の方で銃声を聞くや、「貴方は大切な体、死んではいけない」と押入れに隠し、壁にかかっていた写真をはずして、「俺が岡田だが」と庭に下りていったといえます。たちまち機関銃の乱射を受けて即死、現在と違って情報の少ない当時、岡田首相の生死は官邸からの脱出が成功して生存が確認されるまで、日本中が息を潜めて様子を伺ったと聞きました。

当時、父は福井第一中学校の教頭、維新革命の妨害をした松尾大佐の一族を皆殺しにするために、金沢駐屯の陸軍が福井に攻めてくるといくので、これで我が一家も全滅か、と覚悟をしたといえます。(母方の野村家は松尾家と縁続きでした)。

青年のときは陸軍の工兵中尉であった父は、福井であった陸軍大演習で福井城の中にあった福井第一中学が大本営(臨時の御座所)になった関係で、当時まだ青年だった昭和天皇のお世話をしたといえます。父が真剣な態度で当時の話をしてくれ、そして巷で伝えられているこの事件に私なりの解釈をもつようになったのです。

反乱鎮圧後、軍法会議が開かれて真相究明が行われることになったのですが、事件に直接関係した将校たちの銃殺でけりがつけられ、本当の黒幕たちに司直の手は及ばなかったと聞きました。新聞その他に公然と指摘された真崎將軍には何のお咎めもなかったとか、皇道派と呼ばれたこのグループに東条將軍や山下將軍が含まれていて、この人たちが日米戦争の口火を切ったのですから、2. 26事件は前哨戦だったと理解しています。

昭和16年12月8日、日米戦争が始まりました。第二次世界大戦とも呼ばれる大戦争です。戦争開始が決まった最高機関の御前会議で開戦を洩る天皇に当時総理大臣だった東条が決断を迫ったといえます。

僅かに、この戦争は何年で済むのかと聞かれたとか、それに一年半と答えた東条に、その後長引く戦争にお前の話は違うと責められたとか、業を煮やした東条が天皇暗殺も検討したとか、真偽様々な情報が流れています。

戦後、天皇は戦犯と主張した私に、父は人の噂だけで軽々に判断をしてはいけないと意見したのです。それなら親父さんは知っているのかと反論する私に、「彼はそんな人間ではない」と断言したのです。そして前述の話をしてくれたのです。

歴史が中国山地の片隅に住む私の傍らを過ぎて行った話、どうでしたか？

でも気をつけて探せば貴方の周辺でも大きな歴史の破片が転がっているのではありませんか？
ただ知らないだけ、知ろうとしないだけ。

2011.10.1 見浦 哲弥

今年の熊君（2011/9/5）

2011. 8 草刈りをはじめて今年も熊君の動向が見え始めた。
昨年は2頭が捕獲処分されたのに、どの装置も熊君の行動の痕跡がある。幸いで会うことはないが寝床あり、熊道あり、前日の刈り草の上に脱糞ありで、ごく身近に彼の視線を感じている。最近では脚力の衰えと視力の低下でトラクターの上とはいえ、やはり恐怖。我が見浦牧場のトラクターはキャビンがない。最高 50 年前の年代物から2-30年の車歴を誇る強者たちだからキャビンなる高尚な設備はついていない。もちろんヒーターもステレオも影も形もない。したがって熊君に襲われたら作業機を振り回して抵抗しようと心に決めてはいるが、昨年はトラクターの直前を横断され、「何、熊か？」と驚いたのだから、作業中も進駐は穏やかではない。

今年は深入山ブドウ谷居住の熊君の行動が激しい。旧スキー場から氏神様の裏までが彼の行動範囲らしい。大体熊のけもの道は曲がりくねっているのが普通なので、この熊は斜面を直進している、私もはじめて見るタイプ。獲物をとらえるには効率的だろうがこちらの恐怖心は増す。

一方、刈尾山、六の谷居住の熊君は行動がおとなしい。もちろん隣接の見浦牧場の放牧場に痕跡は認められているが、牛群の動きは穏やか、やや安心して作業ができる。とはいえ藪の中に入る勇氣はない。もうすぐ秋、茸の季節だが指をくわえて傍観するしかない。

例年、道戦峠を越えて旧分教場付近に現れる刈尾山甲繫（コウツナギ）の熊君の消息は聞こえてこない。最近隣村の八幡地区で熊に襲われたと聞くから、今年は餌場を変えたいらしい。最も昨年捕獲されて射殺されたこの地区の熊は長年この地区に出没していた、巨大で年功の熊君だったそうで、後継の熊君はまだ知識の浅い若者かもしれない。

この他、三段峡餅の木付近から小板川に沿って遠征してくる熊君の消息は聞かないから今年は小板地区に出没する熊君の総数は2頭、例年に比較すると静か？である。

最近の新聞報道は、熊の生息数が増えたので来年は捕獲頭数を増やすと報じていた。私たちが熊君が増えたと感じたのはもう10年以上も前だから、都市近辺にも出没するようになってようやく行政が動いたというところだろうか。

熊君が生きていくには5キロ四方とか20キロ四方が必要との説があるが、小板地区のように捕獲して駆除されると翌日には次の熊が着任するというのは、以上な増え方といえる。自然保護と声高なNGOの連中もRCC（広島局）での私の主張には耳を傾けたらしく、最近では山にドングリを撒く運動もしている由、しかし大食漢の熊君の胃袋を満足させるのにはほど遠く、依然として身近に熊君を感じている。

この地方は自然がいたるところに残っていて、都会人が散策をするところ、ウォーキングの人、マイカーの人、道端で不用意に藪の中を覗く人が多い。
熊君の友人？を自認している私にすると、不注意に過ぎないかと心配する。そこに食物連鎖最高位の熊君が身構えていたらどうするのかと、余計な一言の声かけをしているのだが、事故にならないことを祈るだけ。

幸い、ここ2年は事故がない、と思ったら問題発生。出荷した肥育牛にクレームが発生。解体したら、スポット（内出血）があると連絡が来た。ところが原因が思い当たらない。全員で考

えていると、和弥（経営主）が、そういえば放牧地の牛群の動きが少しおかしい。熊か？と意見が出た。

さては、とスポットの出た牛舎に行ってみると、隣接する防風林の中が茂りに茂って格好の目隠しになっている。熊君、これを利用して牛舎を訪問、牛を脅かしていた。

あわてて藪刈りをして、不要木の伐採をして熊君の警戒心に訴えた。

おかげで来訪は途絶えたが、今度は旧国道の路上に脱糞を発見、次はどこに現れるかと戦々恐々。もっとも9月にはいつて早生のドングリが落ち始め、食べ物が増えた。今年は柴栗も豊作なので積雪までは大丈夫かなと思っている。

以上、熊君の友人？見浦牧場からの報告です。

2011.9.5 見浦 哲弥

TPP について(2011/11/4)

”衣食足りて礼節を知る”ということわざがあります。日本人ならよく知っている言葉です。世界の人口が 70 億人を超えた現在、この人たちに十分に食料を提供することが可能なのか不可能なのか、を考えることがこの問題の基本です。

私が子供のころは、世界人口は 21 億とか 25 億とかいわれていました。あれから農地の新開発や品種改良、農薬の普及などで食料の生産は飛躍的に増加しました。しかし生産の増加を上回る速度で人口が増え、食事の内容工場産農産物の需要も増加したのです。アメリカをはじめとした穀物輸出の主要国では余剰農産物が問題になったのはそう昔のことではありません。ところが最近では世界のどこでも余剰農作物の話はありません。その中で米が余ると大騒ぎをしているのは日本だけ、しかも食料の自給率は 40% をきるというのに、対策が後手に回って、足らなければ輸入すれば、との議論が主役なのは、農民の一人として空恐ろしい気がします。

私は敗戦直後の混乱を目の当たりにした老人の一人です。平時でも 5000 万人しか扶養できない日本列島に 8000 万の人間が押し込められたのですから、食料危機が起き、弱者が飢餓に追い込まれて死者が出たのは当然のことです。今でも広島駅の地下道に転がっていた餓死者の姿は脳裏から離れないのです。

政治は国民の衣食住を確保し、生活の安全を保障するのが仕事なのです。最悪の事態のとき、国内で自給できる食糧はどのくらいかを想定し、その対策を立てた上で貿易問題を取り上げるのが筋ではないでしょうか。今国内では農村が崩壊を始めています。社会が国家が適切な対応を怠ったがために農村から優秀な人材は流出してしまいました。政治家も評論家も農村再建のためには資金を投入して新しい体制を作らなければと声高ですが、現在の農村にはその受け皿の人材がないのです。農業教育で若者を育てるといいながら、教えるほうはサラリーマン、教科書の内容は伝わっても農業は伝わらない。作物にしろ、家畜にしろ、農民が相手にするのは命のある生き物なのです。教科書から抜け出さない限り、成果を手にすることはない。私が見てきた小坂の農業は作物や家畜をモノと見始めて崩壊していきました。牛の気持ちがわかる、稲と話がわかる、そんな言葉が消えていって田畑が荒廃し農家が崩れていった、そう認識しています。

貴方はデンマークとドイツが戦ってデンマークが肥沃な国土を失って、再建のため当時不毛といわれたユトランド半島を開発して肥沃な農地とし、国家の再建をした話を知っていますか？その主役は農民学校で育てられた農民だったことを、今の日本のように、農業技術を教えてそれで農民の出来上がり、とは違う、農民が主役だったことを。

「自然は教師、動物は友、私は学ぶことで人間である」は見浦牧場のモットーですが、現在の技術万能の農業教育では本当の農業者は育たない、そう思うのです。もちろん戦前の精神論を主張する気はありませんが、市場経済だから金儲けだけが目標というのでは、農業のような時間の積み上げが必須の産業は育たない、自然から学び、生き物の命から真理を読み取る、そんな農民が主役にならないと、日本の農村は再生しないと思うのです。

その視点から現在の農村を見ると、何のために働くか、何のために生きるか、目標を失っているように見えます。もちろん、子育て中のお父さん、お母さんは懸命に子供を育てていますが、その他の人は金、金と市場経済の亡者です。自分たちが誰に護られているかは頭にはない。何十年か前に小坂にもあった、集団で生きる、という考え方は消え去ってしまったのです。もちろん、昔のボスどもに苦い思いをさせられたことは忘れてはいませんが、一人では生きられない、集落、自治体、国家なくしては生き延びることはできない、の意識は感じるできません。

外国では集落、部族、宗教、国家などと集団意識が強いのに、日本人はどうしたのかと思うのです。長い間の平和ボケ、権利に偏った平和教育、数え上げればきりがありませんが、目の前だけに右往左往している、そのひとつが TPP だと思っています。

農業は国民に食料を供給するのが仕事、国民に餓死者を出さないための政治、それに答える農民、そのためには憲法を変えてでも新しい道を模索する、TPP をそんな契機にしてほしいと思うのですが、現状では不可能でしょう。何十年かして見浦という農夫が戯言を延べていたと伝わったら、それでよしとしなければと思っています。

2011.11.4 見浦 哲弥

私の恩師 榎野俊文先生(2011/2/26)

先生に初めてお会いしたのは、県庁の中島部長の会議室、当時先生は神石の油木種畜場の場長先生。

2度目はその数ヶ月後の油木種畜場で開かれた、多頭化一貫試験の講習会で。

当日、会場の種畜場についた私は、講習会が始まる前に事務所にご挨拶に伺ったのです。ちょうど先生が講師の技術員に指導についての注意事項の説明をされているところでした。話が済むまではと遠慮して事務所の外で待っていたのですが、聞くとともに聞こえてきたのは、「今日は受講者の中に大物がいます。手抜きをしないで丁寧に説明をするように」という言葉でした。うれしかったな。共同経営に失敗して、再び和牛飼育に挑戦を決めたのですから、少しでも自分の知識を補う、そのためならどんな努力でもする覚悟でしたから、ぜひともその大物氏を見つけ出して教えを受けたいと思ったのでした。

教室での講義あり、飼育の現場や、飼料畑の見学、牛の放牧状況の説明など、盛りだくさんの内容でした。ところが2日間の授業の間、注意深く観察したのに、問題の大物氏を発見できなかった。学んだ新技術は多かったのに、物足りない気持ちで帰途に着いたのを覚えています。その大物氏が、実は自分のことだったと知ったのはそれからずいぶんたってからのことでした。

それから問題が起きると試験場を訪問しました。しかし、備後の油木町は岡山との県境に近い、広い広島県をほとんど完全に横断するわけですから、辛いドライブでした。何しろ高速道路など存在しない時代、でも新しい技術に対する欲望は、まだ若かった私を駆り立てたのでした。

何度も私の文章の中に登場したお隣の芸北町農協が経営する、芸北大規模草地と呼ばれる大牧場の建設が始まったのが、再生見浦牧場のスタートと同じころ、5団地に分かれているとはいえ、220ヘクタールに及ぶ広大な牧場は、私には夢のまた夢、ここにも学ぶべき技術は存在するはずと、時間をつくっては見学に通いましたね。

当時はまだ珍しかった大型のトラクターをはじめ、外国製の農機具が勢ぞろい、山林や原野が見る見る畑になっていく、私には異次元の羨望の世界でした。

でも、和光農園解散の事後処理でお近づきになれた、県の畜産関係の幹部の方が場長として就任され、お話を聞く機会も増えました。

中島先生の会議室の一件以来、どの先生方も顔見知り、疑問点は丁寧に教えていただきましたね。

2代目から3代目に油木の種畜場の場長先生だった榎野先生が就任された、恩師が身近にいられたことで本部があった雄鹿原には足しげく何度も通いました。

先生には私のように熱心に教を請うた人間が2人いたのです。一人は私より何年か早く門をたたいた福山の中山さん、当時40歳前後だったと聞きました。彼が広島県で和牛の分野で大成功した中山牧場の先代社長さん、和牛を飼いたいのでと門をたたいたとか。先生の話聞いた彼は中年に差し掛かった自分には短い時間で学習するには実地に学ぶしかないと考えたとか。「それでの一、屠場の屠夫の助手になっての」と、先生が楽しそうに話されたのです。

屠場とは家畜の処理場のこと、家畜とはいえ動物の命を奪うところ、働く現場は異様な緊張の世界、その順列の厳しさは他業種では想像もできない厳しさがあるのです。40も過ぎた中年のオッサンが勉学のためとはいえ、最下層の助手として働く、少々の勇気では勤まらない、それを勤め上げて必要な知識を吸収して、牛を飼い始めたのです。

市場で子牛を買ってきて、15ヶ月から20ヶ月あまり太らせて市場に売る、肥育牛経営という方式に取り組んでまもなく、一番利益が上がるのは解体して消費者に直接売る最終段階だと気がついた彼は直販事業を立ち上げたのです。既存の精肉販売業者の様々な妨害を受けながら道を切り開いて成功への道を登ったのです。

私は中山さんの後に榎野先生に入門した2人目の民間人の弟子になるのです。

先生の2人の評価は、中山君は商売人での一と、あんたは農業にこだわる百姓での一、が先生の口癖でした。時は農民が高収入を目指して突っ走る時代、新分野を切り開こうと苦難の道を歩き続ける弟子を暖かいまなざしで見つめていてくださいました。

中山さんの仕事も大変でしたが、和牛の放牧一貫経営も理想とは違って困難の連続でした。仲間たちが脱落し、公営牧場が閉鎖していく中で、場長として芸北大規模草地の後身の公営牧場を経営された先生は、試験場で立案され試験された基幹技術が小さな周辺技術の集積がなければ成り立たないことを痛感されたのです。

そしてあるとき私に頭を下げられました。「見浦君、申し訳なかった。」と。驚いて何事ですかとの私の問いに「実は新しい牛飼いがこれほど難しいとは思わなかった。簡単に勧めて苦勞をかけている。本当に申し訳なかった。」と。

先生が油木の種畜場の場長だったときに開発、実験された”多頭化放牧一貫経営”、この方式を選んだのは私自身でしたから、苦勞するのは自分の選択の結果、他人を恨んだことは一度もない。それを先生が自分の責任のように感じて頭を下げられた、この先生の優しさが見浦牧場の精神的な支えのひとつだったのです。

退官されて西条の実家にお帰りになりました。先生の実家は西条の中堅どころの酒造メーカー。「酒屋が傾いて仕方なしに役人になった」と話しておられました。

西条は仕事の合間に訪問するには少し遠い、でも、来場される部下だった方々に近況をお聞きすると、年をとられて物忘れが多くなられてとのこと、お元気なうちにお伺いしなくてはと時間を作っていました。

酒蔵に隣り合ったご自宅の縁側におられた先生は目を丸くされました。「覚えていらっしゃるでしょうか」と申し上げると「見浦君じゃー、忘りゃーせんよ」と答えられました。

近況を報告して雑談をしばらく、楽しそうに話される先生は昔と変わりありませんでしたが、お年を召されたの感じは否めませんでした。

「また遊びにこいよ」との言葉が先生との別れでした。それからまもなく老人性痴呆症が始まったのです。旧部下の方々が、「もう俺の顔がわからなくて」と話されるのを聞くのが辛かった。そのうち、何ヶ月も前になくなられたとの訃報が伝わってきました。油木の場長先生の時に所員に「今日は大物の講習生がくる」と話していた先生、「すまん、和牛がこんなに難しいと

は知らなんだ、それを勧めて」と詫びられた先生、その温顔が私の心の支えのひとつでした。

初めて中島先生の会議室でお会いしてから50年近くになります。

先生、見浦はまだあのときの先生の夢を追いつけています。

2011.2.26 見浦 哲弥

文章を書く 2 (2011/8/28)

取りとめのない文章を書き始めてずいぶん時間が経ちました。書きためた短文は50を超えました。時折読み返すと現在の自分があのこととは頭が鈍っているのがよくわかります。私も例外なく終末に近付いている。書き残したいことが山積みになっているのに。

しかし、徒然とは言わないまでも、読み返すとなかなか面白い。平凡と思い込んでいた私の人生も小さいながら、山あり川あり谷ありで結構波乱万丈、こんなことは誰もが経験しているのだろうが、記録していないと石の下、物言わぬ墓となって忘れ去られてゆく。

友人のH君は老境に入り始めて自分史や小板の歴史を記録するとて、高いワープロを購入。意気込みは良かったが操作の習熟で躓いた。読み書きそろばんの教育が昔人間の彼には最新の電子機器は異次元の世界だった。おかげで高価な機械は使われずに押し入れの中、したがって、彼の記憶も体験も墓の下、もう面影もおぼろになった。

そこで登場の私の文章、目的は孫に読ませる、が気がついてみると、小板の歴史の語り部の役割も担っていた。

ところが人間は弱いもので都合のいいことは書きやすいが、後ろ向きの話は筆が進まない。「大畠は人の悪口を言う」とは若いころからの私への批判、あいつもこいつもと抗議してきた顔を思い出す。忘れてほしいだろうなと思うと筆が止まる。それでは真実の記録にはならぬと気力を振り絞るのだが弱気に。ここにも人生の終わりの兆候が出てきたような気がします。

さて、そういうことで

たとえマイナスでも、悪口ととらえられても実際に起きたことは勇気を出して書くことにします。公開するかどうかは別にして。

小板集落の記録屋としての役割も果たすことを目標に。。請うご期待。

2011.8.28 見浦 哲弥

非常識（2011/9/2）

小坂は中国山地の小さな集落です。ところがここで起きた非常識が日本という国でも起きて、世界中の笑い物になっています。日本国崩壊の兆しかもしれません。今日はそういう話を聞いてください。

人間は集団で暮らす生き物です。集団は必ずリーダーを選んで行動します。見浦牧場では大きな牛から生まれた子牛まで100頭余りの集団で放牧しています。牛は集団で暮らす動物。彼らもリーダーを選んでその行動にしたがって暮らしています。何しろ猛獣の月の輪熊が出没していますから、彼らも命がかかっています。

とはいえ、日本の農村には牛を子牛の時から集団で飼う農家はありません。ですから私たちも最初は1-2頭飼いの農家から子牛を集めて牧場をはじめたのです。集団で暮らすのは牛の本能ですから、経験のない彼らでも集団で暮らすようにはなりましたが、問題が山積みでした。

その一つにリーダーの選び方がありました。牛も動物ですからリーダーになるためには力比べてをして勝たなければなりません。集団とは言え、人工授精が普及した現在ではブルと呼ばれる雄の成牛はいません。受胎のための精液は液体窒素の魔法瓶のなか。したがってリーダーは雌の成牛同士で争われます。角と角を突き合わせての力比べ、ぶつかったときは心配になるほどの音を立てて力負けして後ろに下がったら勝負ありで順位が決まるのです。

最初の頃は勝負がついても突き合いをやめず、怪我をすることが再三でした。除角という角切りが必要と指導されましたが、何代か経つと変化がありました。勝負がつくとそこで喧嘩は終わり。無駄な争いはしないようになりました。

自然は素晴らしい。動物には学ぶところがある。”自然は教師、動物は友”の見浦のモットーのそのまです。

この他に、集団の進化につれて学ぶ点が増えましたが、それは後ほど報告ということで。

見浦牧場がスタートした頃は深入山にあった共同の放牧場が機能していました。小坂分は面積が145ヘクタール、山の反対側に松原集落の放牧場が隣接していましたが、こちらは集落に牛がいなくなり、早く廃場になりました。

放牧場は1-2頭の役牛を田植えが済んだあと等に放牧するという形で利用されていたのです。そのころは牛たちは牧場の中では5-6頭の小さな群れで行動していました。

時々群れから外れた牛が行方不明になる事件もあって、牛飼いが総出で探すなどのハプニングもありましてね。

私が覚えている4件は、急斜面の小道を通って谷の奥に入り出られなくなり草を食いつくして痩せこけた2頭連れ。幅の狭い谷に入り込み、向きが変えられなくて立ち往生していた牛が2例、そのうちの1頭は餓死していました。それから、地下水のトンネルを踏みぬいて穴に落ちた牛、これは深入山に遠足で登山した小学生が偶然発見して大騒ぎになりましたっけ。そのほか見浦の牛も牧場から連れ帰るのに歩き辛そうにする、とうとう家まで500メートルのところで走行不能、獣医さんにみせたら腰骨にひびが入っていて廃用、そんなこともありましてね。

しかし、この集落も牛がいなくなって、放牧しているのは見浦の牛だけとなり、様子が変わり

ました。どう変わったか？集団が大きくなったのです。

最初は2頭だけで脱走して他家の山に入り大騒ぎになりました。次は1頭が群れから外れて反対側のキャンプ場に現れ、熊に間違えられたこともありました。牧場から帰る時、リーダーに従わず雪の中で食べるものもなく痩せこけて集落の辺まで帰ってきた若い牛もいました。

これらは集団で暮らすという牛本来の習性を忘れた牛たちが起こした事件でした。ところが生まれて1週間ごろから仲間を探す習性の牛たちは、成長するにつれ集団生活のルールを本能の中から呼び起こしたのです。

でもリーダーを選ぶ本能が本格的に目覚めてくるのには、それからもう少し時間がかかりました。牛は力の強い順に見事な順列を作ります。順列の低い牛が上位の牛のえさ箱に頭を突っ込んだら、思い切り突き飛ばされる、そんな力の世界なのです。

最初の頃、力の強い乱暴な牛がリーダーになりました。気に入らないと追いかけてとことんまでやっつける。それでも黙って従っていた牛たち、やっぱり畜生じゃなと思いました。

ところが何年かして彼女は体力が落ち始めました。そして力比べにやぶれました。と3番目の牛が喧嘩を売りに登場しました。懸命に応戦したリーダー、しかしすでに1戦して体力を消耗しています。負けるべくもない戦いに敗れました。それを見ていた4番目が挑みました。そうして次々と挑戦者が登場、とうとう最下位の牛にまで敗れる始末、前日まで牛舎の最上席で寝ていたリーダーは、吹雪の吹きさらしで震えていました。

” いいあさひめ号 ” という中型の牛がリーダーになりました。気持ち優しい牛で自分の餌箱に頭を突っ込まれても角を振って追い払うだけ、追いかけていくことはありませんでした。

私たちは牛でも手加減を知っている牛がいる、と感心したものです。

彼女も年を取り、リーダー争いに敗れました。順列が下がりましたが、驚いたことに下がり方が2－3位でした。彼女はリーダーでなくなっても畜舎の最上席ではないにしても、風の当たらない屋根の下で寝ていました。優しさは自分のためなのだと理解したのはこの出来事からでした。

リーダーの必須条件の一つは他人に対する優しさだと思います。ところがそれだけでリーダーとは認められない、もうひとつの大きな要素があります。それが集団が生き延びてゆくための必須条件ですから。

私が書いた ” 愛国心を考える ” という文章があります。その中に猟犬が子牛を襲った話を書きました。その時の牛群のリーダーの取った行動が、リーダーとはかくあるべきと教えています。次に引用してみましょう。

” 何年前か前、猟犬がイノシシを追って牧場に入ったことがあります。気がつくと、牛が大騒動をしていました。すわ何事と眺めると、近所の猟師が連れた3頭の猟犬が、子牛を追いかけています。猟師の話によれば、2キロほど離れた道戦峠で猪の足跡を発見して追跡しているうちに、牧場に入ったといえます。犬達は、そこで子牛の集団を発見して、追跡の相手をかえたのです。興奮した犬達は主人の制止にも耳を貸さないで、悲鳴をあげる子牛を追いかける、それを守ろうと母親が走り回る。すると、それに気づいたリーダーが、群を集め始めたのです。子牛を中心にして、育成牛と呼ばれる若者の牛、お母さんに成り立ての若い牛、と群れ全体が輪になり始めたのです。壮年の牛は1番外側で角を外にむけて。

まるで、アフリカの草原の映画を見ているようでした。そして、ボスや幹部級の牛が、3－

4頭で猟犬を追いだしたのです。大きな牛が頭を下げて突進して来る、猟犬も悲鳴を上げていましたね。”

リーダの必須条件は緊急の時に何が大切で何が優先するかを瞬時に判断して行動する、この能力を欠かすできないことができないのです。前述の事件では子牛を守ることが最優先でした。その次は何をするか……、その時の牛のリーダの行動は私に大切なことを教えていました。

後年、戸河内農協の組合長になれば、理事さん数人から話がありました。もちろんその任ではないと断りました。牧場の仕事をやめるきはありませんでしたから、考えたこともなかったからです。

戸河内のような小さい町では、一番偉いのが町長さん、次が議長さん、農協の組合長の順序で、町民が一步譲る存在、それを言下に断るとは何事と思われたようです。先輩の幹事さんが後年「あの時はあんたでよかったのに」と述懐された時は返す言葉がありませんでしたが。

しかし、お断りしたのは牧場のこと以外に私の性格がありました。前述したようにリーダは緊急時には瞬時の判断が必要。ところが、私は理詰めの理科系の人間、瞬時の判断は自信がありません。遅れた判断は集団の破綻と牛に教えられています。黒子として働くなら役立っても、トップになれば集団の足を引っ張りかねない、そう信じていたのです。

そして、2011.3.11、東日本大震災が起きました。そして福島原子力発電所の大事故が発生、リーダの瞬時の判断が必要な事件が起きました。日本という集団の浮沈を決める大事件です。ところが最高責任者の管総理大臣はリーダの本質を理解できていない政治家でした。理系の大学卒を自負していた彼は、正確な判断をするためと称して自分で確認したり、意見を聞き歩いたりで、時間を浪費したのです。結果は原子炉のメルトダウン、建屋の爆発、放射性物質の拡散と最悪の結果をもたらしました。

さらに、自分の行動を正当化するためのいいわけに終始して6カ月を無駄にしました。ようやく辞任した彼が四面楚歌だったとつぶやいたとか、言ったとか。

史上最悪の宰相と評価されたのはたった一つ、彼が緊急時に瞬時に正しい判断を下すというリーダの必須能力を持てていなかったせい、もしくは持とうとしなかったせい。

無能ではない彼が、集団が生き残るための必要な人材の意味を理解して、その才能を生かしてくれたらと思うのは買いかぶりなのでしょうか？

2011.9.2 見浦 哲弥

敬老会(2011/9/15)

2011.9 今年も敬老会の季節になりました。

昔は年寄りはおどちらかといえば役立たず、邪魔者扱いでした。ところが日本が経済大国と発展するにつれ、功労者として大切にしろとの政府からのお達し、そこで始まったのが敬老会。

当初は小学校分教場の運動会に便乗、教場の窓際に設えたひな壇に座らせられて、婦人会の手作り弁当をいただくという敬老会が出来上がりました。

当日の接待係は婦人会長と部落長さんと決まっていた、自分の子供が運動会の主役というお母さんはいい迷惑、他家のお父さん、お母さんが子供と運動会を楽しんでいるのを横目で見ながらお年寄りの面倒をみるという、行き過ぎた敬老会でした。

そのうち分教場も本校に統合されて、小板に運動会もなくなりました。それでも9月15日が来ると分教場の教室に年寄りが集められて手作り弁当をいただくという構図は続いたのです。でも想像してください。子供たちがいない教室で年寄りがぼそぼそと世間話、世代が違う接待係の部落長さんと婦人会長さんが、仕事や家事や子供に気をやりながら貴重な時間をつぶす、今考えると昔の出来事や集落の歴史、仕事の内訳など貴重な知識を聞くための大切な時間だったのですが、そこまでは気がつかなかった。

そんな時代の部落長を押し付けられて、「今年も敬老会かー」とため息をつく私に家内の晴さんが例のごとく一言、「そんならホテルでやったらええ、飯を食って風呂へ入って、気兼ねがなくて、年寄りは喜ぶで」。

4キロばかり離れた深入山のふもとに”いこいの村広島”という年金基金で建てられたホテルがある、それを利用はできないかとの彼女の提案は、いつものことながら的を得ていました。

いわれれば招待されるほうも気兼ねしている、接待係とは年代が違って話題も少ない、そんなシステムより、日常と違った食事をし、お風呂に入っているのんびりできる、忙しい現役の人間がいらいらしながらの接待よりは喜ばれるかもしれない、そう思いましたね。

後は費用が問題。役場から敬老会用と支給される金額はそう多くはありません。送迎用のマイクロバスの派遣を含めてホテル側と交渉、やりくりで何とかできるとわかったときはうれしかったですね。

最初のホテルでの敬老会は好評で、おまけの食事後の入浴は大好評、参加のお年寄りから「よかった」とお礼を言われましてね。

ところが、反対派のボス連中は大批判、見浦は集落の行事を独断で変更した。民主主義をいい始めたのは見浦ではないか、それが民意を踏みにじったと喧々囂々の騒ぎになりましてね。これは予想外の反響でした。

でもこの件では主役の接待を受ける老人たちが喜んでいるのだからと、ほっかぶりを決め込んだのです。おかげでますます反対派の評判は悪くなりましてね。が私の任期中はこの方式で敬老会を押し通したのです。

さて、後任の部落長に反対派のボスが就任、早速見浦色一掃に乗り出しました。中でも敬老会

改革？は世論（小さな集落でも世論はあります）の支持を得る最短距離と意気込みなすった。

そこで最年長の某おばあさんに、今年からは敬老会は旧方式で行いますと通告したといいます。ところがそのお婆さんが怒った。「のんびりできて、お風呂まで入ってるのに、どうして変えなきゃならん。わしゃ一反対ぞ」と「実は前々回から敬老会をホテルでやると決めたのは見浦の一存で、部落の決めでなかった。それで元に戻したいから」と返事をしたとか。ところがこのお婆さんは小作人をしながら、貧乏の中で営々と5人の子供を育てた気丈者、そんな答えでは引き下がらない。「敬老会は年寄りを慰労する会ではないのかい？部落のために開く会なのかい？わしゃ一見浦さんの敬老会のほうがええ」と譲らなかったとか。

この一言で小板では、敬老会はホテルで食事してお風呂にはいってマイクロバスで送迎してもらう今のシステムが確立したのです。

反対派のボスたちも敬老会に招待される年齢になりました。今日は敬老会とご夫婦がお迎えのマイクロバスに乗られる風景を遠くから見て昔を思い出して複雑な気持ちになりました。

でもこれが底辺の庶民の素直な姿、それを理解し、それでも支えていかないと小さな集落は成り立たない。私もそれが理解できる年齢になりました。人の世は複雑で面白い。命の終わりまでそれを楽しんで生きようと思っています。人生万歳。

2011.9.15 見浦 哲弥

ある老人の死（2009/8/15）

2009年4月21日 牛の出荷で三次にいった息子の和弥が「親父さん、空城の新田さんで葬式があるらしい。今晚お通夜とあったで。」と。

翌日、雄鹿原の大工の斎藤さんが立ち寄りました。新田さんの葬式の帰りだと。

そこで初めて新田さんの死亡の原因が判明したのです。家の後ろにある雪の溶解用の池で死んでいたと。

彼との付き合いはひょんなことから始まりました。3年前、芸北の森林組合からおがくずを引き取って帰る途中、道路の真ん中でミニショベルを転倒させて悪戦苦闘している老人を見たのです。見過ごして通過するわけにもいかず、手伝ったのですが、ミニとはいえど重量物、人力ではいかんともしがたく、帰宅してタイヤローダーを走らせて起こしてあげたのです。

その次が難題の解決、小板の一番下流にある今田さんというおばあさんが住居の改修を新田さんに頼んだ。改築して40年ばかり経た家は、床下の根太の交換から始まって、修理すればきりがない。古い大工の新田さんが、ここも、ここもと修理と仕事が拡大、手持ちの貯金が底を尽き始めて娘さんから苦情が。「どこまで家にお金をつぎ込むのか、病気になっても面倒をみるのはお断り」と宣告され、工事の中止をしたいのだが、大工さんにそのことを話して解決してもらえないか、という難題。田舎は変な、それでいて難しい頼みごとが舞い込むところなのです。

自分で撒いた種、自分で解決しろというのは簡単ですが、相手が80歳を越しているおばあさんとくれば、そういうわけにもいかず、ここまでかかった費用は完成していない分も含めて支払うことを約束させて交渉した、そんなこともあったのです。

私はご存知の通り、ざっくばらんな性質、ばあさんと話し合っただけで決めた仕事の邪魔をするのかと文句をいう新田さんに、娘さんの苦情の話をして80の年寄り、万が一病気になり娘さんが面倒を見ないということになれば、貴方の立場も難しいことになりかねない、仕事のお金は未完成の部分も含めてもらってあげるから手を引いては、と。

そして彼の出した請求書のとおり支払いをしてあげたのです。ところが何が気に入ったのか、それから何事かがあると”見浦さん”と訪ねてくる。自動車の調子が悪いと相談にきたことや、怪我をしたからと病院に運んだこともある。子供さんが2人もいるのにね。

友人たちが「一の隣だけえ、仕方がないの」とからかう始末、確かに6キロ離れてはいるものの、道路をたどっていけば確かに隣人でした。町村も集落もちがってはいましたがね。

最後に会った時は、「見浦さんには世話になってばかりだが、一番気兼ねがなくてね」と話していました。歯に衣着せぬ私のしゃべりも彼は裏がないと受け取っていたのでしょう。

怪我也も病気も切り抜けた幸運も思いもよらぬところで切れて、想像もしない終焉を迎えてしまった。ご本人も驚いたでしょうが、妙な縁で友人？になった私にも生きることのよろさを教えられた別れでした。

2009.8.15 見浦哲弥

ミミズの話（2011/5/22）

見浦牧場の堆肥の中にはミミズがたくさんいます。

これはシマミミズという品種で、お父さんやお兄さんが魚釣りに使うミミズです。

このほかに、もっと大きなミミズ、普通の土の中に住んでいるものや、ヤマミミズといって30センチにもなる大きなミミズもいます。

ミミズは土の中の堆肥などが餌です。端っこに口があって反対側にお尻があります。口から食べた堆肥はお尻から土になってでできます。出てきた土はお花や野菜の最高のご馳走なので、ミミズのいる土では植物がよくできます。

ミミズのいない畑では土が固くて小さな草や花しかできません。でも1つだけ都合の悪いことがあります。モグラです。

モグラはミミズが大好物、トンネルを掘って畑の中に入ります。トンネルを掘られたらつぶしてください。それでもだめならおじいさんに頼んでモグラ取りで捕まえてもらってください。

堆肥を入れるとミミズが増えます。そしてミミズが作った土が増えて、お花や野菜がよくできるようになります。土の中に堆肥がなくなるとミミズは死んで土になります。いい土をつくるミミズがいなくなると、お花や野菜ができなくなります。ですから毎年堆肥を入れてやると、土はどんどんよくなります。

ミミズは気味の悪い生き物ではなくて、大切な仕事をしている生き物です。大事にしてやってください。

2011.5.22 見浦牧場

金城牧場（2012/1/20）

金城牧場は島根県の旧金城町にあります。見浦牧場がまだ十数頭の規模だったころに建設された、面積140ヘクタールの大牧場、牛飼いの知識吸収に血眼になっていた私たちが何度も訪れた学んだ最新鋭の牧場でした。それが廃場になり、今年は完全に解体するという。先日中国新聞の社会部長だった島津さんが来場され、人生の集大成に中国山地の近代史を出版する。そのために取材している。でも、調べれば調べるほどこの地方の和牛牧場の変遷が理解できなくなる。どうしてだろうと嘆いていたのを思い出すのです。

私たちが和牛の牧場建設に挑戦をはじめたころ、この周辺でも公営、私営の大小の牧場設立されました。

全国的に紹介されたのが芸北町の大規模草地、4箇所に分断していたものの220ヘクタールの大牧場、吉和村（現在の廿日市市）には農協が経営した、樫の木森林公園の前身の400町歩の和牛牧場、豊平町（現在は北広島町）の20ヘクタールの牧場、等々。

町内の寺領にも20ヘクタールの放牧場を持つ個人牧場が開場されていましてね、小板も60ヘクタールを開墾して和牛を飼う計画でした。そのいずれもが試行錯誤の末に倒産、廃業していったのです。

その中では大規模草地が経営が農協から県営に変わって、一番長く続いたのかな。

これらの失敗を見て始まったのが金城牧場。農民5人の共同経営の形で自己資金5億円、国や県の補助金が20億円、700頭の母牛で子牛から肥育牛までの一貫生産が目標で、前述の広島県の各牧場に比べたら比較にならない近代的な牧場を作り上げたのです。前車の轍を踏まない万全？の牧場をね。

林立するタワーサイロ、清掃も給餌も機械化された畜舎、汚水の草地への自動散布等々、最新の農業機械はいうに及ばず、新築の従業員宿舍まで何から何まで完備していました。制服の若者がきびきびと作業をする牧場は本当にまぶしかった。

最新の農業誌のグラビアが目の前にある。違うのは平原ではなくて、傾斜のある山麓ということと、牛が日本独特の和牛ということだけ、その当時は農業は気象風土の産物で、条件がひとつ変われば仕組みも大きく変わる、変えなければ成立しないということを指摘する人は少なかったのですよ。

でも何かがおかしかった。私の書いた文章に「背負うた子に教えられ」という一文があります。その中に当時小4だった息子の和弥を連れて見学に行ったときのことが記載してあります。抜き出してみましよう。

”その時は、小学4年の和弥が一緒に、曇り空の少し寒い午後でした。金城牧場は牧場とは名ばかりの見浦牧場とは違って、200トンのタワーサイロが立ち並び、最新の外国製の大型機械が勢ぞろいする近代的な牧場、子供の和弥も興味津々でした。

「父ちゃん、これは何？」「これはな、ブローアーゆうて、刻んだ草をあのサイロの上まで吹き上げて詰め込む機械や。あのサイロはな、高さが20メートルもあるんよ。見浦の機械は5メートルも上げると詰まって大変だがな、大きい機械はすごいんよ。」「中の草はどうして出すん？」

「一番下にな、アンローダーちゅう機械があつての、掻き出すんよ。ここじゃー、その草をベルトコンベアで運んで畜舎の餌箱に自動的にいれていくんよ。」彼はだまって説明を聞いていました。やがて、おもむろに「父ちゃん、それなら牛の病気はどうして見つかるん？」

衝撃でした。ハンマーで横っ面を張り飛ばされた、そんな一言でした。

その視点で施設を見直すと、なるほど工場のような雰囲気です。この牧場を訪問する度に感じていた違和感はそれだったのです。

命ある家畜を無機物の機械と同じ感覚で扱うのは間違いではないか？

見浦牧場のモットーは「自然は教師、動物は友、私は考え学ぶことで人間である」です。この標語が生まれたのはこの時なのです。"

私たちの牧場では、牛の集団の中に入って比較しながら異常を見つけています。もちろん人間のやることです。ですからパーフェクトは期待できませんが、効率のよい観察方法だと自負しています。

見浦牧場では牛は友人なのです。事故があれば損益の前に心が痛みます。それが牛飼いなのです。

牛は生き物です。考える頭をもった高等動物です。私たちより知能が劣るとはいえ生き物としては仲間なのです。ただ、家畜として人間が利用させてもらっている、これが私たちの基本の考え方なのです。

そういえば前述の各牧場はいかにして牛を飼って利益を上げるかがすべてでした。近代的な畜舎も省力が主眼で、牛の環境は二の次でした。彼らは生き物、生きるための環境は企業経営の利益の追求と共に整備してやらなければなりません。見浦牧場ではそれを自然に近づける、放牧という形で追い求めているのです。

何回目かの訪問のときに、サイロのそばで仕事をしているメンバーの人と話す機会がありました。私たちの質問に答えられたあと、「このサイロの草を取り出す機械がよく故障して」と話始められました。サイロの下に取り付けられたアンローダーが詰まって草が出なくなると。

元々タワーサイロはトウモロコシサイレージの貯蔵装置として開発された機械、それを牧草用に転用するには運用する方法を再検討する必要がある。電気工学を学んだ私にもそのくらいのことはわかります。

「故障すると大阪からメーカーのサービス員が来て何日も修理にかかる。一遍故障すると50万円ぐらいかかっての」と暗い表情で話された、そのときこの牧場は成功しないかも、と漠然と思ったのを覚えています。

その翌年、農水省の山本課長が視察においでになりました。いろいろ見て歩かれ質問され、最後に「見浦君、島根の金城牧場を知っているか」と尋ねられました。「よく存じています。一時間ぐらいの距離ですから勉強のため何度も伺いましたから」とお答えすると「実は経営がおかしくなって再建を考えている。君ならどういう方法をとるか」と聞かれたのです。まだ若かった私は思ったことを素直に口にしました。「日本は南北に3000キロ、高低差1500メートル、そんな様々な条件の中の農業なのです。牧場も千差万別の自然環境の中での経営です。それをもっともよく知っているのは地元の農民、その知恵を大事にしないと再建は難しいと思います。」と「そうか、そう考えるか、手元にある再建計画はきれい過ぎるな。これは農家はかか

わっていない、お役人の仕事だな」とつぶやかれたのが印象に残っています。

2－3年して再び金城牧場を訪問しました。県営の畜産事業団に変身した金城牧場に。工場のような牛舎は見慣れた一般的な畜舎に変わって、牛がひしめいて活況を呈していました。しかしそこには私たちが求めていたきらめきも先進性もありませんでした。ただ巨大なだけ。もうここには学ぶべきものはない、そう感じたのを覚えています。

使われずに放置された機械がやけに目に付いた、それが私の最後の印象でした。

帰り際に、気になっていた経営主体だった農家の消息をお聞きしました。係員の方が牧場の片隅の建物を指差して、「あそこで豚を飼っている。豚は牛と違って回転が速いからね。」と。

これが私の金城牧場についての記憶のすべてです。

前述の島津先生の話で思い出して、インターネットで検索すると、島根県が今年中に完全に整理するとありました。Google map で探すと建物群はまだ残っていました。できれば消滅する前には訪ねてみたいと思っています。見浦牧場の思い出のひとつですから。

2012.1.20 見浦 哲弥

こがーなお客さんがおるんじゃけー(2012/2/3)

時折、広島の大きな電気店のチラシが入ってきます。広島という地方都市を拠点として全国展開をしている有名な電気店です。そのチラシを見るたびに50年あまり前に聞いた「こがーなお客さんがおるんじゃけー」とお店の隅から聞こえた声が蘇るのです。

貴方は再販制度というのをご存知ですか？メーカーが販売価格を指定して系列店に商品を卸す制度です。戦後確立したこの制度で消費者は大メーカーの品物はどこで買っても同一価格、そして今考えると想像もできない高い価格を押し付けられていたのです。たとえば子供が広島に下宿することになり、扇風機を買ってやりました。20センチが9000円、1-2年後に30センチの扇風機が4000円で買えたときには、詐欺まがいの価格設定だと憤慨したものです。

発足当時、第一産業という社名だったこの会社は全国から倉庫に眠っている商品や過剰在庫の商品を買い集めて安値で販売してくれたのですから、貧乏な私たちには救いの神、早速熱心なファンになったのは言うまでもありません。

しかしながら第一産業は広島市内にある。当時は広島市まで行くのは役場のある戸河内まで約20キロの山道を歩いて、そこからボンネットバスで3時間、おいそれとは行けない遠い遠いところでした。

あれは昭和29年かな、何の娯楽もない雪の中、ラジオを聴いて寝正月と決め込んだ元旦にそのラジオが故障、戦後素人が組み立てた安物のラジオで修理がきかない。困りましたね。家中のお金をかき集めても1万円弱しかない。町の電気屋に頼むと2万円前後もする。まだ何もかも品不足の時代で何もかも高かった。

この手持ち金では安売りの第一産業にいくしか方法がないと思い込んだのです。

当時は私も20代前半、血気盛んでした。思い立ったら即実行。80歳を超した今では想像もできません。お正月の2日というのに広島に出かけたのだから。現在はお正月の初売りは2日が当たり前で元旦から開いているお店も珍しくありませんが、当時は正月三が日はお休みと決まっている。食べ物やも休業が当たり前でした。それも忘れていたのですから頭に血が上っていた。

広島に着いたのは昼過ぎ、紙屋町の第一産業に駆けつけると大戸が堅くしまっていました。そこで初めて正月は休みだと気が付いたのです。休みでしたと手ぶらで帰るには小坂は遠すぎる。えーいままよと潜り戸をたたきました。大声で「こんにちは」と何度も呼びながら。

暫くたたくと「何ですか」と声がして壮年の男の人が顔を出しました。「ラジオを売ってください」と言うのと「今日は休みです」との答え。当たり前です。でも朝早くから一日ががりが出てきた広島、「はいそうですか」で引き下がるわけにはいきません。実はこういうわけでと説明して、何とかありませんかと食い下がりました。暫く考えた男の人は「そんな理由ならお売りしましょう」と店内に入れてくれました。「その棚がラジオです。お好きな品を選んでください。」言い終わると商品棚の陰に消えたのです。

照明の消えた店内は明かり窓の光だけ、目を凝らさないと何も見えませんでした。
やがて目が慣れて棚の上の商品が見え始めました。バラックのお店とは家山形の山奥まで名前
が通った第一産業、いろいろなラジオがありました。そのとき、品定めに懸命な私の耳に聞く
ともなしの声が聞こえてきました。人がもう一人いたのです。男の人が。
「もう一度やろうや」「そうはゆうてもの一」・・・その繰り返しでした。
「正月にの、山県の山奥からお客さんが第一産業いうて訪ねてきてくれる、わしら一間違うち
ゃーおらん。こが一なお客さんがおるんじゃけー、お客さんのためにもう一度やってみようや。」
「そうよの、お客さんが来てくれるんじゃけーの」

聞くとはなしに聞いた話、ラジオが買えた嬉しさに気にも留めませんでしたが、帰宅して新聞
を読んで驚いた。第一産業は年末に倒産していました。

家電メーカーが価格をコントロールできる再販制度を維持するため、製品の出荷停止を含めて
様々な圧力を加えたといいます。一地方の小さな販売店が抵抗するには規模の差があまりにも
大きかった。独禁法が当たり前の現在では想像もできませんが、それが現実でした。
私が訪れたとき、第一産業はそのどん底にあったのです。そうするとあの会話は？

聞くともなしに耳に入った会話、そうです。もう一度大企業に挑戦しようとしていた、社長さ
んと腹心の重役さんとの会話だったのです。それから何年かすると、また第一産業の看板が上
がりました。小さなお店だったが嬉しかった。

貧乏な私たちはささやかな品物しか買えなかった。でも電気製品を買うときはまず第一産業で
した。耳の奥に残る「お客さんがおるんじゃけー」の言葉に促されて。

第一産業は社名がデオデオに変わり、エディオンに変わり今では日本でも3本の指の中に入る
まで発展しました。先々代の「お客さんがおるんじゃけー・・・」の言葉を忘れない限り、ま
だ発展するでしょう。偶然めぐり合った小さな接点、若かった私には生涯の勉強になりました。

2012.2.3 見浦 哲弥

老化を自覚させられた事故(2012/3/15)

2012.1.31 とうとう大事故を引き起こして若い連中に迷惑をかけています。私の脳の劣化を自覚させられた事故です。

朝最後に残った牛舎の（上）の除雪にパワーショベルを移動することになりました。いつものことで一人で自走を始めたのですが、前面新雪で川と道路の境は判然としない。いつもなら降車して足場を確認するのに、山側が見えるから皮までは距離があると思い込んで進行して土手を踏み抜いて横滑り、小川に転落した。何しろ10トンあまりの重量の機械ですから大変、日ごろおは用心していたのにと後悔しても後の祭りでした。

例年は地表が凍結し、踏みつけられた雪も氷になってなまじ地表より堅く、川の上の雪上でも作業ができたのが、今年は地表が凍っていない、雪面は凍っていても地表との境は土も雪も凍らない異常現象が起きていたのを頭が忘れていた。先日も今年の雪は異常だなと確認していたのに、そのことは頭の中から完全に消えていた。そして川岸によりすぎて転落した。

驚きましたね。ショベルが突然横滑り、そのまま小川の中に横転した。最初は何が起きたか理解できなかった。幸い体の一部を打撲しただけで頭はなんとか正常、機外へ出て川からよじ登って驚いた。深さ2メートルの小川に見事にはまりこんでいる。漏油しているかと真っ先に川を覗き込んだが幸い点滴ぐらい。それを確認して家へととんで帰った。

時は厳冬、粉雪がちらつき、気温は零下。私の機械事故の中では最大の事故。老化による思考力の退化を痛感しました。

バケツ容量4.5のショベルは重量が10トンばかりある。引き上げるには大型のクレーンが必要。戸河内の中前石油に依頼したら全機種出払って、手元にあるのは小型車のみで都合が付かない。それにクレーン車は雪道に弱くて積雪があつては協力はできないと。

こうなると智恵を振り絞ってでも自力であげるしかない。隣家の島川君の協力で息子と3人、あーでもない、こうでもない雪の中で悪戦苦闘、これが目下の現況、あきらめないのが見浦の身上だが、さすがに頭が痛い。

ところが今年は2月にはいっても連日零下何度が続いて作業にならない。春先の出水を考えると胸が痛むが、手のうちようがない。ついにあきらめて正式に引き上げを依頼した。路面の雪が消えたら作業をするとの約束で、心は急くが他に対策のしようがない。現場を見に来てくれた土建屋さんは護岸を破壊して引き起こしてあげるかと提案、しかし、公共物の破壊は修復しておくとはいへ問題が多く、しかも、いまは厳冬、改修は春先以降になる。そしてこの方法で引き上げられる保証もない。悩みに悩みぬきましたね。おかげで食欲はなくなるわ、狭心症の症状は出るわで散々になりました。

幸い3日間の努力で、真横から45度の傾きまで引き起こすことに成功。漏油もないので4月までは目をつぶることにしました。一応役場には届けてあるので処罰は受けるでしょうが、これは自業自得、何があってもあきらめることにしました。

しかし小川とはいえ断面の1/2を遮断している。大水が出ると溢れそうで、最悪を想像すると夜が眠れない。人生の終わりにほとんどないことも起きるものです。

どうも私の人生は波乱万丈、いつも落とし穴が傍らに控えている。この調子では最後の瞬間はどんな終わり方になりますやら、平和な臨終ではなさそうです。

老人になるということで恐ろしいのは、思考の退化、脳細胞の減少だと何かにつけて思い知らされています。モノ忘れ（ド忘れと言います）が進むのは老人の共通点ですが、私はまだタイヤショベルが操作できる。恐ろしくて疲れは人一倍ですが、牧場の労力配分の中ではまだ作業から離れるわけにはいかない。大変辛いことです。さすがにパワーショベルは恐怖で操作できなくなりましたが、この調子ではこのパソコンの操作もできなくなるのも時間の問題、皆さんに近況を報告するのも不可能になる、その日は遠くなさそうです。

3.9 中前石油に依頼してあったレッカー車が来ました。標準35トン最大50トンの吊り上げ能力の巨大な車が現場に入って吊り上げてくれました。

1月半も川の中に鎮座していたショベルが動き始めたときは嬉しかった。レッカー車のゲージが12トン強を示した由で、他の方法ではだめでした。転落時の3日の作業で45度の傾きまで起こしてあったものだから、雪解けの増水でもかろうじてエンジンルームには水が入らなかった。おかげでエンジンが動いてアームを動かすことができた。

アームをたたんで最高に持ち上げて、それにワイヤーをかける、それが機体を傾かせずに吊り上げる唯一の方法、目が点でした。アームにワイヤーをかけるその工法は知らなかった。

エンジンが動かないと大変だとつぶやいた中前の工場長の言葉が重かったのです。厳冬の3日間の雪中作業が無駄でなかったのも、今回のアクシデントも最悪よりは少しよかったなとは和弥の弁です。

吊り上げられたショベルはオガクズ小屋の前においてあります。片方のキャタピラがはずれていますが、これは春が来て雪が消えてからはめるつもりです。

ただ、事故がなくても軽い財布が今度の支払いに耐えることができるかと今度はそちらの心配をしています。

現金なもので川の中にショベルがないと気が軽くなりました。悩んで悩みぬいたのがうそのようですが、今度は何をしでかすかと不安で時間が過ぎていきます。

2012.3.15 見浦 哲弥

雪国の教え（2012/2/10）

1945年12月敗戦の年、国民総動員令で14歳の私も新庄村（現在の北広島町新庄）に動員されていました。敗戦は8月15日、日本中が混乱に次ぐ混乱で動員先の農兵隊に正式に解散命令がきたのが12月の末でした。

今日からは大手を振って帰れると聞かされて、帰心矢の如くで一食分の握り飯と一日分のお米をもらって（当時お米がないと何処でも泊めてもらえなかった）リュックを背負って宿舎を出たのが10時過ぎだったと思います。新庄から小坂まで約40キロ、自動車の普及した現在では4-50分の距離ですが、子供の足では1日かかり、懸命に歩けば日暮れまでには小坂に帰れると思ひ込んだのです。

新庄から大朝まではさして登りもなく歩きやすかったのですが、芸北に出るには大谷という大きな峠を越さなければなりません。その頂上あたりから雪が降り始めたのです。足は支給された地下足袋、雪が解けて濡れて、その冷たさをこらえて、家に帰れる、その一心で歩き続けました。

中野村、美和村、雄鹿原村（いずれも現在の北広島町）を過ぎてあと10キロという橋山という集落にたどり着いたときには薄暗くなっていました。おまけに積雪は20センチくらい、街灯もない山道で懐中電灯もなく、途方にくれましたね。

橋山部落は当時6戸ぐらい農家があったと記憶しています。灯りを頼りに一軒の農家の戸をたたきました。囲炉裏端におられた老夫婦が何か用事かと聞かれた。それまで張りつめていた気持ちもちが途切れてなきながら事情を話したのです。

何処までいくのか、何処の集落のなんと言う家かと確認された後は、早く囲炉裏にあたれ、腹が減っているだろうから飯を食え、疲れているだろうから早く寝ろ、・・・。

翌日は雪も止んでいい天気だったと記憶しています。朝ごはんをご馳走になってお世話になったお礼を言って、「おいくらお払いしたらよろしいでしょうか」と申し上げたのです。動員とはいえ解散時にいくばくかの給料をもらっていました。食事をさせてもらい、泊めてもらった、何とか支払いはできると思ったのです。

ところがお爺さんが顔色を変えて叱りました。「金はいらん。よく覚えておきんさい。雪道で難渋したときは誰でも助けることになっておる。それはいつ自分も雪道で遭難することになるかもしれん。人を助けないで自分が助けてもらえるわけがない。昔から雪道の難儀は助けることと教えられてきた。あんたも忘れんさんな。」と諭されたのです。

子供ながらに心に響きました。でも帰宅してすぐお礼にはいけませんでした。10キロの道は動員で弱った体には遠い道でした。そのうち、仕事に勉強に（独学をしていました）追われて、お礼を申し上げたのはそれから40年後、農協の役員で一緒になったお孫さんに「貴方のお爺さんにお世話になりました。」と。

でも「人を助けないで、人に助けてもらえるはずがない」は私の大切な教えになったのです。

2012.2.10 見浦 哲弥

一貫経営のこだわり（2012/3/6）

今日 2008.04.16 恒例の予防注射（気腫阻）がありました。家畜保健所から3人、家畜診療所から2人、いつもながら90頭あまりの注射はそれなりの大仕事です。仕事が終わって雑談のときに気になることがありました。今日はその話、見浦牧場の和牛の放牧一貫経営の成り立ち、考え方について話してみようと思います。

私たちの経営は子牛の生産から肉牛の販売まで、端的に表現すれば、精液を買って、屠場に仕上がった肉牛を売る、（本当は消費者に直接生肉を販売したいのですが）それが現状のシステムです。

この基本は昭和40年から2年間、神石郡油木町にあった広島県立雪種畜場の多頭化放牧一貫経営試験がお手本です。

この試験は当時畜産界で大論争になった、和牛の将来についての、京都大学上坂教室と広島県農政部の中島部長以下広島県畜産技術陣との対立、それに関連して広島県が行った実証試験がそれです。

当時、広島県の多くの若者が、この多頭化試験の成果に夢をかけたのですが、45年の歳月は見浦牧場を残してその多くを戦線から離脱させました。

ですから、家畜保健所の職員の方が、この牧場の基本の考え方を興味深げに聞かれたので、45年前に何が広島県の和牛の世界に起きていたのか、それを解決しようと懸命に努力した広島県畜産技術陣があったこと、それに夢をかけた若者が数多く存在したこと、そんな事実を書き記す責任が見浦牧場にはある、そんな気がしたのです。

ここ芸北地区は和牛と呼ばれる黒牛については、広島県の後進地で、山県郡の牛は広島県で最低のランクに分類されていました。特に芸北地区の牛は島根和牛の血統の影響を受けて、ブランドが確立していた神石牛が基本の広島牛からは相手にされない雑駁（ざっぱく：雑然として統一がないこと）な牛の集まりでした。

でもその芸北地区から和牛飼育に農業の夢をかけた若者が数多く出たのは、昔から広大な山地を利用した夏山放牧の歴史があったからなのです。

小型耕運機が普及する以前の和牛は、春先の農繁期の活躍がすむと、各集落に付属していた大小の放牧場に放すのが慣わしでした。真夏のお盆前後は駄屋（牛舎）に収容して、刈り草を踏ませて堆肥づくりに励み、涼しくなるとまた放牧場に戻して稲刈り、秋じまいが済んで初雪が訪れるころ再び駄屋に連れ帰る、そんなパターンで牛を飼っていた経験から、新しい放牧形式の和牛経営は簡単に成功すると思い込んだ。しかしそこから長い試行錯誤と失敗の歴史が始まったのです。

今にして考えると失敗の原因は、役牛と肉牛との違いを完全に認識していなかった事だと思うのです。もちろん、技術者は問題点は捕らえていました。一日増体重を0.6キロから欧米の肉専用種1.2キロに近づける必要性を声を大にして叫んでいましたから。（現在は0.9から1.0キロぐらい）

当然のことながら、役牛は農耕作業のために存在し、子取りはおまけ、もちろん先進農家は繁殖と育成に努力と技術の積み上げをしていましたが、大部分の農家は博労（ばくろう：牛馬の

売買・仲介を業とする人)のいうまま、技術も売買も彼らの思うがままでした。従って和牛飼育の利益も彼らの懐に直行、それでも農繁期に活躍して堆肥が取れて米が取れば満足、それが大多数の農家でした。

それでも、「わしら一牛を飼うとった。牛は素人じゃない」と自負していましたから、役牛が肉牛に変わるという意味を理解していた農家はいなかった。そう思われても仕方ありませんでした。

役牛から肉牛に変化した和牛は、一年一産が目標、牛が鳴いた（発情）け一、種付（授精）をしたでは通らない世界、微妙な行動の変化からもその前兆を読み取り、適期授精をしなくては成績はあがりません。

私が「あの牛は明日発情するよ」というと、そんなことがどうしてお前にわかるのかとまず疑う、的中すると「ありゃまぐれよ」と片付ける、そんな農民まで和牛で儲けると乗り出してきましたね。そんな受け手の事情は指導する側にまったく理解されていませんでした。要は官の指導に従えば儲かると。

肥育専門の農家は福山を中心として、温暖な瀬戸内海沿岸に集中していました。冬季の低温に晒される中国山地ではそれなりの新しい技術の開発と対策が必要でしたが、農家はえらい先生の言葉と教科書を丸呑みして、自分たちの創意工夫を積み上げる努力をしなかったのです。

そのころ、豊平町（現在の北広島町）で和牛界の神様、京都大学の上坂先生の講演がありました（現在でも神がかり的人物）、但馬牛の牛の飼い方が基本の飼育法と市場の評価の話で、これからの和牛はこの方法で金儲けを目指す、そんな話でした。会場を埋め尽くした農家はおいしい話に熱心に聞き入りました。熱気がありましたね。

その但馬牛を作り上げるために、兵庫の農家たちが長い年月、営々と努力を積み上げ、創意工夫で築き上げた歴史にはまったく関心を払わないで、高値で売れて金儲けができる、そこだけが頭に入った、そんな感じの講演会でした。

先生もサシの入った高級肉を作りさえすれば経営は安定すると話された。消費者の立場からすれば、安全なうまい牛肉をより買いやすい値段で生産し供給してほしい、そんな視点はありませんでしたね。

以来、日本の和牛はサシ A5 の霜降り高級肉を狙うのが主流で、残念ながら一般的な都市生活の皆さんにリーズナブルな価格で世界最高の食味の牛肉を供給する、そんなことを言う農民は和牛の世界から排除されてしまいました。

しかし、消費者の立場を見据えた見浦牧場の考え方は、一部のマスコミから高い評価を受けて何度か取材を受け記事になりました。時代を動かす力はなかったにせよ、犬山市の斉藤さんのように、この記事がきっかけで脱サラし消費者本位の肉屋を開業されて成功された人も出ました。ささやかな力になったかもしれませんが大勢に影響はありませんでした。

貴方もよくご存知のように、日本の農家は南北に3000キロメートル、高低差1000メートル以上の多様な農業環境におかれています。その中で農業を営んでいるのです。

その条件の中で、より安く、よりおいしく、より健康的な和牛肉を生産供給するためには、その地域、その牧場に適した牛を選抜し育て上げなければなりません。偏見かもしれませんが、工業的な飼いで生産されるブロイラーと違って、牛は高い知能を持つ哺乳動物なのです。ですから物言わぬ彼らの気持ちを理解することが、最終の利益につながっていることを忘れては

いけないのです。

和牛には登録という仕組みがあります。明治の終わりに和牛の大型化を狙って外国の種雄牛を導入し、交配したのです。当時はまだ藩閥政府の名残が残っていた時代、各県がそれぞれの思いで種雄牛を導入したのだからたまりません。日本中に被毛が黒いだけが共通の多種多様な和牛が出来上がったのです。

大型化はしたものの、耐久力がない、野草が利用できない、環境への適応性が低い・・・様々な欠点が認められるようになったのです。

大正に入って、これではいけない、品種として統一性がないと和牛という品種がなくなる、と危機感を持った人たちが京都に和牛登録協会を設立、牛の戸籍簿、すなわち登録をしないと和牛とは認めないという制度の運用を始めました。

研究者が集まって、将来の和牛の理想像を設定、より近いものに高得点を与えて記録する和牛登録制度を作り上げました。

何代も高得点を得た牛の子供は高等登録、一般の牛は普通登録、遺伝的にレベルの低い牛は補助登録とランクがありましてね。（もっとも私はこの方面の知識は多くありませんから、正確を必要とされるときには登録協会に確認してください）登録牛の子供以外は登録できなくして、斉一性を目指したのです。

ちなみに貧乏な見浦牧場の牛は普通登録の最低レベルの牛ばかりでしたね。

子牛が生まれると最初に子牛登記をします。この登記には父親の確認のために精液証明書と授精作業をした獣医師や授精師の種付け証明書が要ります。そこで初めて子牛は和牛の仲間入りをするのです。この登記がないと子牛を売買することができない。

子牛が成長して16ヶ月になると24月齢までに登録検査を受けなければ和牛として登録してもらえない。現在では両親が登録牛でないと子供は和牛として認められないのだから、農家にとって大切な業務なのです。

さて、登録検査です。複数以上の検査官が体重、身長、胸囲、管幅（腰骨の幅）等々を計測、被毛、背線、舌、等々を目視で観察（外貌検査といいます）、理想像からどのくらい減点するかで点数を決めるのです。ところがその点数は決して私たちが求めている性能を現していない。問題は農家の側にもありました。この登録検査ですが、子牛市場で子牛に値段がつくときに、母牛の登録点数が高いと競値も高い、その差が無視できないほど大きくて、検査のときに磨き上げるのは序の口で、子牛のうちから栄養過多にして太らす（人情として見栄えのいい牛は高めの得点になります）ところが子牛から太った子牛は肥育牛として本格的にえさをやると、途中から成長を止めて丸くなる、病気に弱い、等々マイナス点ばかりなのに、子牛生産農家と肥育牛農家との利害が一致しないため改善できない。

そこで同一経営内で子牛生産と肥育飼養を行って問題を解決しようとするのが一貫経営なのです。

ところが子牛生産は牛本来の生理を大切に健康に留意して育てる、肥育経営はその生理を最大限に利用して飼料をいかに効率的に牛肉に変えるかを追求する。それは相反する技術の集積なのです。ひとつの経営体の中で、二つの相反する技術を保有しなくてはならない。見浦牧場では分業の形でそれぞれが分担をしているのですが、バランスをとるのが難しい。家族の中でも論争がありましてね。

新しい方式には解決しなければならない問題がこの他にも数多くありました。走り出した一貫経営もいつしか分業の世界になり子取り農家と肥育専業に分化しました。そして何千頭の巨大な肥育牧場と零細な子取り農家という形が出来上がったのです。

わが友人の中山牧場は2000頭あまりの大牧場と直接販売のお店を持つという形で大成功しましたが、見浦牧場はいまだに一貫経営という夢を追いつけています。牛肉生産という技術は消費者の牛肉に寄せる評価を子牛生産に反映させる、その繰り返しで発展してゆくと信じているからです。

幸い50年の時間が経過した現在、日本の各地で僅かながら一貫経営の声が聞こえるようになったのは嬉しい限りです。

しかし、この長い年月の間に私の不注意で数多くの牛たちの命が無駄に失われました。無知ということが生き物にどんなにむごい犠牲を要求することになるのかを畜産農家としては常に心に刻んでいかなければならないのです。

目を閉じれば、未熟ゆえに倒れた牛たちの顔が頭に浮かびます。人間が生きるために犠牲になるのが家畜の定めとは言え、最後の瞬間までは同じ生き物としての思いやりが農家には必要なのです。その姿勢で彼らと接することが新しい発見と知識をもたらし、経営の利益に結びつくのだと、私は信じています。

この文書を書き起こしてから、もう4年もコンピュータの中で眠っていました。ようやく文章に仕上げることができました。文節が繋がらないところは老化ゆえとお許してください。

2012.3.6 見浦 哲弥

大規模林道、大朝一鹿野線（細身谷林道）建設中止(2012/2/29)

2012.1.19 日本のバブル崩壊がこの小さい集落にも現実の姿で現れました。私たちが大規模林道と呼んで利用している2車線の道路建設が中止になったのです。今日は見浦牧場を貫通して建設された、この道路の悲喜こもごもの裏話です。

もう30年あまりも昔になりますか、お隣の芸北町で立派な林道が建設されるという話が聞こえてきました。

ところが20キロもある遠い隣町の話、大朝（北広島町）から山口県の鹿野町をつなぐ林道だそうと聞いても大して関心はありませんでした。その道が隣部落の空城を通ると決まって、にわかには現実味を帯びてきました。隣村の芸北町（現在は北広島町）の役場から、小板通過賛成の同意書が送られてきたのですが、国道191号線の付け替え工事の最中で、それどころではないと放置してありました。

でも、本当かと見学には出かけました。空城川が橋山集落に合流する入り口付近の工事が始まっていて、せまい峡谷の岩盤を削っての工事、こりゃ小板に着くのはいつのことやらと記憶から消してしまったのです。

何年か経ちました。道路は僅かずつ伸びていました。空城川を離れて小さな峠を越え滝山川の上流へと進んできました。そこから小板までは約3キロ、こりゃ完成するぞと期待を持ち始めたのですから現金なもの、進捗状況を頻繁に見に行くようになりましたね。

やがて見浦牧場の芸北町分に差し掛かると、工事会社の社長が工事の残土処分地はないかと訪ねてきました。もともと見浦牧場は谷あり丘ありの地形でそれをならして牧草地にした牧場、埋め切れなかった谷は散在していて場所はある。低地には暗渠排水を、谷には排水パイプを埋設することで契約成立、それから10年あまりも残土の持込が続いたのでしょうか。

山間の道路建設は極力残土が発生しないように、山を切り取ったらその土を谷に埋める、そして最短距離になるように設計するのですが、自然相手のこと、そううまくはいかない。残土処理は道路建設の悩みの種だったのです。おまけに小板から横川の間は国定公園の区間があり、見浦牧場に搬入された残土は約7万リューベ、10万トンを超す膨大な量になったのです。

後年、初期の見浦牧場を知る岡部先生が来場されて、公共工事と農地改良の連携というのは盲点だったと述懐されたときは嬉しかった。何しろ当時はこの地方の公共工事で残土を受け入れるときはダンプ1台で幾ばくという補償金を徴収するのが常識だった。それを改良工事を条件で無償？という方式をとったのだから、何人かの友人に人間がよすぎると忠告されましたね。その関係もあって、中央政府に関係のあった岡部先生が国家資金の有効な投資方式だった「その手があったか」と残念がられた、私の鼻もちょっぴり高くなりましてね。

小板に達した大規模林道は2車線の立派な舗装道路、カーブは多いものの道路規格は国道191号線よりはワンランク上とは工事をした藤本組の社長の話、アスファルトの下の碎石の厚さが違うとか、なんとか。勘ぐればこの道路は国道186号線から191号線に移るときの最短距離、震災その他でいったん火急のための南北連絡道の一部かと考えたものです。

現実には大型車の通行量が多い、一般車は土曜日曜に限られています。もっとも見浦牧場にはありがたい道路で芸北にあった木材工場に週2-3回も木屑取りに利用させてもらった。

国道191号線と交差した大規模林道は名勝三段峡中央の餅の木部落を目指して小板川をくだ

ります。その間約5キロ、三段峡は中流で吉和方向から流れる横川川と旧芸北町八幡高原からの柴木川に分かれる、その中間に餅の木部落があるのです。戸数6戸、川を挟んで小板川に2戸、横川側に4戸、小学校は小板分教場に1時間も2時間もかけて通ってくる、もちろん遅刻、欠けた授業のせいで勉強はできない、当然のことですね。何しろ足の弱い1年生まで連れての登校ですから。しかし、運動能力は抜群、山のことは何でも知っている。町の子の私には尊敬に値する連中でした。その中の一人が1級上の舛見敏夫君、彼は生涯の友でした。

閑話休題、ところが餅の木、小板間は荷車がかろうじて通る悪路、町の中央部へ出るためには、峡谷の中の歩道を出るか、小板を通過して25キロの道を500メートルの高低差を含めて走破するしかない。峡谷の中には丸木橋もありましてね。少し出水すると通行不能、病気をすると即お寺さんと呼べの世界、小板まで自動車を通る道をつけるのが悲願でした。

農道として1車線の道路建設が始まったのが敗戦後10年も経ったころだったと記憶しています。ところが小板部落の下流に川まで巨大な岩壁がせり出した場所があって難工事、小さな削岩機での発破工事が時間がかかりまして。でも悲願の道路が完成したときには舛見君も大喜び、これで役場にいくのも楽になると。ところが小板―餅の木間は100メートルあまりの高低差、大雨が降ると道路は激流で河原に変身、悪路の見本みたいになる。そこで今度は舗装道路がほしいとなった。そんなところに大規模林道、今度こそ僻地から脱出できると懸命になる。町会議員の選挙ともなると林道延伸に努力するの一言で東奔西走、2―3票しかない地域の要望など口約束にすぎないのにね。その挙句に自治会長でしかない私になんとかしてくれと頼みにくる。思わず「心配するな、君が活着している間には必ずつく」と口を滑らせたのが運のつき、「まだつかない」と責められました。

そのうち、横川集落にあった恐羅漢スキー場が戸河内からの横川林道では大型バスが入らないことに気がついた。何しろバブルでスキーバスが大型豪華になって遠くからのツアー客が増えた。ところが道が狭くて芸北地区のスキー場にお客を持っていかれた。この地帯はスキーのメッカ、即スキー場の激戦区、2車線の大規模林道が横川を通ることが問題解決と懸命になる。おかげで舛見訓の苦情を聞くことはなくなりましたね。

やがて餅の木集落？（1―2戸まで減ると集落とはいえないかも）と田代集落（6戸ばかりの集落がありましたがあまりの不便に4―50年前全戸が移住、杉林になりました）の間の田代峠を越えて、立派なコンクリート橋で奥三段峡を渡り、トンネルをくぐると横川川、谷沿いの道を駆け上がると横川部落、最盛期には60戸近くの民家が立ち並んでいたのに、現在は数戸。でもスキー場までは到達した、あと13キロ延伸すれば、高速道路の吉和インター、交通の便では芸北地区随一のスキー場になれる、と思ったところで建設中止。

ちなみに戸河内インターからは38キロ、地域一番の雪質を誇っても、スキー人口減少の最中では経営の好転は望み薄なのでは？

表面の理由は林業の衰退、環境団体の反対など、理由が並べられた。でも私は思う、国民が平和ボケをしたせいではないのかと。私は戦前、戦中、戦後を見てきた。世の中は様々なことが起きる。いいことも悪いことも。

日本は南北に細長い島国。しかも地震国いったん事が起きると大混乱になる。3.11の大震災はこの国の比較的幅の広いところで起きたので、国難ではあっても日本が南北に分断して機能を失う現象は起きなかった。が阪神大震災のときは南北の連絡道が国道9号線のほか数本に限られてこの地帯にもトラックが殺到する事態が起きた。私は大規模林道はこの補完道路の役

割があると思っていた。ところが国の財政が厳しくなり、NGO の自然保護の宣伝にマスコミが便乗するにいたって、これ幸いと中止になったと思っている。

自然保護を口にするのならなぜ国有林の独立採算を主張する前に自然保護のナショナルパークの設立を提起しなかったのか、貴重な自然林が伐採され、針葉樹が植林され、食物に植えた野生動物が里山に押し寄せて山村崩壊を引き起こした。これは人災ではないのか。見浦牧場では過去50年に7頭の牛がツキノワグマの犠牲になった。針葉樹林になった国有林には野生動物を飼養する力は想像以上に劣化している。だとすれば災害対策の道路建設は自然保護と同等以上に評価すべきだと思うのだが、年寄りの遠吠えなのだろうか？

とにかく、大規模林道大朝一鹿野線は終わった。横川のスキー場分かれを過ぎて1車線になりすぐ砂利道になり、やがて40年前吉和村まで駆け抜けた悪路の林道になる。人生の最後にもう一度たどってみたいとは思うものの、おそらくは機会がないだろう。完成していたら吉和のインターにつながる、かくれた主要道になったかもしれないのに。

今日は見浦牧場を横断する道路の裏話を報告しました。

あじさいロード顛末記(2012/6/29)

国道191号線を安芸太田町松原から深入山の麓を経て北広島町の町境まで約6キロ、道路のほとりに紫陽花が植えられて、シーズンには地元の人間でも心が癒されます。何も知らない都会人の「きれいね」の一言の陰に、地元の人達の努力と犠牲があることを感じる人はいません。これは貧しい山村の人達が、豊かな都会人にサービスする、古い田舎の体質から出来たシステムだったのです。

しかも、それも国道の改修で利便を得た地元の人達の発想ならまだしも、目立ち屋のボス連中の上意下達で押しつけられたときには心が痛みます。

たとえ、それが正しいことでも、実際に関わる人達からの発想の形に持って行かないと無理が来る。目下、その無理が極限に達しているのです。人口が減って大切にしなければならない若者達に。

今日はその報告です。

あれはもう何年前になりますか、今は亡き世賀井田（屋号）の肇さんが自治会長でしたから20年も昔です。彼が町の自治会長会議で、国道191号線の付け替え改良工事完成記念に道路沿いに紫陽花を植えてフラワーロードを作る事が決まった、ついでには地元集落に管理を委託したいと申し入れがあったと話したのです。「ええ話しだけー、やらにゃーいけまじゃーないか」と。

一言多い私が「それを誰がするのか」と聞いたのです。「勿論集落のみんながやるのよ」。そこで、「一、二年は何とか出来るかも知らんが、5年先10年先誰がやるんね、どこの若いもんが帰ってくるんね」絶句した彼に追い打ちを掛けました。「消防も水道も自治会の出役も、担ってくれそうな若者は2人しかおらんのよ。紫陽花は1－2年では枯れん。自分たちが出来んことを引き受ける、そんな無責任なことを請け負ってはいけん。」

簡単に考えていた彼も、言われてみれば小板の現実、これ以上の公共の仕事を増やすわけには行かない、「そう言われれば、先のことまで考えなんだ」と。

彼が役場に飛んでいって前言を撤回し、小板地区には紫陽花ロードの管理は請け合いかねると申し入れをしたのは言うまでもありません。

困った役場は隣接の松原自治会に全面管理を依頼しました、発案者がその地区の議員とあれば断るわけにゆかず、引き受けた。

ところが、その先があつて、これを学区の父母会（PTA）に委託したのです、若干の委託費を町が負担するということで。

ところが肝心なところに心配がない。それは山村は人口が減少している、目下減少中ということ。私が松原校に通学していた頃は小学校、中学校（昔は高等科と言いました）合わせて108人、それに小板分校の27人を加えると130人あまりの大所帯、それが十数人に減少している。若者の離村と少子化が重なって農村から若者が消えて、結果として子供がいない。学区の父母会も会員が激減、しかも収入の少ない集落では働き場もない、幸い道路は良くなり、自動車は普及して20－30キロ圏に働きに出る事は可能、父母会のメンバーも夫婦共稼ぎ、たまの休日には山積した家事の後始末で時間が幾らあっても足りない、そんな人達に紫陽花ロードの手入れまで受け負わせた。

ボス共は何を考えているのか、と憤慨しても古い体制を残した山村では若者の不満は上部までは届かない。結果、離村が促進されるという結末。見浦家のお嫁さんも父母会のメンバーと言うことで付き合わされて悲鳴、自分の生活を破壊してまで紫陽花ロードに付き合うのは本末転倒ではないかと助言して脱会させた。

こんな事もあって若者の流出は止めどもなく続きました。そして中学校も、小学校も、幼稚園も消えて行きました。本校があった松原地区の子供より小板地区の生徒が多いと気付いた時は手遅れでした。

若者の都会への流出は時の流れだったかも知れませんが、それを加速するような政治の力が働いた。その一つが紫陽花ロードだったのです。

こんな裏話はあっても梅雨の時期が来れば深入山の国道は紫陽花の花盛りで心が和む。何も知らない旅行者は「綺麗だね」と通り過ぎる。その花の陰の悲喜劇には気付かないで。

今年も夏が過ぎて花の季節は終わりました。紫陽花ロードの「花を大切に」の立て札の側で、ドライフラワーにするため花を切り取って行く人を見かけます。そして隠れた悲劇を知る人もいなくなりました。

2012.6.29 見浦哲弥

新同行、善戦す(2009/6/14)

2009.5.6 亡くなられた、福住のおばさんを見送りました。

4年前、それまであった、お葬式の互助会、小板同行が労力不足と集落からの支援金の打ち切りで、どうせの事なら葬儀会社に丸投げをして集落は関わらないと決議をし、住居を移して来られた方の葬儀を強行して辛い思いをさせました。

その反省で新同行を立ち上げた経緯は、前回同行崩壊す”で報告しました。

新同行になって福住さんで8人、私達が故人を見送りました。慣れ親しんだ身内の方の死は大小はあるものの、肉親の方には衝撃、それを少しでも和らげる役割は出来たのではないかと思っています。

今回の様に事故で肉親を失ったときは、お骨にするまでの時間を新同行が物心両面で支えて、気がついたらお仏壇の前に仏様が骨壺に入っていた。

それがどんなに有り難い事か、それは当事者にならないと理解できないことなのです。

実は私は36才で父を事故で失っているのです。

12月の雪の日の夕方、戸河内からのバスで帰宅した父は30センチほどの積雪の中、バス停から50メートルほどの自宅に帰る途中、小川に転落、死亡したのです。

一緒に帰った隣家に嫁いだ妹からの電話で家の周りを搜索をしてもいない、別に小川を探していた義弟の「いたぞ」の声で飛んでいった先は200メートル下流の水の中、すでに死亡していました。

私は長男、父には兄弟はなく、亡母の姉妹は北陸、責任は全て私、どうすればと頭が真っ白になったのを覚えています。

家を出たときは80近くとは言いながら、元気な姿だった父が、物言わぬ姿になって目の前に横たわっている、今振り返っても何を考えていたのか、思い出せません。

当時、お葬式の時は両隣が願人として差配をするのが小板同行の定めでした。

「お寺さんへの連絡は」「親類への知らせは」「その前に葬式の日時を決めたら」、願人の問いに答えると、次々と人が動いて行く、日頃は何をするにも議論百出で動かない人達が水が流れるように。

もつとも、意見が分かれて折り合いがつかなくなると、口論が起きてせつかくのまとまりが崩れることもあって、それが後に同行の決め事を明文化しろとの命令が私に来ることになるのですが。

でも、父が死んで3日目に、父の骨を骨壺に納めて仏壇に返したときは、もう否応なしに踏み切りがついていました。

振り返って悔やんでも、どうにもならない、残った者が頑張って、家を支えて行かなければならない、それが、どんなに辛い仕事でも、逃れるすべはないのだと。

人間が必ず出会う、大きな衝撃、激しく揺れる心の不安を、ささやかながら支えて上げる、そ

れが同行の精神だと思うのです。

覚悟を決めることを、オリョウギを据えると言います。そのオリョウギが座るまで、支えてあげる、これが大切なんだよと、新同行の仲間達に理解して貰おう、言葉に出して訴えてみよう、そして理解して貰ったら、大声で「新同行善戦す」と叫ぼうと思っています。

2009.6.14 見浦哲弥

ラスパイレス(2012/5/21)

もう随分昔の事になりますが合併前のK町でこの事件がおきました。忘れていた小さな出来事でしたが、最近の本末転倒の政治を見ていて思い出しました。

ラスパイレスというのは地方公務員の給料を国家公務員の給料に比較して数字で表したものと解釈しています。ラスパイレス指数といいましてね。

隣村だった K 町の町長に多少左系の資産家のボンボンが就任しました。彼は組合対策として昇給を重ねて、職員の給与が国家公務員より高くなってしまいました。独立会計で国から交付税などの支援を受けていなければ問題はなかったのですが、残念ながら地方の一寒村、交付税は主要な財源でした。

国からの支援がなければ財政が維持できない町村が、国より高い給与を支払うとは言語道断と改善を迫られたのは当然の成り行きだったのです。

確か10パーセント以上高くて1-2パーセントの他町村の中で突出していました。それで標的になって大きな圧力をかけられたのです。

そして選挙、国との関係改善を標榜して当選した町出身の豪腕政治家が指数改善に乗り出しました。給料の引き下げです。当然職員は反対、職員組合と町長との対立、争いになりました。この問題で町長になった G 氏は一步も引かない。たまりかねた職員組合は、上部機関の自治労に提訴したのです。あたかも全国でこの問題が提起されているとき、格好の事件として最上部の全国自治労が乗り込んできたから大事になりました。

静かだったK町に赤旗がはためき、紅い鉢巻の組合員が「わっしょい、わっしょい」とスクラムを組んで練り歩く。一変した町内に驚いたのは何も知らなかった町民、様子がわかると、そんなことは止めてくれと、親、兄弟、親類が各組合員に大圧力をかけました。もともと固い信念を持たない大多数の組合員氏は町民のブーイングの大合唱に、1人去り、二人去り、最後は幹部だけになった。

その頃です。戸河内町の町会議員で社会党員の S 君が、K 町職員組合の書記長 K 君を連れてやってきた。四面楚歌になり始めた彼に声援が欲しかったのでしょうね。

そして「君は K 町の運動をどうおもうんや」と聞いてきたのです。私もまだ若かった、思ったことを率直に口にしたら、K 君はいつべんにしゅんとなってしまいました。

「わしゃ間違えておる思うで、自分たちが正しい思うたら、全自労（全国自治労の略）に訴える前に、町民に理解をしてもらふ運動をせにやー、あんたら一誰から給料もろとる思うんならー」、今考えると随分思い切ったことを言ったものです。雰囲気は1遍に冷え切りましてね、睨みつけられました。そして早々に帰って行きました。

S 君とはそれから長い付き合いでしたが、2度とこの話が話題になることはありませんでした。もっと遠回しに言うべきでしたね。

勿論、この戦争はG町長の勝ち、赤旗の話はK町の恥とばかり、以後私の耳には聞こえることはありませんでした。

でも傷つけたであろう私の一言は心にずーっと引っかかっていた、町村合併で元K町の職

員さんとも接触する機会が出来ました。ある時、気にかかっていたK君の消息を聞いてみました。彼は最後まで意地を通したといいます。階段下に机を与えられて定年まで勤めたとか。それが正しいか正しくないか、私には判りませんが人生は一度しかない、一度話してみるべきだったかと反省しています。

長い人間の一生、色々なことが起こります。本質を見誤ると一度しかない人生を社会の底辺で悔やみながら過ごすことになるかもしれない、誰にでもその可能性はあります。後輩諸君に申し上げる、人生の曲がり角に出会ったら、立ち止まって相手の立場も考えてみよう、それから前進する事にしよう。

今日はふと思い出した昔語りでした。

2012.5.21 見浦 哲弥

カナクソ物語(2012/5/18)

貴方は集落崩壊のレッテルを貼られている過疎の村、小板集落が200年前までは中国山地の中で当時の産業の一部をになって栄えたことをご存じですか？今日はその話を聞いて下さい。

70年前父に従って小板に帰郷した時、家の前の小川に無数の小穴が明いた黒い石が散乱、不思議に思ったものです。何しろ福井の川にも三国の海岸でもそんな小石や砂利は見たことはありませんでしたから。

友人に聞くと「カナクソ」と当然のように答えます。これがカナクソとの出会いでした。小板は川の中にカナクソという小石がある異境だった。

ところが1年ばかりして、ある爺様がカナクソを掘らして欲しいと頼みにきました。小板川が狭い山間に入って曲ったところに何枚かの小さな山田がありました。その田圃の底が現場でした。地名はカジヤ、鍛冶屋さんがあったと聞かないのに地名がカジヤ、随分不思議の思ったのですが、この地方ではタタラバと呼ぶ日本古来の製鉄所をカジヤと呼んでいたのです、お隣の松原部落にはカジヤという屋号もありました。

その田圃の底が谷川に接するところから製鉄で出た鉱滓が流れ出したのが、川の中の黒い砂利だったのです。そう言えば川底に埋まっているカナクソは赤い粉？（サビ）がついていました。鉄サビだったのですね。

例によって、この話しも父に聞きました。彼の話しでは小板には何カ所もタタラバが存在したと言います。

旧191国道沿いの前述のカジヤ、道戦峠手前の国道の向かい側、国道深入峠の深入山中腹のイシカスミ、川下のモチノキの対岸（大規模林道から500メートル？ばかり下流）の4カ所、道戦峠とイシカスミの2カ所は確認していない。

松原にも何カ所かあったらしい。一つはホテル「いこいのむら広島」の下流の湾曲した国道の橋を渡った斜面、ここは、この地方で最大のタタラバだったと言います。旧国道の道ばたの29人塚という大きな石碑は、このタタラバが雪崩に遭って死者が29人も出た、その慰霊のため浅野藩の鉄山師、加計さんが建立したとか。

もう一つは戦時中に勤労奉仕でカナクソ運びをしたウシロヤマ（松原自治会の所有林）にありました。ずいぶん山奥だったのは覚えています、もうその場所は定かではありません。

この近辺の山には100年を超す古木は数えるしかありませんでした。タタラ用の木炭にするために皆伐されたためです。良質の鉄は出来るものの効率の悪いタタラ製鉄は膨大な木炭を消費したのです。

ともあれ、タタラ製鉄は中国山地の重要な産業でした。

ところで子供の頃に家の前の川端に五右衛門風呂の3倍はあろうかという大羽釜が放置してありました。親父様にあれは何に使ったのかと聞くと、大畠（見浦の屋号）は松原地区のタタラ

最盛期に一儲けを企んで、作り酒屋を始めたことがあっそうと話し始めました。その商売が当たって酒が売れて売れて、倒産したんだと。酒が売れたのに倒産したとは何事かと、さらに聞くと職人は気前よく酒は買ってはくれたものの、支払いは勘定日払いの掛け売りばかり。おまけに流れ職人の中には勘定を踏み倒す奴が仰山でて、とうとう黒字倒産。勘定あって銭足らずの廃業をしたんだ、その名残の大羽釜だと。

酒屋では失敗してもタタラとは縁が続いて、製品の鉄を牛馬の背中につけて運ぶ人足の中継宿として道路沿いにダヤ（馬小屋）付きの農家（宿屋）を開業、自炊ではあったが干し草や藁は準備してあって、小さな中継基地の役割をしていたとか。

そんな関係で芸北地区のタタラ製品運搬の元締めだった加計の前田家と親交ができたとか、後年、ヒョンな事で、社会党の地方政治家だった前田睦雄先生に可愛がって頂く関係ができたのは、そんな繋がり（ちなみに前田先生は前田家の跡取り）。

昭和19年、そのカナクソが脚光を浴びました。

高性能で恐れられた零戦が敵地に不時着したのです。それを無傷で手に入れたアメリカ軍は徹底的にしらべて盲点を掴んだのです。それは軽量化の為に防弾板を積んでいないことでした。後ろからパイロットを狙えば簡単に撃墜できることを知ったのです。

アメリカ空軍の新しい戦術に零戦の被害は激増したと記録にあります。その対策として軽くて強靱な防弾板に使える高性能の鉄板を探したら、加計町にあった帝国製鉄のカナクソと木炭を使った鉄板が最適と判明したのです。それから国の要請で大增産が命令され、この地帯にてんやわんやの大騒動が始まったのです。

それまでは小遣い稼ぎにと細々と続けられていたカナクソ掘りが、役場から何月何日まで何貫匁（1貫目＝3.75キログラム）掘り出せと集落に命令が来る。鉄よりは軽いもののカナクソは重量物、道路に近いタタラ場跡しか採掘していなかったのが、それでは割り当てをこなせない、山の中のタタラ場も掘り返されましたね。道路から1キロや2キロも離れたタタラ跡からトンノスという負い籠で運んだのを覚えています。さすがに4キロ離れたモチノキのタタラ場は無傷で残りましたが、場所を知っているのは私以外にあと何人いますか。

むちゃくちゃな戦争ですから子供達も動員されました。高等科（今の中学生）の生徒も駆り出されました。学校のある松原で山の中から負い出しました。遠くて重くて道路脇の集積場に降ろすと秤で計って、「お前は後、何貫運べ」と命令されてへとへと、それから小板まで7キロを歩いて帰る、気が重たかった、たしか家に帰った時は真っ暗でした。

まだありまして、燃料の木炭も大增産。帝国製鉄の木炭は聖湖から丘一つ越した、中ノ甲という三段峡源流の原生林に、大勢の人間が送り込まれての木炭作り。学校があって、お店もあって、集落ができていまして、木炭は出来るのだが、そこから加計の工場まで運ぶのが大事業。砂利道の1車線の山道を製鉄所まで約50キロ、木炭ガスの小さなトラックがダツというモッコの親玉に詰め込んだ木炭を山積みにして運ぶ。3トンか4トン、それよりも小さかったか？

それでも木炭運びのトラックはガソリンの特配があった。急坂にかかるとエンジンにガソリンを足してやる、そのお陰で何とか急坂を越えてゆく。民間のバスはそれがない、登りで満員だったら動かなくなる、男のお客さんは降りて歩く、登らないときは後ろから押す。そんな情勢の中でも精神力でアメリカに勝つと、竹槍訓練。信じた国民も馬鹿だったが、それを命令した東条首相は靖国神社に祭られて代議士が参拝する、何かおかしいとは思いませんか。

あれから70年近く経ちました。子供の頃に見た川の中の黒い砂利は珍しくなりました。やがてカナクソ物語を話す老人もいなくなります。その時はこの文書だけが黒い石の由来を話すことになるのでしょう。

さからう事の出来ない時の流れ、過ぎた時間の向こうからの私の話に、耳を傾けてくれるのは誰かな。

2012.5.18 見浦 哲弥

穩亡の大將(2012/6/12)

物心がついて70年余り、お葬式の風景も変わりました。今日はここ小板の火葬の話をししましょう。そして私が”穩亡の大將”と呼ばれた理由も聞いてください。

私が子供の頃、すでに葬式は火葬が常識でした。ところが16歳の時、小板神楽団に入団して中国山脈島根県側の臼木谷のお祭りに呼ばれたことがありました。先輩にここは土葬でねと、教えられました。まだ土葬の所が存在していたのです。

好奇心の見浦の記憶の中に初めて火葬場が登場したのは、小1の時、福井市の郊外にあった競馬場まで足をのぼし、帰り道迷い込んだ小さな小屋が火葬場でした。大きなかまどがあって轟々と火が燃えていました。変なおいに気付いた友人が火葬場だと声を上げ、悪童ども（私を含む）が悲鳴を上げて退散したのを覚えてます。

次が広島で母が亡くなって、広西館（字は当て字です）でお骨にしたのですが、大きな火葬場でした。お棺をレンガ作りのかまどに押し込んで鉄の戸をしめる、母がこの世の中から消えていった瞬間は、今でも臉に残っています。確か重油で焼くのだと大人が話していた、焼きあがったお骨が微かにくすんでいた、そんな記憶もあります。

翌年、祖父が亡くなりました。それが小板のお葬式の初めての体験でした。そして藁焼きと称する、小板（この地方かも）独特の火葬を見た最初でした。休火山の深入山の火口からの深い谷が小板側にえぐられたように刻まれている、その先端が血庭（幻の古戦場に登場します）、血庭の最上部の林の中に、その火葬場がありました。少し盛り上がった丘の上の直径2メートル深さ50センチばかりの穴が火葬場、小板の住民は誰もが最後に訪れる場所でした。

血庭は昔から蕨（ワラビ）の良く生えるところ、蕨取りに夢中になって、太い美味しそうな蕨がエットあるのーと気がついて見ると火葬場に近く、あわてて逃げ帰った事が何度かありました。葬場の灰が流れ出て肥料になって蕨がよく出来ていたのです。

私は19歳から見浦家の代表として部落の出役を務めました。お葬式も人夫としての役割が回ってきました。新人は焼き場（火葬場）の人足と決まっています。見る事聞く事新鮮で知らないことの山積みでした。好奇心の私ですから嬉しくはありませんが興味深深でしたね。野普請とも野武士とも言われたこの役には6-8人が割り当てられ、年長者が頭を勤めることにはなっていたのですが、上手下手がありまして時々生焼きを製造する、そんな最下層の野武士を志願する人はいませんでしたね。お葬式は願人（ガンジン）が一切の指揮をしておこないます。願人は不幸の出た家の両隣と決まっていて、必ず二人、適不適があるものの、お互いに補って何とか運営してゆく。それでも前の切れない人が願人の時は、デボウサゲ（でしゃばり）のサイチンヤキ（世話焼き）がイレジョウネ（入れ智恵）をしてテンヤワンヤ（右往左往すること）でした。葬式での役割は、願人、大工、帳場、板場、野武士、飛脚、小走り、等々、役割や呼び名の記憶は、もう定かではなく、呼び名がまちがっているかも。でも今日の話は穩亡、野武士です。こちらはよく覚えていますから。

さて、お葬式の役割の中で穩亡（野武士）は最下位の役割とされ、何度も続くと憤慨する人もいましてね。新人と役割で残った人が穩亡と決まっていたましたが、さすがに婦人や老人には振り当てはなかった。

勿論、新入りの私は先輩の野武士の指図で火葬場までの道刈り、藁集め、お棺の運搬の準備（夏は荷車で、冬は櫓（ソリ）で、そのうち軽四輪トラックになりました。冬は除雪もありまして、これらが前日の作業、運がいいと仕事は半日でかたずく、ところが棺づくりの大工さん、願人（葬式を取り仕切る）、小走り（雑用一切、家の中の片付け、家の内外の掃除、草刈など）、板場（賄い方）も豆腐づくりまで入れて3日も勤める、これに較べると野武士の穩亡は2日、それも仕事が片付くと自分の家の仕事をする時間までである、人手の足らない見浦家では、これが魅力で野武士を志願したものです。

同じ理由で奥さんが怪我で面倒を見なければいけないSさんがいつも一緒、彼は20歳あまりも年長だったかな、藁焼き火葬の基礎は彼から学んだ。

藁焼きの基本は蒸し焼き、他の方法のように火力で焼き上げるのではない。体脂肪も利用してゆっくり白骨にしてゆく。大体3時ごろに着火して翌日の10時頃に焼きあがる、ほぼ20時間もかかるわけだ。最新の火葬場では1時間から2時間で焼き上げるのに較べると随分悠長な話だが、当時は時間の流れもゆったりしていた。

火葬の藁はただ並べるのではない。各戸から集められ火葬場に運び込まれた藁は葬儀の当日、野武士が加工する。先ず藁の小束をブッチガイ（束の方向を変える）にして長さ1メートル直径50センチ前後のわらたばを作る。束を作る時5－6箇所を藁縄で強く結ぶのだが、これが重要で如何に強く締めるかが藁焼きの成否を決める。これを12－15個つくる。それをお棺の下に並べる。強く縛るのにこだわるのは、一番後に火が回るようにするため。手抜きをすると、ここに早くから火が回って灰になる。そうなるとお棺の重みに耐えかねて陥没、お棺は転倒して火力の中心から外れて生焼になる。

ある時、自称名家の主人が野武士の頭に指名された。日頃は号令をかける役を渉り歩く彼にどういう風の吹き回しか穩亡が割り当てられた。

年長とは言え火葬の技術は素人、ところが何かにつけて大将の彼は知らないとは口に出来ない。まして昔の小作人や年少者に教えを仰ぐなどもってのほか、野辺送りの光景や、人の話を思い出しながら段取りをした、一緒に野武士も人が悪い、敵討ちとばかり指導も忠告もしない。「ハイハイ」と指示されたとおりに仕事を進めたのだ。見るに見かねて「そこは、こうせにゃー」と忠告したから怒った。一回りもの違う年少者にみんなの前で恥をかかされたとばかりに「いらんことを言うな」。

見よう見まねとは良く言ったもので「野武士は野普請ともゆうての、綺麗につんであげにゃー」と藁の積み上げは見事だったね。ところが肝心の藁の台座が結びの締めが足らなかった。台座の火の回りが速すぎて最悪事態に、翌朝、骨上げの前に行行って生焼けを発見、急遽骨上げを午後に変更してもらったとか。勿論、責任は野武士の棟梁にある。願人と3人がかりで、焼き直してお骨にしたとか、野武士の棟梁の役が嫌われるのは、これがあるから。

ところが、どうした弾みか次回も同人が大将、性懲りもなく同じことをする。原因を探すのではなくて運が悪かったと思い込んでいるらしい。見かねて、「そんな方法では又生焼きぞ」と意見をしたら怒った。「そんなら、お前がやれ、生焼きだったどうする」「1人で始末をしてやらー、

その代わり言うたとうりにやれ」「その口を忘れるな」。

それで、先輩に教えてもらった方法を忠実に再現した。でも内心は不安でした。売り言葉に買い言葉でのタンカですから。翌朝、明るくなるとすぐ火葬場に飛んでゆきました。お天気にも恵まれて見事に焼きあがっていた時は、1人で火葬場にいることも忘れませんでした。

自称名家のご主人、「ええ具合に焼けたそうなの」と一言。次回から頭でもない私が火葬場で意見を述べても反論する人はいなくなりました。悔し紛れに彼が私につけた肩書きが” 穩亡（オンボ）の大将”。

そんなこんなで火葬場での私の発言は重みを増しました。自称名家氏も火葬場では異論を挟むことはなくなりました。でも” 穩亡の大将” の呼び名は定着しました。同席した野武士一同が賛成したからです。以後藁焼きの火葬が続いた間は葬式になると私の呼び名は” 穩亡の大将” でした。

やがて稲の転作が始まり、藁が手に入り難くなりました。成人の火葬には最低300キロの藁が必要です。どの家でも年に1-2件ある葬式のために藁を準備して置くのですが、稲作農家が減り始めて集まる藁が少なくなりました。秤を持ち歩いて大きな農家をお願いして確保することもしました。

それに火葬の日が晴天とは限りません。火葬を完全にするために穴の底に木炭を1俵（15キロ）敷くことにしました。これは大成功でした。地面からの湿気を遮断するだけでなく、雨や雪で火力が不足する時も藁が燃え切れてからも火力を維持できて完全に焼ける。それからは生焼けはなくなりました。

話がそれました。藁焼きの話です。穴の底に木炭を1俵を広げます。その上にお棺の長さだけ堅く束ねた藁を並べる。6-7個くらいか、これが土台。その上にお棺を乗せ周りを同じ束ねた藁で固めるのです。それから藁の小束で小山に盛り上げ、天辺に藁帽子を載せて完成。家の屋根に似ているとて人生最後の普請とも言う人もいます。野に作るから野普請、だから段取りをする人足を野普請と呼ぶ人もいます。

綺麗に積みあがったところで身内の人藁の小束に火をつけて、それで周囲に点火して退場。野武士は藁の小山に完全に火が回るまで番をするまでが仕事。火をつけたら絶対につついてはいけない。これも先輩の教えでした。そこから空気が入って蒸し焼きにならずに失敗すると。

やがて米づくりも機械化して秋の風物詩だった稲ハゼが姿を消しました。藁は短く切られて田んぼに放置されるようになりました。若者は都会に、移住をする家も出て人手が足らなくなりました。交通の便利もよくなって町の火葬場を利用することになり、藁焼きの火葬は小板から消えました。

お葬式を終えて、公民館で後始末をしながら、前深入山の麓を流れて行く火葬場の煙を見て「今日の煙は〇〇さんの方に流れるのー、この次はあんたの番かいのー」と冗談を言いながら故人を見送った。遠くなったあの頃、私の頭の中では、まだ昨日の事のように。

2012.6.12 見浦哲弥

蛙の声(2012/6/6)

2011.4.23 今年始めて蛙の声を聴きました。小さな声ですがケロケロの声はやっと春が来たと告げていました。

2－3日前、10センチにも及ぶ積雪があった今年の冬、何もかもが異常で死者まで出した豪雪、誰も彼もが一日も早い春の到来を望んだのに足踏みの連続、桜前線の北上も小坂では他国の話でしたが、やっと蛙が鳴いた、やっと。

蛙といえば昔は田圃に水を入れて田仕事が始まると大合唱が始まったものです。盛りの夜はうるさくて眠りが妨げられた。水田が1／10にも減った現在では蛙は場所を探すのが大変で、見浦牧場の牧草のロール置き場の水たまりは彼等には格好の場所に見えるのでしょうか。おびただしい産卵、オタマジャクシと続くのです。子供達が大喜びで騒ぐ、豊かな自然があった昔の田圃は彼等生物達の極楽だったのですがね。

ところが過疎化と転作で水田が激減、蛙も泥鰌（ドジョウ）もメダカも姿を消したのです。

そして見浦牧場の水溜りにオタマジャクシが現れる。それが春の好天が続くと水が干上がって全滅する。見かねて水を汲んだりするのですが、春は本業の牧場が忙しい、いや忙しいのを越して多忙の連続、気がついて見に行くと全滅している。オタマジャクシとは言え命の消滅は厳しいもの。小坂の自然も変わりました。

ところが、加計の吉水園で有名なモリアオガエルは増えました。この蛙は水たまりの上の草や木の枝に、真っ白い泡を作って、その中に卵を産み付ける。その泡の中で卵が孵化して、小さなオタマジャクシになり水に落ちて育つ、独特の生き方を持っている、これが吉水園では池の上に花が咲いたように卵が産み付けられる。それで有名なのですが、見浦牧場でも大小二カ所の池で見られるようになったのです。昔は時折田圃の石垣に見られるにすぎなかった現象が、本当に花が咲いたように無数にぶらさがる。

運良く孵化する直前に出会うと水面に差し出た枝は白い花が咲いたよう、自然の妙とはいえ見事な眺めです。純白で綺麗なのは数日ですがね。この蛙は増えたのだと思います。

しかし、身近の風景をよく見ると、子供時代は当然の事と受け入れていたことが激変しています。

蛇が少なくなりました。餌の蛙が減ったのが原因でしょうが、草むらの中の”グッ、グッ”の声をたどってみると、蛙が蛇に飲み込まれている最中なんて事もよくあったのです。そんな光景は、もう何十年も見ません。ところがマムシはよく見ます。例年家の回りで4－5匹は殺しますか。多い年は10匹以上、毒蛇なので噛まれたら大変で入院する騒ぎになります。生きたまま一升瓶に入れて焼酎を加えて蝮酒（マムシザケ）を造るという友人もいましたが、噛まれて予後が悪く死んだなんて事もあって、もっぱら見つけたら殺す事に精出していますが、増えた気がします。住人が減って蝮酒製造業者がいなくなったせいでしょうか。

この地方は蝦蟇蛙（ガマガエル）が多いのです。松原の高等科に通う頃は雨降りの日は必ず道

の中に”ドンビキ”（がまがえる、蝦蟇蛙の事）がいました。小さくても背中 of イボイボが気持ち悪いのに、時々巨大なのが現れてね。のっそり、のっそりと歩く、動作が鈍いものだから自動車に潰されたりして。卵も独特、林の中の水溜まりに長い紐状になって産み付けられていました。

この蛙も珍しくなりました。もう何年も見ていません。そして卵も見かけることはなくなりました。

土日にもなれば整備された道路を都会人が散策する。ウォーキングあり、サイクリングあり、アマの写真家も歩く。藁屋根はなくなり、モダンな別荘が散見されて風景も変わった。従って足下の蛙君の生活が変化したのは当然かもしれない。変わっていないのは深入山だけ。

昔は遠くなりました。あの蛙の大合唱はもう一度聞いてみたいですね。

2012.6.6 見浦哲弥

島津先生(2012/7/21)

”山里からの伝言”読ませていただきました。

そして書架から”中国山地”(上)、“新中国山地”を探し出して読み返しました(”中国山地(下)は見あたりません。確か貸し出して帰ってこなかったのでは?)。昭和16年4月に小坂に帰郷してから70年、その変遷が昨日の事のように甦ってきました。

夏休み毎に小坂に帰郷した昭和10年頃からの広島、三段峡バス?に乗って遡った太田川流域、福井(父の勤務先が現在の藤島高校でした)とはまるで違った広島弁、そして動員で暮らした七塚原牧場、作業で何度か行った戦前の三次、庄原、原爆直前の広島での建物疎開、敗戦、見浦家の没落、進学をあきらめ、独学への挑戦、周辺の青年達との離反、電検3種、2種に合格、更に勉学の夢、小坂からの脱出失敗、見浦家の再建で夢を捨てる、そんな私を見ていた変な女の子、新婚旅行もなく2人でただ働く、爾来60年。その中の50年が中国新聞のレポート”中国山地”、“新中国山地”、先生の”山里からの伝言”に重なる。

思えば新中国山地の取材の時に、「前回から20年たちましたね。出来れば20年後もこんな企画があれば中国山地の歴史になるのに」と、お話しした記憶があります、その20年後が先生の”山里からの伝言”になるのですね。

一国の興亡の歴史は多くの人々の興味を引きます。しかし一地方に過ぎない中国山地の盛衰は読み物としては評価されないかも知れませんが、こんな読み方をしてみてもいいと思います。

そこで考えたのが、次のストーリー。

先生方の文章と私の雑文の組み合わせると見浦牧場から異端の文字が消えるのではないかと。

1. 中国山地(上) 多頭化の試み P189
2. 中島先生 (同封の私の文章)
3. 中国山地(上) 牛と生きる P184
4. ルポ 見浦牧場 北海道チクレン
5. 新中国山地 牛は学習する P65
6. 岡部先生 (私の文章)
7. 見浦牧場からのメッセージ 京大宮崎教授引率の見学会
8. 金城牧場 金城牧場について
9. 背負うた子に教えられ 大牧場と見浦牧場の違い
10. 山里からの伝言 島津先生 和牛飼育の異端 P190
11. 一貫経営のこだわり

文章を書き上げた時期は違っていますが、この流れで読むと中国山地の和牛の問題点が浮かんで来ると思うのです。ただ時代に流された、だけでなく、次世代への接点が見えるのでは。無学な一農民が送るメッセージ、少しでも説得力があればと願っています。

20年毎に中国山地の報告を、の約束を守っていただいて有り難うございました。大きな組織でなく個人の力での報告、でもそれは、前回、前々回にまさるレポートでした。これは後世、中国山地を研究する人達に貴重な資料を提供する重要な記録になると思います。私の限られた人生の中でお会いできて本当に良かった。有り難うございました。

2012.7.21 見浦 哲弥

(参考)ルポ 見浦牧場

広島空港より、岡部先生親子の車で約2時間走ると、島根県境に近く、臥竜山(1223メートル)と深入山(1153メートル)の山すそが会える標高700メートルのところに、小さな高原がある。この高原を舞台に和牛の一貫生産に取り組む見浦牧場があった。岡部先生の熱心な勧めにより、チクレン組織の先陣を切って、私とS調査役が岡部先生親子の案内で、平成2年3月15～16日の両日にわたって、牧場を見学することができた。

今回の見学にあたって、私は、技術的な点は、同僚の菅井氏に任せて、ひとりのルポライターのつもりで、人物中心の視察研修に焦点を絞り込むこととした。なぜなら、岡部先生のお話によると、経営主の見浦哲弥氏の人物像が特異で異端児の印象が強烈に私の脳裏にこびりつき、会う前から、一種の好奇心に似た興味に期待をはずませたのであった。

現実に対面したときの印象は、古武士を思わせる精悍な顔形であり、凛々とした頸烈さを内に秘めてはいるが、表情はきわめて柔和であり、仏を思わせる風貌の持ち主だった。

私の人物観察の方法をこのとき変更して、とにかく牛をみることから始めることとした。牛は必ず飼い主に似るといわれるから、牛を観察することで、見浦氏の人物像が把握できると思ったからであった。

牛群は、裏山を背景に簡易畜舎が設けられており、親牛子牛が一群となって、約100頭放し飼いとなって飼われていた。この風景を見る限り、何の変哲もない牛飼い技術である。私もかつていまだから20年近く前、北海道における黒毛和種の繁殖基地づくりのため、占冠村でこれと同じ方法にて屋外放牧飼育を試みたことがあり、そのとき無惨にも失敗した経緯があり、黒毛和種は、放牧適性がなく、群管理が難しい牛だという結論が頭の中にこびりついていたので、臨場感があり、零下20度C、積雪1.6メートルにもなるこの地で成功して、なぜ、北海道にて、占冠村はじめ白老町など各地で失敗の連続であったか、——。答えはすぐわかった。牛なのである。牛そのもののちがいのないものである。

目の前の牛群は、確かに紛れもなく黒毛和牛である。ところが、この牛群の特徴は、いわゆる和牛の欠点である、後軀すなわち尻の小ささと四肢の細さが見事に改良されているのである。もちろん、牛群の中には、全部が全部上記のような牛群ではないが、あきらかに、意図的にそれも傲慢なほどの信念に基づく改良基準に基づく系統選抜が20数年にわたり続けられ、見浦牧場の牛群の血統の源流となって、今脈々として流れるのを見るのである。

島根牛でもない、ましてや広島牛でもない。日本の何処にも見ることのない土産種見浦牛ともいえる牛群を作出しているのである。強健性、群飼性、放牧適応性のためには、和牛の生命でもあるサシの価値観を大胆に捨て去る勇気と主流にさらうためにまねく姑息なまでの見浦バッシングに耐える忍耐力と反骨心が牛群の中に生きて、見浦哲弥氏の人物像とオーバーラップして、和牛の故郷中国山地に生命の迸りを、見る人来る人に感銘づけてくれる。

牛は風土の産物である。

もともと和牛は、日本古来の土産種である。だから、和牛は、日本の国土に適合した牛であるといえよう。しかし、日本の風土が北から南に細長くのびて、それぞれの気象、土地その他の違いがあるように、その土地土地に一番適した牛がそれぞれあってもよい。和牛も風土の産物である以上、

土地土地に合った和牛があってもよい。こんな当たり前のことを、当たり前に実践しているのが見浦牧場である。

しかし、これまでの見浦牧場に対する世間の風当たりは想像を絶するものがあったと思う。ことの発端は、昭和40年から41年にかけて、京都大学上坂教授と広島県農政部の中島部長の間で、有名な和牛の一環経営論争が行われたときにさかのぼる。繁殖経営と肥育経営は分離するべきであるとの説は、今でも定説で動かしがたい権威となっているが、見浦氏が中島部長と、その権威に対して反旗を翻したとき、見浦氏の異端の歴史が始まる。

風雪20年の歳月の間に、日本列島の過疎化は中国山地で先鋭的に進み、若者は、村を捨てた。見浦氏の息子も家を出て、妻と二人三脚の経営が続く。貧乏の限りをつくしながら、一貫経営を頑なににつづける。いい牛が買えないので、やむをえずわるい牛にいい種牛を交配して、その子を次の基準で選抜して、またよい種牛を交配するという繰り返しを激しく行ったという。

1. 連産性が高いこと。
2. 哺育能力が高いこと。
3. 管理しやすいこと。
4. この牧場で成育がよいこと。
5. 増体能力が高いこと。
6. 肉質がよいこと。

先進地や試験場を家族ぐるみで視察研修して、先進技術の習得に努めた一方、毎日毎日の牛飼いの中から、独特の技術を習得し続けてきた。

牛は学習する。——との名言も見浦氏の実践から得られたもので、見浦牧場の牛群が見事にトレーニングされていて、見浦氏のかけ声ひとつで、見事に行動することが、多頭数群管理が省力的に行われる秘密になっている。

また牛を囲わず、人家や畑に柵をする。これも逆転の発想だ。

サシとD/G（肉1キロ生産するために必要なエネルギーを麦の量に換算したもの）は反比例することをあらゆるデータの中から引っ張り出して、サシをほどほどにする技術を習得している。

徹底的な省力管理。それも雪深い山地での周年放牧が貢献している。牛に牛を管理させる発想も、見浦氏独特の発想だ。現場主義に徹底して、現場から技術体系を組み立てていく手法は学ぶべきことが多い。

農業は、時間の長さの勝負だ。——これも見浦氏の人生観をあらわす言葉だ。見浦牛を見ていると、確かに時間の長さがひしひしとわが身に迫る思いがする。

二日間の見浦牧場の滞在の中で、見浦牛に接し、見浦氏とその家族とに接する機会を得て、強く感じたことは、農業にあくまでこだわり続ける農魂主義ともいえる土への愛着を最後の砦として、商業感覚を極度に押するなかで、権威主義だけがのさばる保守の象徴的存在である和牛界に徹底的に反抗した見浦牧場のもつチャレンジ精神のすばらしさであった。

農業にこだわることは、自分にこだわることであり、自分の生き方にこだわることでもあった。ともすれば、頑迷固陋な生き方に誤解されがちであるが、見浦氏に限り、きわめて近代的で、知性に

裏打ちされたフレキシブルな経営感覚は、まさに新しい農民像のモデルともいえるのではないだろうか。

見浦牧場は牛肉自由化を堂々と迎え撃つという。今こそ待ちに待ったビジネスチャンスという。サシ重視型の牛肉生産を指向すれば、生き残れるはずなのに。

答えはすぐに返ってきた。

霜降り志向は消費者の声ではない。―――。

今回の見浦牧場の見学は、チクレン組織の技術者として、生産技術の習得が目的だった。学ぶべき多くの技術があったが、なによりも私個人にとっては、和牛に対する不幸な固定観念が払拭されたことが一番の収穫であった。

見浦牧場の牛群を北海道につれてきて、見浦方式で和牛一貫経営を試みても、おそらく成功はしないだろう。見浦牛は見浦牧場を離れたら、ただの牛となる。見浦牧場の技術のノウハウをもってしても何の役にも立たないだろう。

ただ、われわれが北海道に持ちいれることができるものは、いや、ぜひとも取り入れなければならないものは、見浦牧場の経営理念と経営姿勢に他ならないと思う。

春まだ浅き中国山地。街にでた息子も帰ってきた。

子供は親のコピーになってはいけない。

三年後には、息子に経営権を譲るという父の顔に、「農業は生命の継続なり。」の信念と自信が現れていた。

北海道チクレン農業協同組合連合会
調査役 Y.Y

島津邦弘著「山里からの伝言」お読みになった貴方に(2012/7/6)

島津先生の御本、お読み下さって有り難うございます。あの本は50年近く前に出版された、中国新聞社の「中国山地 上、下」、それから20年後に出版された「新中国山地」、それに続く3番目の「中国山地」だと理解しています。

見浦牧場は、最初から取材されました（最初の取材は新聞には乗りましたが、取材後の私の失敗で本には記載されませんでした）。3回の取材は私どもの牧場の歴史と完全にオーバーラップしているのです。

ご存じの様に中国山地の、ここ50年の衰退は目を覆うものがあります。過疎を通り越して限界集落、そして消滅への道をたどりつつあります。ここ小坂も例外ではありません。お読みになってお気づきのように、記載された事例はこの流れをくい止めようとした多くの住民がいたと報告しています。しかし、その殆どが時代の流れに敗れたと。私も記事にするのなら敗退の歴史でなく前進の記録でなくてはと評したこともあるのです。

振り返ってみれば、中国山地は長い歴史を持っています。子供の頃から慣れ親しんだ石見神楽に始まり、樽床の平家落人説、芸北地区の尼子と吉川の抗争（見浦家も関ヶ原の落人）、浅野のタタラ製鉄、等々、数多くの興亡の歴史です。そして現在は経済大国、日本の大変動がもたらした中国山地の衰退の時期だと気付いたのです。なら必ずある次の隆盛に繋ぐ為には何を成すべきか、その提案が見浦牧場の生き方なのです。

それで島津先生に読後感想と一緒に私の文章をお送りしました。そして先生から一番嬉しかったと暖かいお返事を頂きました。

貴方にも島津先生にお送りした資料と同じものを差し上げます。どうか、お読み頂いて「山里からの伝言」の紙面の裏側に思いを馳せて、もう一度、読み返して頂けたらと思っています。

中島先生

ルポ 見浦牧場

岡部先生

見浦牧場からのメッセージ

金城牧場

背負うた子に教えられ

一貫経営のこだわり

2012.7.6 見浦哲弥

私の勲章(2012/6/30)

2012.6.30 島津先生から返事が届いた。先日”山里からの伝言”の私なりの書評を送ったその返信である。一枚の葉書だが心のこもった文面、久方ぶりに心が暖かくなった。

前略 ご丁寧なと言いますか、見浦さんならではの読後評をお送りいただき、全く恐縮のいたりです。

本をご覧いただいておりますが、表紙の写真は見浦さんが格闘してこられた牧場が眼下にあります。紺野カメラマンに頼んだら、雪の刈尾に登ってくれました。読者には単に冬の中国山地かもしれませんが、小生なりに「山里からの伝言」への思いをこめたつもりです。たくさんの人からお祝いの便りを頂きました。でも見浦さんの手間暇かけてつくられた資料集成が一番の喜びでした。30年ぶりの記録を残せて良かったとしみじみ思います。ご家族のご健勝を念じております。

島津邦弘

私は表彰というのは嫌いだ。とかく誇張されて内面の人間性が伝わってこない。しかし、認められることは嫌いではない。限りある命という定めの中で少しでも生き様が伝わるとしたら、理解されるとしたら、それが勲章だと思っている。その意味では、数々の勲章を私は頂いた、その最後の一つがこの島津先生の葉書なのだ、私はそう読ませていただいた。

幸せの数(2012/3/8)

この地方では運のいいことをマンがいいといいますが、他人はとにかく良くみえるようです。友人の O 君の口癖は「わしゃーマンが悪い」でした。ところが私からみると彼は人並み以上に幸運だったと思うのですが、マイナス面だけ取り上げて、不幸じゃ不幸じゃが口癖、これには我慢ができませんでした。

生意気なようですが、早く母を亡くし、恵まれた中産階級の生活から一転して没落地主の厳しい現実の中で生きた私には幸運だけがやってくるというのはおとぎ話の中だけ、いやおとぎ話にも運不運はありましたね。結末が幸せで終わるだけ。そんなわけで「マンが悪い、マンが悪い」のセリフに我慢ができませんでした。

彼が60過ぎのときでしたでしょうか、例によってマンが悪いが始まりました。聞き流そうと思ったがそのときは虫の居所が悪かった。それでつい本音が出てしまいました。

”君はマンが悪いを口にするけれど、運のよかったことを数えてみたことがあるのかい、私から見ると君の幸運の数は他の人より多い気がする、数えてみようか”
彼は憤懣やるかたない顔で私をにらみつけました。そこで私は知る限りの彼の幸運を並べて見せたのです。

君はお母さんの連れ子、それを実子同様に大事にしてくれた養父、彼曰く、「小学校に入学するとき、いじめられては」、と入籍してくれたな。

20代の後半、結核で長期入院をしたとき、養父と奥さんが力を合わせて子供たちを養い家庭を守ってくれた、それは幸運とは言わないのかい。

6人いた子供さんが全員成長できた。医者から見離された大病のお子さんもいたのに。

と数え始めたのです。黙って聞いていた彼が「もういい」と一言、それ以後は私の前では「マンが悪い」が消えました。

人間誰でもいいことばかりではありません。苦しいときもあれば、悲しいこともある。家庭が明るくて、家族が助け合って、貧乏でもあるが食べることには事欠かない、贅沢は夢でも時には笑いはある。そんな生活でも心の持ち方一つで幸せにも不幸にもなる。

私の人生の物差しは自然、山奥の小板は文化の恵みは薄い、山川草木、周囲はすべて自然、おまけに私たちは動物相手に働き、生活している。だからこそ自然が物差し、お寺さんでもない、牧師さんでもない、それが自分の物差し、身近な自然現象が生きるよすがを教えてくれる。

人間だから不運が続くことはある。しかし悪天候が続くことはあっても、やがては晴れてそよ風が吹く。生きていてよかったと春風も吹く。そしてあきらめてはいけないと自然が教える。幸せの数と不幸の数は同数かもしれないが、心の持ち方一つで不幸と思っていることが幸せに変わる。そして幸せの数がひとつでも多ければ素晴らしい人生なんだと気づいてほしい。

一度だけの命、生まれる定めは自分では決められない。でも生き方や考え方は変えることができる。だから自分の幸せと不幸の数を比べてみよう。ひとつでも幸せが多いと気づいたら、生き方も変わるかもしれない。

人生の終わりにたどり着いて色々なことが見え始めている。もう私には役に立たない話だが、若い貴方には参考になるかもしれない。いい人生にしてください。

2012.3.8 見浦 哲弥

農兵隊 14才で動員に(2012/7/10)

昭和20年1月 松原尋常高等小学校からの場八郎君と二人、基礎訓練を受けるため、県立七塚原伝習農場に出発しました。降り積もる雪を踏みしめて。

敗戦につぐ敗戦で追いつめられた政府が子供まで戦争に動員を始めていました。ちなみに友人の斉藤正司君は少年兵を志願した。彼は戦後、帰宅は出来たが航空隊で罹った病でまもなく死亡。一級上の女の子は従軍看護婦で戦死。私の周辺でも戦争の犠牲になった人数は枚挙につきません。

中東の戦争やアフリカの内戦で子供を戦争に使うと非難していますが、狂気の日本軍部も全く同じ事をしていたのです。

自分たちの過ちを祖国を守る愛国心にすり替えて、動員と言う名目で強制労働に、志願兵にと子供達を送り込んだのです。

国家とは何ですか、愛国心とは何ですか、私達は口に出してこの問題を論ずる事はまれです。戦前の間違った愛国心が国民をどんなに悲惨な環境に追い込んだか、広島の惨状の一片でも知る人は、その起こった事だけを非難し、その由来までは思いをはせない、現在はそんな不可解な平和論が横行しています。

私が体験した農兵隊と言う組織、その中での記憶を記述することで、貴方とこの問題を共有したいと思うのです。

昭和19年から20年、すでに日本の近海はアメリカ海軍の潜水艦で監視されていました。特に大陸からの資源を運ぶ輸送船は格好の標的になったのです。国内で不足する食糧は中国の東北部（満州と呼ばれていました）から、朝鮮半島を経て、船で朝鮮海峡を渡りました。その船が狙われたのです。

敗色が濃厚になった日本は近海の朝鮮海峡の制海権まで失っていたのです。国外からの資源がなくては生きて行けない事は今も昔も変わらなかったのに。

食料はとうの昔に配給制になっていて、軍関係は何グラム、一般人は何グラムと詳細に決められていましたが、それが危うくなったのです。

一般の市民は米の飯など夢のまた夢、麦飯になり、芋類が入った芋飯になり、雑穀が入る、米粒が少なくなり、一部の人達を除いて白米のご飯は夢で見るだけ、食堂はとうの昔、雑炊になり、それも政府から配られる配給切符や食料切符がないと食べられませんでした。しかも、長い長い行列に並んで。

しかし、軍人には腹が減っては戦はできぬと重点的に食料は回ったのですが、社会は餓えに苦しんでいたのです。軍需物資の増産はかけ声だけでは人は動かない、腹が減っては戦は出来ないと、政府は閣議で食料増産を決定しました。席上、石黒農林大臣が軍隊や工場に若者が取られて老人だけの農村では、どうやって働き手を確保するのかと問題提起をしたと聞きます。それなら子供を使えと。

そこで各学校から2名ずつ集めて農兵隊を作ったのです。幹部として実業高校の3年生が、隊長として校長先生の古手が、そして寄せ集めの集団が出来上がったのです。そのアマチュアの集まりは何もかにもが試行錯誤、やることなすこと上手く行かない、従ってしわ寄せは子供達にと言うシステムが出来上がったのです。

まず幹部の養成、当時、茨城県内原にあった満蒙義勇軍養成所で（少年を満州の農村に日本村を作る為に送り込んだ組織の訓練所）（松原からも1年上の友人が参加させられて満州に行った）即席訓練された17、8の少年5名と、先生の古手と、軍人の古手の大人が2人、これで何も知らない14歳の子供120人をコントロールして働かせ、食料を増産すると言うのだから、負け戦というものは、何もかも狂ってしまうものらしい。

農兵隊広島県大隊山県中隊第2小隊第4分隊、分隊長見浦哲弥が私の肩書き、分隊長にされたのは学校の成績が参考にされたのだろうが、そんなものが通用するような環境ではない。お陰で仲間からいじめられるわ、幹部からは標的にされるわ、散々な目に合わされた。

本部は新庄村、宿舎は現在は浜田道のインターのところにあった廃牧場の畜舎。

最初は畜舎の改造が間に合わない。そこで新庄中学の講堂の二階に間借り、同じ年齢の少年が片や農兵隊でぶん殴られても命令に絶対服従、片や中学生で自分の意志の表現が出来て家に逃げても警察が逮捕に来ることはない、そんな天と地の違いが同じ空間にいた。

一応、寝る場所と食事が出来るようになると開墾作業が始まってね。サツマイモの植え付け時期が迫っている、何月何日までにこれこれの面積を畑にして苗を植えろ、命令するのはたやすいが、与えられた土地は熊笹の密生地、全面を耕しては間に合わない、笹を刈り取って大きな溝を掘り、溝と溝の間に土を盛り上げてそれに芋苗を植えろ、簡易開墾と称してね。

おまけにノルマがあって一人一日にこれだけを畑にしろと面積が割り当てられる、要領のいい奴は笹の少ないところを我がちに占領、ポサットした奴は密生地と決まっていて、完了しないと宿舎に帰れない、勿論食事はない。

例によって、のろまな常連が5-6人荒れ地で泣きながら鍬をふるってしましてね。勿論私も一員、お月さんが出ても誰も呼びに来ない、宿舎から2キロ以上も離れた山の中、幹部連中が就寝前の点呼で人数が足りないと騒ぎになって、始めて命令した奴が気がついた、「あいつら、まだ山の中か」。

「もう帰ってもええ」と迎えに来て、宿舎に帰って、冷え切った盛り切りの麦飯と塩汁の夕飯にありついた時は、こんな事がいつまで続くのかと暗澹な気持ちになりました。14歳の子供がね、そこにあったのは正邪の世界ではない、いかに上手いことをするか要領の世界でした、見浦の家庭では教えられなかった世界があった。

昭和20年（1945）には戸河内に上殿、戸河内、松原の3国民学校（尋常高等小学校）がありましてね。松原校からは的場八郎君と私、上殿からは鈴木君ほか1名、戸河内からは中津君ほか1名の計6人、もう何十年も会っていない人もいて記憶も定かではない。

何年か毎に農兵隊の同窓会と称して集まりを持った事が何度かあったが、辛い思い出が多かった関係で、総勢120人あまりの中で出席するのは20人足らず、それも年毎に減って集まりも出来なくなった。

山県郡は地勢的に3つに別れるらしい、太田川流域の安野、加計、筒賀、戸河内、地区、江の川流域の大朝、新庄、本地、八重、壬生、南方、原、吉坂、都谷、地区、急峻な中国山地中腹部の八幡、雄鹿原、中野、美和、地区、の各町村。

この3地域は比較的交流が少ない、ことに太田川流域と江の川流域の対立は敵対意識に近い、後年、県会議員の選挙では見事に争った、お陰で芸北地区は漁夫の利で宮本氏が3代に渡って

議席を保った、それは後世の話し。

ところが農兵隊でも、この関係が見事に起きた、団結の江の川系に対して太田川系は対立の意識はあるもののまとまらない、芸北は無色で傍観の姿勢、その中で私は目立ったものだから集中攻撃を食らった、辛かったね、七塚原の牧場派遣に志願したのも、それが原因、何十年かして、道路が整備され、自家用車が普及して交流の範囲が広がって始めて、地形的にも成る程と理解できた。

江の川流域は山や川で別れていても、町村の境が判らないほどなだらかで繋がっている、太田川流域は山は高く急峻、僅かに細長く太田川で結ばれているだけ、芸北地域は尼子と吉川の勢力の接点で支配者の交代が頻繁に起きて住民が保身のため日和見を決め込んだところと。

私が本領を発揮できたのは敗戦後、10月の終わりに七塚原牧場から帰隊してから、戦争の為の動員が農民教育の一環に変更されて、労働と共に授業が開始されてから。

何しろ神様より強いマッカーサー総司令部の命令は軍国主義の色彩は完全に払拭せよと、農兵隊も泡を食って取って付けたような教育機関に変身、もっとも高校を出たての17、8の子供が大声を上げて教えても理解できる奴はいなくて授業の最後に「判ったか」と聞いても返事をする者がいない、さらばと、やっと見つけてきた黒板に問題を書いて「出来るものは」と聞いても誰も手を挙げない、困り果てた即席の先生、出来そうな奴に「おい誰々、できるか」と聞く、そして答えが合うと「よう出来た、みんなも判るの、わからにゃ〇〇に聞け」で終わりにする手を考えた。

当時でも経済的にゆとりがあって頭のええ奴は広島や新庄の中学校へ、行けない奴が小学校の高等科ときまっていた、その高等科でも、卒業したら程度のええ奴は加計か八重の実業に行く、同級生の中には志願兵で航空隊へ行ったのもいたな、農兵隊は農業の跡取りか進学の出来ない奴か、勉強が大嫌いで学校が持て余した奴が送り込まれた、そんな感じだったね。

特に数学が出来ない、何しろ食品のカロリー計算も出来ないと言うので大変、業を煮やした先生「宿題にする、明日までにやっておけ」、自由時間が来ると2-3人いた見浦派が「教えてくれ」とやって来た、九九と足し算が出来れば誰でもできる、奴さん達、これで安心して寝られると大喜び、それを見ていた日和見派の勇氣のある連中が「俺にも」と来た。

高等科でも上級生にも教えていた数学は得意の科目、「わかった」と喜んで貰うのは一種の快感でね、日頃の垣根が取れると後から後からやって来た、順番を取るとて貢ぎ物まで差し入れる奴もいて、前日までとは天と地の違い、あきれたねが、さすがに目の敵にして私をいじめていた連中は、遠くに固まってにらみつけるだけ、でも手は出てこなかった。

12月の終わり頃になって希望者は帰宅しても良いことになった、動員の命令が無効になったと通告があったらしい、表向きは一種の教育機関になっているので正式の解散は翌年の3月、それまでは存続するので出来れば居て欲しい、解散時まで在隊したものは、加計、八重の両実業学校に無試験入学の恩典がつく、軍需物資の払い下げ品も与えると、この説明は効果があって、それでも帰宅すると頑張ったのは10人足らず、その一人が私だった、農兵隊から持ち帰ったのは、1食の握り飯、お米が少々、琺瑯引きの海軍食器、その帰途の雪道遭難は”雪国の教え”に書いた。

敗戦の年の苦しかった1年、14歳のひ弱な都会子がタフな少年に変身した、黙って泣きべそ

をかくより、反撃して殴られろとタフな少年になった、そのために必要な1年だった。

時折あった同窓会の誘いもなくなった、苦楽を共にした仲間達も生きの残りは僅かになった、そして農兵隊山県中隊は忘却の彼方に消えようとしている。

2012.7.10 見浦哲弥

ウインドロー(2012/5/17)

岡部先生がこの牧場にお出でになる様になって、3回か4回目かに「見浦君、乾草が2日で出来ることを知っているか」と、聞かれました。「ええ、知っています、条件がよければ、この牧場でも2日で仕上げています」と申し上げると、不思議そうに「どうして、君はその事を知っているのか、日本では3日以上かかるのが常識なのに」と、聞かれたのです。

私にとって当然のことを、不思議そうに聞かれた先生に一瞬とまどったのです。今日は、その話を思い出して見ましょう。

昭和46年に見浦牧場の一番大きな牧草地が出来上がりました。1区画8ヘクタール、何しろ小板部落の水田総面積が20ヘクタールというのですから、当時は広大だと思ったものです。春になりました。牧草が一斉に伸び始めます。見事な光景と感激したのは何も知らないからで、それを刈り取り、運搬し、牛に食わせて、余った草を貯蔵する、それがとんでもない大仕事で、その解決に何十年もかかったのですから、知らぬは仏の話はここにもありましたね。

勿論、ここ小板でも昔から草刈はありました。刃渡り30センチほどの手鎌で、なぐり刈と称する、この地帯独特の刈り方をする、ですから他の地方とは芸北の鎌は微妙に刃の曲線が違っていました。

殴り刈りというのは左手に固めの少し長い草を持ち、その草で前方の草を分け、曲がった草の根元に鎌を打ち込むようにして刈る。実演すれば簡単な動作も、文章で説明すると大変ですが、少ない力で多量の草が刈れる、質より量の方式なのですが、刈り取った草は不揃いになり勝ちです。

もう一つ握り刈り（にぎりかり）という刈り方もあって、これは左手で草を握って根元に鎌を入れる。

刈り残りはないし、刈り取った草は根元が揃ってきれいです。いかにも仕事が丁寧ですと宣伝しているように。しかし、能率の悪いこと。

動員で働いた牧場で殴り刈り方式で草刈をしていたら、仲間に「見浦は横着な草刈をする」と幹部に密告され、こっぴどく叱られました、この農場では握り刈りの方式でしたから、でも能率は何分の一以下でしたね。

このアホが何も知らんぞと思いましたが、時は戦時下、口答えはとんでもない報復を受けます。我慢我慢、でも悔しかったですね。

ところが8ヘクタールの牧草地、見事に育ったと喜んだのも束の間、草は凄い勢いで育ちます。最初は手鎌で殴り刈り、草の短い間は、さすがの殴り刈りでも量が刈れない、柔らかい牧草は鎌にまきつく、牛が食べるだけの量を刈るのも大変でした。ところが春先は牧草の成長は尋常でない、スプリングラッシュと呼ぶ現象だと教えられましたが、この時期の牧草の伸び方は手鎌で追いつく代物ではありませんでした。

そこで参考書を読む、西洋では牧草を西洋鎌で刈っていると記載してある、早速オーストリア製の西洋鎌を買い入れて挑戦。ところが西洋鎌は形が違うだけでなく、つくりも仕組みも異質、それを理解するまでが大変でした。ここにも異文化を理解するための苦闘がありました。

さて、日本の鎌と西洋の鎌は形が違だけでなく構造までもちがうのです。ですから、そこが判らないと、刈り方も、研ぎ方もうまく行きません。事はついで、その説明もしておきましょう。

日本の刃物は柔らかく粘りの在る軟鋼と、脆いが堅いはがねを組み合わせで作ってあります。そのはがねが中心にあるのが両刃、片側に付いているのが片刃、草刈鎌も二通りありましてね。（ちなみに芸北鎌は両刃でした。）ですから、刃砥ぎも荒砥、中砥、仕上砥と3種の砥石を使って両刃は両側から研ぐ、剃刀のように切れるように、朝露の草刈は滑る様に切れるのが農夫の自慢でした。

西洋鎌は一種類の鋼で作られている、軟鋼よりは堅く、鋼よりは柔らかくて、日本の鎌の2倍もある大きさにもかかわらず軽い。長さは50センチあまり。それに金属の独特に湾曲した長い柄がついて（木製のものもあるらしく、見浦牧場が手に入れたのは金属製でした）、それで日本の鎌と大差ない重量、とにかく軽いのです。薄い鎌は強度を保つため曲面になるようにプレスがしてありましてね。

おまけに切れなくなったら、刃先を金床でハンマーで薄くたたき延ばし、棒状の荒砥できつと削るだけ。説明書には日本の鎌との違いや、独特の使い方の説明はなくて、使い方は知っているのが当然と記載してない、エイままと芸北鎌のように使ったら草は切れなくて、鎌の方が曲がってしまいました。

西洋人は使えて日本人はうまく使えない、同じ人間なのに何故と考える、それが見浦の悪いところで、仕事をおっぼり出して、ああでもない、こうでもない。試行錯誤の結果、横に滑らすと日本鎌には及ばないものの、牧草は気持ちよく大量に刈れる。さすが西洋人と感心しましたね、もっとも日本の野草には無力でした、郷に入っては郷に従えの言葉のように。ところがもう一つ問題がありまして、体力が入るのですよ。体格的に西洋人に劣る日本の農夫には、この鎌での長時間の作業は苦痛でしたね。

さて、ここ西日本は梅雨なる現象があります。6月の半ばから7月の中ごろまで、毎日毎日雨が降り続く。牧草にとって絶好な条件でして、朝草刈をしたのに夕方には、もう2-3センチも伸びている、そんな猛烈な生育をするのです。見事に伸びた牧草が刈り取られないままに、倒れて腐ってゆく。これには、おまけがあつて、倒れた草を放置すると牧草の根まで腐って野草地に変わってゆく、踏んだり蹴ったりの状態になるのです。

ところが適期に刈り取ると、肥料さえあればすぐ伸びだして再生する、年に3回も4回も刈れる。牧草は野草とは異なった凄い能力を持っていたのです。ですが、適期刈り取りと口で言うのは容易いのですが、実際には不可能に近い。なぜなら、この地帯は年間雨量2200ミリ、とんでもない多雨地帯なのです。おそくまである根雪が消えると一度に春がやってくる。牧草の成長が春先に偏るので余った草は貯蔵しなくてははいけない。勿論乾かして蓄える干草はこの地方でも昔からありました。お盆前の1時期、晴天が暫く続くのです。好機到来とばかり

家内総出で干草作り、毎日草刈山に通いましてね。

こんなことが続いて、牧草づくりは在来の草作りとは違うと気がついて、必死で勉強を始めました。

参考書を読む、牧草の成長を観察する、見学に行く。

西洋鎌の勉強などは序の口でしたね。そんな時14歳の時の動員で七塚原牧場で過ごした経験と見聞は役に立ちました。牧草畑で馬が引いてはいたものの、草刈のモア、テッダー、レーキ、などの機械、西洋鎌や牧草用のホークなどは、そこで見たのでしたから。

しかし、転作の田圃まであわせると15ヘクタールの牧草畑、鎌やホーク、肩掛けの草刈機などでは、どんなに働いても処理できる量ではありませんでした。まさにドンキホーテ氏、風車と戦う、そんな有様でしたね。

和興農園の失敗でシイタケ栽培で蓄積した資本を失ったばかりですから、機械を買うのも儘ならない。それでも1971年に国産の20馬力のトラクターを1/2の補助金を頼りに導入しました、ところが補助金を貰うのにもボスが介入、あまりのことに作業機は自費で購入することにしたのです、何年もかかって。

次に買ったのがスターのレシプロモア、当時も現在のようなロータリーモアは外国製であったのですが、レシプロの4倍以上の値段で私達には手ができませんでした。

しかし、石ころが多い開拓地ではレシプロモアは故障の連続、貴重な短い好天を機械の修理で無駄にして何度も泣きました。いま思い返しても胸が痛みます。

考えられないことですが、国産機でも当時はモアの刃は北欧製、かなりの高価でね、折れた歯の交換などで、苦労しました。予備のバーの購入やら、修理の慣れで何とか使いこなせるようにはなったものの、2度刈りができない、最後の中心部の刈り取りは技術がいりましてね。

丁度、その頃からモアの刃の国産が始まって、見浦牧場にも入ってきました。切れ味もいいし耐久力もある、ところが圃場で使うと問題山積、石に当たると折れる、折れないまでも曲がった刃が堅くて叩いたぐらいでは元に戻らない、その度に作業を中断して分解修理、刈刃の交換、北欧製の刃は少々曲がりは叩いて直すと作業が続けられる、実際の作業効率は格段の差がありました。

現在では、国内だけでなく、外国にも普及し始めている日本製コンバインは全部レシプロモアが着いている。しかも小農家の中にはモアの刃を研ぐということを知らないで使っている、それほど日本のモア刃の品質と実用性は向上しています。そんな小さな部品の一つからも技術屋さんの努力が伝わってきます。

農民はそこまでの努力をしたのだろうか、農業の衰退を思うたび反省しているのです。

閑話休題、干草の話でしたね。モアが買えて曲がりなりにも刈り取りは前進しましたが、刈った草をひっくり返えさなくてはなりません。裏側を乾かすためにね。小板では鎌で5-60センチほど引き寄せて足の甲に乗せ、バックしながら裏返す、そんな方式でした。こんなことでは大面積の干草の処理は出来ません。そこで牧草用のホークを購入して対策することになりました。

細長い刃が4本ついてスコップの柄がついたのがマニアホーク、小板でも早くから導入されていて、堆肥を積むのにはかかせない道具でした。3本爪で2メートル前後の真っ直ぐな柄の附いたのがヘイホーク、七塚の牧場で馬車に干草を積むときに使い方を習いましたが、雨が多く

て晴天が続かない小坂ではヘイホークだけでの処理は難しかった。涙を飲んでヘイメイカーなるオランダ製の牧草を反転する作業機を買いました。36万円でしたか、貧乏のどん底の私達には痛い出費でしたね。でもこの機械が新しい考え方を教えてくれたのです。

当時は、農機具会社の対応もまずくて、日本語の説明書がついてこない。製造国のオランダ語と英語、ロシア語のオペレーションマニュアル（使用説明書と部品表）しかついていない。ご存知のように小坂の私には読みこなす力はない。泣きましたね。

実際に使ってみるしか方法がない。試行錯誤、専門家がみたら笑うような間違いをしでかしながら。

そんな使い方だから機械の方もたまったものではない。故障続出、確か10年くらいで駄目になったのかな。現在だったらその2倍も3倍も持たせることができたのに。

しかし、この機械のおかげで、小坂にあった畜産と、取り組もうとしている多頭飼育の畜産との考え方の違いを学んだのだから、それなりに大きな収穫があったのです。

さて長い前置きになりました。私には知り尽くした機械でも、見たこともない貴方には、どんな構造か想像もつかないでしょう、その説明から始めましょうか。

幅2メートル、長さはトラクターへの取り付け部を含めて1メートルあまり、進行方向に直角に両端にダブルの直径50センチばかりのリールがあって、2本のチェーンがかけてある。（百聞は一見にしかず、現在使用中の後継機の写真を添付します。チェーンが太いベルトに変わっているだけで殆ど同じ）2本のチェーンを30センチほどの棒が10本ばかりで結ばれていて、その棒に3本ほどのタイン（爪）がついていて、進行方向と直角に地面を引っかけてゆく。従って地面に刈り倒された牧草は片側に寄せられて列を作ってゆく。参考書によればその列をウインドローと呼ぶのだとか。

私は英語がわかりませんが、なぜ牧草の列をウインドローと言うのか、この単語が頭に引っかかりました。食事をする時も、仕事の最中も気になり始めると止まらない、この癖は高齢になって物忘れが普通になってようやく止まりましたが、若い頃はこれで苦労したのです。

が、ある時ふと思った、これは造語ではないか、ウインドとローではないか、そうすれば風と列ということになる。

それから考えましたね。どうして風の列というのか、頭の良くない私は何日かの思考のすえ、たどり着いた結論は”干し方の違い”でした。

小坂の在来の干し方は日の光で干す、太陽に向いた側が乾いたら裏返す。ウインドローの考えは風にさらして乾かすだったのです。日本より緯度が高く日光が弱いヨーロッパで考えられた、太陽光だけでなく、風の力も利用する合理的な考え方だったのです。

さて結論が出ました。即実行、真夏の晴天にウインドローを作りました。刈って2〜3時間少し表面が乾いたらヘーメーカーでウインドローを作る。でもまだ水分の多い牧草のウインドローは暫くすると潰れてくる。潰れるとウインドローの作り直し。それを何度か繰り返すと見事に2日で干草ができあがったのです。

驚きましたね。真夏の短い期間とはいえ、何日もかかった干草が、たった2日で仕上がりとは。しかし、これは大きな教訓でした。表面の現象だけでなく、考え方まで学ばないと本当のことは理解できない、これが見浦牧場の物事を見る原点になったのです。

何も知らないで機械の寿命は縮めましたが、それ以上のものを学んだ、それがウインドローの話でした。岡部先生は黙って聞いておられました。最後に「九大の農学部を出た牧場主が知らなかったのにのー」と。

「ナーして」という当地の方言があります。どうして？と疑問を持つことですが、当たり前と思っている事にも改善できる要素があるのではと思っています。そんな時「ナーして」とつぶやく、案外大切なことかもしれませんね。
厳しい市場経済のなか生き残るためには、こんな考え方も必要なのでは。

2012.5.17 見浦哲弥

素直すぎる貴方へ(2012/8/18)

2001. 10 久しぶりに貴方とお話をする機会がありました。最初の時は貴方はまだ大学生、後で色々と考えられたと人づてに聞いて真面目に聞いていただいたと嬉しかったものです。いつの間にか随分と時間が経って30歳になられたとお聞きして驚きましたが、お話をしていて気づいた事があったのです。素直すぎると。

先輩面をするのは僭越であること承知ですが、半世紀も長く生きた老人の戯言と許して頂けると、この文章を書いています。

現在の日本は市場経済のシステムの中で動いています。別の言い方をすれば競争社会、その善悪を批評する気はありませんが、見方を変えれば激しい競争の繰り返し、学校でも会社でも地域でも。

このシステムは長所もあれば欠点もあるのです。肯定する人はあらゆる手段で勝とうとし、否定する人は競争の現場から離れようとするが、そんな両極端でなく中間に私達に生息域がある事を皆さんは見落としている、そんな気がしているのです。

貴方もご存じのとおり、見浦牧場は和牛を集団放牧の形で飼育しています。この方式は日本では少数派に属して十指に足らないでしょう。でもその牛達の生き方を見ていると競争しながら助け合っている、その微妙なバランスの取り方に教えられることが多いのです。

私達の社会と同じように彼等の世界も競争社会、強いものがリーダーになります。ところが弱い牛をいじめ回す牛は決してボスの座につけません。何故なのかなと長い間疑問でした。ところが二十数年前から起きた熊の被害の中で教えられたのです。

最初に6ヶ月ばかりの子牛が襲われました。2頭が群と別行動をとって熊に出会ったのです。1頭は地面に叩きつけられて死んでいました。ところが1頭はその隙に逃げ出して助かりました。問題はその後です。見浦の牛は集団で行動するようになりました。子牛でも出来るだけ多くの仲間と動くのです。考えてみれば1頭で熊と出会うと100パーセント命がない。10頭なら危険は1/10に減少する。そのためには集団が大きいほど助かる確率は高くなります。ところが優しくなければ仲間は増えません。思いやりがなければ集団が大きくなりません。ここに思い至った時、自然は素晴らしいことを教えているなと思ったのです。

日本は資源小国です。国内資源で養える人口は5000万から7000万人ぐらいでしょう。生きるためには外国から原料を購入し加工して世界の人達が求める商品を作って売る加工貿易しか生きるすがすがしきありません。誰もがほしい商品それを作るのには知恵がいります、技術が要ります。それは努力と競争の中からしか生まれません。それが小泉さんのグローバル化、競争社会なのです。

その小泉さんの政治は富めるものと貧しいものとの差を拡大してしまいました。貧富の差が大きくなり社会の脱落する人（本当に脱落者なのか？）増えました。だから競争社会は駄目だと極論する人達が出てきたのです。

見浦の牛達はこの事も教えています。草を食べるときも、餌箱から飼料を食べるときでも、競争を忘れません。でも美味しい草がないから絶食するという牛はいません。みんなそれぞれに

生きて行くために全力を尽くします。その積み上げの大きさの差で集団の中での地位が上がって行く、そしてリーダーにたどりつく。でもどうしても負ける牛が何頭かです。その牛は私達が牛舎に連れて帰って飼直をしています。

私達の社会もそれと同じだと思うのです。資源が乏しく加工貿易で国が成り立っている、外国の人達がほしがる商品が生産できなければ、食料も原材料も手に入れることは不可能です、日本の成功を手本として、台湾、韓国、中国、インドなど世界の後進国が工業を発展させ加工貿易に乗り出してきました。ホームセンターに並んでいる商品の大部分が、これらの国々が生産したものです。同じ品質の商品を作っていたのでは、労賃の安いこれらの国の商品が勝に決まっています。

競争力のある商品、工業製品だけでなく、農産物、システムまで、それは発想の転換と努力の積み上げの中でのみ出来上がると思うのです。

こう話すと、とても難しい話しと思うでしょう。それでは身近に起きた話しをしましょう。

敗戦後、都市の復興のため中国山地から木材を始め様々の資材が都会に流れました。

その運搬のためトラック1台のミニ運送会社が乱立しました、小坂にも松原にも。

しかし都市が再建され物資の流れが変わりました、勿論、時代を先取りして新しいニーズに対応し巨大化に成功した有名会社が続出しましたが、山間のミニ運送会社は減少する貨物の取り合いで運賃の値下げ競争、その結果、廃業、倒産が相次いだのです。

そんな時、牧草を運んできた運送屋の若い経営者が、もうお先真っ暗と訴えたのです。

その泣き言を聞いているうち猛然と腹が立ちました。部外者の私から見ても視野がせますぎる。

そこで聞いたのです。「あんた何で商売してるンね」

当然の答えが返ってきました。「運送をやって商売してる」

「なんでもう一つ売らんのかい」彼がキョトンとしたのを覚えています。

「たとえば問屋の倉庫に牧草を積み行く、どの種類の牧草の在庫が多くて、どれが不足しているか、見る事が出来るはず、現場の職員と立ち話をすれば、もっと詳しくわかる、その中には荷卸し先の牧場が必要な情報があるかも知れない、また牧場での世間話で牧草の本当の品質や牛や馬の食い込みの情報も得られるのではないか、それは問屋にも商売のプラスになる、何故情報も一緒に売らないのか」。

運送屋は様々な商品を運ぶ、そこには様々な情報があるのでは、その情報を選択してお客さんに伝える、そんな競争もあるのではと。

途端に彼の顔色が変わりました。私と違って大卒のインテリ、頭の回転は速い、愚痴の羅列はなりをひそめて、どうすれば新しい方法を取り入れられるかと真剣な議論になりましたが、それから先は門外漢、彼の発想の展開を見守るだけでした。

あれから30年余り愚痴の青年は山県郡最大の運送会社の社長に、目下は3代目の経営者になる娘さんの教育に全力をあげている。

そんな彼が「1年に1回はあんたの顔を見ないと心が落ち着かぬ」とやってくる。2回も来るときは会社に問題が起きたとき、あの時の一言がまだ続いているのです。

私達はこの巨大な社会の機構に目がくらんで何も出来ないと思い込んではいないだろうか、巨大故に生じた隙間や、発展ゆえのひび割れが数多くある、それを見落としているのでは、そし

て、そこから水漏れを見逃しているのでは。

この社会が健全に発展して行くためには、その隙間を埋め水漏れを止めなくてはならない。そこが若者や中小の起業者に取って腕を振るう絶好な場所なのです。大企業や大資本は小さな機会や利益は追っかける事はしないものです。資本金何百億の大会社がそんな小さな利益を追っているは大勢の社員を支える事は不可能ですから。

ところが、そこが隙間ですよとは誰も教えてくれない。朝が来て一日が終わって、これが普通だと思ってしまう、運送屋の社長さんの様に目の前の現象だけしか目に入らない、貴方が自動車のライセンスを取るときに、指導教官が道路の左右にも気をつけてと教えたはず、何が飛び出すか判らないからと、ところがいつの間にか注意するのは全面だけで回りの変化などは気がつかなくなる、それが人間のサガなのです。

それを気付かせてくれるのが出会い、それは会社の上司かもしれないし、隣のオジサンかも知れない、まれには後輩かも知れない。私の人生では、それが何度も起きました。とんでも無いところでね、それが無学な田舎の爺様の話を聞いてくれる多くの人を持つ事に繋がったのです。有り難いことです。

たった1度の短い人生です。少しばかりアンテナを延ばしてみませんか？思いもかけぬ出会いがあり、とんでもないチャンスに出会うかも知れませんよ。

今日は爺様の戯言を聞いていただきました。

2012.8.18 見浦哲弥

柴栗と鉛筆(2012/9/3)

私が小板に帰った頃は柴栗の全盛時代、ベテランになると一日に30リットルも50リットルも拾う、ところが私が栗拾いに行くと空の毬（イガ）ばかりで栗がない、たまに栗に出会っても手のひらに一杯も拾えれば大漁、当時は藤田屋の婆様と住福の爺様が小板の名人として存在していた。

2人ともナバ（注：キノコの意）取りも神様で、あやかりたいと思っても遠く及ばない。ある時、名人の技を解説して教えてくれた年寄りが名人の名人たる所以を教えてくれた。ポイントを押さえた話で、目から鱗が落ちた。今日はその話を。

栗拾いも人に先んじる事が全てで、その為には栗の木が生育するのはどんな所か、何処にどんな栗の木があって、今年の成り具合はと、日頃から観察するのだと言う。名人ともなると「そりゃー、よう知っとるけーのー」。

栗にも熟期がある。早生と晩生と、どんな天候で落ち始めるか、落ちる時間も日によって違うのだと教えられた。

そう言えば、栗林は東南面や北面の表土の厚い肥沃な所でしたね。谷によって差がありましたが、おまけに品種まであって、極めて行けばきりが無い。名人はそれを全部頭に入れているのだとか。簡単には名人になれない。

藤田屋の婆様は、その日が来ると暗いうちから目的の林に行き待つ、明るくなると拾い始めて袋詰め、私達が山に入る頃は、袋詰めを自宅に運搬中、大人と赤ん坊の勝負で問題にならない。

雨降りの朝は特に大漁で、そんな日は婆様も拾い残しがある。そんな場所に行き当たったら柴栗の絨毯で小さな栗は無視、そんなことが時にはありました。

それはまさに市場経済の成功条件、頭を使い、苦勞をいとわない。誰もが知っていることなのに、気が付くのが少し遅すぎた。お陰で私は人生の終わりでもまだ成功していない。

ところが、世の中は名人の独走を何時までも許すほどヤワではない。20歳ばかり年下の住福の謙一爺様が名人を追い抜こうと登場した。婆様の技術を盗もうと虎視眈々、一寸した世間話にも頭を突っ込んでくる。元々頭のいい婆様、この野郎と気が付いた。

途端に柴栗やナバの話はしなくなった。そんなことでは謙一爺様はへこたれない。今度はシーズンになると婆様の行動に目を凝らす。ところがそんなことはご承知の婆様、おとりの行動で粕を掴まず、夜明けの暗いうちに家を抜け出す。爺様はさればとて夜のうちに婆様宅が見えるところで番をする。婆様は跡をつけられたと気付くと目的地には行かない等々、丁々発止の知恵比べ。その内に若さの謙一爺様が少しずつ婆様に追いついた。そして小板は2大名人の時代に突入。一般人には運が良ければおこぼれがある、そんな時代が続いたんだ。

一歩先んじなければ何もない、こんなお手本があるのに、やり手を称する連中が、あそこは何々をして儲けたような、あいつは何々を売って成功したような聞くと、前段がなくて人真似のオンパレード、うまく行かないと運が悪いと他人のせい、そして失敗、倒産、そんな人が多かったな。

たかが柴栗、それでも換金するほど拾おうとすると努力がいる、勉強がいる。

最近は使われることが少なくなった鉛筆は、我が身を削って始めて字が書ける、線が引ける、削らなければ、ただの棒切れではないか。謙一爺様が藤田屋の婆様の行動を夜明け前から見張った努力は、是非はあるにしろ我が身を削った努力ではないのか。

ある時小板では勉強家？と称する人が訪ねてきた。彼は陸軍で下士官にまでたどりついた人、曰く「見浦や、お前は人のやらないことやって辛苦ばかりする。わしゃ一利口なけー、人がやって美味しいことが判ったことをやる」とのたまった。返事のしようがなかったね。勿論、最後は倒産、現在は廃屋の痕跡が残るだけ。

今日は我が身を削って、一歩先んじる、市場経済の中で生き残る処世訓の話。

2012.9.3 見浦哲弥

ドンベイと経済（2012/9/2）

市場経済という言葉をよく聞くようになりました。日本経済の基本で、政治も、商業も、農業もこの法則に従って動いているのですが、国民が正確に理解しているとは思えない。教育が悪いのか、マスコミの解説が下手なのか、もどかしく感じる場合があります。今日はドン百姓の見浦が飛んでもない説明をしますので、笑い飛ばして下さい。

経済というのは、大胆に解説すると、生産から消費までの流れ、（主にお金と物ですが）を総称する事だと思っています。昔の小板でもそうでしたが、田舎では自給自足が基本でした（これを自給自足経済といいます）。必要品も出来るだけ自分のところで生産しましてね。

たとえば牛に使うロープ（牛綱と言います）、現在はK Pロープとよばれるプラスチックの製品を使用していますが、子供の頃は春先に畑に大麻の種をまく処から始まって、お盆過ぎの刈り取り、蒸して皮をはぎ、水に晒して白い麻の繊維に仕上げるのです。麻（お）と言いましてね、ロープの太さに束ねて端を天井の梁に結びつけ、3人でかけ声をかけ合いながら力一杯、撚（より）をかける。撚りが弱いと柔らかい縄になつて役に立たない。牛綱一本でも飛んでもない時間と労力と技術を加えて作ったものです。牛綱1本でも大変な貴重品でした。

戦後は田舎でも、自給自足の経済から生産物の大部分を売却して、その代価で必要な資材を購入して、生活する交換経済に変化したのです。

ところが戦争中に施行された食料管理法（食管法）で基幹食料の米、麦は政府が全量買い上げ、政策価格で売り渡す方式になり、価格は需要供給で決まる市場価格ではなくて、政府が決める政策価格が何十年も続いたのです。その結果農民は、米価闘争をやれば価格が上がると政治闘争にうつつて抜かす事になりました。そして選挙の季節ともなれば東京に何万人もの農民や農業関係者（農協の職員）を集めて米価の値上げをぶちあげる、米価闘争が日常化したのです。当時、私は戸河内農協の理事、理事会で組合長が「東京の大会に2名の派遣が割り当てられているので旅費の支出を認めて欲しい」と提案、その理由が「専業農家が多い農協は熱心なんだが、都市型の農協は米価が下がる方が組合員の利益だと消極的だ、が本年だけはもう一年と言うことになったので、認めて欲しい。」

こんな裏話のある食管法ですが、その最大のデメリットは農民が日本の経済の仕組みが市場経済に移行しているのに、その仕組みを理解しなかったことです。

物の値段は需要供給のバランスで決まると言うことを理解できなかった。米価は政府と交渉の結果で決まるもの信じ込んだ。その為には自分たちの息がかかった議員を一人でも多く国会に送り込むことだと思い込んでしまった。

ある年、小板の小学校で運動会がありました。小さな集落ですが、それでも生徒が30人ばかりいましたね。集落の全員が集まって、それなりに賑やかでした。

その折り、大人の賞品に即席麺のドンベイが出たのです。丁度普及の始まりで珍しかった。会が終了して後始末をして、残った賞品のドンベイを食べようということになりました、お湯を沸かしてね。

一口食べた友人が言いました「これは旨い、なんぼでも食える」。

丁度、その秋から米の過剰を抑制するために減反政策が始まっていたのです。前述の友人口癖は「政府はけしからん、米を作るなとは何事か」。

便利で味のいい加工食品の登場で米の消費が減り国や農協の倉庫に米があふれて、やむをえず始めた減反政策、しかし、その本当の意味を農民が理解できなかった。自分たちはお米を食べなくなったのに、都会の消費者にはもっと米を食べはエゴ以外の何者でもありませんでした。

市場経済では、消費と生産が均衡するように価格が動きます。此の原理が理解できれば、このシステムの中では何が一番大切かが理解できるはずですが。生産者にとって消費者の動向が、消費者からは生産者の現状を、それぞれ理解することが基本になっていることを。

ところが消費者は値段の安いことだけを注目して、どんな所で、どんなシステムで生産されて居るのかは考えない。明日も来年も10年先も生きていくかも知れないのに、その時の生産はどうなっているかは考えない。農産物は足りないからと言って翌日から増産できるものではない。お米は1年に1作しか出来ないし、野菜も何ヶ月もかかる、まして田圃や畑が植物が育つようになるのには、何年も何十年もかかるのに私達は関係ない、である。

一方生産者は市場の要求だけに注目して、見てくれや外装だけにエネルギーを費やす。

農産物は命の源なのに、自家消費と販売用とは差別して作る。自分たちが食べるお米や野菜には堆肥を入れ農薬は使わないように努力するのに、市場に出荷する農産物は見てくれ重視、金肥ザグザグ、農薬たっぷり、そんな農民がまだ存在するのです。

市場経済では利益のマキシマムが正義だと教えます。それだけを、ひたすら信じ込んで、自分の利益だけで消費者のことは考えない、そんな人がいます。立場が変わると自分たちも消費者なのにな。

さて、市場経済の中で利益を上げるのには2つの方法があるのです。

1つ目の方法は競争相手より一円でも安く生産する、その為には小規模生産より大規模生産の方がコストが低い。当たり前のことですが農薬でも飼料でも1-2袋ずつ購入するよりも纏めて大量買いをする方が単位当たりの値段ははるかに安い。見浦牧場でも輸入の干し草は25トンのコンテナで、配合飼料はバラで5トン車が配送してくる。1-2頭飼いの牛飼いさんから見れば飛んでもない安さの値段です。それでも牧場の中では小さな方に属します。コストで大規模牧場に競争するには力が足りません。

もう一つの方法は人より先んじる事です。これなら大牧場が同じ技術や考えを持つまでは競争相手がいないので利益を上げることができます。

見浦牧場のように資本力の小さい、土地が広くない牧場で生き残る為にはこの方法しかないのです。

ですから既存の後追いだけでは駄目なのです。学校での知識や専門書は基礎の基礎であって、それだけでは利益は上がらない、そこから一歩も二歩も先んじた分だけが、競争力になる、これが私達の考えなのです。

それならどうしたら、先んじることが出来るのかと、貴方は聞くでしょう。

それが、「柴栗と鉛筆」で述べた柴栗と鉛筆の理論なのです。

もう一度振り返って欲しい。消費者が何を望んでいるか、それを知ることは柴栗が何処で実っているかを理解する事。でも、それだけでは足りない、そこへ一歩でも二歩でも先にたどりつくこと。さもないと栗は人が拾ったあと、ゴミにもならないイガがあるだけ。先にたどりつくための方法は自分の足下にお手本があるのに気がついていないだけ。

繰り返しましょう。人に先んじること、その為には我が身を削ること。

今日の話は、これまでです。思いが文章に伝わらないもどかしさがありますが、気持ちの一端でも触れて頂けたら幸いです。

2012.9.2 見浦哲弥

こんな人がいた！！(2012/9/19)

2012.9.16 思いもかけないことが起きました。

見浦の私設スクラップ置き場が満杯になったので、かねて付き合いのある業者”信栄巧社”引き取り方を依頼したのです。

来場したのはスクラップ専用の10t車と信栄巧社の軽トラでの手伝いの人の2人、いつもの社長は他に仕事が入ったとかで姿が見えなかった。

スクラップは思いもかけず2台以上もあった。買い取った隣家の倒壊した車庫の整理で出た鉄屑が多量にあったためだが今日はその話しではない。

それは、信栄巧社の置き場までトラックが往復する時間の間に起きた小さな出来事。

湯来まで往復すると2時間ばかりかかる。手伝いのオジサン、60ばかりかな、食事に行ってもまだ時間がある、小さな車の中での時間潰し、手持ちぶさたを見かねて私の文章”>幻の古戦場”を差し上げた。暫くして再び通りかかると、「面白かった、実は私は歴史ものが大好きで、小説から歴史書までずいぶん読んだ」と話しかけられた。

彼は上深川の生まれで、高校中退で広島で解体屋に就職、現在は自分で営業している。近頃は仕事が少なくてねと、その業界の話しをしてくれた。こちらも異業種の内輪話は大好きで興味深く聞かせて貰ったね。

私の文章に興味を持たれたのならと手持ちの愛国心を考える”、”こんな処で、こんな話しを聞こうとは”、”こがーなお客さんがおるんじゃけー”を追加で差し上げた。

ところが私も忙しい81歳の現役、立ち話を続けるわけにも行かず、やりかけの仕事を済ませて再び通りかかったら、”こんな話し”のアームストロング砲は気が付かなかった、あれだけ歴史書を読んだのにと悔しがる、おまけにマスコミの愛国心の解説は納得のゆかなかったが、牛の集団行動から愛国心は家族愛の延長でなくては本当の愛国心ではないの説明で長い間の疑問がとけた、信栄巧社の社長は友達で何度も手伝ったが、その内で今日は最高の収穫だった、来て良かった、日本には私を納得させる人間はいないと思っていたのに、こんな処にいた！。聞いてる私が驚く程の感激、私の文章でも人に感銘を与えるのかと、その事が衝撃でした。

コンピューターが出来ますかと聞くと、私は出来ないが家内は出来るとの答え、それならホームページで見て下さい、私の文章も掲載してますから、それで読んで下さいと、お願いしたのです。

また来る、是非、また来たいと言って帰られた彼、また人脈が増えた？のかな。

自然というフィルターを通した考え方が説得力を持つのかも知れませんね。

今日は「こんな処に、こんな人がいた!!」と喜んでくれた人がいた、その報告をしました。

2012.9.19 見浦哲弥

選挙が変わります(2012/9/25)

小板は人口の減少で投票権を持つ選挙人の数が減りました。選挙毎に開設していた投票所の廃止統合の問題が登場してきました。役場が何時言い出すかと期待？はしていたのですが現実になると難しい問題を多く含んでいるのです。

数年前までは選挙人が50人前後いました。国政選挙、地方選挙の度に投票所が開設されました。長い間、松原小の小板分校が会場で、役場から選挙管理人が2名、地元から選挙立会人が3名が一日中、投票所に詰めるのが習わしでした。

道路が整備され自家用車が普及してからは便利になりました。敗戦後の選挙では選挙の前日、役場の職員が泊まりがけで、投票所の開設にやってくる。ベテランと新人がペアになって。小板には旅館はありませんから、宿泊所の斡旋も部落長（自治会長）の仕事、たいていは自宅に泊めてましたね。昔役場の職員だった老人の中には、見浦さんの家に泊めて貰ったと話す人が多かった。同年代の彼等に会うと見浦さん宅に泊めて貰ってと懐かしむ人に出会うのです。巨大な茅葺きの家で囲炉裏を囲みながらの食事、陸軍の将校で、県内、県外の長い教員生活をしてきた父の昔話は強烈な印象を与えたい。

投票が済むと立会人の長が選挙箱を封印して立会人が捺印、投票箱を役場まで搬送するのに一人が付き添う。開票所で選挙管理委員会に引き渡し書類に署名して任務完了となる。

小板は役場から距離20キロあまり、2時間の終了時間の繰り上げでも冬場は帰宅できない。

確か役場の前の丸一旅館で一泊して帰宅なんて記憶もあるのです。

その内に役場も公用車が整備されて活躍を始め、徒歩での搬送はなくなったが、小板にやってくるのは悪路用のジープ、ガタガタ揺られてね、引き渡して帰宅するのは7時頃、元気な男性にお願いと言うことになる。

初めは少なかった日当も少しずつ増えて婦人や老人には、一寸した小遣いになる臨時収入、都合の悪い人が出たときは、それも配慮してお願いしたもんだ。が杓子定規が自治会長になると大変、家の順番は義務だからとどんなに都合が悪くても勘弁して貰えない、せいぜい次回と差し替えるが関の山、人に優しいとはどんなことかを知らない人もいました。

昔は立会人は余程の事がないと男性、男女平等は紙の上だけ、女性の発言が重みを増すにはそれなりの時間が必要だった。やがて女性が登場し、立会人は男性が珍しくなる。そして女性と元気な老人の独占場となった。そして過疎が進行、お願いする人にも事欠くようになり、投票場の廃止に繋がった。時は行政改革のまっただ中、一回に20万円もかかる費用の削減は格好の目標だった。

さて、新しい投票場は7キロ離れた松原、一軒だけの餅の木は小板からでも4キロはある、合計11キロ。自動車の時代とはいえ投票も大変になった。来月は小板投票所が廃止されて最初の選挙、安芸太田町の町長選挙がある。高率だった投票率がどの程度になるのか、これも少々気に掛かる。

2012.9.25 見浦哲弥

山本夏子様(2013/3/11)

お葉書ありがとうございました。心和む挿絵つき、一足先の春到来の心地でした。共済組合でお世話になったあそこから長い時間が経ちました。私も家内も80の坂をとうに越えて、過ぎ越しを振り返る時間が多くなりました。まだ右も左もわからぬ若造のシャカリキの牧場経営、ずいぶん迷惑をおかけしたのではないかと反省しきりです。特に貴方様には桧垣先生との確執でご心配を頂き、お詫びを申し上げないまま過ぎました。本当にすみませんでした。いつかはお話ししようと思いながら機会を得ませんでした。今日はお葉書のお礼に便乗して、遅れた報告を書いてみようと思います。

あれは、去勢の肥育牛が3頭、続けて死亡した時のことです。症状は激しい下痢、桧垣先生が担当され治療されました。確か17-8ヶ月の大きな牛で、同じ症状でした。治療で議論したのを覚えています。この大きさでこの症状、原因の結論が出ないまま、活性炭入りの下痢止めを投与、即死亡ということになりました。確か2頭目だったと記憶していますが、「原因はわからないが埋葬してもいいよ」との連絡を受けました。そのとき私の技術者根性が憤激しました。実は私も技術者、もっとも電気工学ですが大田川にある中電の発電所の主任を勤められる第二種電気事業主任技術者、わからないからいいですよ、とは言ってはいけないと教えられた。わからないまでも自分の力の及ぶところまで追求する義務がある、そんな考えでしたから。もちろん、人間ですから出来ないことはいっぱいありますがね、何かご不幸があったとか後で聞いた話ですが、そのときはその姿勢に憤慨したのです。思ったら即実行が見浦の悪いところ、埋めろというなら解体しても文句はないはず、と息子と二人で解体、下痢の症状だったのだからと肛門から直腸、小腸と調べていったのです。そして見つけました。飲ませた活性炭末が血液で固まって腸閉塞を起こしていました。それが数箇所あったと記憶しています。なぜ出血したのかと腸管の粘膜を調べると転々と穴が開いている。子牛のコクシジウムと同じ現象でした。そこで専門書を読み漁りました。いわく、5-6月齢までにコクシジウムに感染すると記載はありましたが、17-8月齢の牛が感染して死亡の例があるとはどの本にもありませんでした。あとで考えてみると見浦牧場にコクシが侵入した初期のころで、耐性を持っていない牛がいたのだとおもいます。抗生物質の多用で効き目が悪くなっていたので、サルファ剤の声も聞いた気がするのですが、コクシとはだれも気がつかなかった。桧垣先生を責める気はありませんでしたが、技術者ならわからないので開けてみるの一言がほしかった。当時、二人おられた獣医さんの中で彼の方の才能を買っていたものだから、警鐘を鳴らす意味で彼を拒絶したのです。そこを乗り越えると彼なりの成長が出来る、そんな生意気が私にあったのです。

実は、私が牧場を始めたころ、共済に山口からこられた同姓の桧垣先生がおられました。この先生にプロの厳しさを叩き込まれたのです。プロというのは仕事出来る出来ない以前に、精神が大切なんだということ。

人工授精がうまくいかず、お願いをした時のことです。牛飼いははじめた動機を聞かれました。ゆくゆくは牧場で牛で食べてゆく、そんな返事をしたと記憶しています。そこで先生が「直腸に手をいれたことがあるか」と聞かれたのです。忘れもしません。「私は獣医ではないので入れたことはありません」と答えたと記憶しています。とたんに先生が烈火のように怒られた。私はなんで叱られたのかわかりませんでした。「君は牛で食べてゆくといったではないか。それは牛のプロになるということではないのか。最初から出来ない」と投げ出すよ

うではプロにはなれない。さっきの言葉は口先だけか？」
思いもかけない叱責にしゅんとなった私に追い討ちがありました。「40日経つと妊娠鑑定ができる。そのとき君の本気度を測ってやる。勉強しとけ。」
負けず嫌いがとりの私はそれから毎日牛の直腸検査をしました。そして微妙な変化を指先で読み取ろうとしたのです。約束の日が来ました。先生の前での直腸検査は緊張で指先に何時もの感覚がありませんでした。でも厳しい先生の顔を見ると逃げるわけには行きません。内心震えながら「右側の子宮角が腫れている感じです。これはプラスだと思います。」先生も手をいれられて、「本当にそう思うのだな」「はい」
何もおっしゃりませんでした。それから農家の扱いではなく畜産の弟子として教えていただいたのです。
プロなら逃げてはいけない。先生は無言で教えてくださった。そして私も懸命になった。そんないきさつがあったのです。ですから若い桧垣先生の対応が我慢できなかった。いい素質を持ちながら逃げではないのか、ボイコットしてやる。
風の便りに貴方が心を痛めている話は聞こえてきました。でもこれだけは後に引けなかった。その後桧垣先生は共済のデータのコンピュータ化に熱心になられた。息子が協力を頼まれ、何日か千代田に出向きました。先生の近況がわかるにつれ、本来の生き方に向きを変えられたと感じて嬉しかったのです。そして順調に出世されたと聞いて、山口の桧垣先生から教えられたプロ精神のバトンタッチはしたねと自己満足をしたものです。

あれから多くの獣医さんとお付き合いいただきました。そして無理をずいぶん聞いていただきました。特に原因がわからないとすぐ「開けてみましょう」と開腹して確認して下さる。息子や亮子君（お嫁さん）などメンバーが顔をそろえて学習する、私の描いていた農民風景をみせていただいて嬉しい限りなのです。

見浦牧場はいまだに悪戦苦闘ですが私の思い描いた農民像をみなで追い求めています。ありがたいことだと思っています。

お返事を差し上げようと、この文章を書き始めて10日あまりも経ってしまいました。82歳という年齢はすべての機能を仮借なく奪ってゆくさびしいものです。でもお葉書をいただいたおかげで懸案の報告ができました。本当にありがとうございました。

前後しましたが、お体の具合はいかがですか。私の日本脳炎の後遺症と付き合うこと60年、でもこの年まで生き延びました。どうか気をつけながら元気で長生きして下さるよう、祈っています。
駄文をひとつ同封します。私の生き方のひとつです。お読みいただければ幸いです。

2013.3.11 見浦哲弥

小板昔日 2 (2012/10/9)

今でも、目を閉じると臉に浮かぶ風景があります。

田植えが済んで早苗が伸び始めて、一面の田面に初夏の風が吹き渡る。

見浦の大きな藁屋根の縁側で、そんな風景を見るのが好きでした。都会の長屋のちゃちな縁側と違って、荒削りでもゆったりした縁側は、まだ子供だった私には、ほっとする世界でした。

今の見浦より30センチも低い地盤にあった縁側から見る田園風景は、一望5ヘクタール、それはそれは広く感じられたのです。

朝靄に煙って遠くのカヤ屋根がかすんで見える、彩りに柱だけの稲杭が遠近を強調する、稲の葉先が揺れ、畦豆の大豆の葉が露で頭を傾ける、今でもまざまざと思い浮かべられます。

それは昭和16年頃の話、ガソリンが割り当て制になって、あの小さな定期バスは、もう通って居なかった。

運転台の後ろに大きなガス炉を積んだ木炭トラックが、中の甲から加計にあった木炭鉄の製鉄所、帝国製鉄行きの木炭を運んでいました。私たち悪童が上り坂でスピードの落ちたトラックの後ろにぶら下がる、そんな危険な遊びをしてました。

飛び降りる瞬間を間違えるとスピードが出ていて、転んで擦り傷を作る、恐ろしい目にも会いました。

昔は今のような金肥万能の時代では有りませんでした。少しでも多くの収穫を上げるために畦草や山草を一本でも多く刈り取られて牛の敷き料になり堆肥になりました。

その道ばたや周辺の草刈り場にはゴウランと呼んでいたササユリが花盛りでした。中には二股も三股もありで甘い香りと清楚なただすまいは初夏の風物詩でした。

過疎になり人手の入らなくなった野山は荒廃と乱獲でゴウランも絶滅状態になりました。

今年は1本見たと喜ぶ、そんな自然を見る、悲しいことです。

広島から国道191号線をドライブして、ホテル”いこいの村広島”の下を過ぎ、なだらかな登り道を走ると峠、それが深入峠です。その向かい側の山が”向こう深入”、小板の草刈り場でしたね。

当時の小板は田植えが済んだら山草刈り、草刈り山は2年に1度の割合できれいに刈取らなくてはなりません。怠ると草が荒くなりましてね、牛が食べなくなる。

見浦の割り当ての草刈り場は、長年、年老いた祖父と雇い人で仕事をこなしていたので管理不足、山草でなく柴草でしたね。

4カ所か5カ所にあった草刈り場、あちこちに散らばっていましたが、それぞれに湧き水が有りましてね。それぞれに味が違う、しかも生水で美味しい、番茶を入れて沸かすと更に抜群、お茶の葉の代わりに熊笹を入れても美味しい水、すばらしい大地の贈り物でした。

最近はどこを訪ねても昔の水の味には及ばない、自然が変わったのか、私の老化のせいなのか。

昭和38年、歴史に残る大雪が降りました。1月の中頃まで「今年は雪が少なくて有り難いの一」と喜んでいたのに、連日休みなく降り続く大豪雪が始まりました、初めはよく降るなど感心する余裕がありました。その内屋根の雪下ろしに追われ始めました。しかし降雪は止まりません。雪の重みで家が鳴り始めました。

この年の雪の降り方はシンシンと只ひたすらに雪を積み重ねる、異常な降りかたでした。誰もが懸命に雪下ろしを始めたのは言うまでもありません。

その内に、降ろすところが無くなりました。幸いなことに見浦家は家の前は小板川が流れています。最初は川の中へ捨てれば水で溶けてくれる、低いところへ降ろせる事は好条件でしたが、その内川が一杯になりました。でも降り止みません。雪を川の中へ積み上げる始末、最後は川に積み上げた雪が屋根より高くなってついに除雪は挫折、ままよ潰れたらそれまでと屋根の雪下ろしを中止、春になって雪が消えた軒先は全部折れて悲惨な状態になっていました。

最高積雪は4メートル、前代未聞の大豪雪にマスコミは連日報道、奥地は交通途絶で今にも死人が出るような騒ぎと報じても地元の住人は、冬が過ぎれば春がくるよと腹をくくっていました。でも行政はマスコミの手前ヘリコプターに医師を乗せて緊急着陸、地元の住民は雪上ヘリポートの造成にかり出されて、自家の除雪は一時停止、マスコミの騒ぎと裏腹に「何で大騒ぎをするんなら」と冷めた感覚でした。

お宮の鳥居は跨いで通れましたし、配電線は腰を曲げないと3000ボルトの電線に触れて感電する恐れがありました。

当時は、まだ水道がありませんでした。幼子の汚れ物の洗濯に川の水の利用は不可欠でした。雪の下にトンネルを掘りましてね。高さが1.5メートル以上もある本式のトンネル、お米が貯蔵してある倉にも掘りましてね、まさに野ネズミ状態の生活が始まっていました。

ところが、幾ら大雪でも2月中頃を過ぎると気温だけは高くなり始める。トンネルがドンどん低くなりましてね、しまいには腰を曲げないと通れない。

4月の初めになっても積雪が1メートル近くも残っていきまして、苗代が出来ないと急遽ブルトナーザで除雪、除雪が完了した翌日に暖かい雨が降り続いて一夜にして雪がなくなったときは……自然に翻弄され続いた大雪でした。これが後に38（サンパチ）豪雪と称された大雪でした。

翌々年の41年も大雪でしたが、それ以来、年年降雪量が少なくなりました。いわゆる温暖化の影響が出始めたのですが、スキー場関係の人以外は”今年は雪が少なくて、ようがんすのー”と大歓迎でしたが、雪不足対策として各スキー場に人工降雪機なるものが設置され、高価なエネルギーを投入して川の水を凍らしての人工雪をコースに積むゲレンデ作りが日常化して、各スキー場の赤字が表面化しました。なにしろ雪作りの為に3000キロワットの変電所が出来、毎日飛んでもない資金が消えて行きました。そこへ人口減少が追い打ち、スキー客が減って昔日のスキー物語は遠い思い出話になりました。

スキー場華やかな頃は、小板でもスキー場を作ってあやかろうと、お熱を上げた連中ができました。

「雄鹿原村では一年で24億円の売り上げがあったげな一、小板も雪だけはあるけースキー場を作って一儲けしようや一」。

「エー話があるんど、雄鹿原スキー場がの、ロープ塔（滑降点と出発点の間に太いロープを張って動力で回す、スキーヤーはロープにつかまって登る）廃止してリフトにするんだげな。そのロープの設備を安う売ってくれるげな。それを買ってスキー場をつくろうや」

市場経済という現在の仕組みの中では、人の一歩先を歩かないと何も手に入らない、丁度、栗拾いで人の歩いた後は、どんなに懸命に探しても栗のイガしかない、山国に住んでいて嫌とい

うほど判っているのに、金儲けと言う言葉で盲目になってしまって、自治会の積立金を投資をしろと言う騒ぎになりました。丁度、私が会計係で、そんな馬鹿な話に大切な積み立て金を出せないと頑張ってやりました。

ところが、積立金は集落全員の財産、皆のためにスキー場をやって儲ける、それを止めるとは何事か、多数決で金を出す事を決めると言い始めました、そこで、儲かるか、損をするか判らない内から大切な積立金を出すのは反対だが、皆が賛成するのなら、儲かることが判ってからなら出す、それなら目をつぶると妥協したのです。

喜んだ連中、取らぬ狸の皮算用で、儲かったら積立金で返金するから出資金を出せと金を集めました。欲の皮の突つぱった連中がなけなしの現金を差し出したといいます。出さなかったのは私と都合のつかなかった、もう一人の二人だけ。

あまりのことにあきれたのですが、一言アドバイスはしました。

「儲けるためには、お客さんに来てもらわにゃ、宣伝がいるで」

それには賛成する人がいました。

「広島にビラを配りにいこうや」。

後日、そのメンバーの一人にビラ撒きの後日談を聞きました。

「どこで、ビラを配ったのかい」と聞くと、「広島駅」と答えました、「どうだったらー」の問いに、吐き捨てるように「もう二度といかん」と。

どの様な設備と聞かれて、正直に答えて笑われたのでしょうね。時はシングルリフトからペアリフトに変わり始めていましたから、ロープ塔のスキー場を新設と聞いて失笑されたのは当然でしょう。

お客さんの来ないスキー場が営業したのは2年くらいかな、スキー客より従業員の方が多い、それが日曜日だというのだから、なけなしの懐からかき集めたお金は雲と霞と消えて嵩むのは借財ばかり、さらばと当時まだ珍しかったスノーモービルを4台ほど揃えて、これではと挑戦、しかしモービルは起伏のある広いゲレンデなくては面白くない、起死回生の妙薬にはなりませんでした。

翌年、配当と称して出資者に幾ばくかのお金が配られました、儲からないのに配当金とはこれいかに、笑い話になりました。それから手を変え品を変えてスキー場建設の話が持ち上がりました。詐欺まがいの話まで登場して、ともすれば信じがちな善人の村人を止めるのには苦労しました。何年かしてメンバーだった友人を「スキー場建設でご意見を」とからかった事があります。即座に「あの金は、淵に放り込んだ方が、よっぽど気持ちが良かった」と返ってきました。

時代が変わって、暖冬とスキー人口の減少で、各地のスキー場が続々と廃業、スキー場のメッカと言われた芸北地区でも残るのは1社か2社といはれています。でも此の集落ではスキー場の話はタブー、笑い話になるのには、まだ時間がかかりそうです。

もう二十年余り前になりますか、道戦峠の旧国道沿いに始めて別荘建ちました、道路から小道を少しばかり歩いたところ。

それから、いつの間にか集落のあちこちに二十数軒も別荘が増えました。

この地帯は、臥竜山、深入山、十方山などトレッキングのメッカ、地元の住人が知らぬ間に、リタイヤしたら小板に住みたいと言う人達が増えたといいます。

おまけに、土地持ちの旧家が倒産して所有地が売りに出され事もあいまって、一挙に増えたのです、ところが地元の人の対応が今一だったのです。

小板は江戸時代はタタラ製鉄に関わって生き残り、戦前は米作、大麻など農産物と、木材搬出の林業労働者、木炭生産は製鉄用と民需用などで生き残ってきました。昭和20年の敗戦後は都市復興の建築用木材、都市の台所を支える木炭の生産で賑わいました。都市が復興するに連れ、製紙の原料としてのチップ材の出荷も盛んになりました。

ところが都市が復興し日本の経済が発展を始めると人口の流出が始まりました、38の豪雪は契機になりました。最初に移住したのは、何処だったか忘れましたが、一軒が消えると次々と続きました。残留を決めた家も新しい事業で都会に負けない生活を夢を持ちました。お隣の松原が建設業に転進し成功したのをみて、安易な挑戦を始めたのです。結果は無惨な敗退、5軒あった「分限者」と言われた小金持ちが消えました。もっとも大島は敗戦前後に没落しましたから、消えたのは4軒ですか？

その間に中国山地の村々は過疎化の嵐に晒されました。谷間の小さな集落は過疎から崩壊にそして無住になり自然に帰ったのです。小板は目下崩壊中。

お隣の空城は3軒になりました。餅の木は1軒、田代は杉林の中に消えました。甲繫も無住のバラックだけ。小板は常住者は、畑中、住福（冬季は広島）、大前、見浦、原田、堀田、田川、堀江、大谷の9軒、内一人暮らしは3軒、50歳以下成年のいる家は4軒、60以下の男性は2人（一人は身障者）、自治会の業務をこなすのは70台を含めても3人しかいない、幼稚園の年少組が1人、これがこの集落の最後の子供で次に幼児を見るのは20年後、危機を乗り越えてしまったのが現況なのです。

さて、450年余りも続いた、この集落がこのまま森林の中に埋もれるとは考えたくありません。どうしたら再建できるのか、この老人にも名案はありません。ただ言えるのは、この中国山地の自然を生かしながら共存して行く、その道はあると考えています。

豊作の時は柴栗が地面の色が変わるほどになりました。たった一度ですが甘い黄色の木苺に出会って飽きるほど食べたことがあります。ナメコを始め天然の茸の宝庫でした。荒廃した30町歩の開拓地があります。まだまだ小板の自然の中には可能性がある。私は日本は豊かな国だと思っているのです。そしてこの中国山地に再び賑やかな人の声が聞かれる、そう信じているのです。

人の営みには栄枯盛衰があります。小板が再び栄える日、私は見ることはないでしょうが、どんな形になるのやら、この文の続きを書く人に期待をしています。

2012.10.9 見浦哲弥

熱中症(2013/9/2)

2013/8/17 熱中症にかかった。以前は熱射病と称した奴だ。連日35度をこす猛暑に、最初は息子の和弥がかかった。外見は変わらないのに仕事にならぬ、テレビでは毎日熱中症で病院に担ぎ込まれた話が多いのに、小板に住んでいる限り関係がないと思い込んだのが間違いのもと、それでも充分水を飲むなど対策をしていたのだが、もう一つの要素を忘れていた。

見浦牧場には2キロ離れたところに4ヘクタールばかりの採草地がある。昔はスキー場だったところだ。スキー場だったくらいだから高低差はある。何回かに分けて刈り取るのだが、例年なら近所に住む熊君の心配だけですむ。ところが今年は猛暑、連日36度を越すというのだから。小板は夏だけは別天地で別荘も増えたというのに、夜まで27、8度をうろうろする、夏の最大の魅力だった風も粘りつく感じで都会と変わらない、とんでもない夏の到来になった。それでも、草刈も順調に済んで最後に残ったのがスキー場跡の一番急な小山、これを作業機を付けた総重量2トンのトラクターで上下しながら刈るのは毎年恐怖だった。去年は同じ場所で、トラクターに足をひかれる事故もあったからなおさらで、緊張して注意力を集中して作業、それが悪かった。

時は12時、約1時間の作業で最後の周囲の掃除刈り、これが恐ろしい。草の中に外部から色んなものが転げ込んでいる可能性がある、しまったとブレーキを踏んでもトラクターは止まらない、タイヤが滑走を始めるだけ。異物はないか、滑走はしないか、などと注意力を120パーセントまで発揮する。もう少し、もう少しと自分を励まして、時間にして5分足らず、これが発症の引き金を引いた。

下まで降りてほっとするまもなく異状に気がついた。頭が痛い。「しまった、熱中症になった」、「モアーをたたんで家まで走行できるか」。

道路走行の途中の記憶はない。一日に1台か2台しか交通量のない旧国道、何とか家までたどり着いて頭を冷水で冷やし始めて記憶が戻った。それから風呂で冷水のシャワーを浴びて身体を冷やして、なんとか落ち着いたと思ったが、熱中症の後遺症が始まった。

熱中症というのは体温調節の機能が変調することだそう。一応身体を冷やしてほっとしたのも束の間、頭痛が始まった。ところが日本脳炎の後遺症と異なって、良くなったり悪くなったりする。朝方は落ち着いていて快方かなと思っても、午後になると物凄く疲れて頭痛が再発する、2時間ばかり寝ていると、気力が回復する、その繰り返し、おまけに食欲が消えた、3日間は殆ど食事が出来なかった。

一番大変だったのはコーヒーが飲めなくなったことだ。私は前立腺肥大で昨年末は病院で薬を処方されて服用した。ところが副作用がひどくて、発疹が体中にでて、猛烈に痒くて寝られない。薬剤師に聞いても、どの薬も大なり小なり副作用がある由で、私の体質がこの副作用に弱いらしい。そこでコーヒーを従前の4杯から6杯に増やして薬は中止したのだ。この民間療法が効いて小便の量が安定していたのに、コーヒーが飲めなくなったのだ。おまけに小便の量も激減、尿毒症の心配まで加わった。

8/24 土曜日というのに小便が出なくなった。明日は日曜日、倒れると緊急病院を探す羽目になる。さすがの私も大田病院に駆け込んで、かくかくしかじかと内科の先生に事情を説明する。

先生いわく「明日倒れることはありませんね。小便の量が少ないのです。様子を見ましょう」。何しろ、H家の爺様は「あと一日で田植えが済む、我慢しろ」と言われて、頓死している。小便が止まって頓死するのは肥育牛でも多い病気で進行が早い。さすが私もビビったね。幸い翌日から少しずつ小便の量が増え始めて安心はしたものの、微々たる回復で熱中症の恐ろしさが身に沁みた。何しろ今夏は老人が熱中症で大勢死んだというから、私も名を連ねるところだったのかも知れない。

暑さと水分不足を注意することが対策と信じていたが、ぎりぎりの状態では恐怖心も引き金になる、新しい教訓だった。

声を大にして自分に言う、「熱中症の警報がでたら仕事の量を半分に減らそう」。来年はうまくやるぞ。

2013.9.2 見浦哲弥

総力戦(2013/5/3)

見浦牧場は主力の和弥夫婦と私達老人二人組の4人体制で運営している。勿論80を越した私と家内はサポートだが、それでも私が畜舎の掃除、家内が肥育牛の餌やりが責任範囲だ。ところが家内の晴さんが時々入院する、途端に私の仕事が多くなる。ま、何とかこなせるので問題にするほどの事ではないのだが、計画にしたがって休み、食事をし、就寝をする、それと仕事を一致させなくてはいけない、これが思考力の落ちた老人には案外の重荷なのだ。この「計画を立て、実行する」と言う簡単なことがうまく行かないなど、つい先頃までは考えもしなかった。これは思考力の低下に他ならない。老人になると、とんでもないことが起きる。

家内の前回の入院は白内障の手術、入院は短かったが仕事への復帰は1ヶ月あまりかかったな。今回は子宮の全摘出だから身体の負担も大きい、仕事の復帰も時間がかかる。唯でさえ忙しい見浦牧場、彼女も決心がつくまで何年もかかったのだ。思い切ったときは81歳、今度は手術に体力が耐えることが出来るかが問題になった。手術が成功しても回復には時間がかかる、場合によれば現場復帰は出来ないかもしれない。勿論仕事より人命が大切、当然のことだが、それに彼女が欠けた後の仕事の段取りを完全にしないと入院してはくれない。

やっと納得させて入院したのが H25/1/11、手術はうまく出来たのだが、80の高齢は回復が遅くて、本人の仕事復帰を抑えるのが大変だった。3月中旬になり少しずつ外の仕事を始めて、4月に何とか畑仕事も出来るようになった。

見浦牧場の4人体制を3人でこなしただけだから大変と言えば大変だが何とかなるものである。

復帰とは言え、外の仕事は医者から堅く止められていた。ところがご本人、家事よりは外の仕事が好きと言う根っからの田舎者、一部でもやらせろとのたまう。勿論、雪も消えて一日5時間前後の肥育牛舎の管理は、体力の温存のため無理。

しかし、私も肥育牛の飼養のため、機械作業が重荷になる。畜舎の掃除、堆肥撒きなど、重作業との両立は結構疲れる、彼女が見かねての申し出だが、4月まではと引っ張る、それでもそこまで元気になったのは神様が見捨てていないお陰。

4月も後半になった。彼女ほぼ体力を戻したようだ。ただし頑固病は進行した。もともとの気性の激しい人が頑固になったのだからたいへんだ。これも老化の一つか、元気になった事で良しとしなくてはなるまい、天なる神に感謝している。

2013年の平均寿命は男性が78歳、女性は86歳、女性は男性より8歳も長い。私はもう平均寿命を4歳も越しているのに彼女はまだ6歳も残している。体力があったのは当たり前かと言う事にして納得している。

5月、もう昔に帰った。元気になって牛飼いや畑仕事をしている。今回の冒険は成功したようだ。やはり私の最後は彼女の世話になろう。彼女は「あんたの尻しごう（始末のこと）は真っ平」とのたまうが、元気な方が面倒を見るのは世のならいだから。

2013.5.3 見浦哲弥

追記

7月の参議院選挙で自民党が大勝、財政再建が日程に乗り始める。身近なのは高齢者の国民健

康保険の自己負担が 65－75歳までは20パーセントに戻されたが76歳以上は従前通り10パーセント。ちなみに晴さんの今回の入院費は60数万円、10パーセントだから何もかもで10万円は要らなかった。子供の頃、田川のお爺さんが倒れた時、「一度でいいから医者に診せたかった」は老婆さんの悔やみ言、私達はいいい時代に暮らしているのだと思う。

ラジオ体操(2013/10/7)

2013 年 7 月 夏休みがやってきました。我が家の腕白孫、3 人もラジオ体操が宿題の一つ。眠たがるのをたたき起こして体操をする。私たち老人も形だけの参加をするのですが、昔習った体操とは違う、先生役の亮子君を見ながらの体操です。ところが出来ない形がいくつかある。何しろ二人とも 80 歳を越えていますからね。でも員数にはなる。

ラジオ体操で記憶にあるのは三国での夏休み、いまと同じように朝の体操会に参加することと決められていましたな。学校に行ってもよし、町内会の体操会に参加してもよし、ただし参加の捺印を貰うことが条件でした。私は母の許可を得て弟と二人、町内会の体操会に参加することに決めました。

会場は愛宕山、汐見の家から 500 メートルばかりの町屋の裏の小さな丘、頂上に広場がありましてね、そこが会場。学校の会場はそこから 700 メートルばかりの登りで離れていたからな。

時間になると町内会の叔父さんがラジオを大切そう（当時は貴重品でした）に抱えてのぼってくる。私たちのほかに何人かいた子供は大勢の大人に混じって懸命に体操をする。でも朝は眠くて困った。目覚めの悪い孫たちを見て昔も今もと変わらないなと苦笑する。

「お早うございます」と大声で挨拶をする。これは母から厳しく教えられたこと。始めは「お早う」の返事だけのオジサンが、終わり頃はいろいろ声をかけてくれて、嬉しくて夏休みが済んでも、愛宕山の体操会には通った。確か秋雨が降り続くようになって止めたのかな。初めて大人に存在を認められた小 3 の頃、懐かしく思い出す。

ところが我が子のラジオ体操は記憶がない。確か 15 分ほど離れた分校の体操会に子供たちが通ったと思うのだが覚えがない。何しろ貧乏に追われて生活を維持することが全てだったからな。

さて、今年のラジオ体操である。メインの三人の孫たちはゲームが忙しくて夜が遅い。したがって朝が眠い。不平だらだらを、亮ちゃん（お嫁さん）が叱咤激励するのだが、言うことを聞かない。これではならじと朝の牛飼いが済んだ晴さんが（家内）曲がった腰を伸ばして参加。そうなると無視するわけに行かず私も参加。曲がらない腰を曲げ、飛べない跳躍は省略してみんなにあわす。ところが最近のラジオ体操は私の小学校の頃とは違う。皆を見ながらワンテンポ遅れたラジオ体操、それでも員数にはなる。

そのうちに、和弥も参加、律ちゃんもワン公の散歩のついでにと全員体操になった。こうなるとメインの腕白坊主達もサボるわけに行かぬ。何とか全員のラジオ体操が続いた。

真夏の早朝は小板の数少ない財産、すがすがしい深入山、流れ行く雲、そして澄んだ空気、その中での毎朝のラジオ体操は私たち夫婦に結構な贈り物になった。

もっとも、これには落ちがあって、学校が始まると子供たちがストライキ。7 時半にはスクールバスがやってくるので時間がないが口実。これで見浦家のラジオ体操会は来年まで中止ということになった。

もう私たちは結構な年寄り、来年があるとは限らないが、楽しみにしている。

2013.10.7 見浦哲弥

水道物語 2 (2013/11/13)

前回、小板昔日で小板の簡易水道の建設の成り行きを書きました。その組合が安定して運営されるまで、様々な出来事が起きました。今日はその後日談です。

水道は出来ました。しかし、その運営を本気で考える人はいませんでした。水道は出来た、邪魔な見浦は追い出した、水道の水が欲しければ頭を下げて頼みに来い、それならお前にも水道をつけてやる。私は頭を下げる理由がないと突っぱねました。全戸の飲料水を供給するのが初期の目的でした。M爺さんのように極楽だと喜んでいるのに騒ぎを大きくするのは本旨ではありませんでしたから。

幸い飲み水は昔の横穴から清水が出ます。畜舎用の水は小板川の伏流水を汲み上げて使いました。

ところが2年ほど経ったある日、友人のO君が訪ねてきました。水道組合がうまく行かないから立て直して欲しいと。詳しく話を聞くと、水は余っているからと使い放題、豚を飼うボスやその一党と、飲み水と風呂だけに使用する人達とで出役が同じ、それで不満がたまったのに、沈殿槽の砂の交換の費用や線路の修理部品代まで負担を平等にかけた。これには、さすがに大人しい人達も憤慨して収集がつかなくなったと。

小板に潜在している古い悪習に、日頃は声を上げない人達が怒り狂って、小ボス達の手にもたえなくなった、だから言いだしっぺの見浦に始末させよう、そういうことになったとの話でした。

最初のいきさつを忘れるのには時間が短か過ぎた、あのときの立腹はまだ収まっていない。だが水道がなくなれば、たちまち困るのは小農や貧乏な人達、逃げるわけには行きませんでした。そこで私の案に異論を唱えないこと、一つでも反対したら手を引く、それでもよければ後始末をしよう。普段なら「見浦の野郎」とのめない提案も住民の怒りを納めるすべを失った彼等は不承不承でも承諾するしかない、出来るものならやってみろと。

解決法は一つ、水の使用量に対して料金を取る、この方法しかありません。しかしメーター（量水計）を設置する資金がありません。そこで集落の共同財産を利用することにしましたが、何かと雑音が入る。そこでもう一つの要求をしました。「共同財産を管理する小板振興会の会長にしろ」。

もう一つありました。「水道組合員でもない奴の意見を聞くのか」と言う人がいる。組合員になってくれ」「いいよ、組合員になろう」。最初の敷設の時、各戸一個ずつの蛇口と配管をした、これをどうするか。「見浦は勝手に組合に入らなかった。そんな奴に配慮はいらん」、ボス連中には随分憎まれていたのです。しかし、そんなことは瑣末なこと、「配慮はいらん」と宣言してゴリ押しをやりました。

さて、ボスどもの不満を押しつけて組合長と会長になりました。そこで振興会が費用を負担して各戸に水道メーターを取り付け、使用量に応じて料金を徴収する案を提示しましたが、一つ問題がありました。振興会の会員のうち、私ともう一軒が水道を利用していない。

私は組合に入ることにしました。前述のクレームには「ハイハイ、そのとうりです」と反論しませんでした。そんなことより本当に水が必要な人達のためには早急に解決しなければなり

ません。それより、もう1人の方の方が大変でした。現時点では豊富な谷水が落差を伴って流れてくる。水道の必要は全くありませんが、権利は権利です。将来必要になったときは水道組合が無料で敷設するという事にしました。ところが水道の端末から、お宅まで1000メートル近くあります、大金が要る、そんな金は出せないと、又ボスどもが騒ぎ始めたのです。その人は振興会が敷設を保障してくれれば反対はしないと約束してくれました。そこで成り立ての会長の私が「そのときは組合員の皆さんにも協力してもらおうが、個人としても責任を持って約束を実行します」と答えて賛成を得たのです。幸いボス連中よりは私の信用度のほうが高かった。

工事が始まりました。しかし、まだ問題がありました。料金を取ることです。「小板では今まで水を買うような生活はなかった、水代を取るとは何事か」。

あら捜しに躍起になっていたボスどもが、ここでも声を荒げました。そこで基本料金は30リ्यूベまで300円、30リ्यूベ以上は、1リ्यूベ15円と決めて振興会の会員には振興会から配当金として月300円を支給、これを基本料金に充当することにしました。

これは効果がありました。殆どの人が実質無料となり、料金を支払うのは一部の畜産農家と学校と別荘の人達、おまけに今まで奉仕だった労力提供も時間給を支給することにしましたから、不満は一挙になくなりましたが、収まらないのは、これまで無制限に水道水を使っていた畜産農家、ハウスの散水に使用していた農家です。

小ボスの畜産農家が怒鳴り込んできました。7万円も水道代を取られたぞと。そこで、水道は濾過の費用や消毒の費用がかかった値段のある水なんだ、それを豚小屋の床洗いまで無制限に使って、お金が要らないと思う方が非常識、掃除用には前にある小川の水をくみ上げて使え。この論理に負けた彼は川端にポンプ小屋を作って対応してくれましたが、間違った論理を信じる性癖は彼の事業を倒産に導いてしまいました。

もう一軒の畜産農家は豚舎に家と別回路に水道管が繋がれていました。それを住居の方だけメータを繋いで豚舎は内緒で水道を使っていました。あれはどうしたと聞くと不正に気がついた小ボスが、大ボス君に「有力者のくせにけしからん」と、抗議したといひます、公にするぞと。さすが大ボス君これには参って以後高額の水道料を払う羽目になりました。しかし、波及効果もありましてハウスに内緒で使っていた連中も、何時の間にか自費でメータをつけ、水道に関する限り不正はなくなりました。

以来、40年間、飲み水にも苦しんだ小板では、渇水期に節約を要請することはあっても給水が止まることはありませんでした。

しかし、歯止めのない人口の流出は維持管理の人員も足らなくなりました。今年は人手不足で沈殿槽の手入れが2ヶ月も遅れて、遂に見浦家だけで作業をする羽目になりました。しばらくは、この状態が続くかもしれませんが、松広のお爺さんの「見浦さん、毎晩新しい、お湯の風呂に入れる、極楽でよー」の言葉を思い浮かべながら、何とか頑張ろうと思っています。

追記：「後日、水道をつけてあげる」の約束は、その方が国道191号線の辺に住居を移されて権利を行使して解決しました。

2013.11.13 見浦哲弥

達弥様(2013/9/17)

皆様、お元気のことと拝察しております。下って私ども何とか無事?（結構色々あります）で送日しておりますのでご安心ください。

先日は、立派な梨、お送りくださって有難うございます。一寸立派過ぎて気後れをしたかな。尻の町の上に2本あった梨の木を思い出します。大きいけれど甘くない木と、小さいけれど熟れ過ぎて腐る寸前が美味しかった小さい梨、よく兄弟で登ってゆすったなど、思い出して感傷に浸りました。今は土砂を掘り取って何処にあったかも想像が付きませんが、私にとって懐かしい思い出です。

私も82を越えてあと半年もしない中に83、貴方も81歳ですね。お互い長生きをしたものです。覚えておいででしょうが白いあごひげの祖父が数え年82でしたから、それを越えたと言うことになります。長い人生が終わりに近くなって、物忘れが多くなって、辛かったこと、悲しかったこと、楽しかったこと、皆消えようとしています。色々な事がありすぎた。電話でお礼をと思ったのですが、思いきって手紙を書くことにしました。この次はないような気がして、駄文を我慢して読んでください。

達ちゃんも持っていると思いますが、私たちの最初の記録は福井の日之出下町の家門先の写真です。二人とも上下が続いたシャツを着て写っていますね。あの写真は野村のてい叔母が持っていたローライレフで撮ったものです。確か現像も自分でしていたのではないかな。背景の壁は道を隔てた大きな紡績工場の壁ですが、騒音の記憶がありませんでしたから縫製工場だったかもしれません。

それから母と兄弟3人で写った写真、あれは近所の写真館で撮った写真、母の顔が寂しそうだっただのが気にかかります。貴方が持っていた象の玩具、誰が持つと取り合いになって、あれから貴方が重病になった。母の顔はそのせいだったかも？。

貴方が福井の赤十字病院に入院したのは私が小一-のとき、長い入院だったのを記憶しています。父ちゃんも病室から学校に行った。退院の時、院長先生に「再発したら、今度は助からない」と宣言されたとか。谷口の伯父さんが内科の医師でしたから、勉強好きの父はその病気の知識は山ほど持っていたのでしょう。

それから、私と信弥さんと貴方では父の叱り方が違いました。80を越すまで元気で生きている貴方をみて一番喜んでいるのは父ちゃんかもしれませんね。

それから忘れられないのは、三国汐見の恵比寿?さんのお祭り。小学生の男の子がお神輿のお供をして三国の沖の海を一回りするのが行事でね。神様が海の神様だから仕方がないが河口から出るとゆれてね。貴方はお神酒の樽をしっかりとって番をしていた。ところが私の役は何だった全く覚えがない。

昭和16年4月16日?、小坂に帰りました。母がサチ子を、親父がヒロ子ちゃんを背負ってオシロイ谷を登りました。晴れた日で暖かった。男の子三人は遠足気分だね。でも登りはきつかった。

大畠の家は牛が5-6頭も入るダヤが、人間と一つ屋根の下に入る大きな家で、10ワットの電

灯が一つ。便所が怖くてね、サチ子ちゃんがこれだけは覚えていました。

祖父の弥三郎さんは80歳過ぎで真っ白で長い見事な口ひげのお爺さん、私たちのいたずらを「ホー、ホー」言いながら一度も叱ったことはありませんでした。昭和17年夏、母が死んで半年後になくなったときが数えて82歳、私は弥三郎爺さんの年を越えてしまったのです。

母といえど何時も思い出すのは最後の前日、貴方と信弥さんに鮎の塩焼きをほぐしながら食べさせていた姿です。そして「一生懸命生きてね」そんな言葉を聴いた気がします。隣の部屋で看病に来ていた上殿のおばさんが声を忍んで泣いていました。そして私の番「人の真心がわかる人間になれ、そして兄弟仲良く」と、生涯、心を離れない言葉でした。でも努力はしても出来なかったな。

翌朝、目覚めた時はカーちゃんは冷たくなっていました。臨終は夜中だったとか。優しい母でした。でも厳しさもありました。私も懸命に努力はしたのですが母の期待には添えなかった。それから半年余りの冬、弥三郎爺様も亡くなりました。父と私たち子供5人の悲喜劇が始まりました。よく覚えているでしょう。辛かったが懐かしい、貴方には随分迷惑をかけたと冷や汗がでます。

最近では老化の進行が激しく記憶がどんどん消えています。早く貴方に私の記憶を伝えなくてはとあせったのですが、気ばかりせいて中々書き出せませんでした。頂いた梨のお礼状を書かなければと思ったのがきっかけになりました。

立派な梨を有難うございました。そして昔を有難うございました。貴方と兄弟であったこと本当に幸せでした。どうか何時までもお元気で。老化の進行が遅ければ又思い出話を聞いて頂きたいと思っています。

2013.9.17 見浦哲弥

魚切の話(2013/10/5)

小板にも魚釣りがやってくる。いわゆる溪流釣と言う人達らしい。狙いはゴギとヒラベ、山女と岩魚と呼ぶのだそうだが、どちらも美味しい魚で、とれたてを塩焼きにしたら、人にもよるが鮎は足元にもおよばない。そのほかにドロバエと呼ぶアブラハヤもいるが、これは論外、食えたものではない。

ところが小板川には、うなぎ、ます、ハエ（ウグイ）、などは見かけた事がない。何故かと疑問を持ったと言う話も聞いたことがない。人の噂話にはあることないことを詮索するのに不思議な現象である。あまりなことに私が見聞きしたことを書きのこさなければと、この文章を書き始めた。

町の子、見浦は、異次元の小板の話は、どんなことも興味しんしんで耳を傾けた。その中にヒラベの話があった。先輩がいわく「昔は小板にはヒラベがいなかった」と。その理由を聞くと「魚切があるけーの」と。そういえば三段峡の柴木川に注ぐ小板川は合流点で絶壁を流れ落ちる。「あれがあるけーの、小板にはおらん魚がおったんで」「それでの、先輩がヒラベを捕まえて小板川に放したんだげな」、話は続く、「ゴギも放したんだげな、それから増えての」と。ゴギは獰猛な魚で小魚は勿論、蛙や小さな蛇まで食べる。むかしの小板橋の下でゴギが蛇を咥えて泳いでいるを見たときは驚いた。彼らは源流近くまで生息する、ヒラベはその下流と言った感じ。もちろん併走して泳いでいるの見たこともあるが普通は住み分けている。

この放流の成功は小板の若者にヒントを与えたい。小板から空城へ林道をたどると、六の谷（ロクンダニ）、中の谷（ナカノタニ）の二つの小川を渡る。空城川の上流なのだが、これには魚がいない。実はこの二つの川には中流に大きな滝があって魚の遡上を阻んでいる。鬼の木戸（オンノキド）と無名の滝だ。鬼の木戸は大規模林道の交点から山の中を1キロ下流に、川がエル字型に大きく曲がる場所がある。その屈曲点が大きな滝になって滝壺が魚止りになっている。滝壺には遡上できなかった魚が群れをなしているが、何しろ深い。落下点は岩盤が大きくえぐられて奥は光が射さない暗闇、少年の頃、何度か魚とりにいって淵（滝壺）の中を水眼（水眼鏡）でのぞくとヒラベの進行、切歯扼腕（せっしやくわん：歯ぎしりをし、腕を握りしめてくやしがること）したものだ。ここが魚切、上流にはヒラベもゴギもいなかったよし。先輩が「俺が放したんだ」と自慢していたから、あまり昔のことではなかったようだ。

私が魚突きを始めた頃は、すでに魚影はかなり濃くなっていて25センチのヒラベを取った事もあるし、5センチくらいの幼魚は数多く見た。ところが林道から500メートルほど遡るとちょっとした平場があって流れが緩やかなところがある。最初は気がつかなかったが、2度3度と入るごとに異様な雰囲気を感じるようになって、魚とりに入るのを中止した。今考えると月の輪の視線を感じていたらしい。牧場を開いて熊が来場するようになって注意して観察すると、その平場に巣穴があるようだ。何十年も昔のことを思い出して冷や汗をかいたものだ。

中の谷も空城川から分流した小川で林道に沿って1キロほど深い谷底をのぼる。並走する林道の中ほどで20メートルばかりの滝を経て穏やかな小川になる。この滝が魚切である。これも探検したことがある。水量は多くはないが落差の大きな滝には小さな滝壺があった。それが魚

切。小さなヒラベが5－6匹いたのを覚えている。つい道端なのでのぞいて見たいが今では藪が繁っていて、さすがの好奇心も鈍る。この谷にも放流したというが、私は魚とりに入ったことはない。友人もヒラベがいたと話したのを聞いた記憶もないので、定着しなかったのかもしれない。

大田川は水量が多く急流で有名、水力発電に適しているとてダム建設が盛んに行われた。魚道など対策はなされたが現実には魚切が数多く出現したんだ。例えば夏の魚の鮎も戸河内では放流の鮎が全てである。自然は変わった。でも、昔は天然の宿命を乗り越えようとして努力した人がいて、小板にもヒラベもゴギもいる。釣り人は当然のように釣り上げて行くが、そんな先人の努力を少しは思いやって欲しいと思っている。

2013.10.5 見浦哲弥

牧場の大敵 ウシスイバ(2013/10/3)

牧場主にとって大敵がいくつかある。熊をはじめとする野生動物、熊、猪、狐、狸、カラス、等々。

その次が天候不順、景気の変動の牛価の低迷、悪天候による飼料価格の高騰、その結果の資金繰り等々。

まだある、牧草地の雑草だ。なかでも大敵なのはウシスイバ、正式名をエゾノギシギシ。何しろ宿根性で巨大な根っこで何年も生き残る、おまけに無数の種が出来て何年も発芽力を失わない、そして肥料の吸収力も絶大、牧草も作物も見ると間に駆逐して一面のギシギシ畑になる、たった一つの弱点は強い日光が必要なことだけ、直射日光が当たらなくなると生育が止まる、従って林の中には進入できない、いや畑が林地化すると絶滅してゆく、しかし畑や牧草には大敵である、何年も耕さずに利用する牧草地にとってこれほどの大敵はない。牛は食わないからね。牛は同属のスイバは食ってもギシギシだけは口にしない。だから牛も食わないウシスイバの別名があるのだ。

この草がこの地方に侵入したのは牧草の種子にまぎれてのこと。牧草の種子といえば北海道、北海道は近代畜産の先進地、ここで生産した種子のなかに含まれてギシギシ君がこの地方にやってきた。内地の農民達はその恐ろしさを知らないうちに定着したという。

勿論、新米畜産家の見浦牧場はその本性を知る由もなかった。気がついたら猛然と繁殖を始めていた。そこで慌てて参考書を読む。そしてかの草が世界の3大悪草の一つと知ってその対策に奔走したという次第。

では北海道はどうしているか、調べたら”ギシギシ抜き”なる鍬が売られていることを知った。丈夫な2本の爪が付いた鍬、これを根っこに刺し込んで掘り起こす。何しろ無数に枝分かれした根っこが一部でも切れて残ったら、そこから再生するという、とんでもない植物。切らないように掘り起こすのも技術がいる。地上部といえは大きくなって一本で1万粒の種子を落とし、それが発芽率が高いと来る。弱点はたった一つ、日光だけだ。ただそれだけ。

畑も牧草地も太陽の光を充分に利用することで生産をあげるのが仕事、その環境がウシスイバも最適とのたまう。肥料の取り合いでも負けないとくると手も足も出ない。折角の牧草地がみるみるギシギシ畑に変化し始めて家族全員でギシギシ抜きに奔走。子供たちに一本1円の奨励金をつけた。始めはいやいやで挑戦した彼達は1年目のギシギシは根っこが枝分れのないうちに気がついた。これなら簡単に抜けると本数を稼ぐ。夕方計算したらとんでもない数字になった。財布の軽い貧乏親父、一日で悲鳴を上げてジ・エンド、そんな笑い話もおきた。

さて、対策の歴史だが、水田も畑も除草剤なる新しい手段を人間は見つけたが、畑に使う薬も人間に害を及ぼしては困る、残留して家畜に害をしたのでは何のために使うのかという事になる。そこで該当する除草剤を探し、ようやくたどり着いたのはアーザランなる除草剤、これを水溶液にして噴霧器でギシギシにかける、効果的で能率も高いのだが、残念ながら欠点がある。栄養成長が繁殖成長に入ると効かなくなる。即ち花が咲いて実がつきはじめるとギシギシ君、アーザラン何をすると効果がなくなる。小坂の春は牧草もギシギシも猛烈に成長して、花が咲くのも早い。おまけに春先は牧場は眼が回る忙しさ、雪で壊された牧柵もなおさなければいけないし、遅れた畜舎や運動場の掃除、堆肥撒きなど仕事が山積している。おまけに中古機が主力の見浦牧場では機械連が連盟で故障をうったえる、明日はギシギシ退治と思っても日延

べ日延べの連続、やっと牧草地に出てみればギシギシは我が世を春とばかり成長して花ならまだしも早い奴は実が黒くなり始めている。こうなるとアージランは効果がない。選手交代でカソロンなる除草剤の登場である。この薬は粒剤で500CCくらいのポリの空き瓶に入れキャップに5ミリ径くらいの穴を開けて持ち歩く、この時期のトラクターには必携の備品でギシギシを根際から刈り取る小さな鎌と刈り取ったギシギシを入れる飼料の空き袋との3点セットは必携である。ところがアージランと違って刈り取りと薬かけと工数が増えて、おまけに刈り取ったギシギシの種が落ちないように袋に入れるのも細心の注意が必要、その上もちかえっての焼却と、工数が増えて能率が上がらない。これをあきれずに何十年も続けたのだから、俺達は農民だと自己満足をしている。

ところが一般人はこの草が世界の3大悪草とはご存じない。今やいたるところでご面会となる始末。山の中でも日当たりが良くて肥料分の多いところには、ちゃんと生育しているから、油断するとすぐ進入してくる。勿論、田圃の畦も例外ではない。大株になって花が咲いているのを見るのは精神衛生上まことによくない。

しかし、この世界でも進歩がある。新しい除草薬がでたのだ。アメリカのマクドナルド社のラウンドアップなる除草剤。何しろ葉にかけるだけで根っこまで枯れる、土壤に接触すると速やかに無害の物質に分解する、おまけに散布時期を選ばないという特徴のある薬剤。ところがパテントがあって高価、それでも見浦牧場は、なけなしの資金を注ぎこんだ。ま、スイバ抜きなる道具を振り回して何ヘクタールのウシスイバと戦争よりは良くなった。色々と批判のあるマクドナルドだが私は感謝している。

9月ともなると、草地のいたるところで見逃したウシスイバの種が熟れる。真っ黒に色変わりしたウシスイバが草地の中に散在するのを見るのは辛い。したがって再びカソロンの3点セットがトラクター備品となる。いちいち機械から降りての作業は能率が悪いが欠かすことができない。見浦牧場のトラクター作業の能率の低さがここにある。

二番草を刈ると、さすがのギシギシも花を咲かせ実をつけることはまでは出来なくなる。ひたすら葉を伸ばして越冬のための栄養の蓄積に努める。それを横目で見ながら見落としの黒い穂はないかと神経を尖らす。しかし、今年のギシギシ戦争もうすぐ終わりである。

牧場を始めて50年、毎年のギシギシ戦争にも変遷はあった。これからは奴らとの知恵比べ、何処まで続くのかは知らないが、自然という奴はとんでもない強敵を送り込んでくれた。ギシギシ君はその内の小さな巨人。

しかし、私も日本の農民、面子にかけてもこの小さい戦争を続けてゆく。来年も待ってろよ、ギシギシ。

2013.10.3 見浦哲弥

一輪車(2014/7/4)

最近は何処にでもあって珍しくなくなった一輪車、中国名は孤輪車、昔の農機具の本の挿絵で見た。

私が子供の頃、納屋の隅に小さな荷車の車輪が心棒つきでほってあった。何をするものかと随分思案したものだ。小型の大八車の車輪の片割れとすれば小さすぎるし、第一、片割れだけほってあるのが解せない。

そこで親父ドンに聞いて見た。彼いわく、昔は狭い畦道で物を運ぶのにはオイコ（ショイコとも言う、今でも強力さんが荷物を背おうて運ぶ時につかう使う道具）か、天秤棒で担ぐしか方法がなくて、なんとかならんかと弧輪車を作ることにしたんだ、ところが小さな車輪は店で売っていないので広島に特注して作らせたんだと、いきさつを話してくれた。もっとも車輪だけ放置してあったのだから、うまく行かなかったのでしょうな。

ところで本の挿絵の弧輪車は曲がった天然木を加工して車体としている。再現してみようと思っても、当時14、5歳だった私の能力では、そんな加工は出来ない。そこで考えたね、真っ直ぐな角材を組み合わせて出来ないか、それでなら先端に心棒の通る穴を開けて、あとは釘打ちでなんとかならないかと。今でも、その性格は変わらないが思い立ったら即実行が私の性分、出来上がった代物は今では想像も出来ない不恰好な代物だったが何とか荷物は積めた。早速、田植えの苗運びに使ったのだが、大切な事を見落としていて実用にならなかった。なぜ実用にならなかったか？それは田圃の畦は柔らかい、従って車輪がめり込む、押すのに大変な力が必要、重いものを少しでも楽に運ぼうと考えたのにね。もっとも固い道では多少は便利だったと覚えている。が、そんなわけで苦労して作り上げた弧輪車も再び放置される運命になったんだ。

ところが狭い道を楽に物を運ぶと言うことは誰もが考えたことらしく、小さなゴム車輪が売り出された。確か広島の横川にあったリヤカーなどを作る会社だったと思う。それは車輪軸にベアリングが使ってあった。早速購入して一輪車を製作して愛用した。もっともパンクと言う新しい現象を伴ってきたが、これは畦道で使えたんだ。

そのうち細いパイプで組み立てられ、タイヤの直径が少し大きくて細めの一輪車が工場生産されて店頭に登場した。これは軽くて安定していて3、40キロの荷物が積めたので、手造り一輪車はたちまち駆逐されたんだ。もっとも値段は高くてね、貴重品だったんだけど。

販売店が農機具屋からホームセンターに変るようになり、安売りの目玉商品になって貴重品だった一輪車も気軽に買えるようになった。勿論、国産品は安価な中国品に駆逐されて姿を消して、溶接の不具合や、タイヤの空気漏れなど問題点が数多くあるものの、安くて便利と一家に1台はもとより2・3台あっても不思議ではなくなった。壊れたら買い換えればいい、空気漏れも安い空気ポンプを買ってつぎ足せばいい。

そんなわけで何千年か昔、中国で発明され、何百年か昔、日本に伝えられ、明治の小板で親父ドンが苦労して試作した一輪車は、今はどこの農家にもある使い捨ての道具になった。スクラップの山の中にその残骸をみると、時のながれを感じるのである。

2014.7.4 見浦哲弥

酒断(2012/3/16)

私を知る人の多くは、見浦さんは酒が嫌いと認識している。

事実 酒席は嫌いだし、たまたま 同席しても一滴も口にしないのだから、お酒は駄目のレッテルを貼られているのも当然だが、昔を知る人は本当にしてくれない。

本当はお酒は美味しいと思うし、一汗かいた後のビールは最高の甘露だと感じもする。妹の結婚式で酒の飲めない父にかわって列席のお客の返杯を受けて回って前後不覚になったこともある。それがある時を境に一滴も口にしなくなったのだから、その前後を知る人が不審に思ったのは無理のない話、「何、俺の杯は受けられないというのか」とすごまれた事もあるのだから。

40年近くも昔の話です。畜舎を見てきた私は今晚はお産はないと判断したのです。

牛は分娩が始まる一日前位から食欲が落ちる、そわそわする、他の子牛を気に掛ける、など何かしら兆候があるものです。一日の作業の終わりに予定日の近い牛は必ず観察してお産に備える。それでも知らない内に生まれたと言うことが半分以上いますから自然は有り難いのですが。しかし、難産も少なくはないのです。胎児が大型だったり、産道に入るのに姿勢が悪かったり、奇形だったり、様々な理由で。

でも、人間の介助で大部分の胎児の命を救うことが出来る。それが畜産家の腕前だと思うし、たとえ家畜でも与えられた命を救うことは使命だと考えているのです。

その晩も何頭かいたお産の予定の牛を見て今夜はお産はないと判断して、晩酌を飲んだのです。一日の労働を癒すささやかな休息でした。

ところが夜中になって一頭の分娩が始まりました。しかも胎児が大きくて難産になりました。哺乳類は骨盤の中を産道が通っています。筋肉だけなら伸縮ができますが骨は拡張は出来ません。帝王切開で取り出すか、間に合わないときは胎児を糸のこで切断して取り出すか方法は限られています。しかし、大部分の場合は前足を伸ばしてその間に頭を乗せ、最小の断面にして引き出せば助かる事が多いのですが、産道に入り始めると臍の緒が圧迫されて血液を通じての酸素の供給が遮断されるので、分秒を争う作業になるのです。

正常でも微妙な作業、アルコールが体に入っている状態では気は焦っても体が動かない、指先が思うに任せない、時間だけが空回りする。ようやく引き出した時は完全に死亡していました。最初に子宮の中で手に触れた時は元気で動いていて死産になるとは思はなかったのに。アルコールが子牛の生死を分けた、恐ろしいと思いましたね。家畜とはいえ命は命、一時の安らぎの為に子牛の命を犠牲にした、飲まなきゃ良かったと後悔しても後の祭り、ほぞを噛む心境でした。

その日から酒は断ちました。悪友達が酒席で一滴も飲まない私に鼻先に杯を突きつけてこれでも飲まないかとかからかって、あの命の消えて行く瞬間を思い出して耐えました。何年か経ちました。いつの間にか私が酒好きだった事は、誰も忘れてしまいました。そして、見浦は酒嫌いが定着して、何十年も経ちました。そして、煙草も吸わず、酒も飲まずで81歳まで長生きをさせてもらいました。今でもあの夜の子牛の命が消えていった瞬間の悔しさが忘れられません。でも、それが長生きに繋がった。人生は何がプラスで、何がマイナス

になるか判らない、不思議なものだと思っています。

2012.3.16 見浦哲弥

爺ちゃんから、大人の入り口の明弥君に(2014/5/29)

2014.5.21 貴方も10歳、6年生になりました、この年齢は、少しずつ子供から大人に変わり始める年なのです。でもおおかたの子供たちはそれに気がついていない。昨日までの小さな子供の時と同じ気持ちで生きている。それが普通なのです。
でも、それでは本当の大人になれない。お父さんや、お母さんのような大人にはね。今日はその話をしましょう。

人間は1人では暮らせません。こう言ったら利口な貴方は1人で暮らしている人もいるよというでしょう。でもよく考えたら、何時も働いている貴方のお父さん、お母さんや、学校の先生、スクールバスの運転手さん、病院のお医者さん、看護婦さん、町では泥棒がこないようにお巡りさんもいます。お店やスーパーで働く人、道路を直す人、食べ物を作るお百姓さん、私達が住んでいる世の中は沢山の人が色々と働いて助け合うことで成り立っている社会なのです。それが人間の集まり、仕組みなのです。貴方も1人では一日も生きてゆけない。人間とはそんな弱い動物なのです。

さて、そこで考えてください。もし貴方がライオンのいる草原で1人でいるとする。どんなに大きな声で「俺は強いぞ」と言っても一人ぼっちは、たちまちに食べられてしまいます。ところが仲間が大勢で団結していると、そう簡単には餌食にはならない。それが動物の社会なのです。貴方は自分が住んでいる社会ではそんなことは起きないと思っているでしょうが、人間の社会でも似たようなことが起きるのです。1人ぼっちは誰も助けてくれない、やけを起こして泥棒をして、警察に捕まって牢屋を出たり入ったり、誰からも相手にされなくなり、「何のために生まれたのか、勉強したのか」と人を恨みながら死んでいった友達がいます。利口な貴方は、俺はそんな馬鹿な生き方はしないと思うでしょうが。

そうならないためには、どんな生き方をすればいいか、それは見浦の牛が教えています。

見浦の牧場では30年ほど前、子牛が熊に襲われて殺される事件がおきました。子牛が2頭、群れから離れたのが原因です。熊が餌を狙うときは1頭でいる子牛か弱い病気の牛をねらいます。それは元気な牛や群れになっている牛に命がけで抵抗されると自分が危なくなるからです。そして事件が起きました。夕方、帰ってこない子牛を呼んで2頭の母牛が懸命に鳴いていました。それが夜中には鳴く牛は1頭になりました。1頭は逃げ帰ったのです。
あくる日、牧場の岡の向こうで発見した子牛は地面にたたきつけられて死んでいました。

普通の牧場では牛は牛舎で飼います。熊が牛舎の中まで入って牛を襲うなど、日本の内地では聞いた事はありません（昔は北海道ではあったそうですが）。牛舎の中で育った子牛を買ってきて始めた見浦牧場の牛は、自然の中に自分達を襲う熊がいる、そんなことは知りませんでした。そして何も知らない子牛が2頭群れから離れたのです。そこに腹を空かした熊さんがまっていたというわけです。そして1頭が捕まって殺された。

それから何が起きたと思いますか？見浦の牛達は生き残るための勉強したのです。一匹でいたら危ない、仲間が多い方が安全だと学習したのです。ところが子牛も人間と同じで仲間に優しい子牛と意地悪をする子牛がいます。見ていると意地悪をする子牛の周りには子牛が集まらな

い。角を突き合わせても、走りまわっても、相手の嫌がることや、いじめはしない、そんな子牛のところには沢山集まるのです。弱い子牛を何時までも突いて突いていじめる、そんな子牛はいつのまにか一人ぼっち、気がついて慌てて皆を追いかける、そんなことが多いのですよ。そんなときに熊に出会ったら誰が食べられるのでしょうか？動物は言い訳をしません。言い訳をしない代わりに行動で示すのです。

そうは言っても、お爺さんも子供の頃からそんなことが判っていたのではありません。喧嘩もしたし、いじめもしたかも知れません。でも小板の学校で一年上の上級生が大人しいモチノキからくる生徒や韓国から働きに来ていた人の子供をいじめているのを見て我慢が出来なくなりました。「弱いものをいじめるな」と、いじめっ子に文句を言いました。下級生に文句を言われたその上級生はカンカンに怒って「いらんことを言うな」と、喧嘩になりました。先生が止められないほどの喧嘩にね。ボカボカに殴られても泣きながらも喧嘩をやめないでね。僕の方が正しいと負けませんでした。最後は皆が味方してくれてやっけることが出来ました。それが境にいじめられていた生徒は「見浦君、見浦君」と信頼してくれるようになりました。

松原の中学校に通った時、同級生に子供の時の病気が原因で足が不自由な子と、小さいときの火傷で頭にハゲのある子がいました。初めて松原の学校に登校したときは驚いたのです。同級生の中に、この二人をからかったり、いじめたりする子が何人もいたのです。いじめる方はなんとも思わないだろうが、いじめられる生徒の気持ちを考えると辛かった、そこで私は、この二人の友達になったのです。

あれから70年余り経ちました。足の悪かった友達は学校を出て間もなく病気で死にました。でも、そのお父さんお母さんは「子供に仲良くしてくれた」と大人になってからも親切にしてもらいました。

やけどの友人は70年経った今でも「おい見浦君やー」訪ねてくる仲良しです。

大人になって判った事は、人に仲良くする、親切にすること、相手のためにすることではないということです。それがはっきり判ったのは牛を飼い始めてからです。君が知っているように見浦牧場の牛は群れで暮らしています。大将がいて、お母さん牛がいて、子供の牛がいて、集まって暮らしています。何故かな？

牛は草を食べる草食動物です。草食動物は肉食動物に餌としてねらわれる弱い立場の生き物と言うことは知っていますね。弱いとはいえ殺されて食べられるのが嬉しい生き物はいません。彼等も出来るだけ生き残る努力をしているのです。そのために集団で暮らす智恵をもったのです。そして大きな角を利用して肉食動物とたたかうのです。それでも後ろから襲われると逃げしか方法がありません。そんなときは、集めた子牛を中に入れて角を外に向けて戦うのです。見浦の牛で一度だけ見たことがあります。爺ちゃんの書いた文章の”愛国心を考える”の中に出ています、いつか読んでください。

爺ちゃんは、小さい頃、(幼稚園から低学年)教会の日曜学校に通っていました。そこでキリストの紙芝居を見たり、牧師さんの話を聞いたり、賛美歌を歌ったりしていました。そのときに”自分がしてもらって嬉しかったことを他の人にしなさい、自分がされて嫌なことは他の人にしてはいけません”と教えられました。なかなか出来ませんでした、が、「見浦君、見浦君」と仲良くしてくれる友達を見ると少しは出来たのかも？

大人になり始めた明弥君、いい大人になってください。爺ちゃんは何時も何時も願っています。

2014.5.29 見浦哲弥

再び同行崩壊す(2014/8/28)

2014.8.15 とうとう同行が立ち行かなくなりそうだ。今度は組織の問題でなく、住民が同行を維持できる状況でなくなりつつあるのだ。

住民の不幸を分け合って助けると言う理念は、皆が持ち合わせている。しかし、若者がいないのだ。20代、30代の若者は言うに及ばず、40代の住民は我が家の若夫婦(?) だけだと言うのでは、お互いに助け合うという理念は維持できなくなったということなんだ。

が、幸い、その若者が我が家族であることは、同行を最後まで続けられるということ、互助でなくても、仲間に奉仕することと視点をかえることで集落の住民が最後の1軒になるまで維持できる、その負担をするのが私の家族であることで心が休まる、他人に崩壊する小板同行を押し付けなくて幕引きが出来る、これも喜びのうちに数えることにしたんだ。

そして最後は家族葬、何時の日か小板の人口が増えることがあったら、そのとき同行を復活すればと、私のいない時代を夢見るのです。

群れとしての牛飼いにこだわった見浦牧場では、お互いに補完しあう牛達を見て暮らしてきた。集団で暮らす動物の基本は一匹では生きてゆけないが助け合うことで生き延びると言うことなのです。見浦の牛群が草を求めて群れで暮らしている姿を、「凄い」と都会の見学者が感心して見えています。

彼等が本能で作り上げた見浦牛の集団は小さいながら訴えるものを持っているのです。

2014.8.28 私より5歳も年下のN君が亡くなりました。小さな会社を経営していた彼の葬儀は、飯室の葬儀社の会館で行うということになりました。同行の一員として長年協力してくれた彼ですが、集落外の葬儀に同行の人員を派遣する先例はありません。まして同行のメンバーが高齢化して地域内の葬儀も苦慮している現状では遺族の要望に応えることは出来ません。そこで葬儀の日には世話人の私と協力人の島川君が参列して雑用をこなすことで了解を貰いました。

今回はご遺族のご了解を得てこの形で済ませそうですが、同行の有力な協力者を失ったことで、つぎの葬儀はどうこなすか対応策は苦慮しそうです。

いま小板には私より年長の人は3人、同年代が4人、他にも高齢者ばかりで、同行の幕引きが難しい。我家の若者たちが、この困難を軟着陸させられるよう、私の最後の智恵を絞ってみようと思っています。

2014.8.28 見浦哲弥

田植え歌(2014/9/17)

数えて見ると、もう70年あまりの昔になった、田植えの季節に聞こえていた田植え歌、子供だった私が大人に混じって懸命に働いた田植えの日、腰の痛みに耐えながら親父さんの前歌に続いて五月女さんと後歌を歌う、歌の意味は判らなくても土の香りのメロディは心の休まるものがあつた。

梅雨時に何日も続いた田植え、そして五月女さんとの合唱、私の心には、まだ聞こえている。

田植機が進化して手で苗を植えれば新聞社が飛んでくる昨今では想像もつかないが、腰を曲げて一株一株と早苗を植えてゆく作業は昔かたぎの農民でも悲鳴を上げるほど辛い作業だった。朝の5時起きで始まる田植えは日が暮れて田圃が夕闇に包まれるまで、4・5回の食事とその間の休憩で束の間、身体を休めるだけ、それが田植えが終わるまで連日続くのだから過酷である。自分の家の田植えが済んでも集落全体の田圃が緑にかわるまでは、田植えは終わらない。テゴー（手伝い）という形の賃仕事が、貧しいこの田舎では高給に属する賃金になるのだから、体が悲鳴を上げてでも休むわけには行かない。

田植は黙ってするには辛い作業、そこで世間話、「何処そこの誰それは怪しい」から始まって夜這いの話まで、子供には少々刺激が強すぎたが、学校の勉強よりも興味があつたね。そんな話の種が尽きると、誰となく田植え歌が始まる。苗代（当時は田圃の一角に厚く種粃を撒いて苗を育てていました）には苗取りの歌、今は一つしか覚えていないが「ミヤジマノー、ゴカイローハ、ドナタガ、コンリュウナサレター、」と早乙女（ソウトメ）の頭が声を張り上げる。「シンタノ、タクミノ、タケタノ、バンジョウ、キヨモリ、コンリュウナサレター」と残りの早乙女が声をあわせる。まだ薄暗い早もやの苗代で歌った苗取り歌、ひなびた合唱に声を合せて何度も何度も繰り返したのは昨日の事ようだ。ちなみに仮名の歌詞を独断で文章に変えると「宮島の御回廊はどなたが建立なされた一、新田の、匠の武田の万上、清盛建立なされた一」となる。

9時過ぎに2番目の朝飯がある。一日、5度の食事の五度飯の制度は随分変なしくみだと思ったのだが、親父ドンに非合理だと文句を言ったら、とんでもない答えが返ってきた。彼曰く「働きに来てくれる人の中には貧乏な人もいるんだ。朝は朝飯を食わずに、夜は夕食抜き、そんな人の為に遅めの朝食、早めの夕食なんだ」。

私が始めて知った世間の裏側、そして思いやりのシステムだった。

しかし、この意味の深さを本当に理解したのは、随分後のこと、当時は5度飯のおかげで、朝は5時起き、夕食後の10時ごろまでの夜なべ、子供には辛かった。それで随分この仕組みを恨んだもんです。

現在も一つのショーとして田植え歌が歌われています。でも昔の生活に直結していた田植え歌とは感じが違います。生活観がにじみ出ていた昔の田植え歌は、私の老化とともに消えようとしています。苗取りが終わって田圃での田植えになると、男衆（おとし）の即興の歌いだしに、早乙女さんの1人が即興で応える。2度目からは同じ歌いだしに、早乙女さんの大合唱。何度か繰り返すと、又、新しい歌いだし、今度は五月女さんの誰が応えるのかな、ベテランの五月女さんが2・3人もいると次から次と繰り出される即興の田植え歌に腰の痛みが軽くなる。歌の中には、子供には理解の出来ないエロチックな歌詞あつて、それが、おてんとうさんの下

で明るく合唱される。田植えは嫌だが、雰囲気は楽しかった。日暮れになると、男衆が「ヒハクレル、ユクヤゴウデ、コマドヘツナイダ、」と歌いだす、と、本日の田植えは切りを付けて終了になる。現金なもので「ヤマヲコシ、タニヲコシ、サガリマツニ、ツナイダ」と応える声には力が入りましてね。耳を澄ますと今でも、その歌声が時の彼方から聞こえてくるようで！！ちなみに先の歌を文章に直すと「日は暮れる，行くや郷で、駒を何処に繋いだ、山を越し、谷を越し、下がり松に繋いだ」となるのですよ。

2014.9.17 見浦哲弥

深入山は火山(2014/10/8)

2014. 9. 14、今日は小板の話をしてくれとの依頼で大野モータースのイベントに出かけました。雑談の相手なら嫌いではないのですが衆目を集める演壇は苦手で、そんな話があると「尋卒（小学校しか出ていない）に恥をかかせなさんな」と断り続けてきたのですが、お隣で日頃の付き合いを考えるとそうも行かず、衰えた頭に鞭打って30分ばかり”誰も話さない小板の話”をしちゃべって来ました。

ところが聞き手の中に友人の娘さんがいた。

彼女曰く、「私の知らんことばかりだった」、「おい、おい、あんたは小板で生まれたんぞ」、「それでも見浦さんは算数しか教えてくれなかった」

そこで気がついた。今日は深入山が死火山だったことも話そうと思ったんだ。それを完全に失念していた。

それで「深入山が火山だったことは？」と聞くと「えっ、ほんま」と、のたまった。その言葉で深入山の話を書かねばなるまいと思ったんだ。

深入山は国道191号線と旧191号線（現在は町道）が麓を取り巻いて走っている独立峰。広島側の松原から走ると柔らかな曲線の山峰がみえる。転じて島根側から道峠を越えると深入山の主峰と前深入と呼ばれる副峰が眼前に迫る。そして地元の住人が“イデガタニ”と呼ぶ巨大な深い谷が見える。

私が深入山が火山と知ったのは、そんな昔ではない。「ありゃー死火山ど」と教えてくれたのは誰だったか忘れたが、それまでの様々な疑問が解けたのだから、あの一言は強烈だった。

それが前述のイベントでの話に結びついた。

小板川の上流に一枚岩の川底が500メートルばかり続くところがある。地元の人がナメラとよんでいた、川遊びでヒラベ（イワナ）追っかけて川を上ると行き当たる、魚の隠れる溜りがなくて、たまの溜りも小さなヒラベしかいなかった、刈尾山側の六の谷とは異質の川だった。もしかすると、あれは溶岩か?と思ったんだ。そのナメラに合流する小さなカジヤ谷の急な谷底も同じ岩盤が続いていた。そういえば反対側の小山に植林された檜は何年たっても大きくならない。古老曰く、「この山は木が育たん山での、植林なんかしても無駄での」とのたまった。その小山を越した斜面は木の生長が早く、よく繁る、そこの宇名（あざな）は繁濃（シゲノウ）。そこで思い当たったんだ。植林地は土が薄いから木が伸びない、土の薄いのは底に溶岩があるからだ。

考えてみると小板には井戸が一つもない。横穴と称して崖に小さなトンネルを水が湧き出るまで掘る、にじみ出た湧き水を集めてそれを飲料水にしていた。住民が増加するまでは4つあったとも伝えられた沼もことごとく田圃になった。小板全域で最盛期は約20ヘクタールの水田があった。梅雨時の朝靄の中の稲田は一幅の絵画だった。ところが、お盆の8月15日前後の乾期になると川の水が一気に減って水の取り合いが始まる。深入山は死火山、溶岩で出来ている、だからであった。溶岩の上には何千年か何万年かで出来た岩石や土が積もってはいるが、褶曲で出来た山々に較べると沁み込む雨水が格段に少ない、従って夏の渇水期が一月も続くと谷谷の湧き水が止まってしまう。小板の命の川、小板川も干上がりはしないが、田圃にまでは

水が届かない。そこで日頃の付き合いは何処へやら、隣同士がにらみ合う。そんなことが何年かごとに繰り返されたんだ。ところが深入山の旧火口から流れ出る谷は、比較的水が切れない。これは渇水に苦しむ小板の住民には垂涎の的、悪い奴が山腹に溝を掘って盗水をした。松原の水が峠を越して小板に流れたので、峠の名前が"水越しの峠（みずこしのたお）、峠で双方の住民が鎌を持って睨みあいの喧嘩までしたと古老が話した。

1960年代に小板に開拓の話が持ち上がった。農閑期には飯を食わない、テラーなるミニ耕運機の普及で役牛の和牛が急速に減って、堆肥の供給源がなくなると、農業の専門家が危機感をもったんだ。そこで和牛を肉用牛に転換して利用しよう、そのために草地開発をして畜産農家を育てようという事になったんだ。

その開拓事業に便乗して、全戸に水道をつけた。これが小板簡易水道の始まりである。貧しいお爺さんに「見浦さん、御蔭で毎晩新しいお湯の風呂に入れる。極楽で」と感謝されたのはこのときである。以来、小板の水不足は大いに改善された。

ところが集落外の住民が増えた。いわゆる別荘、その他である。経済的に余裕のある新住民の中に地下水を求める人が出た。掘削の機械も進化して比較的簡単に掘れるようになった。勿論、費用は高価、一般的ではないが挑戦する人が出た。そして3箇所まで水を掘り当てた。深さ80メートル、50メートル、150メートル。即ち、溶岩の厚さがそのくらいあるということだ。

話がそれた。先日、テレビを見ていたら、中国地方の火山帯の分布が表示されていた。瀬戸内海の沿岸と島根県の海岸沿いに、そして二つの火山帯を結ぶブリッジ、それが湯来温泉を経て吉和、筒賀、そして細長く深入山、さらに匹見、美都、有福と島根の温泉群に続く。まさに深入山は火山だった。但し死火山（休火山かもしれない）。もっとも瀬戸内海側はいずれも加温する温泉、中国山脈に近づくほど湯温は下がり、頂上を越して日本海に迫ると再び湯温は上昇する。

ちなみに筒賀に温泉を泉源とする小さな池がある。その池では金魚が自然繁殖して様々な姿を見せてくれる。美しくないのもいてね。池の温度は年間を通じて19度で一定だとか。

深入山と前深入の間に大きな円形のくぼみがある。測って見たことはないので正確ではないが、直径が7-800メートル位の草原である。一箇所、壁が大きく切れ込んで、小板の水道の谷に水が流れこむ。この谷が深入山の唯一水が切れない谷、火口の証拠だ。湧水が切れないのは火口跡にたまった地下水が流れ出るためだと考えられる。勿論、素人の独断だから間違いかもしれないが、疑問を持たれた人は学術的に調べて欲しい。

深入山の頂上に陸地測量部の三角点がある。そこから聖湖側に少しばかり下ると板状の石が散乱している。遠足で登ったときは変な石があるなと思ったが、今考えると、この火山特有の石だったのかもしれない。

お天気の日には頂上から日本海が見える。空気が澄んでいるときは益田の沖の小島までが見える。貴方が登山を楽しむ時間を持っているのなら、是非、深入山にも登って欲しい。穏やかな表情の山の、もう一つの側面を探りながら。

2014.10.8 見浦哲弥

角と教育(2012/9/30)

和牛は牛ですから立派な角があります。広島牛とか但馬牛とか地方によって角にも特徴があって、広島は横に広がって大きな角、岡山の千屋牛は細い角が上に曲がってと、エトセトラです。

ところが牛は集団で暮らす動物、ドミネンスオーダーと言う順位を作る本能があって、その為の喧嘩があります。

牛飼いを始めた頃は一頭飼いの子牛を導入して群を作り、放牧で経営を始めたのですから喧嘩が絶えなくて、牛の怪我が続き、困り果てました。先生方に教えを請うと簡単に除角をしろと。早速教科書を読むといろいろの方法が記述してありました。鋸で切る、油圧の切断ハサミで切る、子牛の角の伸び始めに苛性ソーダで焼く、等々。

当時は私は30才前半の蛮勇の固まりで、暴れる牛を柵場に固定して、大工鋸でゴシゴシ切り落としたのだからすさまじい。

切り始めて、直ぐに出血が始まりました。こりゃ止血がいたら、急遽、焼きごてを準備しました。ところが焼いても止まらない。こりゃ全部切り落さなくては止血は出来ない。

切り落とすと血が赤い糸のように2〜3メートルも飛んだのです。肝を潰しましたね。後で牛の角には3本の細い動脈が通っていると聞いたのですが、そのときは止血することで頭は回リません。焼き鑊で切断面を焼くのですが止まらない。試行錯誤、血管の周囲を焼きごてで潰して止血する方法を探り当てるまでは大変でした。

しかし、経験はしておくもので、後年、時折発生する角折れの対処などで随分役に立ちました。牛の角は袋角で外側は5ミリ位の堅い角質なのですが、中は柔らかい軟骨で出来ています。その間に離層があるみたいで、物に挟んでひねると簡単に表面の角質部が抜けるのです。丁度、角笛みたいな形でね。抜けた当分は軟骨部分がものに当たって出血、手当が必要になります。群飼育の放牧形式となると案外発生が多く、見浦牧場では年間2〜3頭くらい、ひどい出血の時は顔が真っ赤になっていますから、慌てます。そんなときは最初の角切りをを思いだしながら手当をするのです。

消毒をして4重にしたガーゼで覆い、ゴム輪を何本も掛けて止める、角はテーパー（円錐状の先細りの勾配）がついているので止まらないと思うでしょうが、これで上手くゆく、年の功です。

ところが世代が交代して何代か経つと、角の切断は不要になりました。牛が変わったのです。本来の姿に戻ったのです。

牛は、もともと集団で暮らす動物なのです。貴方も西部劇の映画で牛が大きな集団で移動して行く場面など見られた事があるでしょう。それが日本では1〜2頭の少数飼いが基本、乳牛などで何十頭の規模はあっても舎飼いで、子牛の時から集団で暮らす飼いは日本ではまだ珍しかったのです。ましてこの地方では。

話は変わりますが前段で出たドミネンスオーダーという言葉、集団で暮らす動物がボスを筆頭に力によって順番を決めることを順位といい、その外来語です。その反対性質をテリトリー（縄張り）というのです。全ての動物はこの2つの性質を持ち順位が大きい動物は縄張りの力は小さい、縄張りの性質が大きい動物は順位の性質は小さいと言う一つの法則が成り立っているの

です。

牛は本来集団で暮らしていた動物、12ヶ月以上にもなると、順列の仕組みの中にしっかりと組み込まれる、年に何回かある一寸したショックで群全体で力比べが始まって順位が入れ替わる、自分と相手の力の差が判ると力比べがおしまい、怪我をするなどは先ずない。

これが本来の姿だったのです。ところが集団で暮らしたことの無い牛君はケンカが始まるとトコトン闘う、相手がもう参ったと降参しても角を振り上げて突いて行く、それで良く怪我をしましてね。そこで対策として角切りが奨励されたのです。

見浦牧場の牛も最初は市場から買い集めた舎飼いの牛の寄せ集めですから、ケンカ、イジメのオンパレード、角切りは多頭飼育の基本的な技術と錯覚しましてね、勉強したものです。

専門書には角切りの方法は列挙してありましたが、貧乏な見浦牧場では高価な道具が必要な方法は論外で、最初は苛性ソーダを使いました。ところが生長点を焼くと、簡単に書いてあるものの実際は大変、棒状のソーダの固まりで角の生長点をこすって焼くと、皮膚が焼け、肉も焼けて骨が見えるようになる、そこまですないと角が生えてくる、変な形の狂った角がね。

ところが処置する間にも傷口から漿液がにじみでる、それが流れないように拭かないと他の処まで傷になる、おまけに焼き方が足ないと、変な角が生えてくる。これは見浦牧場には向かない、そう結論を出したのです。

次は鋸で切り落とす方法で除角を実行したのです。大工鋸をアルコールで消毒してゴシゴシと切った。驚いた牛が暴れるのを柵場に嚴重に保定して1/3ほど切って驚いた、切り口から血が2メートルほど吹き上がった、焼きごてで止血をしるとテンヤワンヤ、専門書で勉強して再驚き、牛の角の中には2-3本の細い動脈があると、それを切ったのだから吹き上がるのは当然、おまけに血管に沿って神経が通っているのだから、牛が暴れるのもまた当然、何も知らないと言うことは飛んでもないことをする。

ところが集団の中で生まれ、集団の中で育った牛達は除角の必要性を認めない。むしろ受精や治療の時の捕獲に角はなくてはならない、投げ縄は角にかからないと止めることが出来ない、首にかかったら引きずられるだけ、専門書にはこんなことまでは書いてなかった。

学問は大切だが、実社会はそれだけでは通用しない、学問と現実の差を埋める目を持つ、それが大切なんだ。

同居している孫達は10才を頭に8才と6才、目下悪戯の天才達、彼等の好奇心の芽を摘みまない様努力している。その好奇心が成人して世の中の盲点に気付いてくれることを期待している。どんな小さなことでも、その集積が社会の進歩に貢献する、私はそう信じているから。目まぐるしく進歩する近代社会、彼等が時代に遅れずに歩き、時には時代に先んじるためにも、失敗を恐れず挑戦してほしいと思うのです。但し被害は最小にしなければなりません。事前の勉強は忘れずにと忠告しておきます。

2012.9.30 見浦哲弥

スーパーデキスタ(2015/7/22)

スーパーデキスタ、イギリス製の農業トラクターである、出力は38馬力、私が牧場を始めようとしたころ、垂涎のトラクターだったんだ。貧乏な農村青年にとって夢のまた夢の機械だったんだ。

最初に購入したのはクボタの24馬力のトラクター、純国産でね。トラクターとはいいいながら、耕運機メーカーのクボタが初めてトラクターと称して売り出した代物、外国製の機械に較べると一世代遅れていた。おまけにボディが折れる事故など起こしてね。ほかに変わる機械がないので騙し騙し使っていたんだ。そこへお隣から「新車を購入したから、今まで使っていたゼトアの38馬力のトラクターを買わないか」と来た。60万円の価格は痛かったが、なけなしの金を集めて購入。これが大変な機械でね。機械を知らない前の持ち主がうまく行かないとて分解組み立てを繰り返したもんだから、故障山積。でも東欧一のメーカーの製品とあって動けばクボタに倍する能力を上げてくれたが、電装品が悪くて、パーツが入り難い、ハンドルが重くて、操縦し難い機械でね。それでも故障しながらでも30年近く動いたかな。最後は油食いの原動機としてボロボロになるまで使ったんだ。

この機械で悪戦苦闘しているとき、ある代理店のセールスが機械の好きな牧場主が2台を1台に組み替えた2コイチのトラクターがあるが買わないかと来た。運んできて20万円、一応動くものの故障修理は自分でやってくれ、部品供給はするが代理店の保障はないと。それは、私が牧場を始める頃に油木の種畜場で見えたスーパーデキスタ、当時の世界で中型トラクターとしては最高級の機械だったんだ。たしか新品は200万円は越していたはず、和牛の子牛が10万円余りだったから、計算してくれたまえ。その機械が油木の種畜場では複数走り回っていたな。

それが素人の組み換え品とは言え、一応は動く機械が20万円、貧乏人の見浦牧場が買い取ったのは無理がなかった。ところがセールスが帰って動かして問題がでた。燃料系統に漏れがあった。その程度のことは貧乏農場の常として修理はお手の物、かくして、この機械がフル回転をし始めたんだ。

ところが半年もしたらどうか、エンジンブロックから漏水が始まった。さてはと観察すると5センチばかりのひびがある。不凍液の投入を忘れて凍結させたらしい。修理が悪くて漏れが始まった。素人の組み換えを承知で購入した機械、文句を言うところはない。対策には知恵を絞ったね。

考えた結果、傷にブリッジを溶接し鉄セメントを塗布したんだ。これが大成功で、以来20年あまりモア専用機として活躍した、今年もまだ動いている。

何しろ、セルモーターはあるもののピニオンギヤは手動で押し込む、油圧はドラフトはなくシングルである、ブレーキはシュー、変速は3速、パワステは勿論ない、トラクターの祖先みたいなデキスタだが使いやすさは抜群、寿命の来はじめた現在もデスクモアとコンビで活躍している。

2015.7.22 見浦哲弥

春、草との闘い(2015/6/30)

小板の春はめまぐるしい。根雪が遅くまで消えないのが原因で、役場周りは春なのに車で20分の深入山は雪が居座る。そのため春は小板を駆け足で走り抜ける。ところが牧場屋にとって、その急変は大変な重圧なんだ。西日本には梅雨がある、同じ春の遅い北海道はそれがない、この違いがこの地帯の重圧だったんだ。遅い春とかかさず訪れる梅雨、その短い期間の間に、雪で破損した牧柵の修理、1年間の溜まった堆肥の散布、そして一齐に伸びる牧草の刈り取り、これらの作業が殺到するんだ。おまけに牧場の大敵のギシギシ君(雑草で大敵)も懸命に成長する、除草剤のスポット散布が待ったなしと来るから、牧場の人間は春を楽しむ余裕などない。桜が咲いたねと横目で睨むだけ、新緑が綺麗と都会の車が土日には殺到するが私達にとっては異次元の話である。

しかし、私の長い人生の中で一つだけ激変した事がある。それは牧草の処理である。先にも話したが、春先に急激に成長する牧草は、年間で収穫する収量の2/3にも達する。在来の野草は牧草のような急激な成長はしないので、田植が済んで畦や家の周囲の草刈、梅雨が終わって草刈山の干し草刈と何とか農作業にパターン化されていたが、開拓で造成した牧草地の春先は異次元の世界だった。何しろ、最盛期には一日で何センチも伸びる、野草と違って収量も桁違い、まだ少なかった牛達に懸命に刈り取っても膨大な草が余る、それは刈り取って貯蔵するしかないが、問題山積だったね。その笑い話のような経過を今日は聞いてほしい。

冬の牛達の食料のため干草を作るのは昔から行われていた。ただし、真夏の梅雨明けからお盆(この地帯は8月15日)までの強烈な日差しと晴天が続くことが条件、それでも最低3日の晴れが続くことが必要だった。しかし、その真夏も8月に入ると夕立がやってくる。折角の干草も1度の雨で草の養分の40パーセントが流れてしまう。ただし1回の雨なら、牛君は文句を言いながら食べてくれるが、3回となると見向きもしなくなる。干草づくりはお天気との戦いだったんだ。勿論、各地に測候所が設置されて、百葉箱とよばれる観測器がみられたし、戦後は高空気象の調査のためラジオゾンデが上げられていた。しかし、現在のように正確な予報でないので当たるも八卦、当たらぬも八卦と言う条件の中で、梅雨前の干草など不可能に近い。それでもスプリングラッシュがやってくる。何度も何度も挑戦して泣いたんだ。そして処理できないうちに梅雨に入る、1ヶ月近くの雨続きのうちに牧草は1メートル以上に伸びて花が咲き、種をつける、でもあと少しで梅雨が晴れる、そうしたら干草ができると神頼み、ところが伸びに伸びて頭が重い牧草は雨降りにそよ風が吹いただけで倒伏、広い牧草畑が絨毯を引いたようになり、腐り始める。おまけに根まで腐って裸地になるんだ。泣くに泣けないとはこのことだったね。

当時、中国山地で肉牛として和牛を飼うと農業の次の展開を考えた人間は少なからずいた。上は国の農水省から、県の畜産関係の部署から、末端の私達、農家に至るまで、研究会と称して講習から見学会まで、戸河内から高田郡へ見学に行った時は40人乗りのバスが満杯だった。それが50年経った現在、加計、筒賀、戸河内3日町村合併の安芸太田町で牛を買っているのは2件、しかも、後継者がいて長期展望で経営しているのは見浦牧場だけ、如何に困難な道だったか、もっとも、少々思考のちがう私達ほとんどない大仕事とは思ってはいなかった、ただ目の前にある問題を一つ一つ徹底的に追っただけ、それが農学の範囲を離れようが、離れま

いが、自分達が納得できる答えを追い続けただけなんだけど、外部の人には変わり種の農民と見られていたらしい。

それは牧草の対策でも同じことだった。もともとが理科系の頭だから（電検の3種と2種をもっている）一つ一つ納得しないと前へ進めない。例えば牧草の刈り取り、昔からの日本の鎌でも刈れない事はないが、田圃の畦ならまだしも広い牧草畑では能率の上がらないこと、まさに蟻螂（カマキリ）の斧の状態なんだ。そこでオーストリアの西洋鎌を購入したんだ。ところが私の時代の日本人は体格が小さい、日本の鎌よりは能率が高いが疲労が激しくて仕事にならない、鎌の構造も違い研ぎ方も違う、おまけに日本の在来草が混じると能力がガタ落ちになる、勉強にはなったが見浦の戦力にはならなかったね。

その次は背負いのエンジンカッターと中古の軽トラック、猛然と伸びるスプリングラッシュに立ち向かうには、恐竜に立ち向かうドンキホーテといった感じで能力不足で畑には牧草が腐っているのに牛は腹を減らすという笑い話、仲間達があきらめるか、農機具屋の口車で借金で外国製の大型機を導入する中、見浦牧場は身の丈のシステムを追い求めたんだ。

さて、その頃、農業の近代化の掛け声で国が補助金と融資をすると声がかかった。14ヘクタールの牧草畑に悲鳴を上げていた私は借金に嫌悪を感じながら、その話に乗ったんだ。そして当時ようやく本格的なトラクターの製造を始めた24馬力のクボタトラクターを購入することにしたんだ。ところが当時の制度は補助金は個人でなく、その地区の農業集団を通じて申し込まなければいけなかった。そのボスが牧場に必要でもない付属機までつけて注文してくれた。御蔭で1/2の補助が1/3の効果しかなくて、貧乏のどん底の見浦牧場は苦しみを増やしたんだ。それに懲りて翌年から少しずつ購入した作業機は全て自前、和興農園の後粗末を押し付けられていたし、今考えると良く凌いだもんだ。それで最初に購入したモア（トラクターにつける作業機、モアは草刈機）はレシプロ（バリカン方式）国産の4フィートだったね。時は外国製のロータリーモアが輸入され始めていてお隣の牧場は70何万円の最新型、見浦牧場のモアは14万円、個性の強い機械で中々満足に動いてくれない、勉強もしたが苦労の連続だった、レシプロモアは石ころに弱い。運動しているナイフに小石が入ると曲がるんだ、ひどいときはナイフが折れる、途端にその部分は草が切れない、作りたての我が牧場は拾い残した小石が多い（「無限大」の文章を読んでください）、限られた天候の中の分解修理に何度泣かされたことか、それに比べお隣の外国製の能率のよさは垂涎的、世は金の時代と悔し涙を流したものだ。もっとも24馬力のトラクターでは力不足で動かすことは不可能だったが。

そのモアの悪戦苦闘の最中に日本人の優れた特性を見た。当時、国産のモアでもナイフは北欧製だったが何年かして国産のモアの刃が供給されるようになった。硬くて切れ味が良くてそこそこの価格だったが、使ってみると大きな欠点があった。硬すぎて石をかむと折れるのである。北欧製の刃は曲がってもよくよくの事がないと折れない、圃場でハンマーで曲がりを直せば使える、そんなところにも先進地の知恵が秘められていた。

あれから日本型のコンバインが普及して稲作用では世界で高い技術を誇る、その刈り取り部のモアは手入れをしなくても能力が高い、日本の農業機械も大いに進歩したのだから、農業も進歩したかと問われると反省しきりになるのだが。

少しづつ牧草機械をそろえていったが、牧草の保存は干草が主流、降雨量の多い小坂での干草は問題が多かった。当時は他にはサイレージしかなかった。七塚原の牧場で働いたときから各種のサイロを見せてもらった。歴史的な木造のタワーサイロから石づくり、ブロックづくり、地下サイロなど、いずれも少なからぬ資金投入が必要な施設である。繰り返すが貧乏の私達、サ

イロ用のブロックを買い込んで3トンのミニタワーサイロを建設したんだ。確かにサイレージは出来たが材料の草の吹き込み、小さい取り出し口、手間のかかることおびただしい。さすがこれは主力にはならないと早めに諦めたんだ。それでもサイロ関係には色々な製品が出現した。合成樹脂と袋に詰め込むバックサイロ、結束した牧草を積み上げビニールフィルムで被覆するスタックサイロ、等々、牧草の保存方法は畜産関係者の難問の一つだったんだ。勿論、我が見浦牧場も試行錯誤、失った労力も資金もとんでもない大きさだった。

そこに登場したのが工場生産のタワーサイロ、鋼板で製作され新しい技術で塗装されたサイロは良質なサイレージの生産を可能にした。ところが原料を詰め込むのも取り出すにも専用の機械が必要なんだ。大型の200トンサイロは外国にも普及し始めていたから、それなりの専用機械が販売されていたが10トンや20トンの小型サイロは日本独自のもの、コスト的に和牛牧場が採用して採算を取るなど不可能、それでも島根の金城牧場で200トンサイロが林立しているのを見たときは、自分達の和牛牧場が成功するとは思えなかったね。ところが、何度目かの見学で最新サイロにも問題を抱えていることを知って中国山地独特の技術を追求することで、可能性はあるかも知れないと思ったんだ。

そんな折、愛読していた農業誌にロールベアラーの紹介記事が出た。水分が70パーセント以下になればフィルムでラッピングをすればサイレージになる。それから色々な本で確認をしたね。その結果は、これが唯一の解決策だと確信したんだ。

機械で巻き上げたロールの直径で機械の大きさを表す、輸入品は160センチと120センチ、国産化して小農の要望にも応える形で現在は60センチと90センチがあるが、私はドイツのアッセンブリの機械、タカキタの120センチを選んだんだ。しかし高価な機械でね、340万もする、ロールにフィルムを巻く機械は北欧製で100万円弱、貧乏人が出せる金額ではない、農林事務所に補助金の申請書を出して、残りは長期の低利融資を受けることで購入が出来たんだ。ところが問題があって、当時の見浦牧場には中古で買った38馬力のトラクターしかない。これでは平地では何とかなっても斜面ではベアラーを牽引することができないのではないかとクレームが入ってね。牽引できない斜面では空で上部まで上がって下りで作業をするの説明をするやら大変だった。

それや、これやで何とか機械は導入できた、作業も何とかこなした、ところが問題はそれからだった、運搬はどうするかである。トラックの荷台に歩み板を並べて押し上げる、当時、最初の24馬力のトラクターはフロントローダー（小さな土砂用のバケツが付いた荷揚げ装置）が付けてはいたが、どんなに頑張っても200キロ止まり、押し上げるしかない、さて折角の機械が宝の持ち腐れになると思案していたら、家内の晴さんが一言「戸河内のガソリンスタンドから貰ったトラックは使えんかい」。

考えてみればスタンドの配送用に使われた車、後部にドラム缶の積み下ろし用にリフトがある、荷台は小さいが2本同時に積み下ろしが出来る、ただしリフト重量は400キロ、でも力が足らなけりゃ人間が助けりゃいい、軽けりゃ1人、重けりゃ3人もちあげる、それなら使えるぞ。しかし、ドラム缶用の荷台は小さいので改造が必要、当時はガス溶接の設備しかなくて、素人で、500キロにも耐える改造は至難の業だったね。

出来上がった改造車は3個のロールを積んで大活躍、随分長いお世話になった。廃車になっていくくらいだからエンジンの不調には泣かされたが。

そんなこんなで、一応牧草の収穫貯蔵のシステムが完成したんだ。このシステムは予想外の成果をあげて、牧草はおろか野草まで草と名が付くものは何でも貯蔵できる、水分70パーセント以下という条件に配慮さえすれば腐敗することはない、水分が少なければ干草の野外貯蔵に

もなる、小板での草システムの完成であった。見浦牧場のような年間放牧の冬季飼育にはもって来いのシステムだった。ただベラーがカッティングシステムのない旧型なので、給与時に少々無駄が多いが、荒い野草も刈り込む見浦牧場では牛が不可食部分を選別して食べると思えば我慢が出来る。

こうして小さな貧乏牧場が牧草の一貫処理のシステムを作り上げた。あれから、もう20年あまりにもなる。ラッパーを駆動するのは廃車のトラクターの活用から現在はミニショベルの廃車が動力を供給している。何台か揃った中古のショベルを動員すれば、一人でも刈り取り、集草、ローリング、ラッピングと作業が流れる。問題は我が家のベラーは初期の製品で生産台数が少なく、部品の供給がおぼつかないことだが、にわか修理屋の親子が知恵をしばり、アイデアを出し合いながら動かしている。

付け加えるとベールローダーには構造的に、芯から固くかためる芯巻き式と、外側から巻きしめる外巻き式の2種類がある。水分大目の干草を芯巻き式で巻きしめて芯部から発熱、火事になったと報告があって、見浦牧場は外巻き式である。

こうして私達の羨望の的であったタワーサイロは目標ではなくなった。出入りの農機具屋のセリフ、「私らタワーサイロのある農家には用心してセールスに行くんだ。ベラーをすすめたら、タワーサイロを作る前に言え、と怒られる」と。

ともあれ、この地帯の牧畜のブラックホール、牧草の保存は体系が出来上がった。石油資源が枯渇してラップが手に入らない事態が生じない限りこの方法は生き残るだろうし、この方式の放牧型和牛飼育は定着するだろう。挑戦を始めてから50余年、成功はしなかったが道筋だけは作り上げた、これが私の誇りなのである。

世人からみれば取るに足りない成功談、小さな小さな積み上げだが、そんな集積が日本社会だと思っている。

2015.6.30 見浦哲弥

廃屋(2015/8/8)

日本が人口減少に変じて、各所に起きた現象に廃屋がある。もっとも、わが小坂で廃屋が目立ち始めたのは、ここ20年余りにもなるが、無住はそれ以前からだから、随分昔からの現象である。しかし、無住と廃屋は大きく違う。とくに解体されることなく朽ちて行く廃屋の住民に与える影響は大きい。まるで年老いて衰え行く我が身を見せられるようで、気持ちが沈んでゆく。

見浦牧場の前にある一軒のお家も廃屋に向けて進行中である。私が帰郷した70年前すでに新築の面影はなかったから、築100年余りのお家である。典型的な茅葺で、私が10代の頃、葺き替えの出役に行った覚えがある。確か40年毎の周期だから、その点からも100年以上の古家であることは間違いない。

旧国道、広島・益田線の道路沿いで小さなお店だった。駄菓子や少々酒と酒のつまみが並んでいた。それだけでは食べてゆけないので、田圃も2・3反あったのでは。親父さんは陸軍の伍長さん、我が小坂では親父の陸軍中尉を除くと最高位、何事かあると軍服を着て肩章をつけて現れる小坂の名士だった。何しろ小坂最古の先住民、某家の分家と来るから、小坂の住民は煙たくても頭があがらない。

彼には娘さんと息子さんがいた。でも娘さんは原爆で行方不明になり、息子さんはシベリヤ抑留になった。何とか生きて帰る事は出来たが、帰国後の生活はうまく行かず、離婚して一家離散、幸いお爺さんはその前に死んだ、が、家は人手に渡った。

新しい住人は、家に手を入れて大事にした。お店だったところも部屋に改造、住宅としては大きな家となった。時代の流れで屋根は萱屋根に鉄板で蓋う流行の鉄板葺きになった。新住民の改造で家の中は見違えるようになった。立派な仏壇も座り、屋根も5年おきの塗装で、貧乏、貧乏と口癖ながら手入れの行き届いたお家だったが、一人娘さんが町内に嫁いで跡継ぎがいなくなった。それでもお婆さんは家を守った。屋根も塗装をかかさなかった。除雪機も自分で使って除雪もした。しかし、冬のある日、見取る人なく旅立って無住になった。

家は生きている。無住と言うことは、家にとっても終わったということだ。まだ命が続いている間に次の住人が現れれば再生もするが、無住が数年もすると家も死んでゆく。かの家も無住になって、はや10年、屋根が崩れ始めた。あの鉄板の破れの下には仏壇があると人は言う、が、固く閉ざされた屋内のことは誰も知る由もない。辛うじて窓の破れから見える室内は山積した埃の下に昔の栄光が見える。

小坂には廃屋がまだ数件ある。大規模林道の道下にも大きな藁屋根の農家が倒壊している。お爺さんが腕のいい山仕事の職人で、自分の住宅を新築するに当たって材木を吟味して建てたんだ。それがお婆さんの自慢で板の間や縁側に足跡が付いたら大変な騒ぎで、子どもの頃はそれで叱られた。それでも、お婆さんがこだわるだけあって、つやが出るまで磨き上げた囲炉裏端の板の間は、見事だったね。

しかし跡継ぎの娘さんが大阪に出て、老人が死に絶えて無住になると手入れをする人もなく荒れ始めたんだ。

それでも婆様が自慢していた家だけあって、無住になっても往時の姿が崩れなかった。さすが

だねと話合ったものだ。ある年大雪が降って滑り落ちた雪が屋根まで届いた。それが例年になく高いところまで、そして暖かい日に少し融けて凍りついた。その重量で鉄板がずり落ち、棟に大穴が開いたんだ。それでも作りのいい建物は中々倒れない。少しずつ腐ってゆくだけ。倒壊するまで10何年もかかったんだ。そして婆様が自慢だった美邸は残骸と化して醜態をさらしている。

廃屋を見る度に思う。田舎には自他共に認める名家がある。しかし、跡継ぎがいない、いても人生教育がされていない、などで人為的にも滅んでゆく。何代も続いたと言う誇りも、それを裏づけする人間が繋がないと幻に終わってしまう。私の短い人生の中でも数多く見せてもらったんだ。

廃屋を見る度に生き様の廃屋にならないようにと自戒している。

2015.8.8 見浦哲弥

他人に返せ(2012/5/8)

ご存じかも知れませんが、私の母方は越前藩の中級の侍で、祖父も祖母もその環境の中で育ちました。従ってその影響は孫の私にも及んで、武士は食わねど高楊枝などと、思い違いもしましてね。私の子供時代を知る人は、老人になった現在との違いに驚く事でしょうね。

あれは二十歳過ぎ、世の中の仕組みを教えてもらおうと、加計の前田睦雄先生に弟子入りしました。先生は、加計家、佐々木家、前田家、加計3名家の一員、政治的には左でね、日本社会党の地方活動家、何が気に入られたか自分の子供の様に可愛がって頂いた。他人に頼るなど侍の教育を受けた私は心苦しくて、ある時先生に申し上げた。「先生、もう結構です、こんなに親身にしていただいても、ご恩返しはできない」と。それを聞いた先生が怒ったこと、烈火の如くとの言葉がありますが、正にその言葉どおり、怖かったのを覚えています。

やがて怒りの収まった先生が、その理由を説明してくれました。「他人の善意に、返せないからと断る、それでは世の中は成り立たない、返せない善意は、必要とする他人に返せば良いんだ」と、商売と善意との違いが判らなかった私が新しい目を持った瞬間でした。

聖書に「自分がして欲しいと、思うことを他人にして上げなさい。自分がして欲しくない事は人にしてはいけない。」との意味の教えがあります。幼い頃、日曜学校に通って教えられたことです。(幼年期は福井市で育ちました) それを思い出したのです。

勿論、家族を抱えて生活していますから、私達の善意などささやかな物ですが、余っていて他の人が必要な物は差し上げてはと考えて生きてきました。

その一つが堆肥です。百姓には堆肥は大切な資源でした。昔は深入山の草刈り場に競争で材料の山草を刈りに行ったものです。

ところが牧場を始めて牛が200頭近くにもなると、年間で1500トン前後も出ます。材料の一部がオガクズや木屑に変わりましたが、よく腐らせると見事な堆肥になるのです。

私も人並みに欲張りですから、懸命に牧場に撒くのですが、天候や仕事の都合で幾ばくかは残るのです。それを皆さんに差し上げようと決めたのです。勿論、金、金の世の中ですから堆肥も有価物、金に換えて一円でも経営にプラスにしろと指導もありました。でもそれではお金に縁のない私達は受けた恩を返すことは出来ない、せめて堆肥ぐらいは差し上げようということになりました。

ところが私達は金の金持ち嫌い、金を出すから積んでくれ、もってこい、儲かるんだから文句はあるまい、そんな人の気持ちも金で買えるという考え方が嫌いなのです。勿論、市場経済というシステムに首まで浸かっているのですから、そればかりでは飢え死に間違いなしですが、せめて一つ位は損徳抜きがないと人間ではなくなる、そう考えているのです。

話し合っただけ私達の気持ちを理解した人は、気兼ねなく堆肥を積みに来る、こんな野菜が出来た、お米が変わったと見本を持って来る、世間話で時間を忘れる時もある、山奥の小さな集落に住む私達が広い社会との接点を持つことが出来る、そんな效能をもたらしてくれたのです。

今年も堆肥の季節になりました。常連になった人達が見浦牧場を訪れてくれるのを心待ちにしています。お元気な近況を聞かせて貰えるのを楽しみに、お待ちしております。

2012.5.8 見浦哲弥

薪用材の伐採(2015/12/30)

2015.11.5 秋口に切り倒した薪用の雑木の小切りの仕事をする。草地の仕事が一段落と思ったら冬将軍が間近に迫り、東北や北海道は積雪の便り。毎日は飛ぶように過ぎ去り、老体の懸命は季節に追いつかない。

牧場を始めて50年余り、ふと気がつくとも牧草地の周辺の木々が異常に生育していた。牧草地が堆肥の投入で肥沃になるにつれて、肥料の横取りで猛然と生育を始めた、そんな感じである。とはいえ、肥料だけでなく日光もよこせと、牧草の上に覆いかぶさるように横伸びをする。そのつもりで観察すると、3メートルから5メートルばかりも侵入されている。これはたまらんと、薪は牧草地の周囲の木ということに決めたのだが、予想外の生育で仕事のはかどらないこと。もっとも私の老齢で能率が落ちているから余計に、である。

牧草地の周りは初期の牧柵代わりに立木を有刺線の杭代りに使用したこともあって、思いがけないところに針金あり釘ありで、刃物にとって大敵がいたるところにいるという状態なのだから、仕事のはかどらないのもやむを得ないか。

もう一つ問題があって、足の衰えが仕事に影響する。特に斜面での伐採は細心の注意がいる。倒れ始めて避難するのに昔のように敏速に退避が出来ないためだ。伐採は昔とった杵柄で何とかこなせるが、倒れ始めるときに避難の距離を稼げない。特に斜面の伐採は根元がどのくらい跳ねるかの予測が難しい。だから余裕をもって逃げなくてはいけないのだが、それが出来なくなったのだ。せいぜい2～3メートルも離れば上等といった現状は、老人には勧められない作業である。

だからお前は若くはないのだと、何度も自分に言い聞かせながらチェーンソーを操るんだ。幸い今年は何とか仕事をこなせている。

思えばチェーンソーという高能率の機械が私達にも買える値段で供給されるようになって、山仕事の能率も一変した。何しろ鋸で木を切る仕事は手作業の最たるもの、薪きりの伐採も大小2種か3種の鋸を使う。切る樹種によって歯の研ぎ方を変えて等々、腕の違いで能力は何倍、いや何十倍も違うのだから、素人から見ると専門家は神様に見えたもんだ。ところが70年前、始めてチェーンソーなる機械を見た。国産で現在の機械から見ると巨大な代物だったが、間もなくマッカラーというアメリカ製の小型機が国内市場を圧倒した。その能力の高さ、使用の簡単さ、山仕事の人間にとって垂涎の機械だった。

しかし、その高価だったこと。それに原動機が2サイクルで性能が悪く、なかなか起動しない。しかしエンジンが回り始めると、その高性能は従来の手鋸など視野に入れられないほど。国産化して改良されて、私達も何台ものチェーンソーの遍歴をした。そう、大金を投入したんだ。

現在は当然のように大小2台のチェーンソーと腰鋸と腰鉋を持参で山に入る。簡単に伐採できるようになった反面、危険は倍増している。長い人生の中で何人かの知人を山事故で失った。近代化は細心の注意と知識が必要だった。

手鋸の時代は研ぎの技術の差がその人の能力とされた。チェーンソーの現在でもプロとアマチュアの差は歴然として存在する。私は老化の進行で技術が落ちたとくるから切れ味もいまいに

なって歯がゆいこと。俺も昔はプロの炭焼だったのに悔やむのだ。

チェーンソーの製造会社は世界に無数にある、日本でも十指に近い。改良の競争のおかげで使いやすさと値段の低下で昔のような財産でなく普通の道具になった。ところが戦後登場したオレゴン社のチェーンソーのナイフは独創的な発想と絶え間ない改良の積み上げで他社の追従をゆるさない。チェーンソーのナイフはどの会社もオレゴンで共通なんだ。

気がついてみたら、牧場を始めて50年以上も経った。牧草地の周りの木が異常に生長していた。伐採して年輪を数えると、ここ20年余りの成長が明らかに異常と思えるほどの年輪の幅を広げている。最近では牧草地の上に枝を伸ばすだけでなく、幹まで曲がって日光を奪おうとしている。山仕事のプロいわく、根は日光と肥料を追っかけて、幹の高さの長さまで伸ばすのだと。

そんなわけで薪用に切るくらいでは樹木の生長には太刀打ち出来そうもない。自然というものは人知の及ばない力を持っている。自然を教師として生きてきた私がいまだに感銘を受け続けている。自然万歳。

2015.12.30 見浦 哲弥

道(2014/8/9)

山深い中国山地にも遅い春がやってくる。その季節、誰も気がつかないままに、山肌の林の中に細い白線が現れるのを、貴方は知っていますか？住人は春の風物詩の一つと見過ごしているこの現象、それを何故か気になったのは私が町で育った異邦人？だったせいです。

この地帯はタタラ鉄を巡って山陰と山陽が争ったところ、その戦いを阻んだのは急峻な山肌と積雪だった。その山腹を乗り越えるために何本も刻みこまれた道、その残雪跡が雪解けに白線をつくる。ひそかに、ひそかに切り開いた何本もの道、敵対する相手の目をかすめて作り上げたその道が、雪解けに一時姿を現す。そのつもりで見ると、そこここの斜面に遠い戦国の戦いの痕が見える。長い年月の風雪に、ところどころは消え去った白線の彼方に、過ぎ去った時代の中国山地が見えるんだ。

目を転じて集落の中の小道を見る。幅1メートルばかりの古道が田圃や屋敷で消えては現れ、現れては消える。そして谷川にそって峠を目指し、急斜面を下り、雑木林の中に姿を消す。戦いに敗れた落武者たちがたどった道、人足が牛馬の背にタタラ鉄を積んでひたすら海を目指して歩いた道だ。次の宿場の松原には茶店があった。飯を食って牛馬に餌を食わせて一休み、それを楽しみにひたすらに歩く。その遠い昔の小道は今は知る人もなく、心をやる人もいない。しかし、古道にたたずんで目を閉じれば、遠い遠い昔の息吹を感じるはず。貴方は感じないか、草いきれに混じってほのかに漂う歴史の香りを。

集落を縦貫する1車線の道路がある。100年余りに建設された近代日本の夜明けを告げた旧国道だ。広島から益田まで人力で切り開いた191号線、この道は戦いに明け暮れた近代日本の象徴、舗装のない砂利道だった。その道をフォードの小さなバスが住民を満載して走った。車の後ろに荷物籠をつけて、それでも足りずに屋根にも荷物を積むガードがあった。お客が満員の時は荷物のかわりに若者が屋根の上でガードにしがみつく。非力で荷物満載の車は、峠にかかると思いガソリンの煙を吐きながら、ひたすらにローギヤで走る。体力のない婦人は車酔いに耐えながら嘔吐をこらえる。そんな難行苦行の田舎道、それが中国山地、それが小板、それが幼い日のわたしの記憶。

勇ましい軍人さんの号令で75年前、第二次世界大戦が始まった。アメリカと戦った太平洋戦争というやつだ。あえぎながらも広島と結んでいた小さなバスは燃料不足で廃業、山間の住民はただ歩くのみ、役場も病院も買い物も、ひたすらに歩く、そして背負う。靴もズックも長靴も、お金持ち以外には遠い夢、藁で作ったワラジとゾウリが履物の全て、一度きりの時間が藁細工と歩くことで失われてゆく。それが当たり前だった、疑問は持たなかった。だが戦争が始まるとトラックが通り始めた。小さなトラックが木炭を積んでね、加計にあった小さな製鉄所が増産でね、戦争でコストの高い倒産寸前の小さな製鉄所も仕事が増えたんだ。ところが道路は旧態依然、穴ぼこだらけの砂利道を砂埃を巻き上げながらトラックは走り、悪童達の格好の遊び相手となった。登り坂でスピードが落ちたところで車の後ろにぶらさがり、何百メートルかいったところでスピードが出ないうちに飛び降りる。今考えると危ないゲームだったね。手を離す瞬間を間違えてスピードが出ていて着地に失敗、スリ傷を作ったこともあった。

閑話休題、戦争も末期になって国道とは名ばかりの小板の道路に緊張が走ったんだ。トラックの交通量が飛躍的に伸びた、その一つは前にも書いた戦闘機の防弾板、もう一つはイギリスの傑作機モスキートの登場だった。それが影響をもたらした。防弾板の話は別の文章に書いたので重複は避けよう。今日はモスキートの話にしよう。

この飛行機は正式にはデ・ハビランド・モスキートと言う双発の戦闘機、足が速くて、旋回性能が良く、機体が木製で軽いと来る。おまけに大出力のエンジンを二つ積んで高速が出るという代物、多目的機である。戦争の末期に日本軍がミャンマー（当時はビルマといった）に侵攻した頃から活躍を始めたという。

忠勇無双の日本軍はこの飛行機に散々な目に合わされたとか。わが国は物まね日本と陰口をたたかれたお国柄、木材は沢山ある、日本でも木製の飛行機を作れと軍人さんが号令をかけたからさあ大変。この地帯で唯一残っていた原生林、中の甲谷からブナの大木を切り出してベニヤ板にして飛行機を作るという大計画、泥縄もいいところだが頭に血が上った軍人さんは大真面目、途端に小板の道路は賑やかになったね。

穴ぼこだらけの砂利道、悲鳴を上げる木炭車、手もつこと鍬とショベルの修路工夫さんがつききりで道直し、でもひと雨来ると穴ぼこ道が再現する、まさに賽の河原だった、あの風景は昨日のことだ。

敗戦の混乱が落ち着き始めて、そう1955年頃かな、日本の産業復興の兆しが見えると、隣部落の樽床にダム建設が本格化し始めた。長い前哨戦があったと聞くから、ダム建設の話は終戦後間もなくおきた。

大田川の最後の発電ダムの建設とて、落差も大きく出力も巨大、住民は樽床ダムと呼ぶが、地図上では聖湖と記されている。この地帯でも有数の大きな樽床部落を殆ど飲み込む大工事、1車線の砂利道での資材搬入は無理と15キロ下流の三段峡の入り口からケーブル線を建設、峰を3つ越して建設現場へ直接資材の搬入を始めた。ところが工事用のケーブル線での人間の輸送は危険で資材以外は道路を利用するしか方法がなかった。

そこで冬季でも交通を確保するための除雪が始まった。ブルドーザーが轟音を響かせて積雪を排除して道を確保する。積雪で諦めていた冬季の交通が約束されて病人を轎で搬送する苦労も昔話になった。私もその恩恵で命拾いをした人間の1人。

ところが除雪機械が工事用のブルドーザー、従って雪だけでなく路面もけずる。春ともなれば沿線の田圃は雪と共に放りこまれた砂利が小山になって続く、これには苦情が殺到した。そこでようやく路面舗装が始まったんだ。

戦争をしないと国内は様々な点で改良され進歩する。都市近郊でしか見られなかった舗装道路、アスファルト舗装で夢のようじゃなと感激したのも束の間、舗装がされても道幅や急坂は昔のまま、自動車が増えて1車線での離合（すれちがい）が苦痛になる、対向車がくれば道幅が広いところまで後退しなければいけない、どちらがバックするかで争いになる、なかには居居る奴がいて小心者が割りを食うこともあって、問題もおきた。

その時期、かの有名な田中角栄氏が登場、政治力を発揮して道路が良くなり始める。なにしろガソリン税なるものを新設、国庫に集まった新税は全て道路改良・新設に向けるというのだから画期的。しかも、その税率たるや、本体のガソリンより高い。その税金は建設省がにぎって全部が道路に使う目的税。時あたかも日本の経済が上昇期に入ってマイカーブームがおき、猫も杓子も免許を取って自動車を買う、それが生きる目的。従ってガソリンが売れる、そして道

路にお金が回る、とんでもない循環が始まったんだ。勿論、抜け目のない政治家諸君には土建屋さんから政治献金が潤沢に入ってくる、公共事業が資金源とは怪しからんと世論はあっても、僻地の道路はあれよあれよと言う間に2車線になり、高速道路に接続し、長大なトンネルが掘削されて、七曲の山道は山の下のトンネルに変わり、歩いて二日がかかりだった広島が、マイカー時代の初期で5時間、高速道路を利用すると2時間はいかない。住民は先日までの不便など何処吹く風、当然のように自家用車をぶっとばす。

一家に1台のマイカーは常識で、見浦牧場では乗用車、トラックが計5台、運転手が5人、役場も学校も病院も20キロの彼方、買い物一つでも3、40キロ走らなければ用がたせない。自動車は生命線になって、一人暮らしの老人が車がなかったら生きてゆけない、とんでもない世の中になってしまったんだ。

ところが近代化された道路は昔は夢だった大きな橋やトンネルを建設することで成り立っている。私達が日常的に利用する橋にも何億円もする高価な橋が珍しくない。ところが人工物なのだから耐用年数なるものが存在する。老朽化した時は寒気がするほどの巨額の費用がいるはずだ。人口が減り始め、経済も停滞しがちの日本にそんな資金が何処にあるのかと、いささか不安である。

取越し苦労の老人の眩きを踏み潰すように、今日も家の横の大規模林道を岡山の港から益田の巨大牧場に20トン積みのバルク車（バラ積みの飼料の運搬車）が吹っ飛んでゆく、時代は移り変わる、か？

2014.8.9 見浦 哲弥

紅葉の頃(2015/10/8)

今年も山々が色付きはじめました。観光資源の少ないこのあたりでも、晴れ渡った青空と見渡す限りの紅葉の景色は、都会人には格好の観光材料なのです。

地元で暮らしている住民は残り少ない好天をいかに有効に使うかと懸命なのですが、三々五々風景を楽しむ都会人を「ええことよの」と羨望の眼で見送るのです。

でも誰もお互いに話しかけない。住民も観光の都会人も、ただ通りすぎるだけ。せいぜい目礼をするのが精一杯か。何故なのでしょうね、同じ言葉を話し、同じ教育を受け、同じテレビを見ているのにね。

幼年期を都会で過ごした私には、その垣根が見えないのです。ちょっとしたきっかけがあれば、ちょっとした会話をすることになっています。それが大変喜ばれる。なぜ皆さん、それに気がつかないのか、私は不思議に思うのです。

確かにこの地方には方言がありました。広島弁も独特ですが、その上にもう一つアクセントの違いがありました。当時は小学校から標準語で話せと厳しく指導されていたので、心の中に地元の言葉に劣等感を持つようになったのかも知れません。

方言は地方、地方に存在します。私が生まれた福井市と育った三国町ではアクセントに違いがありました。転校した小3のときは言葉の意味が理解できなくて困ったものです。でも同じ日本語なんだから、すぐなれて話せるようになる。私が方言に抵抗感がないのは、そのせいだと思っているのです。

現在の日本人は誰でも標準語を話します。でも小さい時から地域の方言に親しんでいた地元の老人は都会人と見ると標準語でと身構える。それで話の範囲が狭まるのです。それを聞かされるほうは興味が薄れるのは当然でしょう。

道端で作業をしていると話しかけてくる都会人がいます。田舎の風情を楽しんで歩く人は見ているだけで心が和みます。そして一言、声をかけると大抵は答えが帰ってくるのです。そして話が続けてゆく。小さな山間の高原にも歴史があります。取るに足らないような話でも、それが都会人の知識と関連してくると、俄然興味が湧いてくるのです。例えば聖湖の湖底に沈んだ樽床部落は平家の落人の末裔とか、同じ三段峡の支流の横川は樽床の人とアクセントが違います、さて?とか、それから小板は尼子氏と吉川氏の古戦場で地域の中の地名の戦いの後が偲ばれるとか、眼前の深入山は死火山で小板川の川底を見るとその片鱗が見えとか。ただ何となく散策するのと、それなりの知識を持って歩くのとは風景も変わって見えるはずです。それを提供するの小板に住む住民の小さな責務と思うのですが。

紅葉の頃は柴栗が落ちる頃、市販の大栗とは違った味の濃い柴栗の季節は、山からのささやかなプレゼントです。小板の山がまだ柴栗で覆われていた頃、栗拾いは重要な秋の仕事だった。何しろ一日の20リットルから50リットルも拾う、水につけて虫を殺して乾燥して仲買人に売る、立派な収入源だったんだ。

それが或る年、クリタマバチがやってきた。あれはまだ新緑の頃だったね。八幡の方から栗の木が枯れ始めたんだ。それがクリタマバチ、新梢の芽の根元に卵を産み付ける、孵化した幼虫

は樹液を吸収しながら成長する、だから樹液の行かない新梢は枯れてしまうんだ。そして幼虫が成長するにつれて、その部分が玉になる。それでクリタマバチと呼ばれるんだ。新梢が伸びないから葉が出来ない、辛うじて葉になっても小さな葉で幹の栄養を補えない、そして枯れるというパターンだった。見る見る柴栗が枯れて山が茶色になった。これで柴栗は全滅かと思ったんだ。

ところで、その当時は「進化」という現象は専門書の中だけと思っていたが、現実はその存在を見せてくれた。栗の木の中に枯れない木が出てきたんだ。クリタマバチに寄生されても虫類（幼虫が住み着いた幼芽）が大きくなる。そして幼虫が死んでしまう。そのほかクリタマバチが寄生しない木もあったんだ。特に栽培する大栗は強かったね。

そんなわけで生き残った柴栗のおかげで今年は例年になく豊作。勿論、全盛期には比べようがないが、道端のそこそこに栗が落ちている。都会人が大喜びする自然がそこにある。10月10日は恒例のウォーキング、色づきはじめた風景と木の実が都会人を満足させるだろう。

2015.10.8 見浦 哲弥

掃除刈り(2015/10/26)

10月も終わりに近くなると元気な牧草も伸びなくなって冬支度の季節である。冬将軍の到来の前に牧草地は掃除刈りなる作業がある。牛が食い残したまづい草を刈り払って来春の牧草の生育の助けをする作業だ。

放牧をしている草地は牛が美味しい草だけを食べるので、イグサのような雑草が繁茂する。だから最低年1回の掃除刈りは欠かせない作業なのだ。

ところが見浦牧場は山の中、総面積25ヘクタール近い草地も山の中あり、水田の転作もあり、小は5アールの小区画から4ヘクタールの斜面まで条件は千差万別、日本の山岳農業の欠点をすべてが揃っている。おまけに草地には毎年牛糞の堆肥を散布する。その肥料を狙って周辺の木々の生長の早いこと。伐採して調べると草地が肥沃になるにつれて年輪の間隔も2倍3倍と増加している。おまけに伸びるためには日光が必要とばかり、草地に張り出してくる。何と30センチを越す大木まで幹を曲げて伸びるのだから、凶暴である。

牧草の成長期は収穫に追われて気付かなかった周囲の変遷も、掃除刈りの時は思い知らされるのだ。もともとこの地帯は雨量が多い上に西日本でも比較的温暖と来る。臥竜山には一部原生林が現存するほど樹木の生育は旺盛なところだ。そこへ牧草地を開いて牛の糞尿を投入したから、樹木の生育が倍増してしまった。ここ20年の年輪を見ると、それ以前の倍以上の速さで成長している。専門家に聞くと、樹高の高さだけ根が伸びて、草地に散布した肥料を吸収するのだと。伐採して樹木の草地への侵入阻止を図るのだが自然の力には及ばない。

10月26日、草地の掃除刈りがほぼ終了した。後は3番草が1ヘクタール弱、気候も冬に向かってまっしぐらである。

2015.10.26 見浦 哲弥

オガコー代記 敷き料おがくず変遷記(2013/9/10)

昔は、といっても私の子供の頃、家畜の寝床は刈草と藁（ワラ）を敷くと決まっていました。化学肥料などなかなか買えない農村が貧乏だった時代、肥料の主役は牛馬に踏ませて作った草や藁の堆肥（ダヤゴエ）が主役でした。

ですから、田植えが済んだら暇があると草刈、田圃の畦をはじめとして、家の周りの草地（勿論野草です）、草刈山の柴草（野草だけでなく、笹や萩や落葉樹の芽生えまで含めて）、ひたすらに草を刈る、草刈鎌もその土地、土地の鍛冶屋さんで使い勝手と切れ味が違う、おまけに研ぎ方で切れ方も違う、熟練が物をいう世界でした。

稲刈りが済むと敷き料には豊富な藁を投入する、ところが長いまま入れると、踏み固められてダヤゴエを掘り起こして櫓（ソリ）に積むのが大変な重労働になる（重量物は雪を利用して櫓で運ぶ、小道と細い畦道では重量物を多量に運ぶのは困難でしたから）、そこで掘り起こす専用のコエホリなる頑丈な三つ爪の鍬（スキ）が登場する、でも掘起こすのは重労働でしたね。

冬になって2月になると積雪も落ち着き、田圃も川も一面の銀世界、櫓で何処にでもダヤゴエを運べる、なにしろ2メートルをこす積雪でしたからね、雪解けまでに運んでしまわないと川やら畦が現れる、毎日が戦争でした。もちろん吹雪の日はお休みでしたが、今度は屋根の雪下ろしが登場する。何日も降り続くと雪の重さで家が鳴りまして、こちらも戦争になる。さて田圃の真ん中に積み上げられたダヤゴエの山の大きさが、その農家の働き度の指針、隣よりも家ののが大きいと鼻をたかくする、素人と子供が百姓の大畠では勝ち目がない、「道路から見ると大きく見えるように幅広に積み」と親父に言われたときは、本当に悔しかったですね。

その時代から 20 年近くたって本格的に牛を飼うということになって最初に問題になったのは敷き料でした。

でも、当時はまだ稲作が盛んで手刈でハゼ干し（細い木材や竹で作った何段もの干し場）が主役で稲藁は簡単に手に入りました。もっとも秋の晴天にどこの家でも一斉に脱穀（藁と粃に分離する）をする。藁は野天に放置されていてね。雨に濡らさないで集めるのは一苦労でしたが、集められた稲藁は飼料に敷き藁にと大活躍でした。が牛の数が10頭を越すと十分な敷き料とまでは行かず、牛舎は糞尿で泥寧（ぬかるみ）と化し、新しい対策が必要でした。

当時も乳牛は多頭飼育が当たり前でした。ところが搾乳牛は敷料を敷かない、コンクリート床か木床、後に厚いゴムマットになりましたが、糞尿分離で繋ぎ飼い、尿は流れて溝に入り尿溜めに、糞はバーンクリーナーなる機械で自動的に集められる、見学に行くたびに羨望のまなざしで眺めたものです。もっと子牛を生む時は分娩房に入って、ここには敷きわらが敷いてありましたが、見浦牧場の参考にはならない、中身のない頭をしぼりましたな。

ある日、ふと見た農業雑誌の片隅に読者の投稿が眼に止まりました。畜舎に厚く川砂をしいている、尿だけ浸透して糞尿が分離できるとの文でした。糞だけなら自然乾燥で処理が楽になったと、小さな農家の思い付きだったのですが、妙に気になりました。

ところが、小坂では砂は貴重品、小川の小板川では川泥はあってもモルタルに使うほどの砂も手に入りません。40キロも50キロも下流から運んでもらう高価な品物、とても敷料に利用するのは無理でしたが、あるとき学校の砂場が頭に浮かんで来ました。走り幅跳びや三段跳びで着地する砂場です。そういえば小坂に来て驚いた事の一つだったな、砂のかわりにオガクズ

が厚く敷いてあった。

そうだ、砂の代わりにオガクズを敷こう。早速、戸河内の製材所にかかけつけました。幾らでもあげる、実は始末に困っていたんだ、あちこちの畑の隅に置かせてもらったり、山に捨てたり。

実は私も20代のはじめ丸鋸の簡易製材をしていたことがあるのです。出てくるオガクズは厄介者、大水が出たときに溝に流し込んで川へ放流、現在なら警察沙汰、なにしろダイナマイトを淵に放り込んで魚をとるなんて、無法がまかり通った敗戦の頃でしたから。

それでも、移動製材とも呼ばれた簡易製材は周囲に立木（リュウボク）がなくなると、後にオガクズとコワと呼ばれる木切れの山を残して移動してゆく。オガクズの処理が問題になったことはありませんでした。

ところが、帯鋸と動力の送材台車が導入されて、中小の製材工場が設立され、精度と能率の劣る簡易製材は姿を消したのです。しかし、定置式となった製材所から排出されるオガクズの処理が問題になり始めていたのを私は気がつきませんでした。畜舎の敷料としてのオガクズの利用は、私たちにとっても製材工場にとっても利害が一致したのです。

利益に結びつくとなると、新しい技術の波及は電光の速さでひろがります。畜産屋が製材所に殺到して、取りにいかなくてもタンクが空ということが多くなりました。私たちも対抗策として木工所も集収先として次々と開発して行きました。機械カンナのカスや丸棒削りのカス等、オガクズとは劣る木屑も利用するようになりました。工場の外に山積みするよりも見浦を利用する方が得と工場側も積極的になってくれました。

が、オガクズが容易に手に入ることを知った畜産家の中には、冬は畜舎の暖房に使えんと考えたのです。敷料だけでも冬場のオガクズは使用量が増えます。その上、暖房に使用されて冬場のオガクズが取り合いになりました。ところが夏場は不要です。そのご都合主義に製材工場が悲鳴を上げました。

「見浦さん、夏場のオガクズを引き取ってもらえんか」

「取るけど、要る時は貰えんで必要が少ない時だけ処理しろというのは、少し無理と違うか」

「無料というので、勝手に積んで行くんで、どうもならん」

「それなら前金で年間幾らで全量を買取る、それなら他人のオガクズを勝手に取ることは出来ないはず」

「うまい考えだ、それで行こう」

「では最初は年間前払い5万円で全量買取ることに」

「よろしく頼む」。

他の工場では木屑のタンクが満杯になったら1時間以内に必ず引き取りに行く約束したりして、実行しました。約束ですから不要のオガクズは牧場の片隅につみあげたりして、5年も経つと見浦はあてにできると評価が確定しました。なにしろ、タンクが満杯でと連絡しても「今日は忙しい」と返事をする畜産家もいたそうで、ますます信用が高まって20年くらいは敷料の心配はしなくて済んだのですが。

ところが日本経済が発展するに連れてオガクズ的环境にも変化が起きました。まず、簡易製材が姿を消し定置型の製材工場が旧町村ごとに現れました。その工場に山積みされていた国産の

松や杉の丸太が消え、直径が1メートルもある外国の丸太が何本も置かれるようになりました。そして身近なホームセンターに製材された輸入木材の製品が並ぶようになりました。森林組合の年間報告書に国産材の使用が20パーセントに落ち、外国からの木材製品に置き換わったと記されるようになりました。製材所の丸太置き場に山積みされていた外材も見られなくなり、次々と製材工場の廃止が起き、とうとう大田川流域の区域では1箇所になってしまいました。しかもフル操業をするほど原料が集まらない、従ってオガクズも手に入り難くなりました。もっとも近隣の牧場も廃業が相次いで、見浦牧場が生き残っているのが話題になる現状でしたから消費も減ったのですが。

しかし、需要があれば供給が必要、そこに商売が発生する。廿日市に木材港と呼ばれる輸入木材の拠点があります。したがって大規模な製材工場もある。思い余って電話をしてみたのです。担当者いわく「発生単位が大きくて、小さな個人牧場は対象にしていない。しかし、貴方が望めば搬送業者は紹介できる」と。勿論、お願いしました。

そして、連絡してきたのが、4トントラック1台で営業している O さん、お会いしてみると、気さくな人のよさそうな運転手さん、専用の車で23リ्यूベが2万5千円、ために1台御願いますと最高級のオガクズが納入されました。そこで毎月1台で契約、現金決済というのは辛かったがオガクズの心配はなくなりました。従前の引き取り先も減少したとは言えオガクズは発生していましたから。

ところが安定していたのは2年くらいだったかな、日本経済が混迷してデフレになっちゃった。おまけに政治が右往左往、適切な対応が出来ないものだから、経済も縮小するばかり、中型や大型まで製材所が廃業してゆく、したがって、ここでもオガクズの取り扱い、価格がみるみるうちに高騰、4万円になって、それでも計画どうり納入してくれれば、我慢するのだが、納入が2ヶ月おきになり、3ヶ月ともなると対策を立てざるを得ない、本気になりましたね。

最初に考えたのがチップ工場、様々な原木を粉碎して製紙工場に原料として納入する、その際発生するのがダストと呼ばれる微粉と木の皮、これが代用にならないかと。勿論、オガクズに較べれば効果は数段劣ると判っていましたが、高騰を続けるオガクズにはもう頼ってはいけないうちと。ところが吸湿性がよくない、したがって多量に投入する必要がある、購入場所が往復で70キロと今までの倍の距離、欠点を数えればきりがありますが、オガクズの代用が出来るかどうか重要な点でした。

思い立ったら実験するのが見浦牧場のいいところ、牛は迷惑でしょうが直ちに実施、敷料としての厚さ、オガクズとの併用、単独使用、そして使用済みの敷料の発酵の状態、やることは山ほどありましたが、いずれも時間が必要な条項ばかりでした。

テストを始めて1年が経ちました。吸収力は劣るものの、多少は糞と尿が分離するので、案外敷料の役割を果たしてくれる、ことに木質部のオガクズと違って皮の部分は腐りやすいこともあって発酵も良好でした。ただ粉碎し切れなかった木切れが混在する、この堆肥を機械で圃場に撒く事ができるかが課題として残りました。しかし案ずるよりは行うは易くで、機械は順調に散布してくれました。もっとも大きな木片は手で拾いますが。

次から次へと新しい問題がおきる見浦牧場、でもまだ挑戦するエネルギーが残っているようです。

今日も巨大製材工場のオガクズを満載した巨大トラックが島根の巨大牧場へ見浦牧場の傍らの林道を疾走してゆきます。その巨大に抵抗して、ささやかな見浦牧場が智恵で対抗しています。そんな見浦牧場に理解と声援を御願いしたいと思うのですが。

2013.9.10 見浦 哲弥

スクールバス(2016/1/10)

毎朝 7 時 30 分に赤いマイクロバスが大規模林道小板橋から出発する。我が家の孫三人の通学のためのスクールバスである。

これは各集落ごとにあった小学校や分校が消滅したためである。そのための費用は国や自治体が負担するのだが、相当の金額であろうことは素人の私達でも理解できる。教育の機会均等は国の基本理念であることはいうまでもないが、恩恵を受ける側に感謝の気持ちが薄いのでは国家としての団結力は弱くなるのでは。

私は小板に帰郷して始めて遠距離通学の現実を知った。福井市でも三国町でも 10 分も歩けば学校に着く。それが小板分校に通う餅ノ木集落の生徒は 1 時間かけて 4 キロの山道を通ってくる、小学生も高学年にもなれば体力もつき、差して困難の距離ではないが低学年の 1-2 年生を庇いながらの登校は毎日 1 時間の遅刻、複複式の授業だから抜け落ちた教科の補修などする時間は先生にはない、従って期末試験で好得点を取るなどは夢のまた夢、それを小板の連中は餅ノ木は頭が悪いときめてかかったんだ。ところが都会の転校生から見ると餅ノ木の自然の子は私が知らない山のような智識の持ち主だった。

餅ノ木の上級生はどんなに天候が悪くても、都合が悪いことがあっても、下級生を学校まで庇いながら登校する。地元の人間は、当たり前としか評価をしなかったが、私は素晴らしいと思った。だから餅ノ木の生徒とは仲良しだったし、彼等も見浦君と見浦君と親しんでくれたんだ。

それから松原にあった中学校へ(高等科といった)通った。旧国道 191 号線は深入峠を越えて 9 キロ近くある。深入峠からはオシロイ谷という近道を走って降りて 7 km、どんなに急いでも 1 時間、天候が悪いと 1.5 時間がかかったもんだ。おまけに、ご存知の太平洋戦争で中学生も勤労奉仕なる強制労働があって作業の終了が夕方 5 時ということもあって、校門を出る時は、すでに夕暮れ、山道のオシロイ谷は真っ暗、懐中電灯も何もない坂道を空を見上げて、僅かに見える隙間の下が道と判断して登ったものだ。ちなみに松原の校舎は海拔 650m、深入峠は 870m、見浦家は 780m、従って高低差は 220m、その 1/3 を一気に登る近道は日中も厳しい道、それを中学生が夜道を 1 人で帰る、今なら人権問題になる。

樽床にダム工事が始まって小板の分校にも生徒が増えた。工事関係の子供さんが通学してきたためだ。最盛期には 70 人を超す生徒がいたから、当然中学校も分室が出来て本校から先生が通ってくるようになった。小板の生徒が松原の本校に行くのは入学式と卒業式の 2 度だけになって徒歩での毎日通学はなくなったが、やがて松原の中学校も廃止されて中学生は戸河内中学校に通うことになった。そこで登場したのは寄宿舎制度、私の子供達はその世話になった。山奥の小さな学校から人数が多い学校への環境変化は当然イジメが発生した。大きな学校を経験した私は小 3 で発生したイジメに何とか対応して免疫が出来たが、おかげで高等科(2 年制の中学)でも、動員でも、大人の新人りの時も、なんとか対応することが出来たんだ。人間は集団で暮らす動物、順列をつけるためのイジメは大なり小なり必要悪として存在する、その訓練のためにも小規模校よりは中規模校以上の生徒数が欲しい、その配慮不足がイジメが原因の生徒の自殺という悲劇を呼ぶのだと私は考えている。

最近はいじめによる若者の殺人事件が珍しくない。いじめは悪として完全否定をしている社会

にも無理があるように思う。決してイジメを肯定するわけではないが、順列をつけるための一つとして小さなイジメは必要悪の気がするのだ。

とはいえ逼迫する地方財政の中で義務教育とは言いながらスクールバスの配慮はありがたい。暖房のきいた車内は冬季の雪中登校の厳しかったことを孫達は想像も出来ないだろう。

人口減少が始まって各所で学校統合が論議され、実行されて、スクールバスによる遠距離通学が珍しくなくなった。勿論、廃校になる地区の心情も猛反対も理解が出来ないではないが、限られた財源と国民の負担を考えると、一方的な主張は子供達に笑われるのではないか。最低の費用で最大の効果は教育の世界でも例外ではないのだから。

ともあれ、今朝も赤いスクールバスは孫達を迎えに来た。将来、彼達が国家の為に役立つ人にならんことをと祈りながら見送った。

2016.1.10 見浦 哲弥

めだし帽(2016/2/17)

めだし帽、近頃コンビニ強盗の犯人が顔を隠すために愛用している帽子である。本来簡易型の防寒帽として雪国で愛用されてきた帽子なのに犯罪の必需品になるとは心外のきわみである。

例年、積雪が始まると作業帽が防寒帽にとってかわる。私の愛用品は昔、淑子が土産に買ってくれたアメリカ製の皮製の防寒帽、もう何十年も愛用している。さすが本場物、性能は私の防寒帽の中では最高品、猛吹雪の時はかかせない。次は大野モータースの社長がくれたアメリカ軍の払い下げ防寒帽、軍需品だけあって布製だが実用的には満足できる製品、もう10年余り使っている。

しかし、肉体労働の見浦牧場では冬でも汗ばむ、この点ではこの2品は多少問題がある。そこで、もう一つの愛用の防寒帽は国産のめだし帽。第一に値段が安い、おまけに軽い、そこそこに防寒である。もっとも雨には弱い、これは数を揃えればいいと、私の越冬の目玉だったのに今冬は行方不明。仕方がないから前二者の帽子で我慢していたのだが、やはり不便、それが発見された。勿論しまい忘れ、老人のさがである。しかも何枚も発見されたから嬉しい反面、物忘れの進行を突きつけられて、こりや大変だと痛感した次第。

85歳ともなれば、肉体も頭脳も衰えるのは当たり前である。それが毎日6－8時間、時には10時間も働けるのだから「有り難い」と感謝しなければならないが、それと引き換えに貧乏と馬鹿正直を引き当てた。が、S君の言に従えば家族が健康で仲良くて、しかも三人の孫達が元気とくれば、この上のない幸せだと、この周りには、そんな家族は見当たらないぞと。

めだし帽が活躍するのは冬である。冬でも時期によって気象は様々、風が強い時はめだし帽では役に立たない。気温が極端に低い時は毛皮で裏打ちされたアメリカ製が最高だが、老人となった現在では帽子の多少の重さでも気になって、出来るだけ軽い方が作業をしやすいためだ。仕舞い忘れのめだし帽の出現で頭だけは豊かな使い分けができている。

ともあれ、防寒帽の心配のない春風の訪れを、千秋の思いで待ちわびている今日この頃である。

2016.2.17 見浦 哲弥

癌(2016/2/3)

テレビが癌治療の進歩を伝えていた。新しい放射線治療の仕組みと完治した患者の報告である。私の生きた時代は科学や医学が猛烈に進化した時代らしい。

見浦家は癌の遺伝子を見事に伝えている。野村の祖母が胃癌、父が直腸癌、母が肝臓癌、妹は癌だと言ったが幸い完治した。孫が喉のリンパ腺に癌、これも医学が進歩したおかげで命は取り留めた。

癌は細胞分裂のときの母細胞と違った細胞を作り出すところに原因があるという。ところが神ならぬ人間は、基本的に細胞分裂で母細胞と同じ細胞を作り出す筈が、少しばかり狂った細胞を作り出すという。その数一日に数千個と言うから、人間は癌という地雷の中で生きているようなもの、これは神様の大きなイタズラ、現実にはキラー細胞なる正義漢がその狂った細胞を常に退治して癌の発生を防いでいてくれる、それで我々は生きることを持続することが出来るというんだ。ところがキラー細胞も生き物、完璧ではない、時には癌細胞を見逃す、そのがん細胞が運良く、いや運悪く定着して増殖し始めて癌患者の誕生ということになる。

そこで、私は出来るだけ自然の中で生活し、そして自然の食品を愛用することを推薦する。人間は本来自然の子、ところが近代社会になって自然から遠ざかる生活が近代化ということになった。

20年ほど前、”世話になったら他人に返せ”の前田先生の教えに従い、野菜づくりをするリタイヤ老人へ堆肥の無料提供を始めたんだ。ところが何でもお金で解決出来ると思い込んだ連中は無料で高品質の堆肥がもらえる、ということが理解できない。見浦牧場の無料堆肥には確かに裏読みはあるが、これは私欲ではない。老人が身体が動かなくなって、病院のベッドで呻吟しながら最後を迎えるよりは、畑に出て野菜を作り、自家用の果物を作って、食べて周囲におすそ分けをする。堆肥が充分な作物が旨いのは当然で、誰にも喜ばれる。それが励みになって畑に出る。

新鮮な空気と日光と、それが健康を約束してくれる。そして健康な身体のキラー細胞は懸命にがん細胞を退治してくれる。素人の思い込みかもしれないが身体の動く限り畑に出て自然と親しむ老人は、病院で何本もの管に繋がれて最後を迎えることが少ないことを私は知っている。

年末にも18年ここへ堆肥を取りに来て野菜づくりをしていますという、ご夫婦がこられた。さすがご主人は足が少し曲がったが元気、この堆肥で来年もと意気込みは高かった。

癌は細胞分裂時、遺伝子配列が母細胞と異なるところから始まるという。生物は老化した細胞の代りに細胞分裂で新しい細胞と置き換えて生命を維持してゆく。ところが人間も、その細胞も生き物、新しい細胞が元の細胞と同じものに再生するといっても、膨大な数の細胞の再生が行われているのだ。完全無欠というわけには行かないのが生物であり、それが進化の条件なんだ。

そうして母細胞と少々違った細胞が出来るんだ。その違った点が細胞の寿命をつかさどる部分で、ここが機能しないと無限に生き続けて増え続ける、それが癌である。

勿論、体の方も無抵抗ではない。キラー細胞なる警官がいて常時この無法者を退治しているのだが、不健康な生活で体力が衰えるとキラー細胞も実力を発揮できなくなり、癌細胞を見逃して増殖を許してしまう。

無学の私の独断と偏見ではあるが、人間は出来るだけ自然に接して、適度に身体を動かし、飲酒や喫煙や薬物を避ける、それが最良と信じている。だから小さな畑でも結構、太陽の下で花や野菜や果樹をつくろう、と提唱している、そのための堆肥は無償提供をします、を、もう何十年も続けている。

また春がやってくる。何組かのご夫婦が長靴、スコップのいでたちで、軽トラに乗ってやってくる。どなたも長い、長いお付き合い、そのお元気な姿を見ると幸せな気分になる。人間は自然の子、少しでも暇があったら日光を浴び、新鮮な空気を吸い、与えられた時間を精一杯生きる、それが本当の幸せだと思うのだが。

2016.2.3 見浦哲弥

マイカー(2015/8/17)

我が家の足はインプレッサ、彼は4輪駆動、多少ガソリン食いの傾向はあるが、豪雪地帯の小板では代えがたい能力の持ち主である。勿論、10年落ちの中古車、見浦家に住み着いて10年余りになる。マフラーが錆びて自家修理をしたが遂に新品に交換したと言うからその古さを理解してもらえらるだろう。

貧乏の生涯だった私は、たった一度だけ新車を購入した。親父ドンが直腸がんで入院して小板の仕事と看病との二本立てをこなした時、当時の自家用車はマツダの R360 という軽三輪トラック、新車の半額と言う中古車だから故障がなくて走れば幸運と言う代物。空冷の V 型 2 気筒で 360cc 12 馬力、当時のマツダは営業用の 3 輪トラックから民生用の小型車に進出しようとしていて、そこで登場したのが R360。対抗車はダイハツのミゼット、こちらは同じ軽三輪トラックとは言ってもバーハンドル、サドルシート、単気筒 10 馬力、しかし、頑丈で荷物を積んでよく走る、猛烈に売れ始めていた。後発であるし同じ路線では太刀打ちが出来ない、そこで R360 はデラックス路線で対抗したんだ。即ち、丸ハンドル、完全キャビン、2 気筒エンジン、等々、これが当たっていっぺんに売れ行きを伸ばしたんだが、その代償は高く故障続出、その中古車ときたら、まず非力である。公称 12 馬力が虫木峠を登らない、国道だよ？。チェンジをローにして引っ張るとエンジンがヒートして力がなくなる、こうなると道端で停車してエンジンの冷めるのをまつ、それを何度か繰り返して、やっと峠を越したんだ。当時のマツダはエンジンに関しては技術が低かったね。50 年を経て日本の自動車会社の中で注目されるエンジンを何個か持つ現在からは想像が出来ないが。

丁度、父が直腸がんで倒れて広大病院に入院したんだ。かなりの手遅れで手術の成否が 30 パーセントの状態だったから、広島と小板と掛け持ちで飛び回った。その足が R360、何せ片道 5 時間ぐらいかかったからね、おまけに故障続出、仕事にならない。手持ちの金をかき集めて当時一番安かったトヨタのパブリカを購入したんだ。トヨタが大衆車向けとして設計した 100 パーセントの実用車、これは故障知らずで良く走った。今でも名車だとおもっているが、空冷の対向 2 気筒 700cc、28 馬力、前輪はトーションバースプリングで独立懸架で 4 人乗り、シートはハンモックで暖房は無し、徹底的に軽量化がしてあって走りは抜群で 100 キロ出しても怖くはなかったね。ただしエンジン音はいただけなかったね。ポポポと乗用車らしからぬ音がして遠くからでも音さえ聞けばパブリカと判る、そして空冷だから暖房が効かない、冬は寒くてね、しかし故障知らずの快適で親父の看病に通えたんだ。

その車重の軽さは雪の多い小板で抜群の威力を発揮して、スタッドレスタイヤ出現前の雪道は頼りになった。スノーチェーン装着で走るのだが硬い雪の上なら底まで潜らない、在来車が悪戦苦闘する横を走り抜けるという荒業が出来た、今でも傑作車だと思っている。

ところが、あのポポポという排気音は不評で販売は伸びなくて間もなく改良?普通の車になった。

新車に乗ったのはこの車だけ、あとは長い人生、中古車との付き合いばかりだった。御蔭で中には名車と呼ばれる車もあって結構面白い車人生だったが、現在は 20 年前のインプレッサ、基本設計の良さで傷だらけの車体が東奔西走、見浦一族の貴重な足をつとめている。

目下、見浦牧場には 2 トンダンプ 2 台、1.5 トントラック 1 台、乗用車 1 台が活躍中、いずれも中古車であることはいうまでもない。

敗戦直後、数少ないバス便に乗り遅れて花見に来た消防車に便乗したことがある。デフのない昔のフォードでとんでもない走り方をした。それでも車の便利さを痛感させられて、どこへ行くのも 2 本の脚という当時の自動車は夢の機械だったんだ。あれから 70 年、日本には自動車があふれている。そして、その便利さを当たり前のように受け入れている。本当は、この時代に巡り会った恩恵として感謝すべきなんだけど、誰もそこまでは思いはいたらない。

今日も牛の出荷で三次まで高速道路を走る、当然のことのよう。

2015.8.17 見浦哲弥

山口六平太(2016/1/31)

山口六平太は我が家の愛読書の漫画である。それぞれに興味の違う我が一家が、唯一全員で愛読している漫画である。

時折、書棚に並んだ蔵書の山口六平太のシリーズからランダムに取り出して読みふける。ご存知の通り、この漫画は主人公の山口六平太を中心に悪役の有馬係長、その他の人物が登場する、そして何処にでもある人間関係がユーモラスに描かれている、そして何処にでもありそうな社会生活の一面が読者をひきつけてヒットしたんだ。

読み返してみると、まだ壮年だった頃の手感と人生を振り返っている現在とでは微妙にインパクトが違う。そして作者も年齢を加えるにつれての経験から、この本の登場人物にも成長があり、停滞がある、そんな人生の縮図が描かれていて、読みふけるほど、親近感と嫌悪感が深くなる、そして私の人生の中にも有馬係長が何人もいたし、山口六平太に近い人も何人かいたと、思い返しながらかみふけるのである。

しかし、何度読んでも有馬係長は憎らしい、それが現実に私の周囲にも居た実在の人物と重なる、思い出しても気分が悪くなる。

世に言う目立ちたがり屋君はどこにでもいる、実力はないのにしゃしゃり出るものだから、欠点が目立って人が心を開かない、ご本人もそれが弱点と、ご存知なんだが、それを認めて修正する勇気がない、だから周囲の人をあげつらって陰に陽に攻撃する、そんな人を私は知っている、でも素直に自分を見詰めさえすれば素晴らしい能力も持っているのに、それを見失って人生を失ってゆく、悪役有馬係長にも同情の感情はある。

人間の能力は人それぞれである、能力の範囲内で誠実に暮らせば大きな失敗はない、そして持てる力を100パーセント出すように努力すれば、育ててくれる人が何処からとなく現れる、若い頃は、そんな話は夢物語だと思っていた、が、年齢を経るに従って、それが本当だと思えることが我が身におきた、一つだけでなくてね。

大島（見浦家の家号）は私で9代続いたと親父から教えられた、（小坂でもっとも古いのは西という家だが小坂では絶えて今は雄鹿原で血が続いている）小坂のもっとも古い血筋とはいえないが血筋が続いたのは我が家だけと。

栄枯盛衰を繰り返した家系だが辛うじて遺伝子だけは繋がった。私の代は衰退の時期で逆風の嵐のなかで苦しんだが、懸命に生きた御蔭で暖かい励ましと指導の先生方に恵まれた。その御恩返しにと、懸命に生きる人達に私もささやかな応援を続けてきた。本当に取るに足りないことばかりだったのに、見浦にというファンがいて驚くことがある。漫画の中でも六平太が起こす小さな出来事が読者の共感を呼び、それがが彼が社長になったらと期待を膨らます。ところが作者も商売で山口六平太が社長になったら物語が終わると出世をさせない。このいたちごっこは何時まで続くのか、いい加減に社長にしないと、たとえ漫画でも理想の社長像を読めないうちに人生が終わりそうである。

漫画でも本書だけは愛読している。人生のペースをほのかに感じさせてくれるからだ。しかし、大いに不満もある。繰り返すが六平太が何時までも社長にならないことだ。こんな人物が

身边にいたら是非とも友人になりたい、教えを請いたい、そう思うのは私だけではないはず。この漫画のファンは、そう考えて読者になっているのだから。こんな人が組織のトップになったら、なにが起きるのだろうか、たとえ漫画の中でも、どんな物語になるのだろうか、そのストーリーを想像しながら新刊を待つのだが、依然と総務課の平社員の物語がつづく、大いに不満である。

2016.1.31 見浦哲弥

追記：2016年11月14日、インターネットが六平太の著者が死亡したと報じた。従ってこのシリーズは終了すると。”六平太”の社長就任を夢見て愛読してきた私は長年の夢を絶たれて空想するしかなくなった。

しかし、私の人生と重なった長い時間、大いに楽しませてくれた”山口六平太”の作者の一人、高井研一郎先生には感謝の言葉を贈りたい、「長い間有難うございました」と。

愚弟賢兄(2016/1/29)

2015.8.21 中国新聞に中山畜産の近況を報じた記事があった。従業員632人、牧場が福山、笠岡、真庭の3箇所、直営の店舗が8箇所、年間売り上げが133億円、飼養頭数が8000頭、日本でも有数の巨大牧場であると。お隣の島根県にも同じ規模の松永牧場がある。見浦牧場のようなミニ牧場から見ればたいそうな大牧場である。

ところが創業者の中山伯男さんは私の兄弟子になる。確か私より10歳くらいの先輩のはず、当時油木の種畜場の場長だった榎野俊文先生の門下生。

和牛飼育に取り組んだのも殆ど同じ時期、教えを頂いたのも同じ先生、が、歩いた道は環境も考え方も天と地ほど違った、今日はその話をして見ましょうか。

榎野先生は中島先生の部下、その出会いは”中島健先生”で書いた。当時、油木の種畜場の場長先生だった。福山の奥にある種畜場には勉強のために何度も通ったんだ。油木町と戸河内町は県の西と東の端にある、広い広島県を横断するのは道路事情が良くなかったあの時代では、とんでもない距離だったんだ。

でも、まだ若かった私はカロウラの中古車を駆って何度も訪問して教えを請うたんだ。

時は役牛だった和牛が肉用牛と変身を始めた時期、目標は一日増体量が700グラム前後の能力を海外並みの1.1キログラム以上に改良することと、1-3頭の飼育規模を10頭以上に拡大すること。そうしなければ生き残れないと、畜産の専門家が考え始めた時期、経済が拡大して外国貿易が盛んになれば、外国産牛肉の輸入の拡大で国内の肉牛生産は一敗地にまみえと、国も県も担当者は本気で考えたのだ。

そして広島県が考えたのが放牧一貫経営、親牛10頭を基本として育成牛、肥育牛など30頭を1セットとして飼育するシステム、繁殖と育成は放牧飼育、肥育牛は屋外のパドック牛舎、これが基本のシステムで油木の種畜場で試験飼育が始まったのだ。

規模は3セット、計90頭、牧草畑10ヘクタール、これを作業員2名で管理運営する、機械設備は20馬力の国産トラクターと作業機一式、試験期間2年で始まったんだ。その最高責任者が榎野俊文場長、私は熱心な民間人の弟子、記憶が消えたところもあるが、そのようなプロフィールだった。

勿論、何度も見学と学習に通ったのはいうまでもない。

同じ頃、榎野先生のところに牛のことで教えを請うた人がいた。確か福山近辺の人で40歳ぐらいではなかったか、学ぶにつけて自分の年齢では普通の方法で学習するには時間が足りない、現場で実習しなければとてもついては行けないと、屠場の見習助手になったと、先生が楽しそうに話してくれたものだ。ところで助手は屠場では最下級の職種、命のやり取りの職場だから極度の緊張の世界、ミスでもしようものなら年齢など人間扱いなど微塵もない、そんなところに40男が勉強すると飛び込んだのだからと、先生は話す、それが中山伯夫さん、現在は日本でも指折りの牧場に成長した中山牧場の社長さんなのだ。彼が榎野先生の民間の1番弟子で私が2番弟子。

ところが1番弟子は偉すぎた。彼は成功して日本でも有数の牧場主になったのに、私は50年
余りも夢を追いつけても、いまだにゴールは遥か雲の彼方、人に誇るべき成果はまだない。た
だ、榎野、中島先生の一貫経営の夢を日本でただ1人、追いつけている。両先生にあの世でこ
の報告したら喜ばれるだろうな、が、私の唯一つの成果なのだ。

遠い日、榎野先生の門を叩いた2人の青年、天と地ほど違った結末は愚弟賢兄の見本のような
もの、勿論、愚弟は私なのだが。

2016.1.29 見浦哲弥

私とお天気(2016/2/16)

昔は、といっても60年ほど前の話ですが、たいていの農家には牛や馬がいました。ところが、この地方は中国地方でも有数の豪雪地、牛や馬を飼うといっても、冬場のエサが大変だったのですよ。

確かに、牛馬は草食動物ですから、周囲に繁茂している、あぜ草や野草、柴草を刈って食わずだけでも育ちます。春から秋口まではね。

稲刈りが済んだら豊富にあるワラがその役割を引き継ぐのですが、ワラは消化率が非常に悪い。確か消化率40何パーセントだったかな。ですからヌカ、ふすま、商品にならないくず米などを加えてやる。そして夏の間に作っておいた、山草やあぜ草などの乾草を食わせる。この量が多いと牛馬は元気で春を迎えましてね。

ところが、この干草作りが大問題、何しろ当地は中国地方で最高といわれる多雨地帯、お天気が続くのは、草の短い春先と8月15日のお盆前後の十日くらいと来るから大変、乾くまで3-4日もかかる干草を大量に作るのは先ず不可能でして、運が悪いと仕上がる寸前で雨、ひっくり返して乾かして又雨、なんて悲惨なことが起きる。

おまけに干草は1度雨に会うだけで養分の40パーセント以上が失われるとかで、2度雨に会った干草は牛は見向きもしない。

もちろん、ラジオの天気予報はありましたが、現在と違ってこれが当たらない。

特に夏場の短い安定期を過ぎると、天気予報は晴れなのに微気象的に雨がやってくる、深入山の頂上から見ていると、表側は晴れているのに、裏側は雨が激しく降りながら通ってゆく、そんな景色を何度も見ました、お天気は魔物でした。

ですから明日のお天気を占うのは大変で、まさか下駄を蹴り上げて裏表で決めるとまでは行きませんでした。えーいままよと干草刈を始める、その翌日が雨で、そんな事が多くありました。

ところが、ある日、遠い親戚のお婆さんが「雲が刈尾（刈尾山）から深入（深入山）へ流れると天気がよくなる」と、教えてくれました、それから雲の流れに注意するようになりました。確かに流れ方がお天気に関係があることは判ったのですが、流れる方向や、早さにも関係して、予測が6割も当たれば大当たり、でも下駄より遥かに進歩でしたね。

そこで、農業気象の専門書を取りよせて読みふけりました。ところが、義務教育の知識だけでの読みこなしは大変な努力が必要でした。

現在はテレビで時々刻々の天気図を見ることが出来ますから、大いに役だてていますが、ラジオだけの当時は自分で天気図に等圧線を書き込んでという、のめり込みまでは出来ませんでした。日々の生活に追われて忙しくてと、これは言い訳ですが。

ところが、この勉強は無駄ではありませんでした、思いもかけないところで役立ったのです。

見浦牧場も最初は水田1.5ヘクタールの米農家でした。小坂は広島県の北海道と呼ばれる寒冷地帯、稲の品種も寒さに強く、病気にも強い、他では見られない特殊な品種でノギ（モミの先から出ている鋭い毛）の赤いアカヒゲ、白いシロヒゲ、ノギのないチョウシュウ、の3品種が見浦の稲でした、比較的多収でまあまあの味のアカヒゲ、ノギが長くて脱穀するのに力がいり

ました。収量がそこそこで、藁が比較的長くて（藁細工をするのに長さも重要でした）、でも脱穀は楽でした。シロヒゲは短幹ですがノギが落ち難く食味はよくない、でも比較的多収でした。最後はチョウシュウ、米はまずい、収量は低い、とんでもない品種でしたが冷害には滅法強い、冷害でシイラ（粳の中が空の事）しか出来ない年も、この稲だけは実る。この3品種での米作り、このほかにモチ米がありましたが名前は忘れましたが藁は長かった。

戦後、陸羽132号という品種が入ってきました。福井の試験場で開発された有名な品種で食味は格段に優れていました。ところがイモチ病に弱い、冷害にも弱い。私が経営を担当してからは、小坂に適した品種があるはずと奔走しました。なにしろ普及員さんが推奨する品種は戸河内の町中以南の平場に適した品種、海拔300メートルと780メートルでは北海道で関東の稲を作るようなもの、アテにならないと思った。小坂の寒冷は戸河内では特別、自分で探すしかない、同じ努力をするのなら、少しでも多く取れて味が良くてと、新しい品種と追い求めました。農民は保守的な反面、大変な新し物好きなのです、とても臆病ですが。そして見付けたのは藤坂5号と八甲田という東北地方の品種、これは当たりでしたね。種粳の分譲依頼が相次いで見る間に普及したのですが、国の普及員が渋い顔をしたのはいうまでもありません。

臆病ですがより多く収穫したいという欲望は農民の誰もが持っている願い、新しく導入した新品種が、少しばかり温度が足らなくなると、作り方も少しずつですが変えてゆく。例えば、水を張っただけの水苗代が、表面に油紙を張って保温する保温苗代に、更には苗床の上にトンネルを作ってフィルムを張る保温折衷苗代にと、様々な改良をし工夫をして栽培法も改良する、そしておいしい米、増収と懸命だったのです。

進化の一つに病気の予防がありました。多収の品種は病気に弱かった、特にイモチ病は大敵でした。これは稲の熱病で非常に伝染性が強い、この病気にかかると稲の葉が赤くなって、最後にはゆでたようになって枯れてゆく、恐ろしい伝染病でした。穂が出る前に発生するのを、葉イモチ病と呼び、穂が出てからは穂イモチ病といいました。

葉イモチ病に罹らず、やれ一安心と気持ちを緩めた途端、稲穂が白くなって傾かない穂イモチ病、稲刈りをしてハゼ干しをして脱穀（粳を落とすこと）をすると粳が全部風に飛ばされる、僅かに粳入れに集まった粳も食べられるお米は入っていない病気の空粳だけという悲惨な結果になるのです。肥料を入れて良くできた稲ほどこの病気には弱かったですね。

ですから、当時のお百姓は山草を刈って牛馬に踏ませた厩肥（ダエゴエといいました）と下肥と呼ばれたダル（人糞尿）だけが肥料でした。この方式だとイモチ病の発生が少なかったから、収量も低かった。当然ですね。

そこへ、セレサン石灰と言う農薬が出ました。これがイモチ病に大変よく効く。ただし有機水銀剤で微量ながらお米に残留する、ある程度体内に蓄積するとイタイイタイ病を発症すると言う事がわかって姿を消しました。一時は日本人の髪に含まれる水銀量は世界最高と言われるほど使われたのです。

閑話休題、当時小坂で使われたのは3キロ入りの粉剤でして、これを手回しのダスターなる送風機と薬剤の箱とを組み合わせた農機具で散布したのです。農業普及員という技術屋さんが稲の葉の裏表に粉が附着するよう丁寧に撒くようにと指導されていましたね。

ところが、それが大変な労力として、泥田の中の炎天下での重労働、全部の田圃に散布するのは大変で中々普及しなかった。2－3年後に動力散粉機なる機械が町の補助金付きで推奨され共同購入し、一気に予防が普及しました。

ところが小型のエンジンが付いたこの機械は薬剤を入れるとかなりの重量、浅い田圃ならまだしも、深い田圃になるとこれも悪戦苦闘の重労働でした。何とか田圃に入らないで全面に薬をまく方法はないかと考えましたね。

話は戻りますが前述の穂イモチ病、この病気も稲穂が出る寸前と、開花が終了した時を狙ってセレサン石灰を撒くと、ほぼ完全に防ぐことが出来ると指導されたのです。

ところが出穂前の稲は60－70センチにも伸びて茂っている、茎葉全体に附着するように散布するは、言うは易しく行なうは難しでした。

農薬はある、散布の機械もある、後は新しい散布法を見つけるだけで、この病気は防ぐことが出来る、それを見つけることで小坂でも米の多収穫ができる、必死でしたね。

ある夕暮れ、焚き火の煙が、たなびいているのをぼんやり眺めていました。何かが頭の中で懸命に訴えている、何かが。

煙が地表をある高さでゆっくり移動しながら下がっている、あれが農薬だったらいいのになると、”そうだあの煙の中に農薬を吹き込んだら”と思いつきました。

思いついたら即、行動が私の身上、すぐ機械を始動して農薬をたなびいている煙の中に吹き込みました。思ったように農薬の煙も地表に留まりながら下がってゆきました。

上手くいった、さてその理由はと、農業気象の本を読み返しました。今度は気合が入っていました。

貴方もご存知のように強風の日には別にして日中と夜間では気温に変化があります。陽が射せば地表の温度が上がり、暖められた空気は上昇してゆきます。夜になれば放射冷却で地表の温度は下がり空気は下降してきます。即ち一日に2度空気の向きが変わる時がある、そのとき空気が停滞するのです。そして上昇気流が下降気流に変わる時、短い時間ですが（15－20分）を狙えば田圃の中へ入らなくても農薬は撒ける、下降気流は天の助け、短い時間でも高い効率は人間にとってもプラスでした。もっとも少し遅れると稲の葉に露がついて薬害がおきました。

”大畠（見浦の屋号）が又オカシゲなことを始めて“と白い眼で見ていた周囲の農家も、効果があることがわかると早速まねを始めました。ところがその理論を聞きに来る人は一人もいない、「見浦に農薬を撒き始めたから家も撒かにかー」で始めるのだから、貴重な時間が見る間に終了、上手く行かない。

一言「教えてくれ」が見浦には言い難かった、「ありゃー高等科も中退ぞ、あいつにだきゃー頭さげとうない」、私の態度が生意気だったのですね。

一冊の”農業気象”なる専門書、難しくて正直な話、ごく一部しか理解できなかったのですが、自然現象の観察と結びついて、農作業の効率化に役立った。

この小坂でも高校の農業科を卒業した青年も2人いました。でも失礼ながら学校で教えられた知識が実際の農業の中に生かされているとは思えなかった。学校で何をしていたのでしょうか？教える人がいなかったか？

ともあれ、あれから60年余り時間がたちました。現在はテレビで天気図や予報も何種か見ることが出来る、おまけにコンピューターの発達で正確度も100パーセントに近い、勿論、小さな集落の天気予報は完全とは行かないまでも生活や経営には大いに役立っています。若い世代は当然との事と利用してますが、前世代の私には驚天動地の出来事の一つなのです。今日は天気予報の昔話でした。

2016.2.16 見浦 哲弥

